福岡市博多区

比恵遺跡

―第6次調査・遺構編―

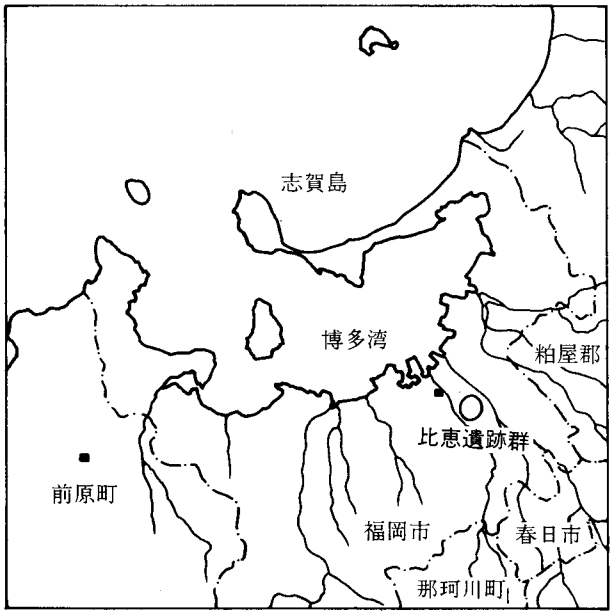
福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集

1983

福岡市教育委員会

比恵遺跡

―第6次調査・遺構編―



1983

福岡市教育委員会

SK28 甕　棺　墓

序　文

博多駅の南に広がる比恵台地に昭和27年、市営住宅が建築され、その際建設予定地の一部が県指定史跡「比恵環溝住居遺跡」として保存されています。

福岡市建築局では、この市営住宅を改築する計画を立て、教育委員会に埋蔵文化財の事前調査を依頼するところとなり、福岡市教育委員会では、昭和57年５月から９月にかけて発掘調査を実施しました。

調査の結果、遺構の残存状況は予想以上によく、弥生時代の甕棺、井戸をはじめ、古墳時代、古代に至るまで各時代の遺構が検出されました。その中でも甕棺に副葬されていた銅剣に巻かれていた絹は、我が国でも最も古い時期のものとして注目されるところとなりました。

本書はその一部を報告するものです。この報告書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、併せて研究資料としても活用いただければ幸いです。

調査から出土資料の整理に至るまで指導委員の先生をはじめ多くの方々に御協力をいただきました。ここに心からの謝意を表するものです。

昭和58年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　西津茂美

例　　言

□　本報告書は1982年５月～９月に発掘調査を実施した市営小林町第１住宅の建替えに伴なう福岡市博多区比恵遺跡群の第６次発掘調査報告である。

□　遺構は呼称を全て記号化し、甕棺墓→ＳＫ、土壙墓→ＳＸ、竪穴住居址→ＳＣ、掘立柱建物→ＳＢ、井戸址→ＳＥ、土壙→ＳＨ、溝→ＳＤとしたが第１号古墳はこのまま呼んだ。

□　遺構の実測は浜石哲也・横山邦継・岩切幹嘉が中心に行ない、岡部裕俊(同志社大)、山本雅代・太田史代・緒方俊輔(奈良大)、赤司善彦(明治大)、籾木郁郎(九州大)、村上かをり(福岡大)の協力を得、製図は浜石・横山・赤司・村上で行なった。井戸址の実測図作成にあたっては一部土器の出土状況を全面見透しとしたものがある。

□　遺構の撮影は浜石・横山で分担して行ない、一部白石公高氏の協力を得た。

□　付論として布目順郎・小西　孝先生には玉稿をいただいた。また森貞次郎先生には第２次調査時の記録・図面類の提供を受けた。

□　付図２は小林義彦氏（市文化課）の実測・製図により、二宮忠司氏には第５次調査全体図の提供をうけた。

□　本書の執筆は井戸址・土壙を浜石がおこない、他は横山が分担した。また編集は浜石の協力を得て横山が担当した。

本文目次

序

Ⅰ　はじめに …… 1

　1　調査に至る経過…… 1

　2　調査の組織…… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 3

Ⅲ　調査の記録 …… 7

　1　調査地点の概要…… 7

　2　第６次調査概要……12

　　(1)　甕棺墓……13

　　(2)　土壙墓……44

　　(3)　竪穴住居址……49

　　(4)　掘立柱建物……52

　　(5)　井戸址……61

　　(6)　土壙……85

　　(7)　溝状遺構……91

　　(8)　方形周溝遺構……92

　　(9)　第１号古墳……93

Ⅳ　おわりに ……94

付論目次

Ⅰ　比恵遺跡の細形銅剣に付着する織物・繊維について ……99

布目順郎

Ⅱ　比恵遺跡出土の絹織物の走査型電子顕微鏡による観察 ……111

小西　孝

図版目次

本文対照頁

PL. 1　比恵遺跡群付近航空写真（1／15,000）……3

PL. 2　1　第2次調査風景（昭和26年）……7

　　2　環溝遺構全景……8

PL. 3　1　環溝遺構内堆積状況……8

　　2　第3号土壙出土状況……10

PL. 4　1　第1号甕棺墓出土状況……10

　　2　第2号甕棺墓出土状況……10

PL. 5　1　第4号甕棺墓出土状況……10

　　2　第6号甕棺墓出土状況……10

PL. 6　1　第8号甕棺墓出土状況……10

　　2　第12号甕棺墓出土状況……10

PL. 7　1　甕棺墓出土状況(東より)……12

　　2　甕棺墓出土状況(北より)……12

PL. 8　1　調査区南東部遺構出土状況……12

　　2　調査区東部遺構出土状況……12

PL. 9　1　SK01甕棺墓出土状況……13

　　2　SK04・38甕棺墓出土状況……35・39

PL. 10　1　SK02甕棺墓出土状況……13

　　2　SK05甕棺墓出土状況……17

PL. 11　1　SK06甕棺墓出土状況……39

　　2　SK07・08・09甕棺墓出土状況……17

PL. 12　1　SK10甕棺墓出土状況……19

　　2　SK11・12甕棺墓出土状況……19

PL. 13　1　SK13甕棺墓出土状況……19

　　2　SK14甕棺墓出土状況……19

PL. 14　1　SK15甕棺墓出土状況……39

　　2　SK16甕棺墓出土状況……39

PL. 15　1　SK17・18甕棺墓出土状況……23

　　2　SK19甕棺墓出土状況……39

PL. 16　1　SK20甕棺墓出土状況……23

2　ＳＫ21・37甕棺墓出土状況……23・35
PL. 17　1　ＳＫ22甕棺墓出土状況……23
2　ＳＫ23甕棺墓出土状況……26
PL. 18　1　ＳＫ26・27甕棺墓出土状況……39
2　ＳＫ29・32甕棺墓出土状況……26・31
PL. 19　ＳＫ28甕棺墓出土状況……27～29・31
PL. 20　1　ＳＫ28甕棺墓出土状況……27～29・31
2　同甕棺墓出土銅剣……27～29・31
PL. 21　1　ＳＫ30・36甕棺墓出土状況……31・35
2　ＳＫ31・35甕棺墓出土状況……31・35
PL. 22　1　ＳＫ32甕棺墓出土状況……31
2　ＳＫ33・30・36甕棺墓出土状況……31・35
PL. 23　1　ＳＫ36・33・30甕棺墓出土状況……31・35
2　ＳＫ34甕棺墓出土状況……31
PL. 24　1　ＳＫ40甕棺墓出土状況……35
2　ＳＫ37甕棺墓出土状況……35
PL. 25　1　ＳＫ42甕棺墓出土状況……35・37
2　ＳＫ41甕棺墓出土状況……35
PL. 26　1　ＳＫ43甕棺墓出土状況……38
2　ＳＫ44甕棺墓出土状況……38
PL. 27　1　ＳＸ03土壙墓出土状況(西より)……44
2　同土壙墓主体部土層……44
PL. 28　1　ＳＸ04土壙墓出土状況(北より)……46
2　ＳＸ05・06出土状況(西より)……46
PL. 29　1　ＳＣ01住居址出土状況……49
2　ＳＣ02住居址出土状況……49
PL. 30　1　ＳＣ03・04・05住居址出土状況……49・51
2　ＳＣ08住居址出土状況……51
PL. 31　井戸址出土状況　Ⅰ……64～66
PL. 32　井戸址出土状況　Ⅱ……66～68
PL. 33　井戸址出土状況　Ⅲ……69・70・72
PL. 34　井戸址出土状況　Ⅳ……72・74・75
PL. 35　井戸址出土状況　Ⅴ……76・77・79

PL. 36　井戸址出土状況　Ⅵ……79・81
PL. 37　井戸址出土状況　Ⅶ……81・83
PL. 38　土壙出土状況　Ⅰ……85
PL. 39　土壙出土状況　Ⅱ……88～90
PL. 40　1　第1号古墳出土状況……93
　　2　同古墳周溝内遺物出土状況……93

挿図目次

本文頁
Fig. 1　比恵遺跡群周辺遺跡分布図（1／2.5万）……2
Fig. 2　比恵遺跡位置図（1／2万、明治34年）……4
Fig. 3　比恵遺跡群調査地点図（1／8000）……5
Fig. 4　比恵遺跡群位置図（1／6000、昭和7年頃）……6
Fig. 5　第2次調査遺構全体図（1／400）……8
Fig. 6　環溝遺構および周辺遺構実測図（1／100）……折り込み
Fig. 7　第1・2・3・4・5・6・8号甕棺墓出土状況実測図（1／20）……折り込み
Fig. 8　第12号甕棺墓および土壙1・2号出土状況実測図……9
Fig. 9　第2次調査出土遺物実測図（1／2）……10
Fig. 10　第5次調査遺構全体図（1／200）……折り込み
Fig. 11　SK1・2甕棺墓出土状況実測図（1／30）……14
Fig. 12　SK5・7甕棺墓出土状況実測図（1／30）……15
Fig. 13　SK8・9甕棺墓出土状況実測図（1／30）……16
Fig. 14　SK10・11・12甕棺墓出土状況実測図（1／30）……18
Fig. 15　SK13・14甕棺墓出土状況実測図（1／30）……20
Fig. 16　SK17・18・20甕棺墓出土状況実測図（1／30）……21
Fig. 17　SK21・22甕棺墓出土状況実測図（1／30）……22
Fig. 18　SK23・24甕棺墓出土状況実測図（1／30）……24
Fig. 19　SK25・29甕棺墓出土状況実測図（1／30）……25
Fig. 20　SK28甕棺墓出土状況実測図（1／30）……28
Fig. 21　SK28甕棺実測図（1／12）……29
Fig. 22　SK28甕棺墓副葬銅剣実測図（1／2）……29
Fig. 23　SK30・31甕棺墓出土状況実測図（1／30）……30

Fig. 24　ＳＫ32・33甕棺墓出土状況実測図（１／30）……32
Fig. 25　ＳＫ34・35甕棺墓出土状況実測図（１／30）……33
Fig. 26　ＳＫ36・37甕棺墓出土状況実測図（１／30）……34
Fig. 27　ＳＫ38・40甕棺墓出土状況実測図（１／30）……36
Fig. 28　ＳＫ41・42甕棺墓出土状況実測図（１／30）……37
Fig. 29　ＳＫ43・44甕棺墓出土状況実測図（１／30）……38
Fig. 30　ＳＫ３・４・６・16・19甕棺墓出土状況実測図（１／20）……40
Fig. 31　ＳＫ15・26・27・39甕棺墓出土状況実測図（１／20）……41
Fig. 32　甕棺墓の埋置方位と角度……43
Fig. 33　ＳＸ01・02土壙墓出土状況実測図（１／30）……45
Fig. 34　ＳＸ03土壙墓出土状況実測図（１／30）……折り込み
Fig. 35　ＳＸ04土壙墓出土状況実測図（１／30）……47
Fig. 36　ＳＸ05・06・07土壙墓出土状況実測図（１／30）……48
Fig. 37　ＳＣ01・02竪穴住居址出土状況実測図（１／60）……50
Fig. 38　ＳＣ03・04・05竪穴住居址出土状況実測図（１／60）……折り込み
Fig. 39　ＳＢ01・02・03・04掘立柱建物出土状況実測図（１／100）……53
Fig. 40　ＳＢ05・06・07・08掘立柱建物出土状況実測図（１／100）……54
Fig. 41　ＳＢ09・10・11・12・13掘立柱建物出土状況実測図（１／100）……56
Fig. 42　ＳＢ14・15・16・17・18・19掘立柱建物出土状況実測図（１／100）……58
Fig. 43　ＳＢ20・21・22掘立柱建物出土状況実測図（１／100）……59
Fig. 44　井戸址分布図（１／400）……61
Fig. 45　井戸址断面図（１／150）……63
Fig. 46　ＳＥ01・02・03井戸址実測図（１／30）……64
Fig. 47　ＳＥ04・05・06井戸址実測図（１／30）……65
Fig. 48　ＳＥ07・08・09井戸址実測図（１／30）……66
Fig. 49　ＳＥ10・11井戸址実測図（１／30）……67
Fig. 50　ＳＥ12・13井戸址実測図（１／30）……68
Fig. 51　ＳＥ14・15・16井戸址実測図（１／30）……69
Fig. 52　ＳＥ17・18井戸址実測図（１／30）……70
Fig. 53　ＳＥ17井戸側大型甕実測図（１／８）……71
Fig. 54　ＳＥ19・20・21井戸址実測図（１／30）……72
Fig. 55　ＳＥ22・23・24・25・26井戸址実測図（１／30）……73
Fig. 56　ＳＥ27・28井戸址実測図（１／30）……74

Fig. 57　ＳＥ29・30井戸址実測図（１／30）……75
Fig. 58　ＳＥ31・32・33井戸址実測図（１／30）……76
Fig. 59　ＳＥ33井戸址出土井桁実測図（１／６）……折り込み
Fig. 60　ＳＥ34・35・36・37井戸址実測図（１／30）……78
Fig. 61　ＳＥ38・39・40・41・42・43・44井戸址実測図（１／30）……80
Fig. 62　ＳＥ45・46・47・48・49・50井戸址実測図（１／30）……82
Fig. 63　ＳＨ01・02・03・04・05・06土壙実測図（１／30）……86
Fig. 64　ＳＨ07・08・09・10土壙実測図（１／30）……87
Fig. 65　ＳＨ11・12・13・14土壙実測図（１／30）……88
Fig. 66　ＳＤ01・03溝断面実測図（１／40）……91
Fig. 67　方形周溝遺構実測図（１／60）……92
Fig. 68　第１号古墳実測図（１／100）……折り込み
Fig. 69　第１号古墳周溝土層断面実測図（１／40）……93
Fig. 70　完成予定建物と遺構との関連図……96

本文表目次

Tab. 1　甕棺墓一覧表……42
Tab. 2　掘立柱建物計測表……60
Tab. 3　井戸址一覧表……84

付図目次

付図１　第６次調査出土遺構全体図（１／100）
付図２　第５・６次調査地点図（１／400）

I　はじめに

1　調査に至る経過

1981（昭和56）年福岡市建築局より、博多区駅南四丁目405―1番地の市営小林町第1住宅の老朽化に伴う建替え計画が文化課に出され、当該地における埋蔵文化財の有無の確認が事前に必要となった。文化課では当局と協議の結果家屋・施設一切が除去された同年3月9～10日に亘って試掘調査を行なった。この結果過去に行なわれた比恵遺跡の調査成果を裏付ける様に弥生時代墓地・住居址・竪穴遺構など多数分布することが判り、建設によって失なわれるこれらの遺構の本調査が必要となり、1982（昭和57）年5月6日より本調査を始めた。

2　調査の組織

調査委託　福岡市建築局

調査主体　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係

事務担当　柳田純孝（係長）、古藤国生

調査担当　浜石哲也、横山邦継

調査補助　岩切幹嘉、山本雅代・太田史代・緒方俊輔（奈良大学）、岡部裕俊（同志社大学）、赤司善彦（明治大学）、籾木郁郎（九州大学）、村上かをり（福岡大学）、白石公高（写真撮影）

整理補助　山崎恵美子、野村弥生、野邑久子、木村絹子、取違ムツ子、城戸トミ子、稲吉尚子、雪吉良子、河鍋光子、北村信子

調査・整理作業　荒木君子、青柳恵子、池見寿夫、石見良教、岩隈由丸、植田隆、上村和美、榎本明浩、大山幸治、尾上彰、大部茂久、奥田洋美、尾崎順子、尾崎文枝、小野倉太、樫山美穂子、金子秀明、嘉村芳光、木原泰信、菊池栄子、来嶋友子、久良木シズエ、木山祐子、久保山まさ子、久保山二三子、権藤利雄、古賀博子、小柳恒夫、坂口一樹、佐土島初喜、関富美男、津村武光、手柴泰隆、徳永静雄、舎川キチエ、中野英隆、長野康子、中原嘉男、永松伊都子、永松富子、林田初美、日隈正守、日比野典子、平川道子、松尾泰、松永シゲ子、光安義幸、三浦力、宮本雄司、無津呂ハル子、村崎優子、安高久子、山口淳、山口節子、山村スミ子、吉岡恭一、吉田キミノ、米丸次男

なお発掘調査にあたっては地元町内会長無津呂三代次、池本政雄、中原志外顕、荒木葎の各氏に諸協力・援助を受けた。また森貞次郎（九州産業大学）、岡崎敬・西谷正（九州大学）の先生方には諸々の御指導をいただいた。

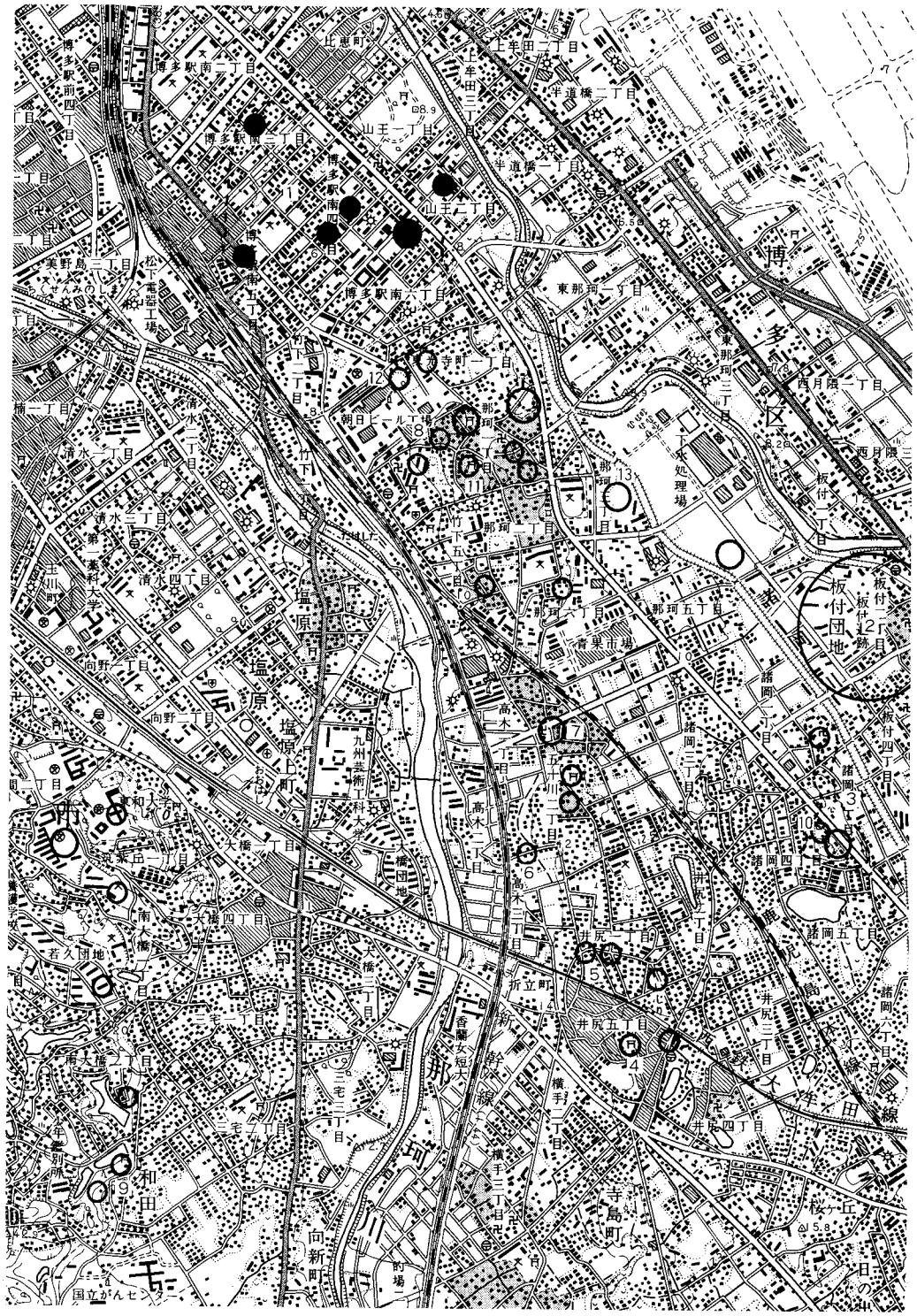


Fig.1　　比恵遺跡周辺遺跡分布図（1／2.5万，弥生～古墳時代）

1 比恵遺跡群，　2 板付遺跡，　3 諸岡遺跡，　4 井尻地縁神社遺跡，　5 井尻栄町遺跡，　6 五十川高木遺跡
7 妙楽寺遺跡，　8 宮園遺跡，　9 和田遺跡，　10 諸岡古墳群，　11 那珂八幡古墳，　12 剣塚古墳，　13 那珂深ヲサ遺跡

II　遺跡の立地と環境

立地　二日市狭隘部より博多湾に向って北方にひろがる福岡平野は北にこれらをつらぬいて流れる那珂川・御笠川の二大河川によって開析され流域に沿って幾多の侵食丘陵を残している。比恵遺跡群ののる那珂丘陵はこれらの残丘の一つで、東西幅1km、南北2kmをはかる阿蘇噴出物（鳥栖ローム・八女粘土）で構成された広大な洪積中位段丘であり、標高8～6mと北に向って漸次低くなる。比恵遺跡群はこの那珂丘陵の北端部に位置する。(Fig.2・3・4)

周辺の歴史的環境（Fig.1）　比恵遺跡群周辺では弥生～古墳時代に亘る集落址・墓地遺跡の分布は非常に濃厚である。特に比恵遺跡群ののる那珂丘陵（那珂川右岸）および御笠川左岸にあたる麦野丘陵から北に連絡する板付丘陵および諸岡独立丘陵などは弥生時代前期より古墳時代まで集落址が連続する特徴がある。弥生時代遺跡では東南約2.5～3kmに位置する低丘陵上にある板付・諸岡遺跡がある。板付遺跡[(1)]では東西150m、南北600mの丘陵上に弥生前期～後期に至る生活遺構（環溝に囲まれる竪穴住居址・多数の袋状貯蔵穴・中期後葉～後期の井戸址・堀立柱建物など）、墓地（前期後半より後期初頭に至る甕棺墓・木棺土壙墓があり、田端地区では前期末甕棺に細形銅剣・銅鉾を副葬する。）および丘陵周辺の冲積地に前期初頭～後期にかけての水田遺構とこれにともなう水利施設が見付かっている。生産遺跡は初期には丘陵縁辺部にひろがり、中期以降飛躍的に拡大する傾向にある。また後期には集落内で青銅武器の鋳造が行なわれている。諸岡遺跡[(2)]では前期末～後期初頭に至る墓地（甕棺墓・土壙墓で細形銅剣副葬）および前期末～中期初頭までの生活遺構などが見付かり、特に生活遺構では朝鮮系無文土器と前期末弥生式土器の共伴する竪穴が多く、注目される。またこれの西方約1kmの井尻周辺は那珂丘陵の南端部に近く、弥生後期の鉄鎌を出土した井尻地緑神社遺跡、中～後期甕棺墓地井尻栄町遺跡および五十川地区の銅剣鋳型を出土した妙楽寺遺跡などがある。次いで古墳時代になると石棺系石室を内部主体とする諸岡古墳群、那珂八幡および線刻装飾をもつ横穴式石室を内部主体とする剣塚の二大前方後円墳などが知られ、紀元4世紀末～5世紀に比定できる柵状遺構をともなう巨大な水利施設が検出された那珂深ヲサ遺跡[(3)]はこれら古墳群の造営を行なわしめた新しい首長層の生産活動への関わりがこの時期の全国的な生産地開発に伴う溝渠等の掘削・整備の傾向と符号して色濃く出た一例として考えることができるかも知れない。

註　(1) ㋐ 中山平次郎「銅鉾銅剣の新資料（板付北崎の遺物）」『考古学雑誌　第7巻7号』1917年
　　㋑ 森　貞次郎・岡崎　敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』1961年
　　㋒ 下條信行「板付遺跡調査報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書　第8集』1970年
　　㋓ 「板付周辺遺跡調査報告」(1)～(8)『福岡市埋蔵文化財調査報告書　第29・31・36・38・49・57・65・83集』1972～1982年
　　㋔ 「板付」－県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書－『福岡市埋蔵文化財調査報告書　第39集』1977年
　　㋕ 「板付」－市営住宅建設にともなう発掘調査報告書－『福岡市埋蔵文化財調査報告書　第35集』1976年
　(2)　同掲註㋓
　(3)　「那珂深ヲサ遺跡」Ⅰ・Ⅱ『福岡市埋蔵文化財調査報告書　第72・82集』1981・1982年

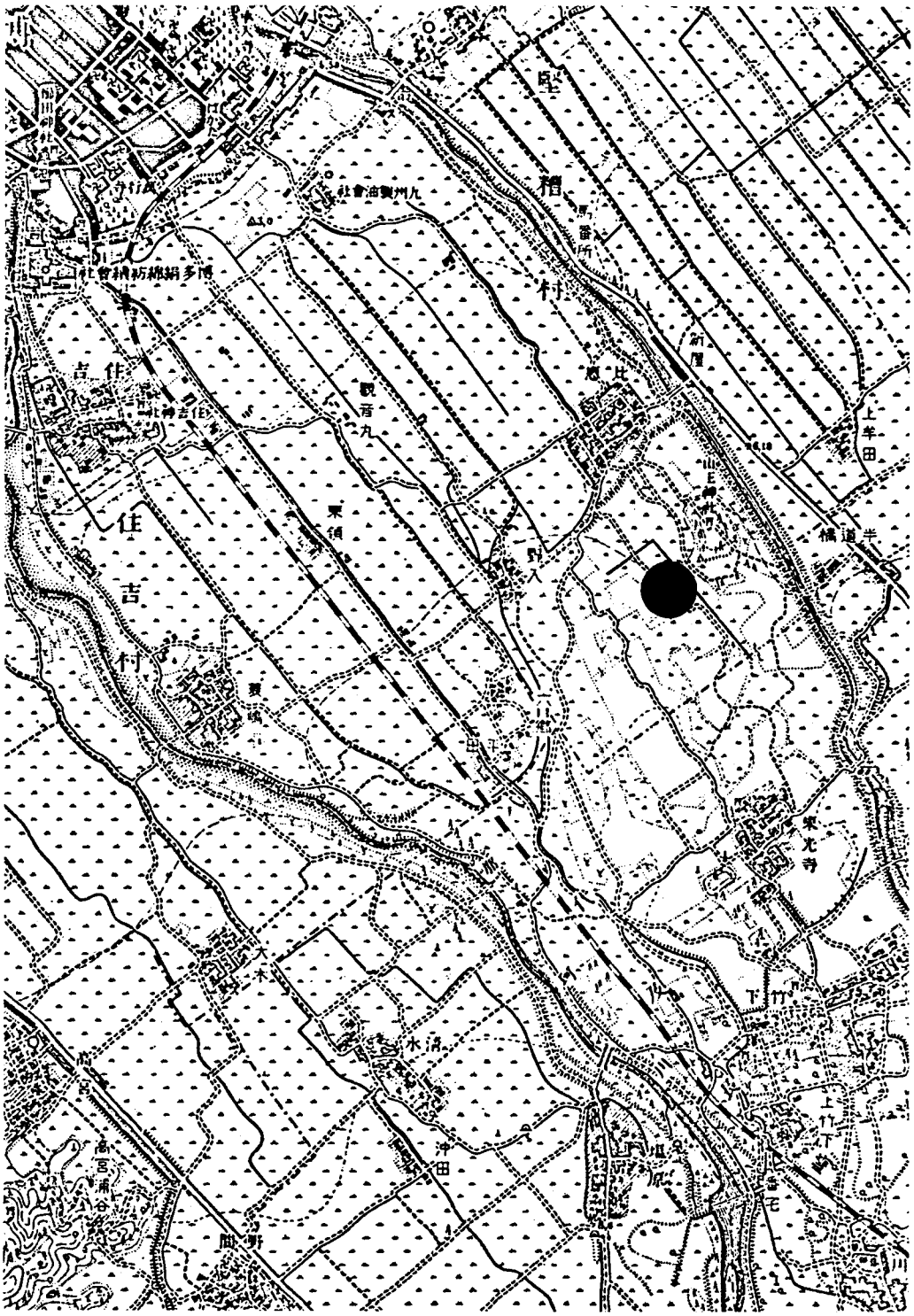


Fig.2　　比恵遺跡位置図（1／2万，明治34年）

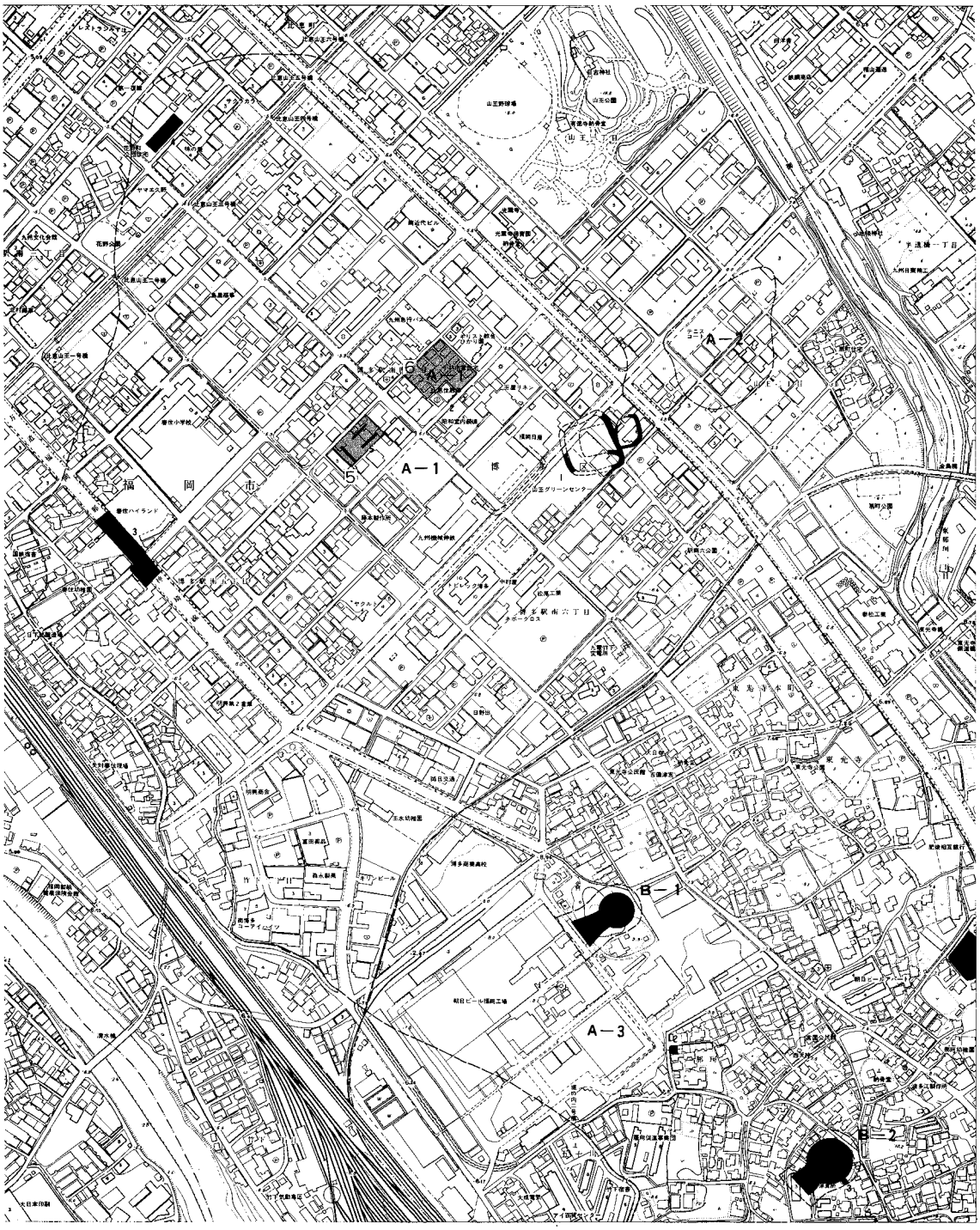


Fig.3　比恵遺跡群位置図（1／8,000）

A-1 比恵 遺跡群（1 第1次調査，2 第2次調査，3 第3次調査，4 第4次調査，5 第5次調査，6 第6次調査）

A-2比恵甕棺遺跡，A-3 那珂遺跡群

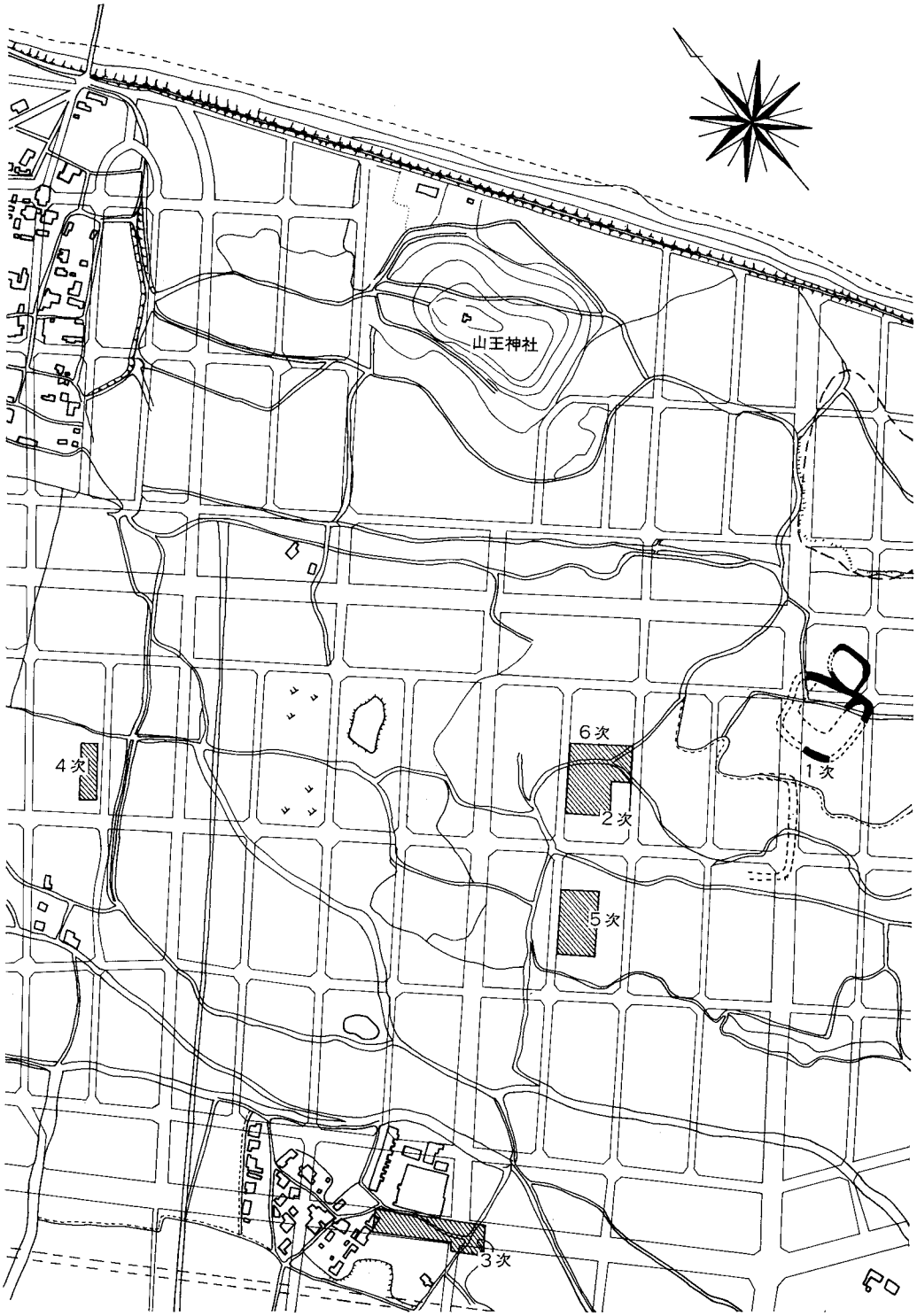


Fig. 4　　比恵遺跡群位置図（1／6,000，昭和７年頃）

Ⅲ　調 査 の 記 録

1　調査地点の概要

那珂丘陵北端部地域（比恵遺跡群）における埋蔵文化財の考古学的調査は昭和13年に始まる区画整理事業に伴う調査を第１次として昭和56年までに第５次を数えているがここでは各調査についての概要を述べることとする。また第２次調査については森貞次郎先生より当時の記録写真類の提供を受けあわせて収録することができた。

第１次調査（昭和13～14年）

昭和８年頃より実施されていた土地区画整理事業の進行に伴って調査がおこなわれた。

調査で検出された遺構は『環溝住居址』４基（第１～４号）以上、弥生時代甕棺墓12基以上である。環溝住居址のうち第１号は一辺が約30ｍを測るやや南北に長い方形を呈し、内部には時期を異にする竪穴５基、井戸址２基、土壙などがあり、溝外北側に６基の甕棺墓が見付かっている。またこれ以外の環溝は第２号（１辺70ｍ）・第３号（１辺40ｍ）・第４号（１辺90ｍ）があり、現存した環溝の深さ、幅にも種々の規模が知られた。なお環溝の時期については第１号が中期に属するとされる。また環溝の東側の微高地に存在した甕棺墓地では上限は不明であるが中期末～後期初頭に降る甕棺墓が知られた。

比恵遺跡群第１次調査はそのきわめて限られた調査条件の中で集落特に弥生時代集落の研究に多くの遺跡論的成果を提供した。

第２次調査（昭和27年）（Fig.５～９・PL.２～６）

第２次調査は同年市営住宅小林町第１住宅の進行に伴って福岡県・福岡市の委託を受けた森貞次郎氏（現九州産業大学教授）によっておこなわれた。

調査は今回（第６次）調査と西南部において重複する範囲にあり、遺構の種類総数において整理が必要であるがこれは後に第６次調査の項で述べる。

第２次調査で検出された遺構は、環溝遺構１基、土壙３基および環溝内外に点在する小竪穴群（計68個）と環溝北西側10～20ｍにひろがる18基以上の甕棺墓である。また第６次調査での第１号古墳周溝内大石もドルメン卓石の可能性をもって浮揚させ下部の調査がおこなわれたが下面には他の施設はなく須恵器類が出土したにとどまった。

次に遺構や遺物の写真や実測図は保存されているが、出土遺物（土器片、甕棺片、数個の石器）の保管については、残念ながら当時埋蔵文化財の対応の機構が不十分であったため現在は散逸している。従って各遺構について当時の実測図・記録類によって各個別遺構に説明を加え、報告とする。

1.環溝遺構（Fig. 6）

環溝遺構は北辺にブリッジをもつ方形の溝遺構である。その規模は外法で一辺がほぼ10mを測るが、北辺および南辺が若干長く東西に長い平面形となる。溝の幅・深さは過去の削平によって特に南辺の保存が悪く、北辺で幅0.8m・深さ0.55～0.6m、南辺の幅0.6～0.8m・深さ0.3～0.6m、東辺の幅0.9～1m・深さ0.65～0.8m、西辺の幅0.8～1m・深さ0.4～0.5mを測ることができる。また環溝内辺によって囲まれる面積は約75m²となる。

次に環溝に伴う遺物類は溝中より出土するものが殆どであった。溝中では北辺西半および西

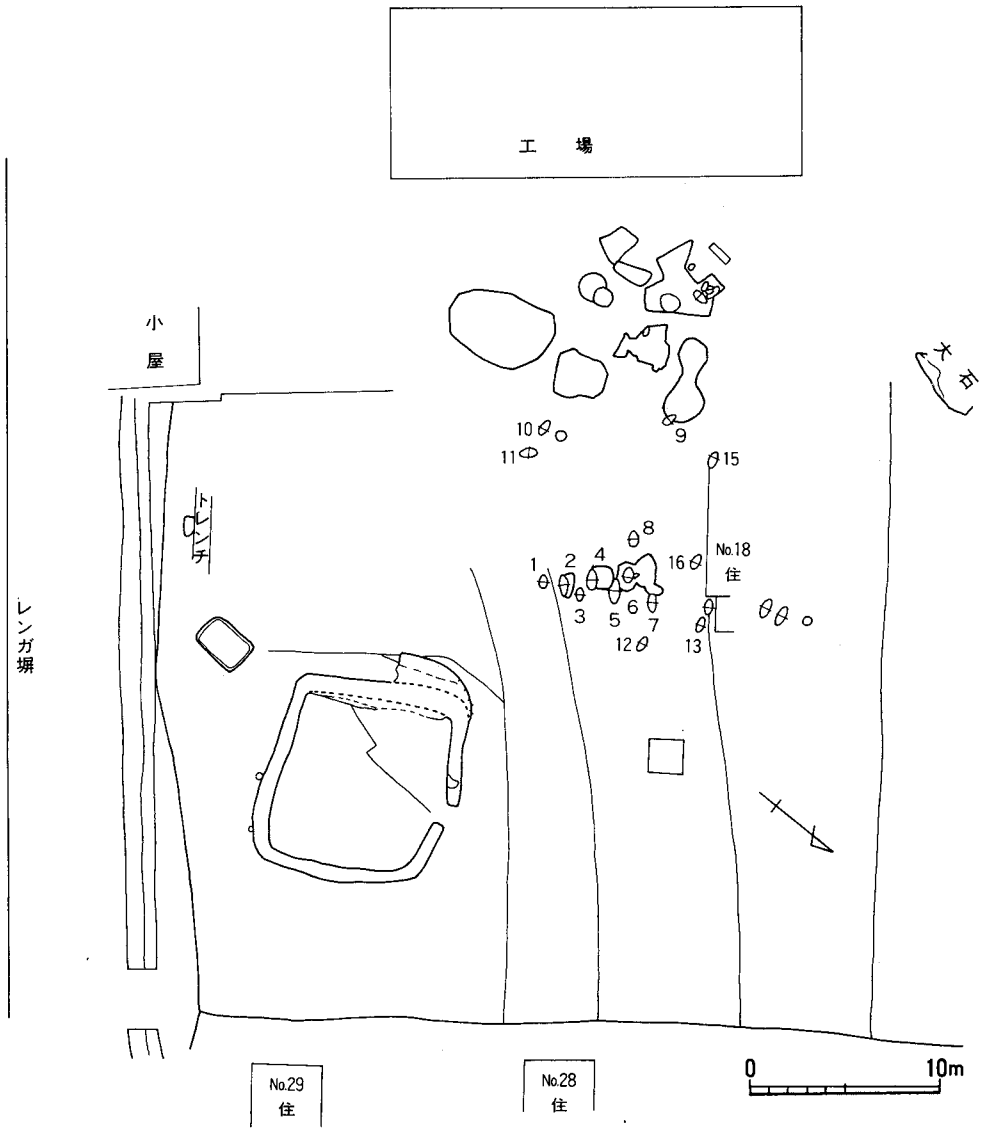


Fig.5　第２次調査遺構全体図（1／400）

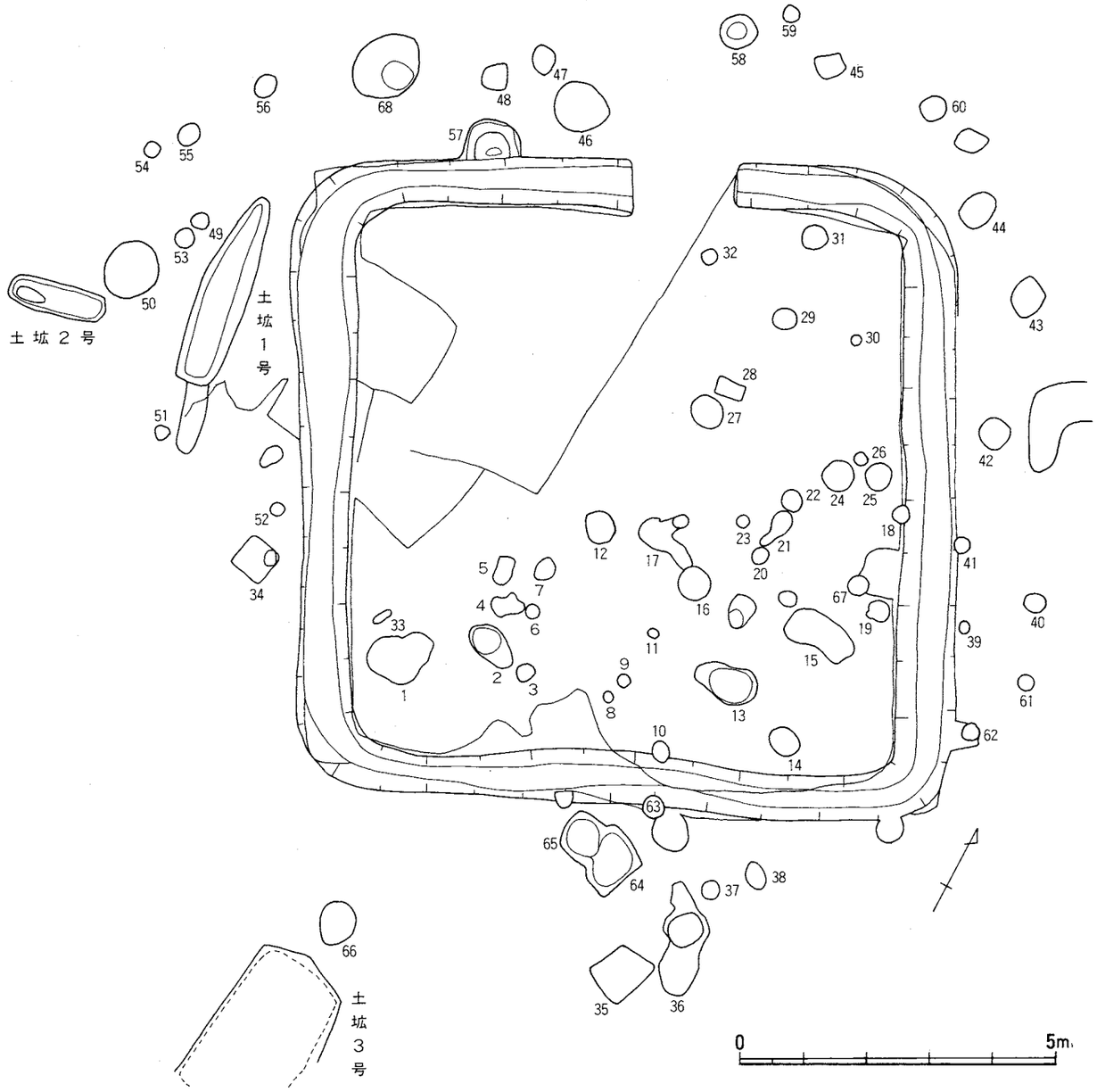


Fig. 6　環溝遺構および周辺遺構実測図（1／100）

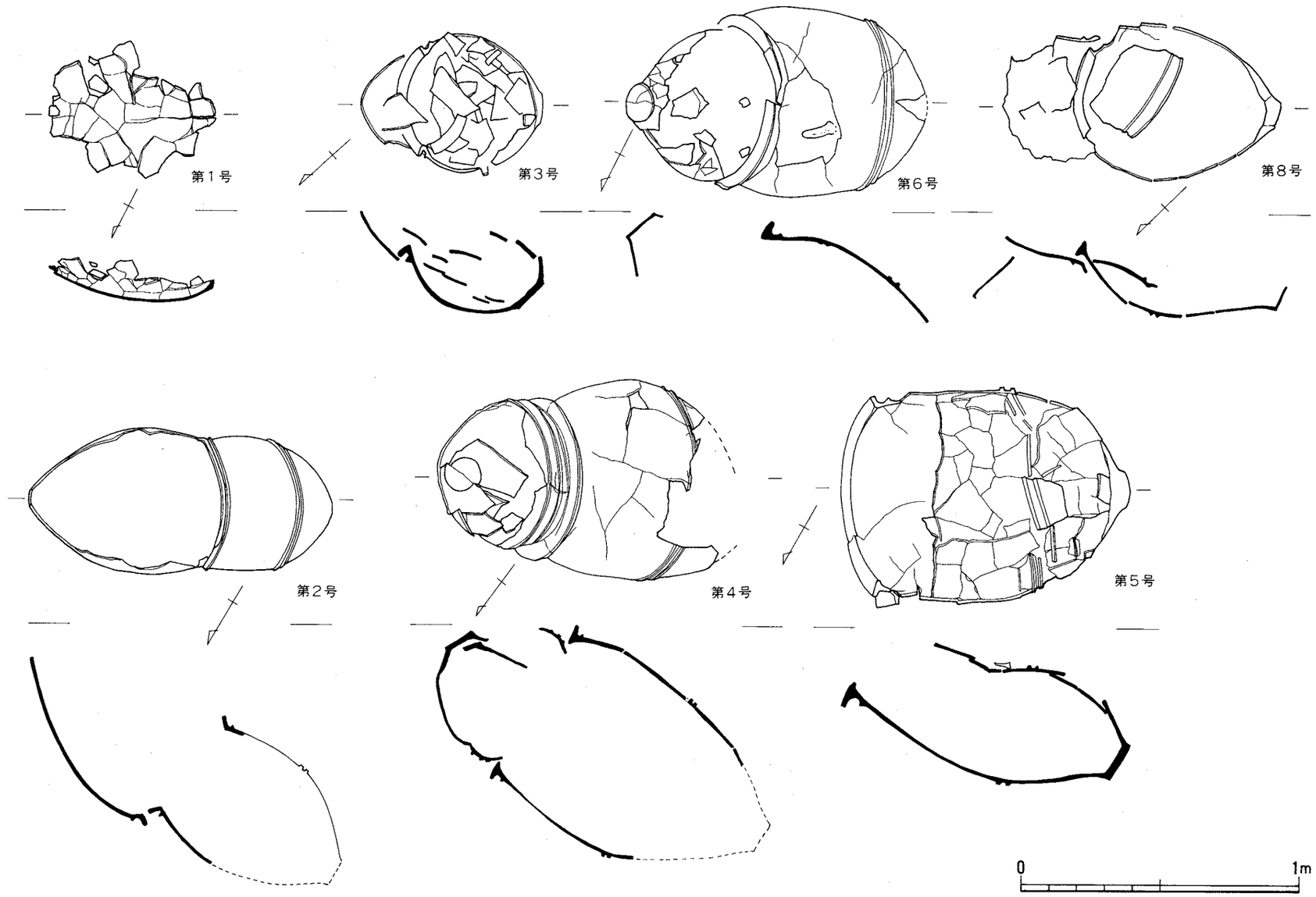


Fig. 7　第1・2・3・4・5・6・8号甕棺墓出土状況実測図（1／20）

辺北半にかかるコーナー部分を中心に弥生時代中期中頃以降の土器類が多量に出土したが土師器類は含まれなかった。

本遺構の性格については当時まだ住居址に付設するものと考えられていたが、現在これを方形周溝墓に比定するとしても墓壙の存在が不明であり、かつ北部九州の弥生中期に周溝墓が存在していたという類例がまだ知られていないので必ずしもきめ手にならないという状態である。

2.小竪穴群（Fig. 6）

環溝内外に点在する小竪穴は調査されたもので68個にのぼる。これらは掘立柱建物あるいは他の施設としてまとまりをもつものは無かったがこのうち6・8・9・11・12・13・16・19・21・22・23・27・39・40・42・44・45・46・60・61・62・63・66・68の24個は時期的に古墳時代と考えられた。小竪穴群は規模的に径0.2～0.5m・深さ0.05～0.7mとかなりの幅があるが全体的に小型の竪穴は深く、大型のものは残りが浅い。

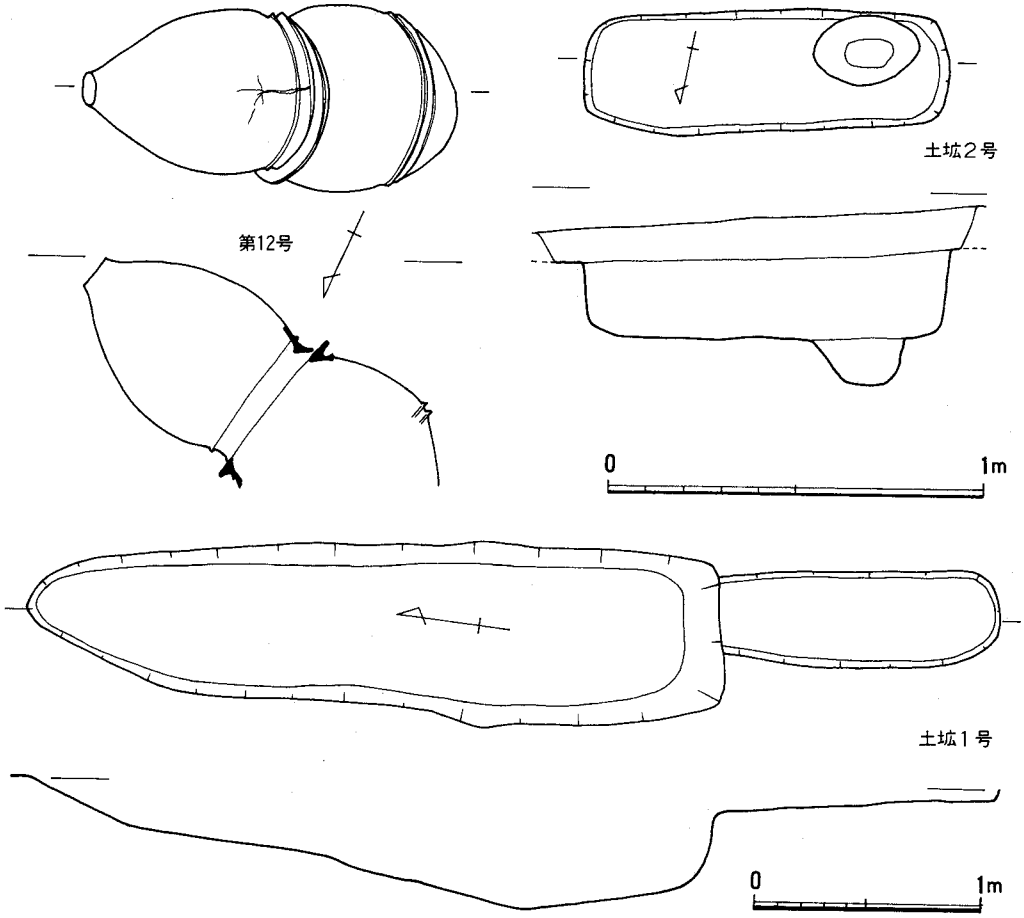


Fig.8　第12号甕棺墓および土壙1・2号出土状況実測図

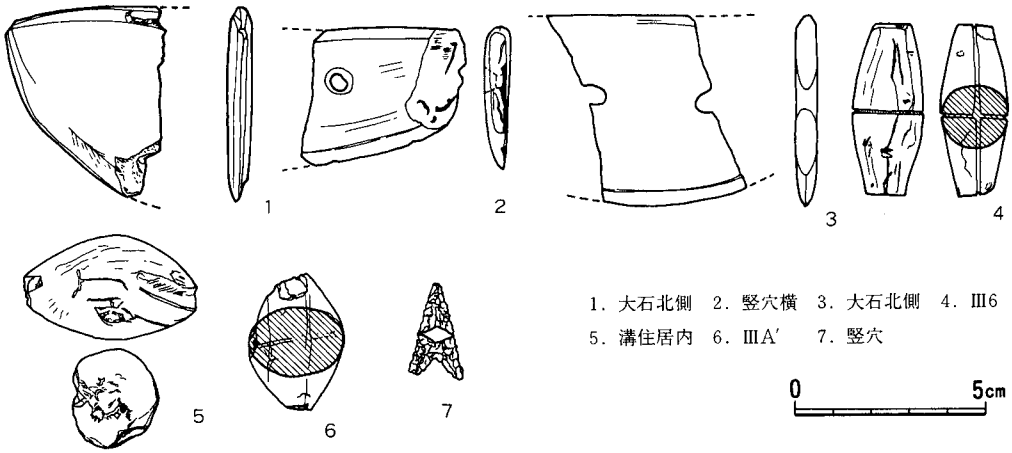


Fig.9　第２次調査出土遺物実測図（1／2）

3.甕棺墓（Fig. 7・8）

環溝北西部で18基以上が確認された。その殆どが東西方向に軸を取るもので、時期的には弥生時代中期後半から後期初頭に亘るものと考えられる。

第１号甕棺墓　下甕のみを残し、主軸をN－64°－Eに向ける。

第２号甕棺墓　覆口式の甕棺墓である。主軸をN－60°－Eに向ける。埋置角度は38°である。

第３号甕棺墓　覆口式の甕棺墓である。主軸をN－42°－Eに向ける。埋置角度は44.5°である。

第４号甕棺墓　呑口式甕棺墓である。主軸をN－54.5°－Eに向ける。埋置角度30.5°である。

第５号甕棺墓　単棺か。主軸をN－59.5°－Eに向ける。埋置角度は24.5°である。

第６号甕棺墓　接口式甕棺墓である。主軸をN－63.5°－Eに向ける。埋置角度50.5°である。

第８号甕棺墓　覆口式甕棺墓である。主軸をN－45°－Eに向ける。埋置角度は25°である。

第12号甕棺墓　接口式甕棺墓である。主軸をN－60.5°－Eに向ける。埋置角度は37°である。

4.土壙（Fig. 8）

第１号土壙　第１号土壙は環溝西側に隣接する溝状土壙で長・幅が3.2×0.8mを測る。底面は中央部で約0.65mであり、北側に向って緩く立あがる。覆土に焼灰が多い。

第２号土壙　第２号土壙は長・幅が1.6×0.5mを測る隅丸長方形の土壙である。底面はほぼ平坦で深さ0.3mを残す。古墳時代の墳墓であろう。

第３号土壙　環溝遺構の南コーナー３mに隣接する長方形土壙である。土壙は長・幅が 2.8×1.8mを測り、覆土には焼土が多量含まれていた。また覆土中では筒形器台を含む中期後半の遺物が出土した。

5.第２次調査採集遺物（Fig. 9）

第２次調査では遺物は全て散逸しているため当時の実測図に拠った。１、２、３は石庖丁残欠である。３は大石北側出土。４は管状土錘で、長・短軸ともに溝を有する。５・６は土製投

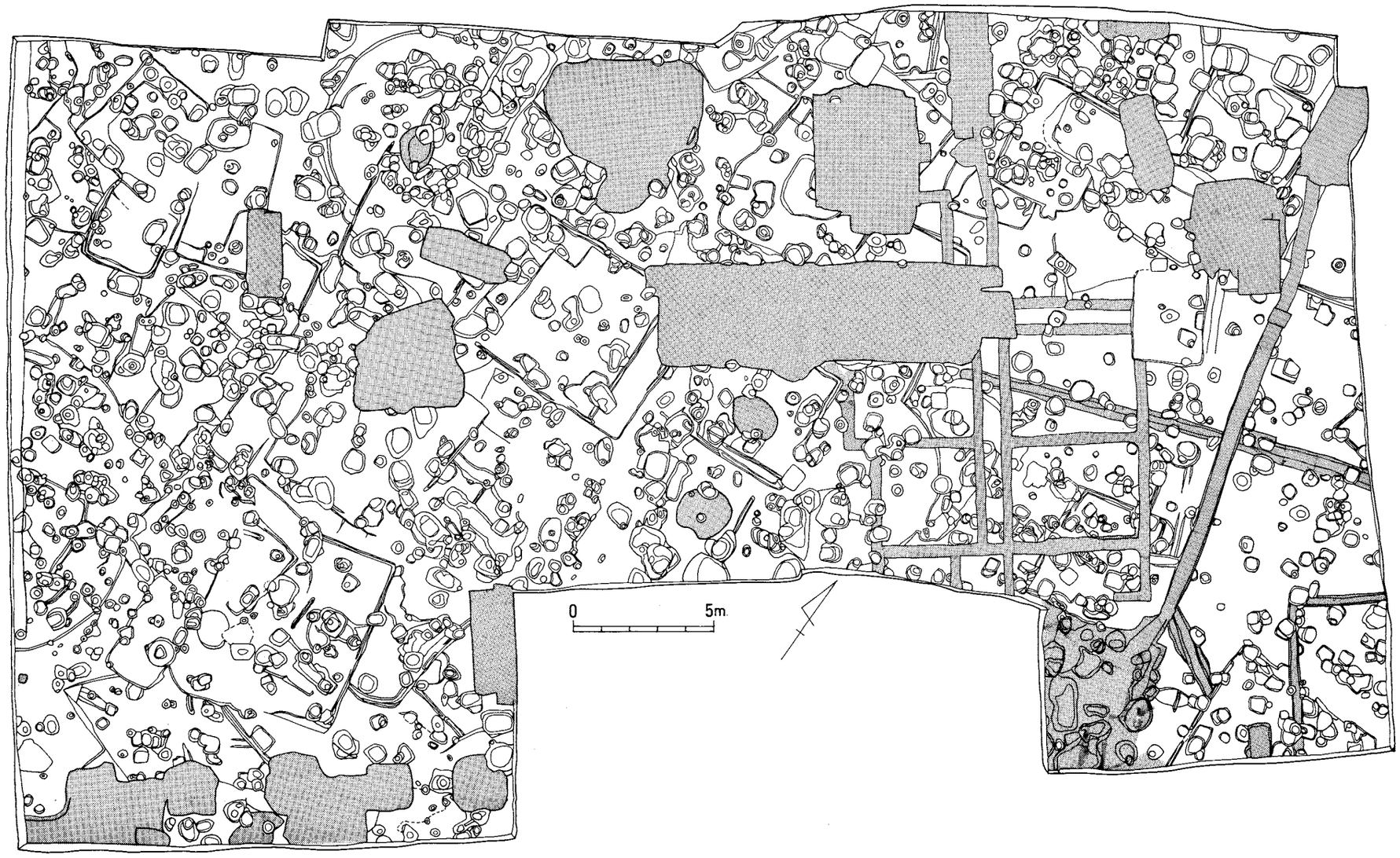


Fig.10　第５次調査遺構全体図（1／200）

弾である。5は環溝内出土。7は凹基無茎式打製石鏃である。黒曜石製である。

第3次調査（昭和41年）

第3次調査は昭和39～41年にかけて施行された県道博多駅－竹下線の拡張調査に伴なって行なわれた。（春住遺跡）

調査は拡幅工事に伴うもの以降に昭和42・44年と断続的に観察調査の形でおこなわれた。これらの調査から縄文時代晩期終末から弥生時代前期にかけての貯蔵穴8基（1～8号ピット）、弥生中期須玖式に属する甕棺墓2基、溝遺構などが確認された。貯蔵穴のうち1号・3号・4号・6号・7号・8号ピットは削平著しく、最下底部層で夜臼式土器と板付Ⅰ式土器の共伴が知られた。また2号ピットは上部に弥生中期後半の土器を混じ、また6号ピットは共伴土器に板付Ⅱ式土器をもつものがある。同調査では上記の土器類以外に扁平打製石斧、石庖丁、石斧、石鏃、土製紡錘車などが採集された。

第4次調査（昭和54～55年）

第4次調査は日本住宅公団の建設工事に伴って行なわれた。（瑞穂遺跡）

調査地は那珂丘陵の北端部に近い位置にあたり、殆どが丘陵上にあたるが西側で谷の侵入する部分があった。東側丘陵部では弥生時代前期～中期に亘る貯蔵穴6基（非常に多量の炭化籾を貯蔵）、祭祀遺構をともなう中期後半の甕棺墓12基および古墳時代前期～中期に至る溝状遺構が検出された。また西側谷部では杭列を伴う弥生前期の泥炭質土層が見付かり、農具類が出土している。

第5次調査（昭和56年）（Fig. 10）

第5次調査は民間自動車会社建物建設に伴って行なわれた。

調査では以前に製造工場があり、基礎と諸々の施設による撹乱で遺構にかなりの改変がみられたが、遺構は全面に分布して重複の激しいものであった。遺構は弥生時代中期から古墳時代前期に亘る竪穴住居址42軒、弥生時代に属する掘立柱建物23棟、それから弥生時代中期後半の丹塗袋状口縁長頸壺を出土した井戸など井戸3基を検出した。

第5次調査は今回の第6次調査地点の西側に近接し、竪穴住居址・掘立柱建物などの遺構が豊富であることから両地点の比較検討が興味深いが、成果については現在鋭意整理中であり、詳細は近刊が予定される本報告を待ちたい。

比恵遺跡関連文献

1．鏡山猛　「原始日本民族の集落形式」『日本諸学振興委員会研究報告第11篇』　1940年
2．鏡山猛　「日本原始集落の研究」『歴史第16巻2号』　1940年
3．福岡市役所　「福岡」　1950年
4．鏡山猛　「北九州の古代遺跡－墳墓・集落・都城－」『日本歴史新書』至文堂　1956年
5．鏡山猛　「環溝住居址小論（一～四）」『史淵67・68・74・78』九州大学　1956～1959年
6．筑紫野古代史研究会　「見捨てられた春住遺跡－縄文晩期終末へのアプローチ－」『筑紫野古代史研究会々報第2集』　1977年7月
7．日本住宅公団　「瑞穂－福岡市比恵台地遺跡－」　1980年

2　第６次調査概要

第６次調査は第２次調査（昭和27年）後『環溝住居址』として遺構の保存措置がなされた環溝遺構部分を除く市営住宅建設地が調査の対象地となった。同地内は市営住宅建設時の基礎掘方・上水道・排水側溝などの諸施設による撹乱で削平が著しい。またほぼ東半にあたる部分は近世以降に水田化がなされ、水利施設としての溝（ＳＤ07・08）をともなって削平が数10cmに及んでいる。

調査は前述の如く過去の削平によって20～30cmの整地土を除くと遺構が直ちに露呈する状況にあった。遺構は弥生時代中期～歴史時代に亘る墓地（甕棺墓・土壙墓）・生活遺構（竪穴住居址・掘立柱建物・井戸址・土壙・溝状遺構）である。

墓地は旧状でかなりの高まりとなっていたとされる調査区西端部と中央部に拡がる。甕棺墓は弥生前期に遡るものはなく中期前葉～後期初頭に亘る44基（ＳＫ01～44）が検出され、細形銅剣副葬墓（ＳＫ28）もあった。土壙墓は７基（ＳＸ01～07）となった。

生活遺構は甕棺墓地を除く調査区全域に分布しており、竪穴住居址９軒（ＳＣ01～09)、堀立柱建物22棟（ＳＢ01～22)、井戸址50基（ＳＥ01～50)、土壙15基（ＳＨ01～15）、溝状遺構９条（ＳＤ01～08、ＳＸ08)、古墳１基が検出された。竪穴住居址は中期後半～古墳時代前期に亘る。掘立柱建物は竪穴住居址と重複し、近世溝（ＳＤ07）東側にも分布し、小規模のものが多い。弥生後期～古墳時代前期に比定される。更に井戸址は弥生中期後半～古墳時代前期に亘り、近世溝（ＳＤ07）の西側に散在するものと同溝の東側地域の南北に２群がみとめられたが前記の掘立柱建物群とは殆ど重複していない。また井戸址は殆ど素掘りと考えられるが、中には井戸側として大型甕を使用するものや井桁に枘板材を用いた例もみられる。

以下に各個別の遺構について詳述することとする。

遺跡見学会風景（6月27日）

調査日誌抄

1982年５月６日　ユンボを入れ遺構検出開始

〃　５月13日　13:30PMにＳＫ28甕棺墓より細形銅剣が出土した。

〃　６月27日　近世構（ＳＤ07）以西の遺構検出がおわり、現地の説明会（写真）を行なう。盛況であった。

1982年８月24日　本日より東半部の井戸址の発掘にかかる。

1982年９月５日　本日にて膨大な井戸址の実測・遺物取上げが完了した。

(1) 甕棺墓（Fig. 11～32, PL. 9～26, Tab. 1）

概要 第6次調査で確認された甕棺墓は墓壙掘方のみのものを含めて計44基となったが、第2次調査での第6号甕棺墓がSK34甕棺墓と切あう撹乱坑、第6号甕棺墓がSK24甕棺墓と切あう撹乱坑、第11号甕棺墓がSK35甕棺墓と切あう撹乱坑とそれぞれ一致すると考えられるため5基を追加、更に当時の調査区は今回のSK28甕棺墓より西側に拡がっており甕棺墓3基以上の確認があるため都合甕棺墓は52基以上の構成になることは確実である。墓域については第2次調査の成果から更に西側に拡大することが知られるが、南限は現在の遺跡会館下の様子が昭和27年当時からも不明である点で範囲を限れない。

甕棺墓は遺存状態の悪いものを除くと中期前葉4基、中期中葉5期、中期後葉14基、中期末～後期初頭17基の時期構成となっているが第2次調査のものを含めると中期末～後期初頭の時期に属するものが多い。細形銅剣を副葬するSK28甕棺墓は中期前葉に含まれる。以下各甕棺墓については個別の出土状況の説明を加えるが、全体は表にして後にまとめた。（Tab. 1）

SK01甕棺墓（Fig. 11・PL. 9）

SK01甕棺墓は第1号古墳の周溝南端に近く位置し、墓域内では最北部にあたるとおもわれる。同墓は第1号古墳周溝掘削および後世の撹乱坑によって墓壙を大きく破壊されている。墓坑はSK02に類似する形態となろう。

甕棺墓は上甕・下甕ともに大型の甕形土器を使用した接口式合口甕棺墓である。甕棺墓はN－66.5°－Eを主軸として9°の緩い角度をもって埋置されており、墓壙の掘削と甕棺の挿入は東側方向よりおこなわれている。

棺使用甕のうち上甕は口縁部が最大口径をなり、口唇内面への発達が著しく外方に傾斜する。胴部には中位に2条の三角突帯をもつ。下甕は胴部中位よりやや上った部分を最大径とし、上部が内傾化する。胴部中位よりやや上に2条の三角突帯を有する形態となる。

SK02甕棺墓（Fig. 11・PL.10）

SK02甕棺墓はSK01甕棺墓の東側に隣接する位置にある。墓壙は竪坑が1×1.5mの横長の長方形をなし、これより掘入まれた横穴は奥行2.4mをはかる。

甕棺墓は上甕・下甕ともに大型の甕形土器を使用した接口式合口甕棺墓である。甕棺墓はN－30.5°－Wを主軸として水平に埋置されており、墓壙の掘削と甕棺の挿入は南側方向よりおこなわれている。

棺使用甕のうち上甕は口縁部が内方に発達し、胴部中位に2条の三角突帯を有する。胴部は突帯以上は外方にひらかず直立的に口縁部につながる。下甕は口縁が内外面に発達した平坦口縁を有し、胴部中位に一条の三角突帯を廻らす。突帯以上は胴部が膨らみを増し口縁下付近でしまる。突帯は口縁下にはつかない。

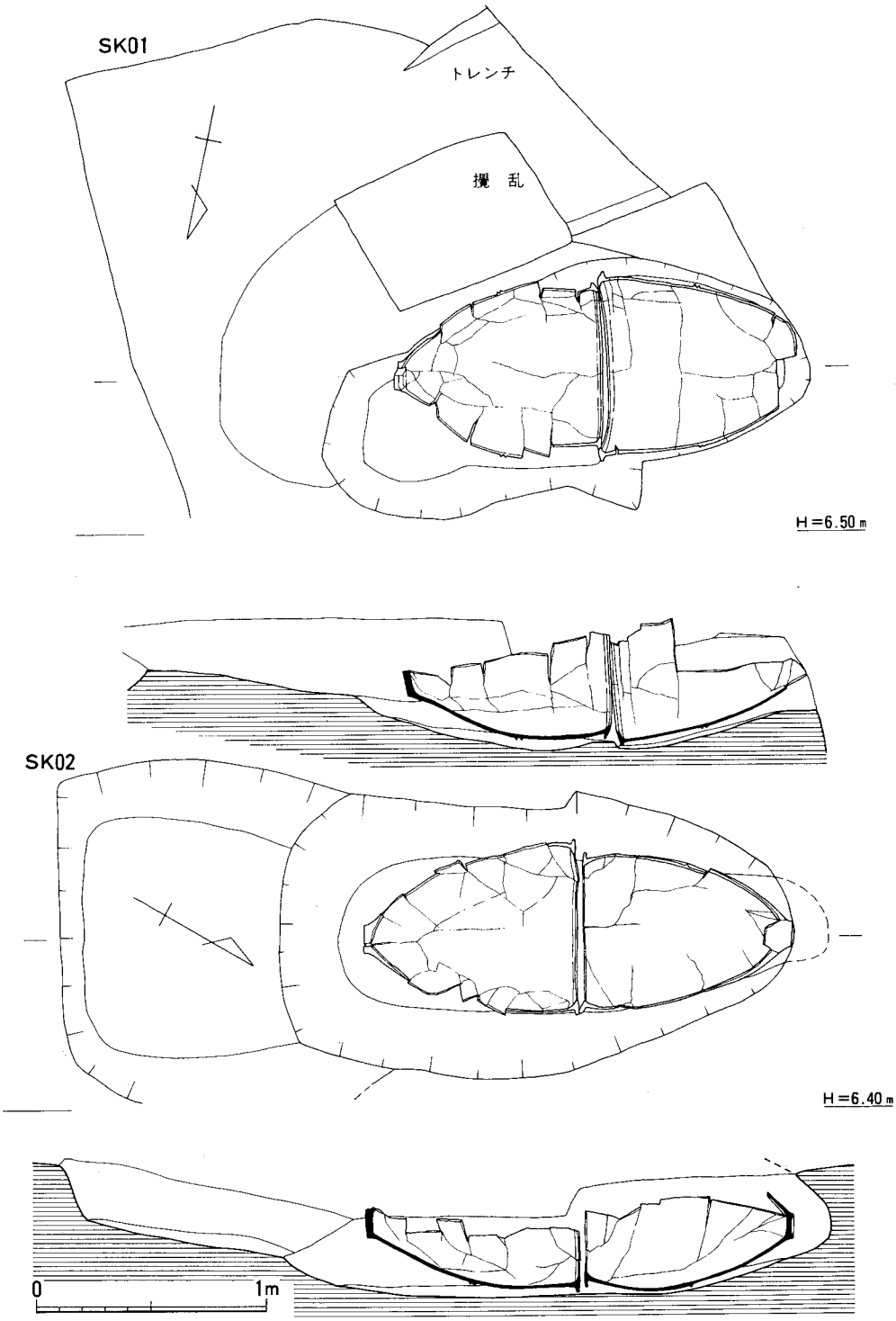


Fig.11　SK01・02甕棺墓出土状況実測図（1／30）

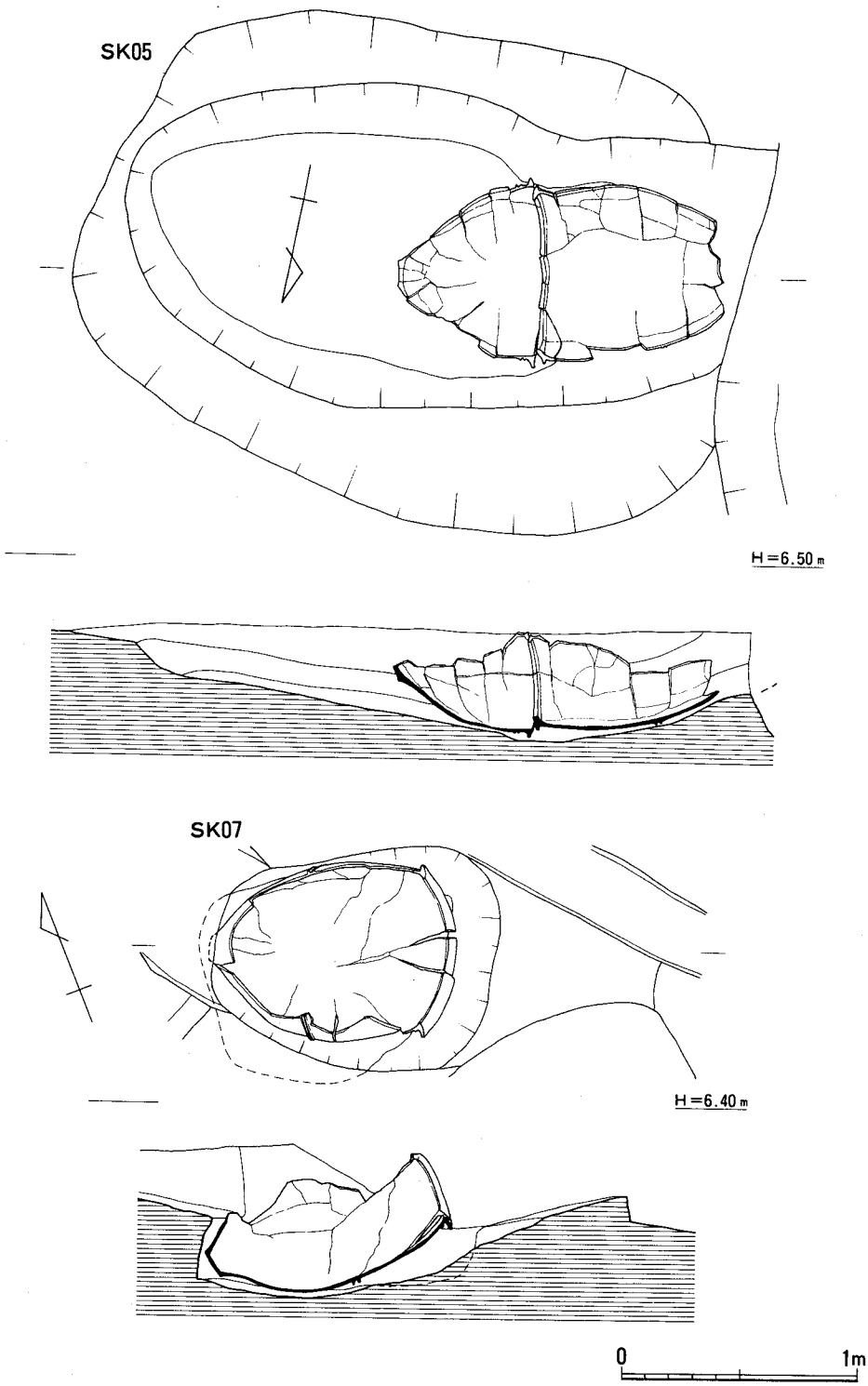


Fig.12　SK05・07甕棺墓出土状況実測図（1／30）

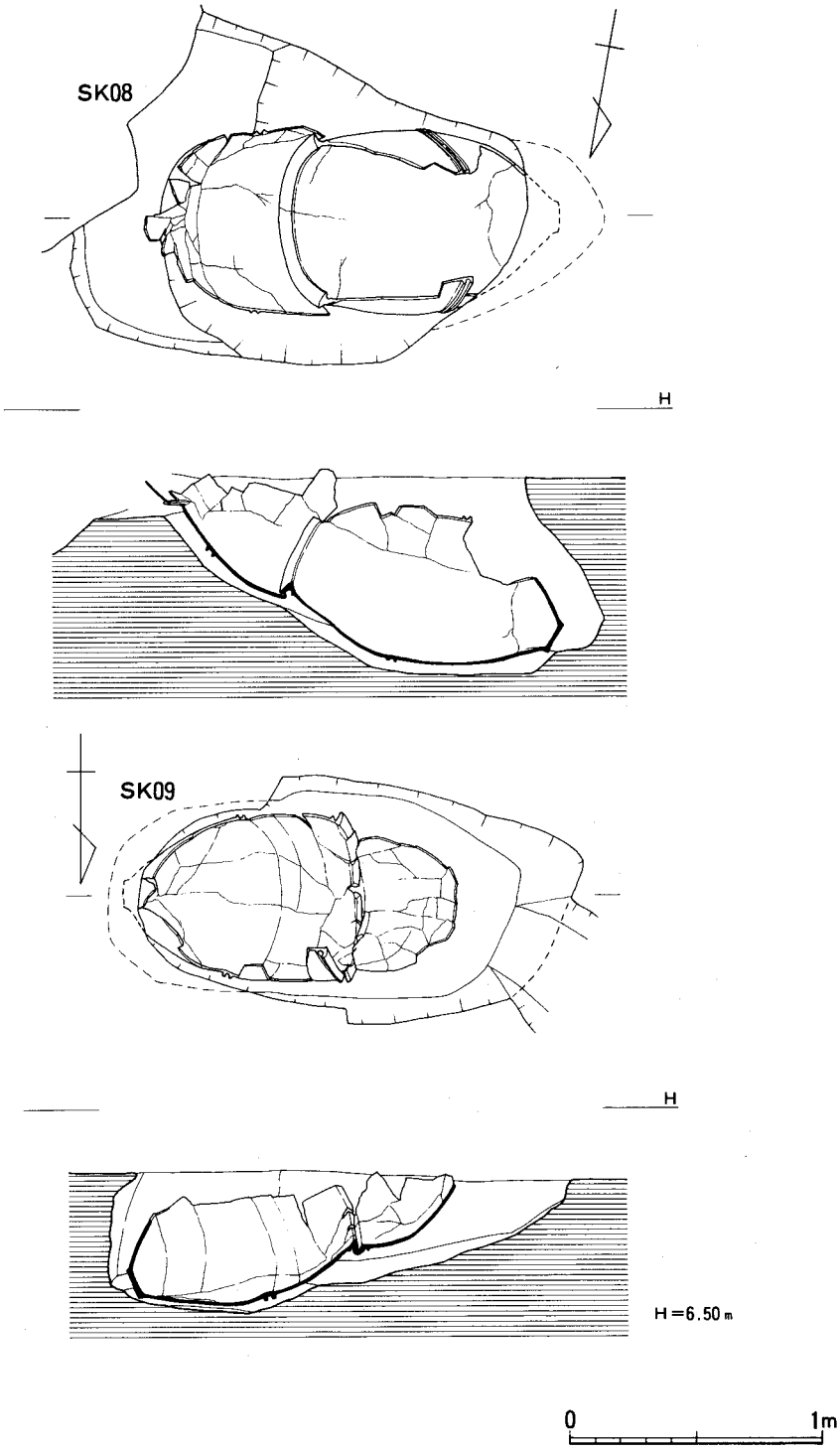


Fig.13　SK08・09甕棺墓出土状況実測図（1／30）

ＳＫ05甕棺墓（Fig.12・PL.10）

ＳＫ05甕棺墓は第１号古墳周溝掘削時に下甕を著しく破損している。墓壙は2×2.8mをはかる隅丸長方形をなす。

甕棺墓は上甕を大型鉢・下甕を大型甕形土器を使用した接口式合口甕棺墓である。甕棺墓はＮ－78°－Ｅを主軸として3.5°というほぼ水平に近い緩い角度で埋置されており、墓壙の掘削と甕棺の挿入は東側方向よりおこなわれている。

棺使用甕のうち上甕は内外とも口縁部が発達した「Ｔ」字形口縁を有する鉢で口縁下にやや下って２条の三角突帯を廻らす。下甕は口縁部が内方に発達が著しく外方に傾斜する。胴部には中位よりやや下った位置に２条の三角突帯を廻らすが、胴部は突帯上から一端膨らみ、次いで内傾気味に立あがる。

ＳＫ07甕棺墓（Fig.12・PL.11）

ＳＫ07甕棺墓は墓地東側にＳＫ８・９甕棺墓と並列する位置にある。墓壙は水道管理設によってかなりの削平を受けている。

甕棺墓は単棺の可能性が高い。甕棺墓はＮ－112°－Ｅを主軸として34°の急角度で埋置されている。墓坑の掘削と甕棺の挿入は東側方向から行なわれている。

棺使用甕は内傾化する「Ｔ」字形口縁を有し、最大径を胴部中位にもつ。中位に２条の「コ」字形突帯廻らす。

ＳＫ08甕棺墓（Fig.13・PL.11）

ＳＫ08甕棺墓はＳＫ07・09に並列する位置にある。墓壙は不整な隅丸長方形をなす。

甕棺墓は上甕に中型の甕、下甕に大型の甕形土器を使用した接口式合口甕棺墓である。甕棺墓はＮ－89.5°－Ｅを主軸として21°の急角度で埋置されている。墓壙の掘削・甕棺の挿入は東側方向からである。

棺使用甕は上甕が内弯気味に外反する口縁直下に１条の三角突帯を廻らす。下甕は内傾化の著しい「Ｔ」字形口縁を有し、胴部は卵形を呈して口縁部付近に至ってよくしまる。そして胴部中位に高い２条の「コ」字形突帯と口縁部直下に鈍い三角突帯を１条廻らす。

ＳＫ09甕棺墓（Fig.13・PL.11）

ＳＫ09甕棺墓はＳＫ07・08甕棺墓の南側に並列して埋置されている。墓壙は竪坑部分が顕著に残らない。

甕棺墓は上甕に口縁打欠きの大形甕・下甕に大型甕形土器を使用した覆口式合口甕棺墓である。主軸はＮ－80.5°－Ｅにとり31°の急激な角度をもって埋置される。墓壙掘方・甕棺挿入は東側方向から行なわれている。

棺使用甕は上甕が胴部中位よりやや下に２条の三角突帯をもつ。下甕は内傾化の著しい「Ｔ」字形口縁を有し、胴部最大径となり、中位に２条の「コ」字形突帯を廻らす。

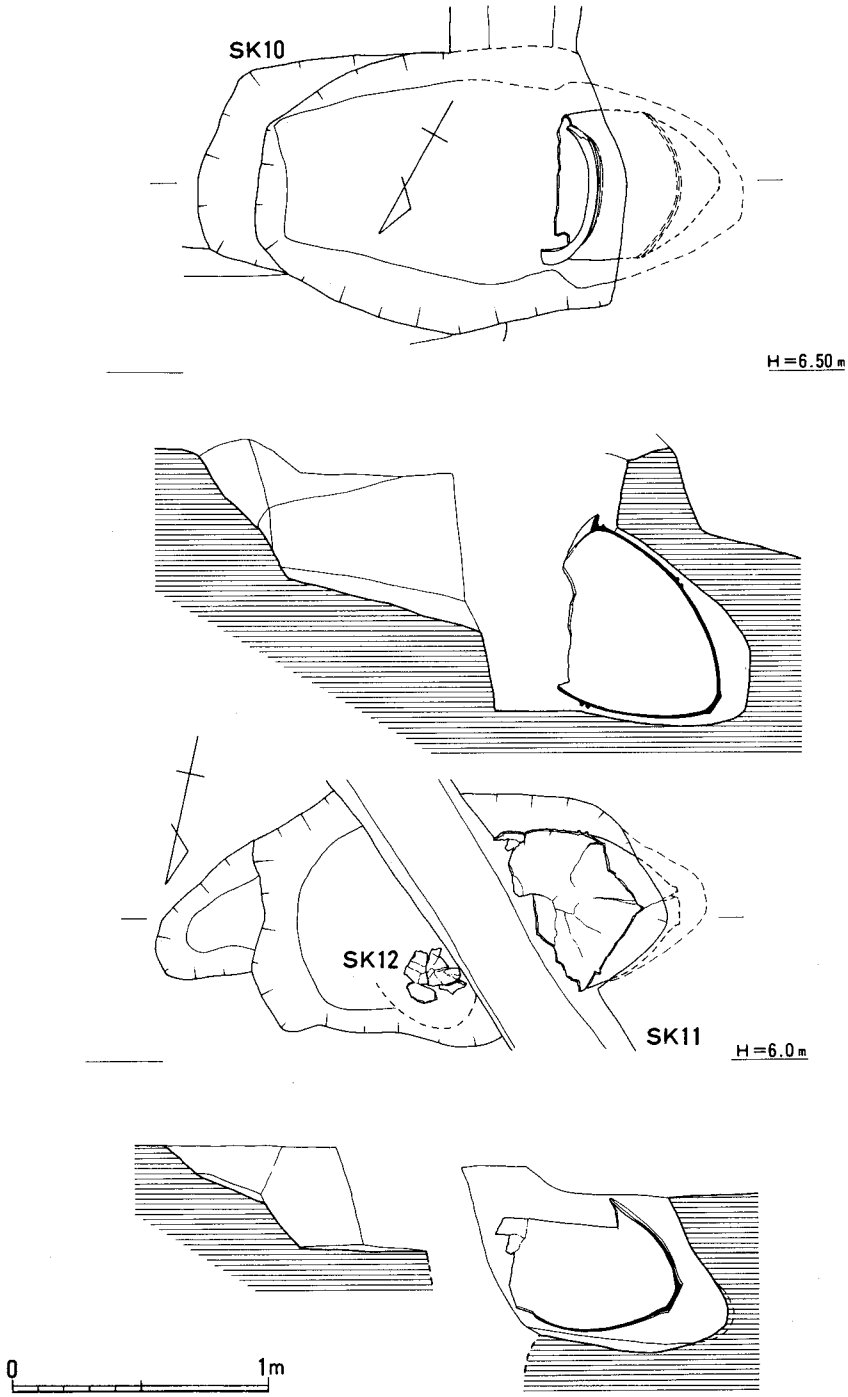


Fig.14　SK10・11・12甕棺墓出土状況実測図（1／30）

ＳＫ10甕棺墓（Fig.14・PL.12）

ＳＫ10甕棺墓は水道管埋設による撹乱受けるが竪坑の段を明瞭に残す。

甕棺墓は単棺で大型の甕形土器を使用している。主軸をＮ－51°－Ｅにとり37.5°の強い角度で埋置している。墓壙の掘削・甕棺挿入は東側方向からである。

棺使用甕はやや内傾化した口縁を有し、胴部は全体に膨らみがつよく、胴中位以上はやや内傾しながら立あがっている。口縁下突帯は断面三角形、胴部中位のものは２条の「コ」字形突帯である。

ＳＫ12甕棺墓（Fig14・PL.12）

ＳＫ12甕棺墓はＳＫ10甕棺墓の南側に隣接する。墓壙は水道管埋設に非常な撹乱を受けている。また墓壙覆土中には小児棺ＳＫ11甕棺墓が営まれている。

甕棺墓は単棺で口縁部を欠損するが大型の甕形土器を使用している。甕棺墓はＮ－78.5°－Ｅに主軸をもち26.5°の強い角度で埋置されている。墓壙の掘削・甕棺の挿入は東側方向からである。

棺使用甕は口縁部形態が不明であるが、胴部中位に下方を向く２条の「コ」字形突帯を廻らす。胴部中位以上は直立気味に内傾している。全体に胴下半はしまりがない。

ＳＫ13甕棺墓（Fig.15・PL.13）

ＳＫ13甕棺墓は墓地の東辺に位置している。竪坑は方形状をなすが狭く、底面は横穴に向って緩く傾斜する。

甕棺墓は上甕に中型の甕・下甕に大型の甕形土器を使用している接口式合口甕棺墓である。Ｎ－118°－Ｅに主軸方向をとり、36°の強い傾斜をもって埋置されている。墓壙の掘方・甕棺の挿入は東側方向から行なわれている。

棺使用甕は上甕が胴部中位を最大径とする甕で口縁はよくしまり、外方によく発達した口縁部は下方にたれ、やや下った位置に一条の三角突帯を廻らす。また胴部中位よりやや下った位置に２条の三角突帯を廻らす。下甕は胴部中位よりやや上方に最大径を有する甕で口縁部はよくしまる。また口縁部は内傾化が著しく、直下に一条の三角突帯を廻らす。胴部中位に２条の「コ」字形突帯を廻らす。

ＳＫ14甕棺墓（Fig.15・PL.13）

ＳＫ14甕棺墓は墓地の東辺に位置する。竪穴は0.7×1.1ｍの隅丸方形を呈し、底面は幅約0.4ｍの狭いものとなっている。排水溝の掘削によってかなりの欠損がみられる。

甕棺墓は単棺で口縁部の半分を欠損するが大型の甕形土器を使用している。Ｎ－131.5°－Ｅに主軸をとり、31°の傾斜をもって埋置されている。墓壙の掘削・甕棺の挿入は東南側より行なわれている。

棺使用甕は全体に胴部のふくらみが大きく、口縁部はよくしまる。口縁部は分厚く内傾化しており、直下に三角突帯１条を廻らす。胴部中位よりやや下った位置に２条の三角突帯を廻らしている。

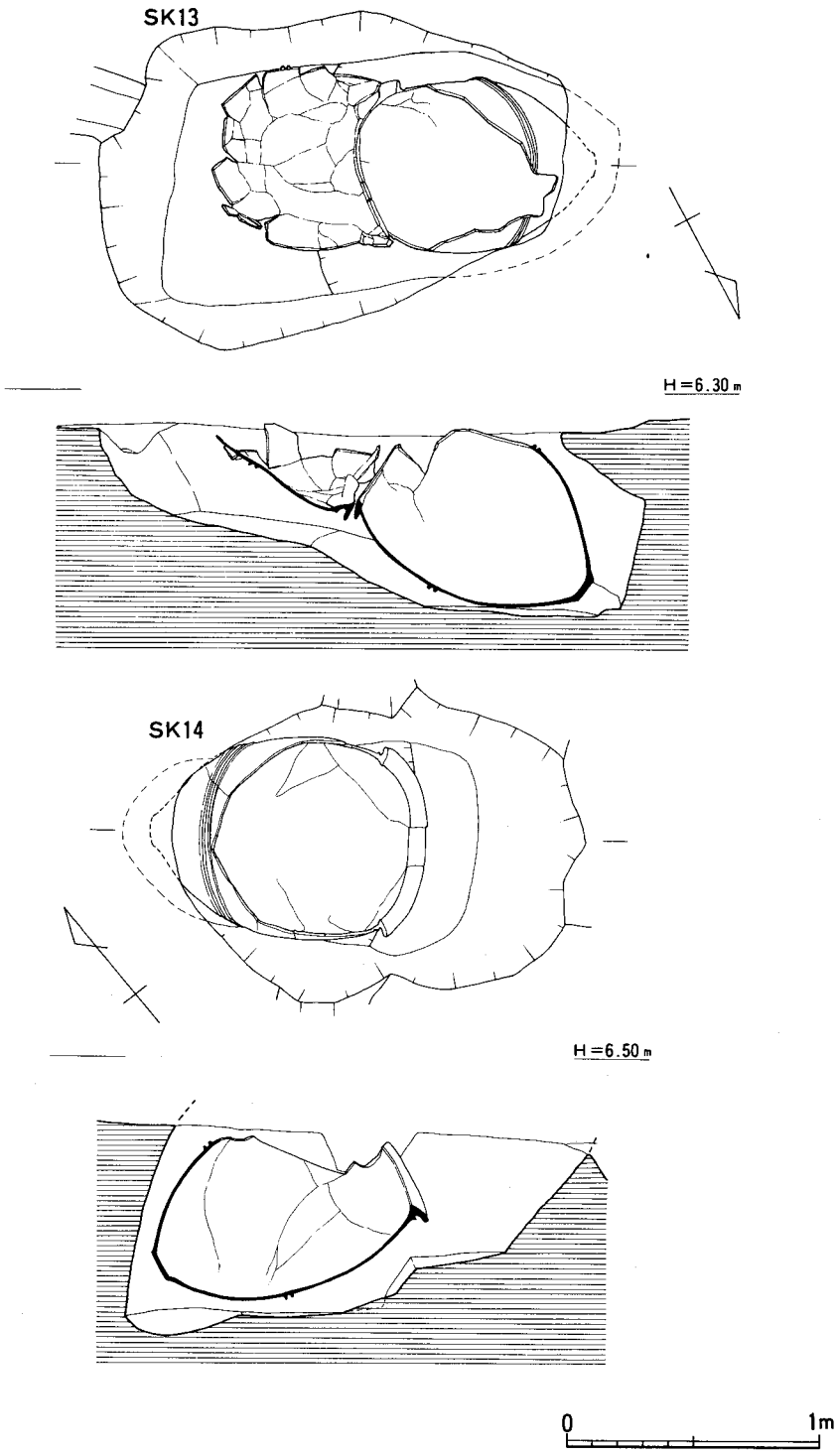


Fig.15　SK13・14甕棺墓出土状況実測図（1／30）

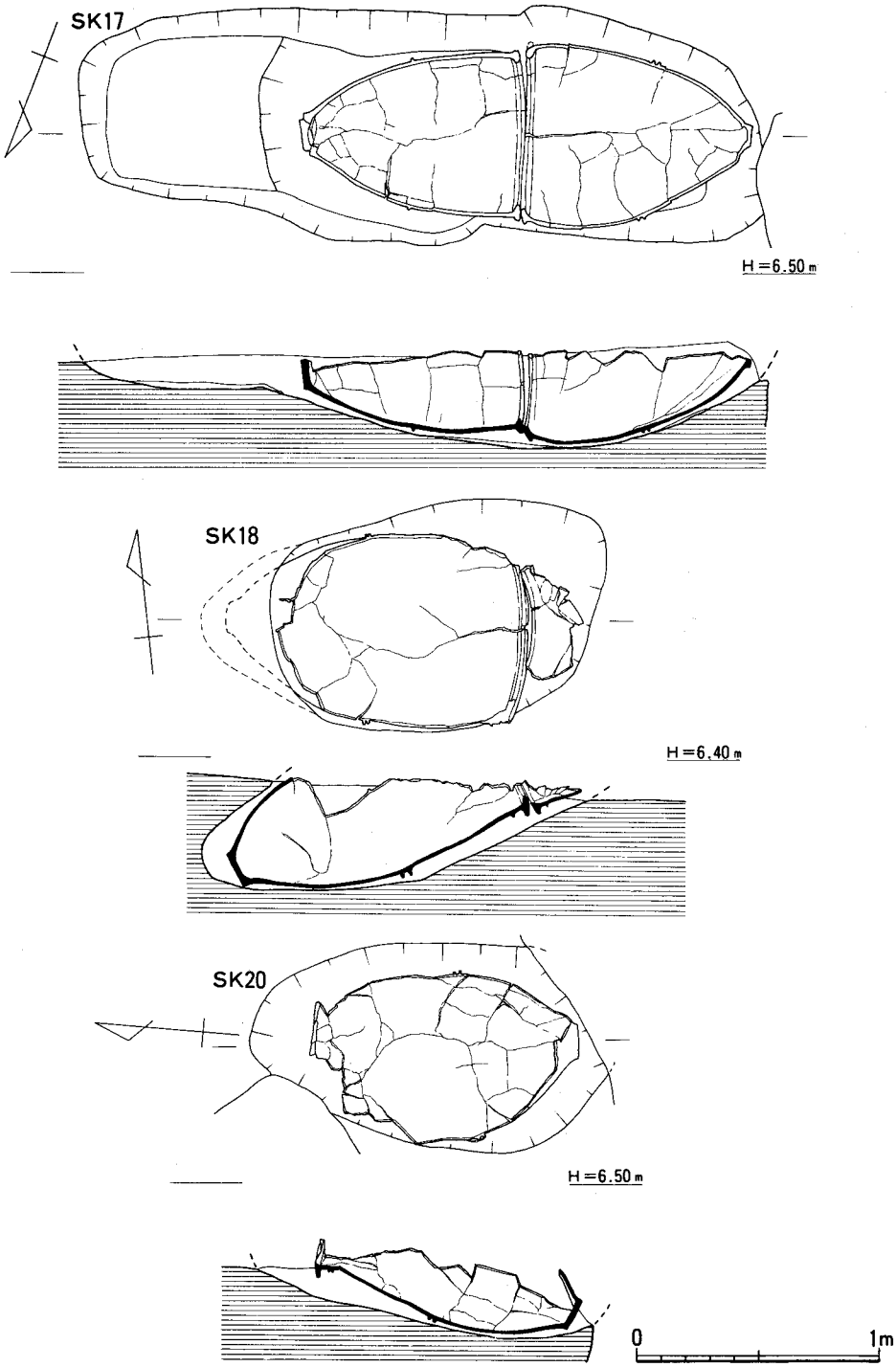


Fig.16　SK17・18・20甕棺墓出土状況実測図（1／30）

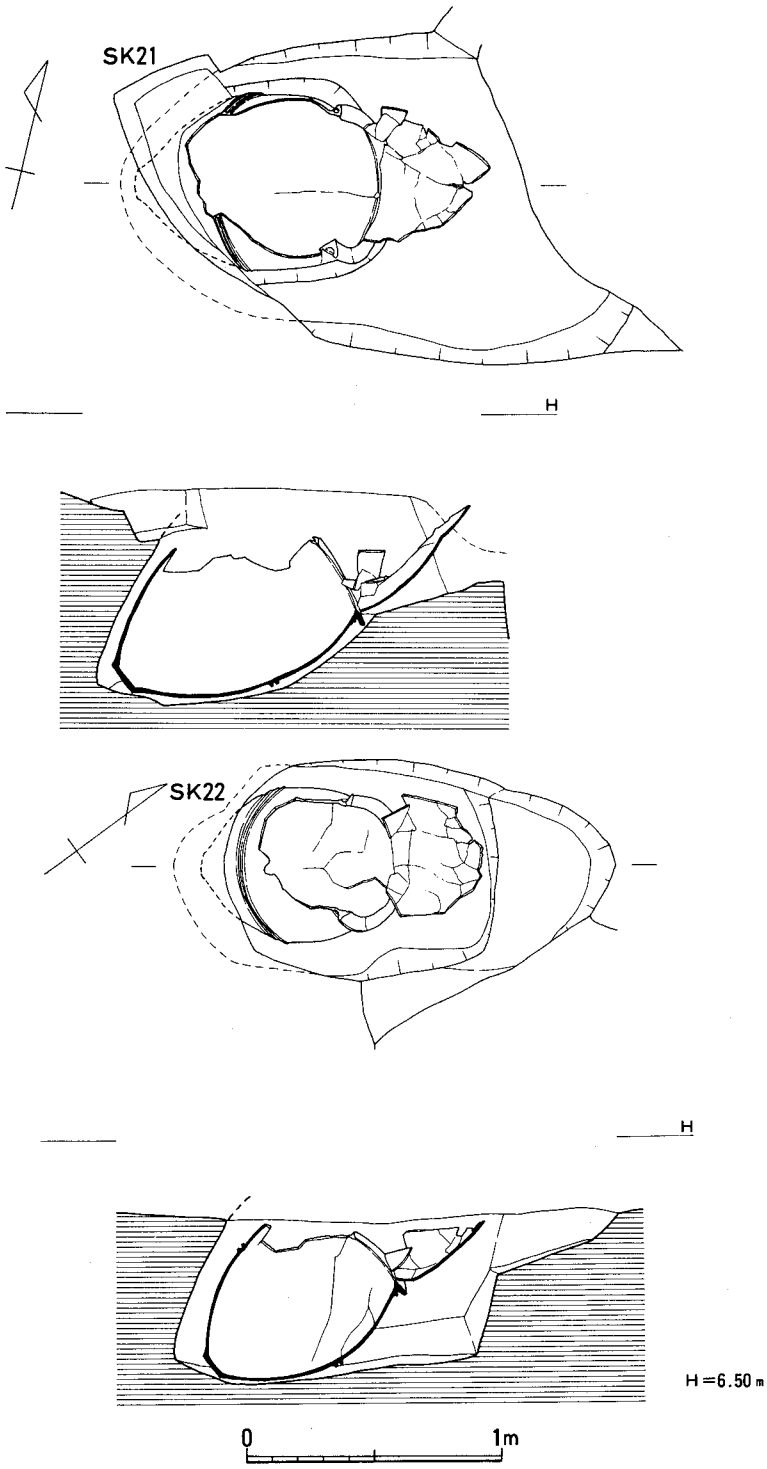


Fig.17　SK21・22甕棺墓出土状況実測図（1／30）

ＳＫ17甕棺墓（Fig. 16・ＰＬ.15）

ＳＫ17甕棺墓は墓地のほぼ中央部にＳＫ18甕棺墓の北側に並列している。墓壙は長方形を呈し、横穴との間に明瞭な段をもつ。

甕棺墓は上甕・下甕ともに大型甕形土器を使用した接口式合口甕棺墓である。Ｎ－67°－Ｅに主軸をとり、3.5°の緩い傾斜をもって埋置されている。墓壙掘方・甕棺挿入ともに東側からおこなっている。

棺使用甕は上甕が胴部中位から直線的に立あがり、口縁内面の突出が著しく、胴中位に一条の三角突帯をもつ。下甕は口縁が外方に傾斜し、胴部に２条の三角突帯を廻らす。

ＳＫ18甕棺墓（Fig. 16・ＰＬ.15）

ＳＫ18甕棺墓はＳＫ17甕棺墓の南側に隣接する。上部の削平により上甕は殆どない。

甕棺墓は上甕が大型鉢、下甕が大型甕を使用した接口式合口甕棺墓である。Ｎ－95°－Ｅに主軸をとり、29°の傾斜をもって埋置されている。墓壙掘方・甕棺挿入は東側からである。

棺使用甕は下甕が口縁部を最大径として、胴部が中位より直線的に立ちあがる。外唇部が垂れる「Ｔ」字形口縁を有し、直下に１条の「コ」字形突帯をもつ。胴部中位に同様の突帯を２条廻らす。

ＳＫ20甕棺墓（Fig. 16・ＰＬ.16）

ＳＫ20甕棺墓はＳＫ21・37甕棺墓と隣接しており時期的に先後関係があろうが出土状況では判断が不明である。

甕棺墓は単棺か。主軸をＮ－5°－Ｗにとり、29°の強い角度で埋置されている。墓壙掘方・甕棺挿入も北側から行なっている。

棺使用甕は胴全体にふくらみが大きく、胴部中位より直線的に立あがり、口縁部は内方への張出しが大きく外方に傾斜する。口縁より下った位置に２条の三角突帯および胴部中位に「コ」字形突帯２条を廻らす。

ＳＫ21甕棺墓（Fig. 17・ＰＬ.16）

ＳＫ21甕棺墓はＳＫ37甕棺墓と切り合い関係にあってこれより新しく営まれた可能性がたかい。

甕棺墓は上甕が中型の甕、下甕が大型甕を使用した接口式合口甕棺墓である。主軸をＮ－77°－Ｅにとり、36°の傾斜をもって埋置される。墓壙掘方・甕棺挿入は東側からである。

棺使用甕は上甕が胴部中位より口縁に向ってのしまりの大きいもの。下甕は胴部全体のふくらみが大きく、口縁付近でよくしまる特徴をもつ。口縁は小さく内傾し、直下に１条の三角突帯、胴中位に２条の「コ」字形突帯を廻らす。

ＳＫ22甕棺墓（Fig. 17・ＰＬ.17）

ＳＫ22甕棺墓はＳＸ01土壙墓の北側に隣接する。墓壙は長円形をなす。

甕棺墓は上甕が中型甕、下甕が大型甕の呑口式合口式甕棺墓(？)である。主軸をＮ－36°－Ｅ

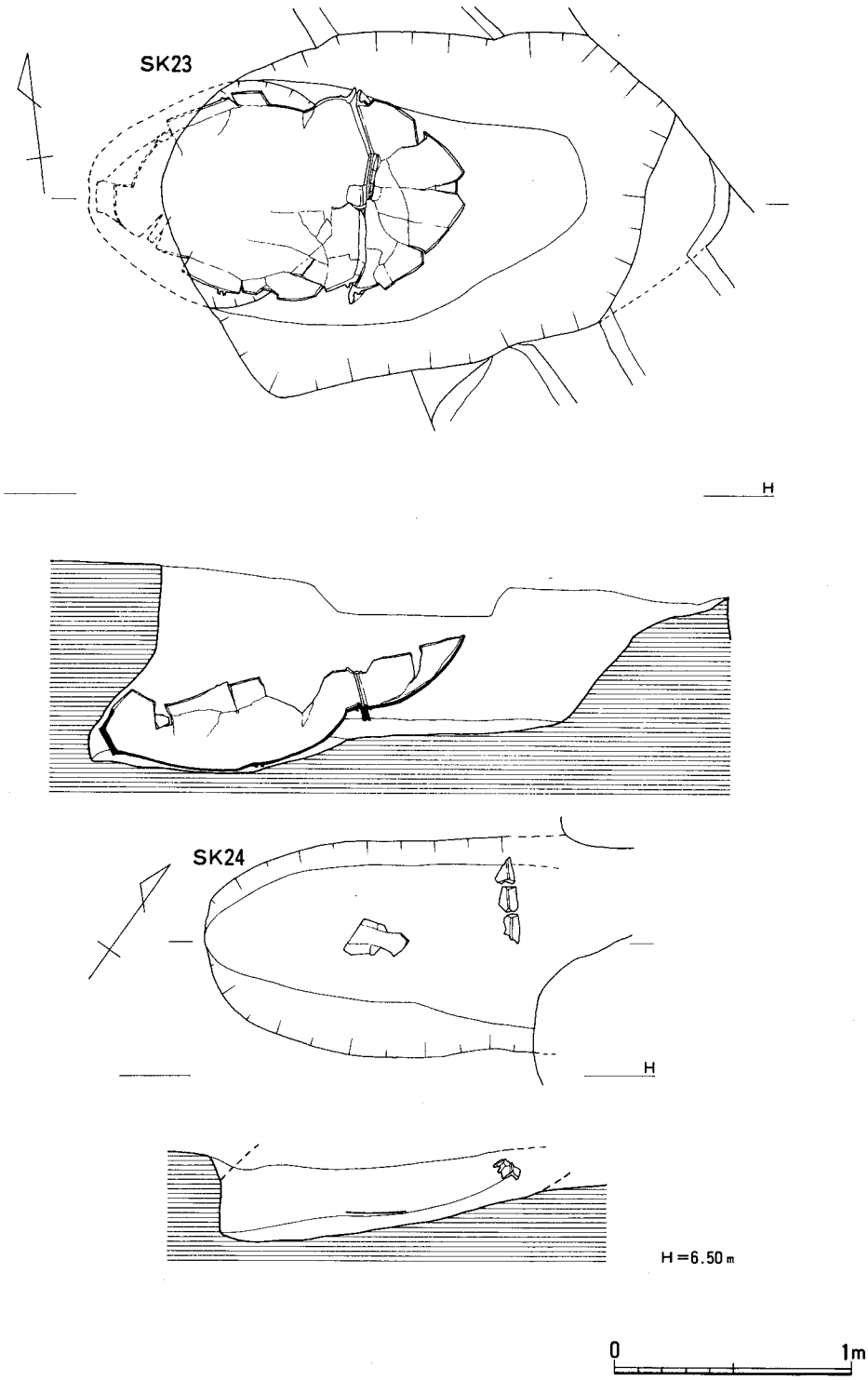


Fig.18　SK23・24甕棺墓出土状況実測図（1／30）

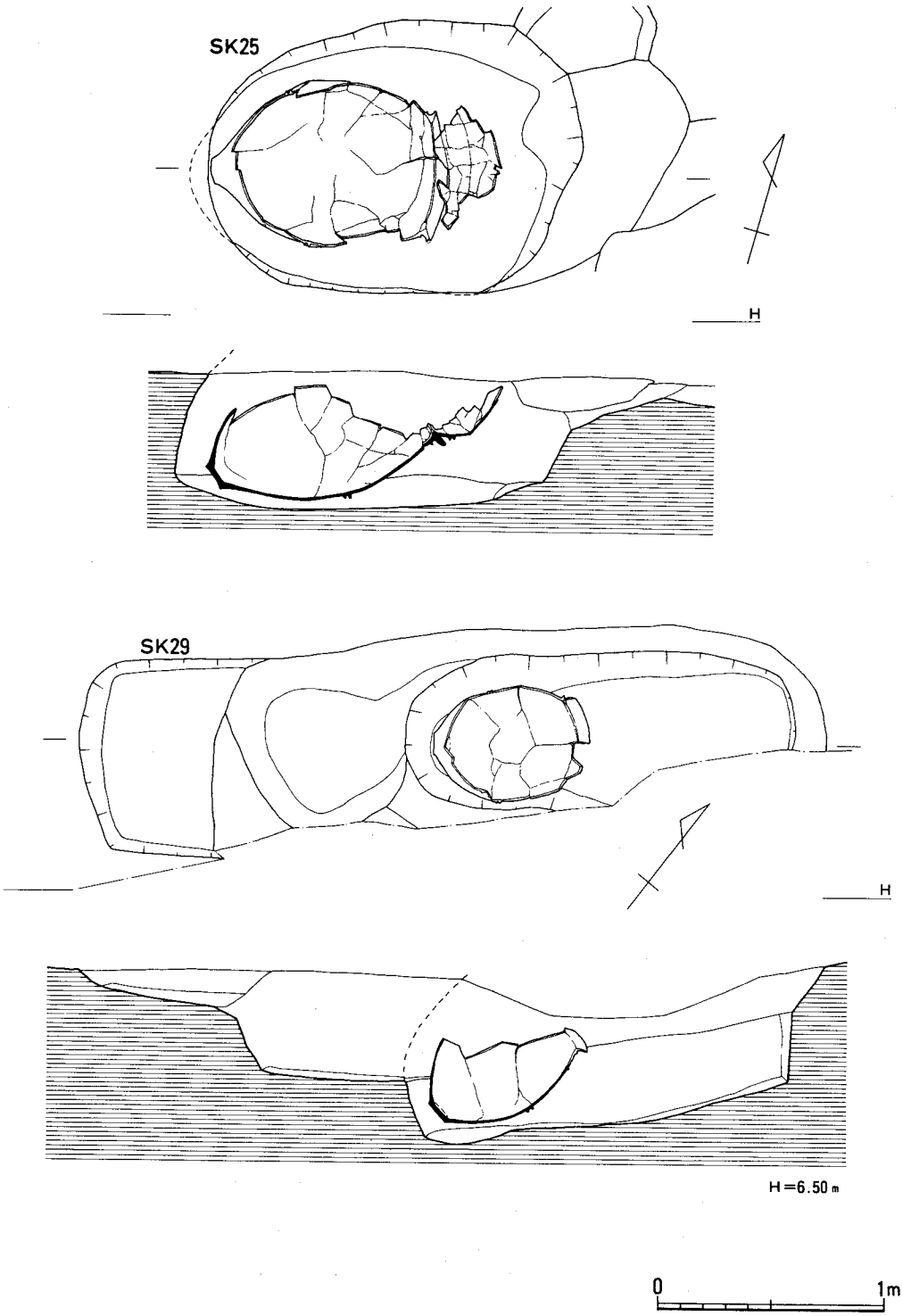


Fig.19　SK25・29甕棺墓出土状況実測図（1／30）

にとり、39°の急角度で埋置されている。墓壙掘方・甕棺挿入も北東方向からである。

棺使用甕は上甕が内弯気味に直立する口縁直下に一条の三角突帯を付す。下甕は胴部中位より口縁に向ってしまりが良い。内傾化する口縁直下に一条の三角突帯、胴部中位に2条の「コ」字形突帯を付す。

ＳＫ23甕棺墓（Fig. 18・ＰＬ.17）

ＳＫ23甕棺墓はＳＫ13甕棺墓の東側に隣接している。墓壙は埋設管掘方、基礎坑などによる撹乱で改変が著しいがほぼ隅丸長方形をなす。

甕棺墓は上甕が大型の鉢・下甕が大型の甕形土器を使用した接口式合口甕棺墓である。同棺はＮ－96.5°－Ｅに主軸をとり、28.5°の傾斜をもって埋置されている。墓壙掘方・甕棺の挿入は東側からなされている。

棺使用甕は上甕が口径に比して身丈のつまった鉢で外方に強く張出す口縁は下方に垂れ口縁直下に一条の三角突帯を廻らす。下甕は胴部中位よりやや上った位置が最大径となり全体に膨らみのつよい甕で、やや外唇部の垂れ気味の口縁部直下に一条の「コ」字形突帯、胴部中位に下方のものが高く全体に上向きな「コ」字形突帯2条を付している。

ＳＫ24甕棺墓（Fig. 18）

ＳＫ24甕棺墓は第2次調査第7号甕棺墓と切り合い関係にある。甕棺は下甕と考えられる甕口縁部と墓壙の底面に密着して甕胴部が見付かったにすぎない。甕は口縁が内弯しながら外反し、直下に一条の三角突帯を付す。

ＳＫ25甕棺墓（Fig. 19）

ＳＫ25甕棺墓はＳＫ24甕棺墓の西側に隣接する位置にある。墓壙は削平により上半部を失うが隅丸長方形をなす。

甕棺墓は上甕･下甕ともに大型の甕形土器を使用する接口式合口甕棺墓である。同棺は主軸をＮ－74°－Ｅにとり、34°の急角度で埋置されている。墓壙掘方･甕棺の挿入は東側から行なわれている。

棺使用甕は上甕が胴部突帯以上打欠きの甕で突帯は三角突帯2条を付す。下甕は胴部中位を最大径とする甕で口縁外唇部が肥厚し、やや内傾する。口縁部直下に一条の「コ」字形突帯を付す。胴部中位には2条の「コ」字形突帯を付しており、全体に安定感をあたえる。

ＳＫ29甕棺墓（Fig. 19・ＰＬ.18）

ＳＫ29甕棺墓は調査区南端壁際にあり、後世の撹乱によって墓壙の欠損が大きい。本棺は墓壙のスペース等から合口甕棺墓の上甕が失なわれたものと考えられる。

甕棺墓は主軸をＮ－53°－Ｅにとり、45°のきわめて急角度で埋置されている。墓壙掘方・甕棺の挿入は北東側からである。

棺使用甕は、下甕が胴部中位を最大径とする甕でこれより以上の内傾化がいちじるしい。口縁部は「く」字形に強く屈曲し、直下に1条胴部中位に2条の三角突帯を付す。

ＳＫ28甕棺墓（Fig.20, ＰＬ.19・20）

ＳＫ28甕棺墓は調査区南西部に位置し、住宅化の際の削平で非常な影響を蒙っているが全体のまとまりは把えることができた。検出時には東西に長い大形土壙と甕棺墓とが切り合い関係にあるものと考えて精査したが覆土層観察でも漆黒色土の単一層であり、また遺構全体が露出するに及んで長方形土壙の南辺に甕棺墓が直交することが判りこの竪穴も甕棺墓に付帯する施設であると判断した。

甕棺墓は上甕・下甕ともに大型の甕形土器を使用した接口式合口甕棺墓である。同棺は主軸をＮ－18.5°－Ｗにとり、ほぼ水平に埋置されており、接口部に近い上甕側に切先を北側に向けた細形銅剣１振が副葬されていた。銅剣は後世の流入土があり甕壁面より若干浮いた状態にあったが、露呈した面の裏面には布痕が顕著にみとめられた。

墓壙は東西方向に長く、東西・南北が4.1～4.2×2.2mの長大な竪穴を掘り、更に長軸と直交する不整長円形の竪穴（1.7×1.4m）とこれに連絡して南辺の壁中央部から０.７m程の横穴を穿つもので同時期に比定できる他の甕棺墓と比較すると際立った突出をみせており、甕棺埋置に必要な墓壙の法量をはるかに越える点で上部に何等かの施設が想定されようがこれらについては触れ得る材料がなかった。

出土甕棺（Fig.21）

出土した甕棺はいづれも器面の荒れが著しく内・外面ともに調整痕を十分に明らかにできない。

下甕は外口径62cm・内口径48.5cm、底部径11.6cm、器高87cmをはかる甕形土器である。口縁部は内方への張出しがつよく、外方に向って傾斜する。胴部は口縁付近で緩くしまり、中位よりやや下った位置に非常に低い三角突帯１条を廻らす。底部外面は２cm程度の平坦部をもち内面が凹むあげ底となっている。器色は暗赤褐～暗褐色を呈する。焼成は堅緻。胎土に石英砂などの砂粒の混入が多い。器壁は口縁部を除き約１cm程度である。また口縁下にみとめられる粘土接合痕から粘土帯の平均的幅は10cm内外である。

上甕は外口径59～60cm・内口径49cm、推定器高87～88cmをはかる甕形土器である。上甕は下甕に比して形態的に古い要素がある。口縁部は外方への発達が弱く内側への張出しがつよい。胴部は口縁部付近で緩くしまるが、下方は直立的で中位よりやや上った位置に低い三角突帯１条を廻らす。またこの突帯より下方は急に径を減じて底部へとすぼまる。器色は黄褐～暗黄褐色を呈する。焼成は堅緻である。胎土は石英粗砂などを多く含む。器壁厚は０.８～１cmをはかる。また粘土接合痕からみた粘土帯の平均的幅は11～12cm程度であった。

副葬銅剣（Fig.22・ＰＬ.20）

ＳＫ28甕棺墓に副葬銅剣は全面が緑青でおおわれている以外は殆ど欠損はみられない。法量は全長30.35cmをはかり、茎長2.1cm、刳方長3.3cm（幅は上端突出部3.4cm、中位3.25cm、下端

SK28

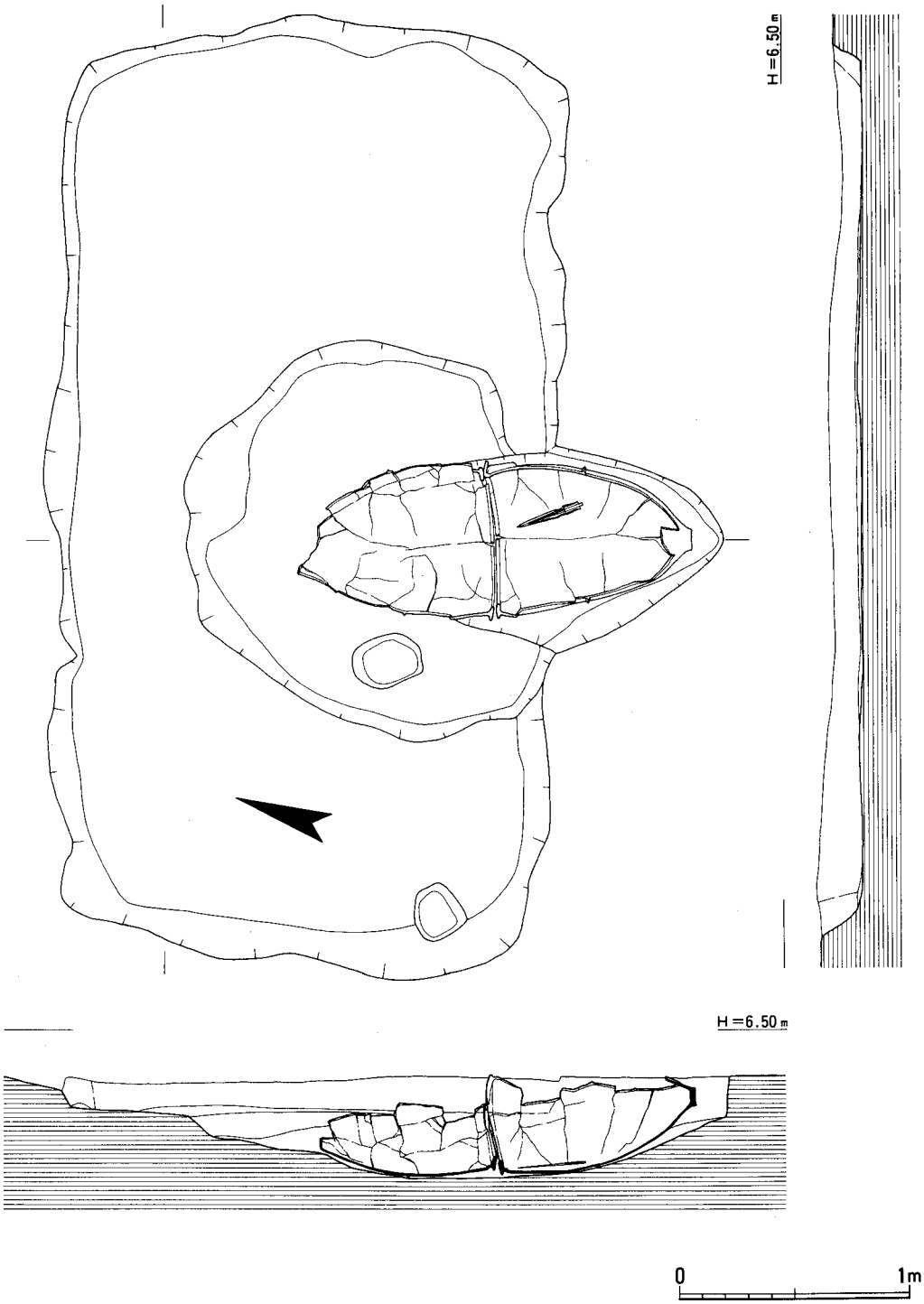


Fig.20　SK28甕棺墓出土状況実測図（1／30）

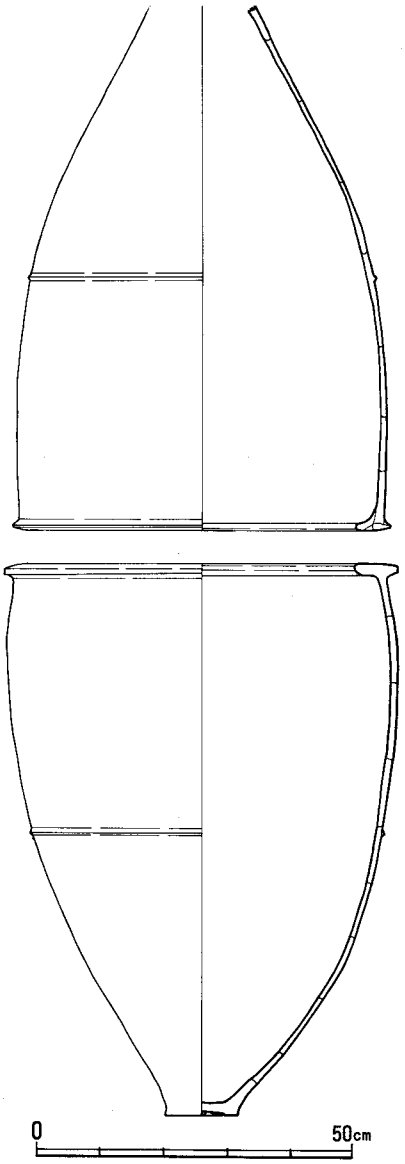


Fig.21　SK28甕棺実測図（1／12）

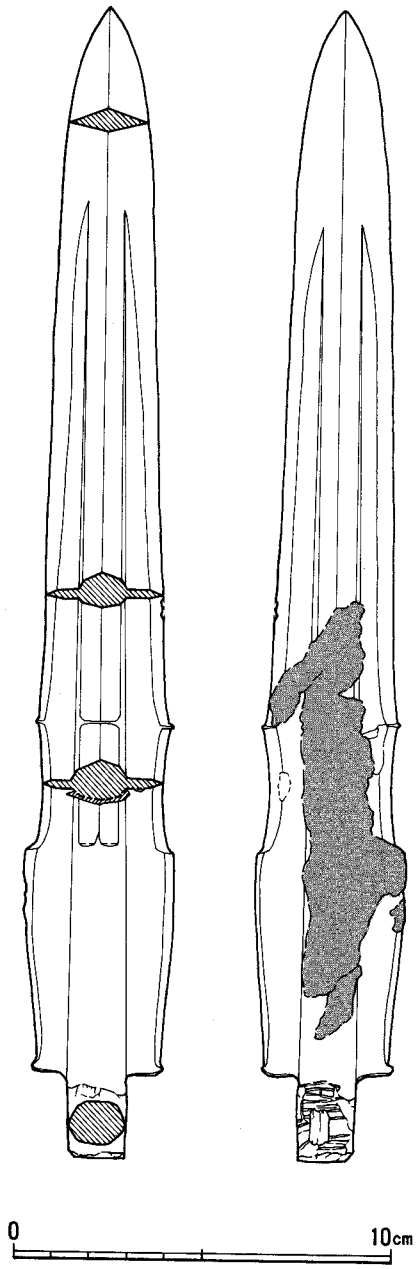


Fig.22　SK28甕棺墓副葬銅剣実測図（1／2）

突出部3.8cm）関部幅3.4cmをはかる。また重量は204ｇである。銅剣は鋒より刳方下端部まで背に鎬をもち、これ以下は鎬がなく、背部は円棒状となる。また刳方上端部は棘状に両側とも突出し、関部端も両側がまるく突出している。次に身部の最大部は刳方下端部にあって幅4cm

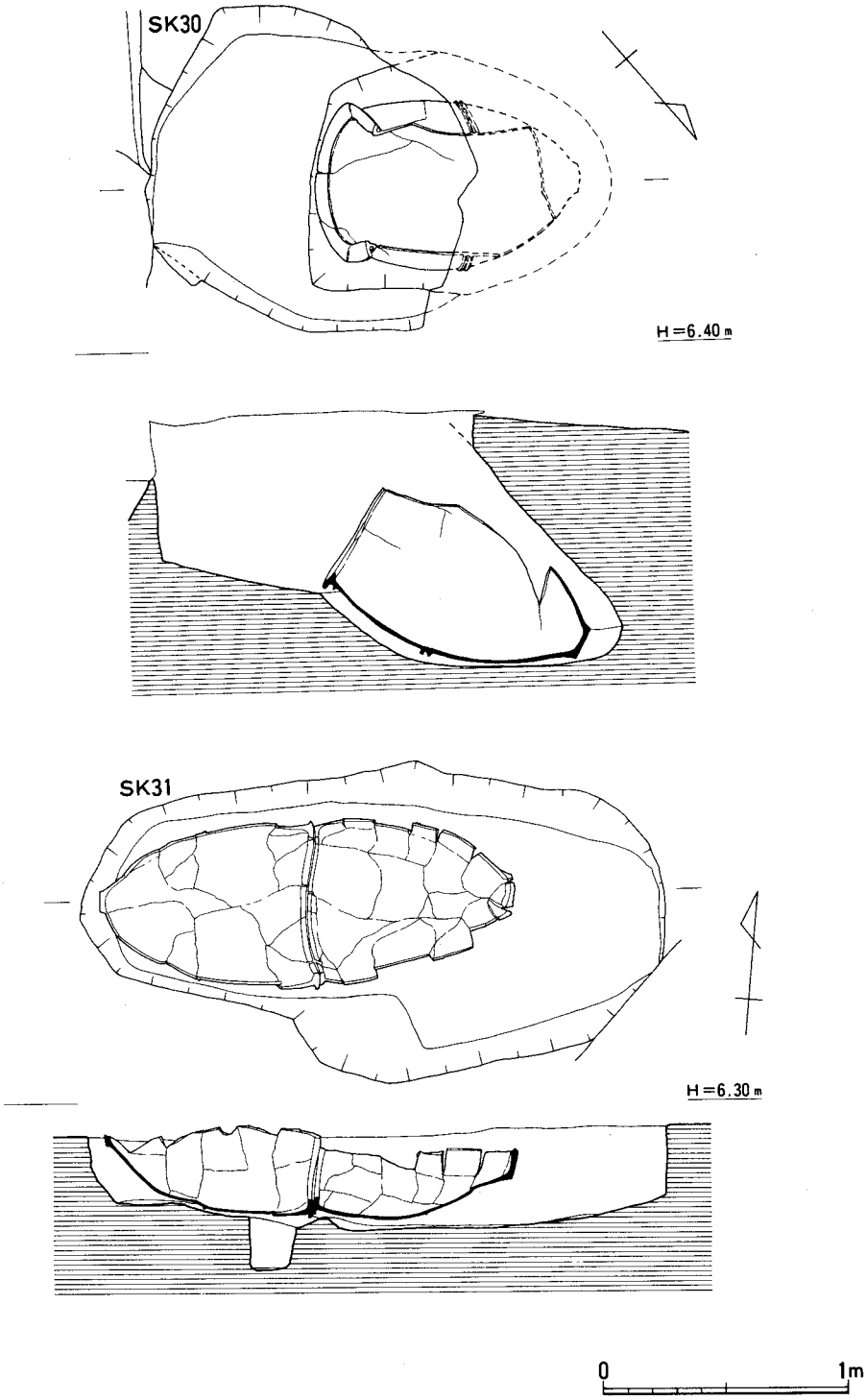


Fig.23　SK30・31甕棺墓出土状況実測図（1／30）

をはかり、同部位での背部の幅は1.4cmとなり、両部位の比率は約3：1の割合となる。これらの諸特徴からこの銅剣は森貞次郎氏の分類に徒えばBIb型細形銅剣[(1)]にあたり、岩永省三氏による細形銅剣Ia型式[(2)]に相当し、中期前葉を中心とし一部中葉まで残る副葬類例に符号するものといえる。また銅剣には剣身を包む様に関部から鋩に向かって幅7～8mm単位の布巻き痕跡および茎に糸を巻付けた痕跡が認められ、内容についての鑑定結果ではいづれも絹で茎のものは撚りをかけず繊維を束ねたものである。また剣身に付着する絹布は国産品である可能性が高いとされた。詳細については付論によられたい。

註

1．森貞次郎　「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』
　金関丈夫博士古稀記念委員会編　1968年

2．岩永省三　「弥生時代青銅器型式分類編年再考」　九州考古学No.55　1980年

ＳＫ30甕棺墓（Fig.23・PL.21）ＳＫ30甕棺墓は主軸をＮ－128.5°－Ｅにとり、29°の傾斜をもって埋置された単棺墓である。墓壙掘方、甕棺の挿入は東南側よりおこなわれている。

棺使用甕は胴部中位を最大径とする大型甕である。外方によく発達した口縁部は内傾気味で直下に一条の「コ」字形突帯を廻らす。胴部中位には2条の高い「コ」字形突帯を廻らす。全体に胴部のふくらみがつよく、底部も安定している。

ＳＫ31甕棺墓（Fig.23・PL.21）ＳＫ31甕棺墓は調査区南西端に位置し、上甕・下甕ともに大型の甕形土器を使用した接口式合口甕棺墓である。主軸をＮ－88.5°－Ｅにとり、7.5°の角度で埋置されている。墓壙掘方・甕棺の挿入は東側から行なわれている。

棺使用甕の上甕は胴部中位よりやや上った位置を最大径として内傾しながら立あがる。口縁はたれ気味で胴部に2条の三角突帯を付す。下甕は全体的に胴部のしまりが少なく、内方に発達した口縁部は若干外傾する。胴部中位に一条の「コ」字形突帯を付す。

ＳＫ32甕棺墓（Fig.24・PL.22）ＳＫ32甕棺墓は調査区南端にあたり、排水溝による破壊が著しい。下甕のみしか残らないが、主軸をＮ－56.5°－Ｅにとり、26°の傾斜で埋置されている。墓壙掘方・甕棺の挿入は東側から行なわれている。

棺使用甕は胴部が中位よりやや上った位置より内傾化し、外方によく伸びる口縁部は内傾して直下に三角突帯1条を付す。胴部中位に下帯が高い「コ」字形突帯2条を付す。

ＳＫ33甕棺墓（Fig.24・PL.22）ＳＫ33甕棺墓は調査区南端に位置し、図にはないが本来は覆口式合口甕棺墓である。主軸をＮ－62.5°－Ｅにとり、46°の傾斜をもって埋置されている。墓壙掘方・甕棺の挿入は東側からである。

棺使用甕は下甕がつよく「く」字形に屈曲して直下に一条の三角突帯を付す。胴部最大径は中位よりやや上にあり、中位に2条の「コ」字形突帯を付す。

ＳＫ34甕棺墓（Fig.25・PL.23）ＳＫ34甕棺墓はＳＫ32甕棺墓の北側に隣接し、撹乱による破壊が著しい。同墓は下甕のみを残し、主軸をＮ－58°－Ｅにとり、44°の強い角度で埋置されて

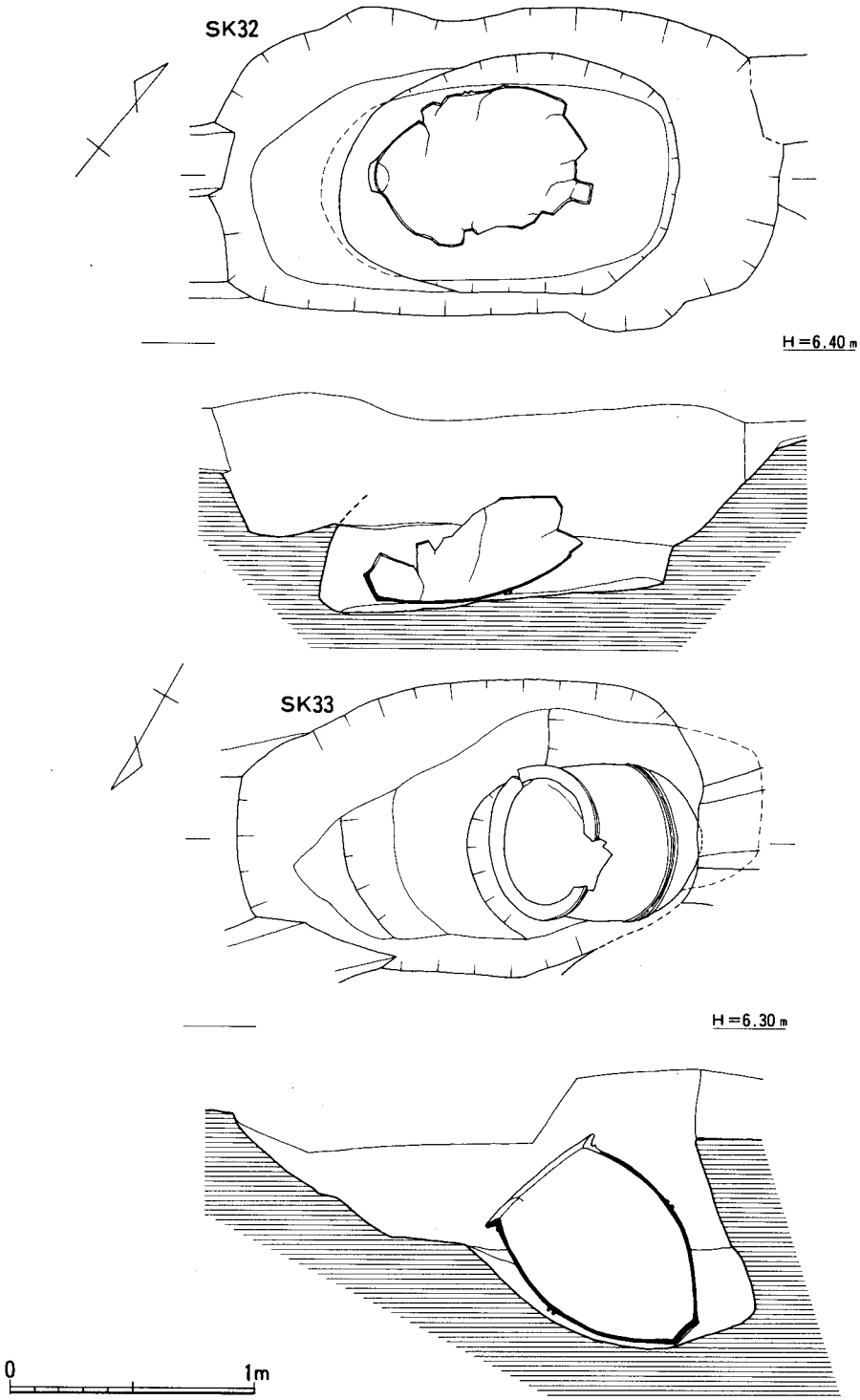


Fig.24　SK32・33甕棺墓出土状況実測図（1／30）

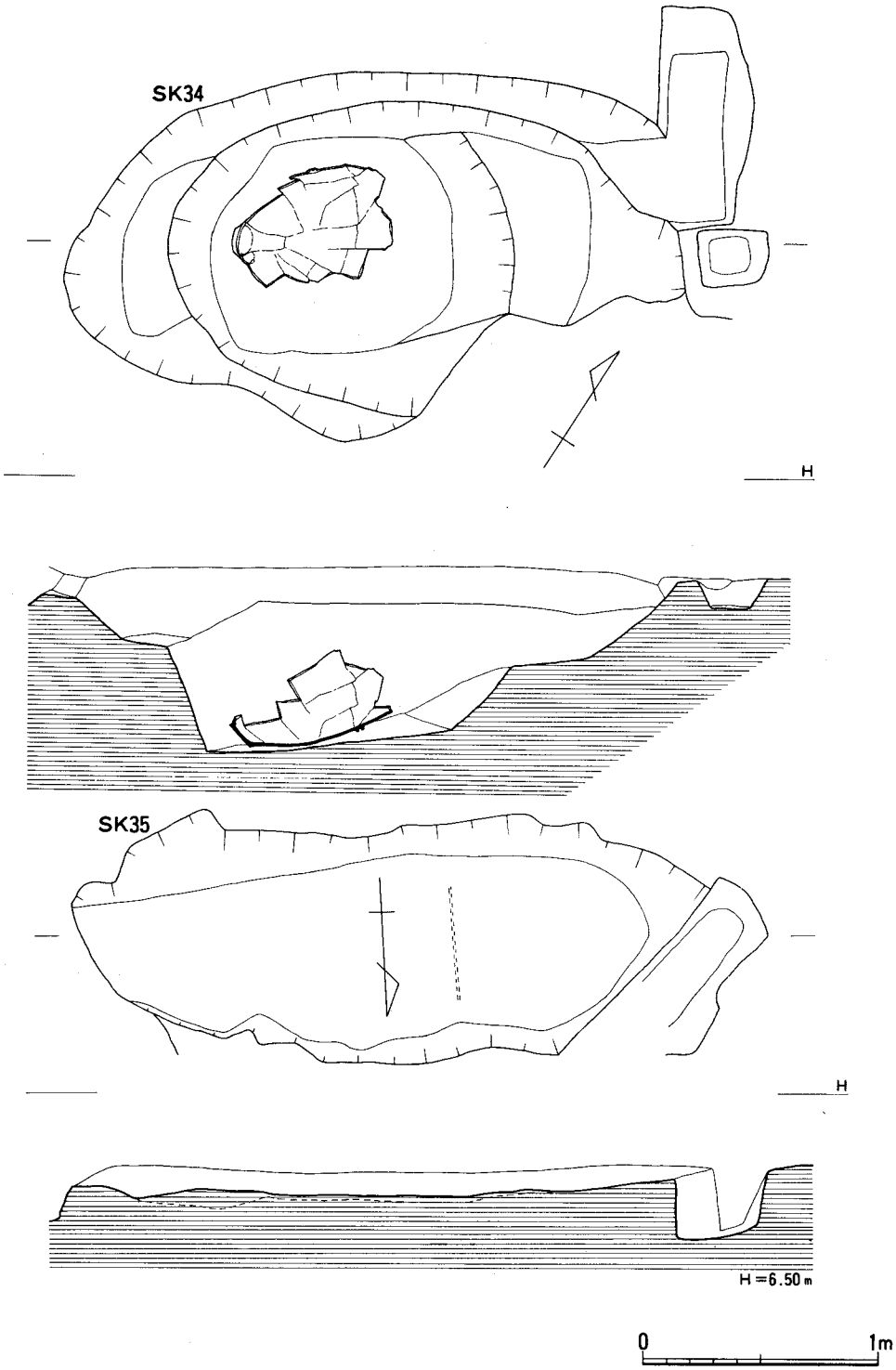


Fig.25　SK34・35甕棺墓出土状況実測図（1／30）

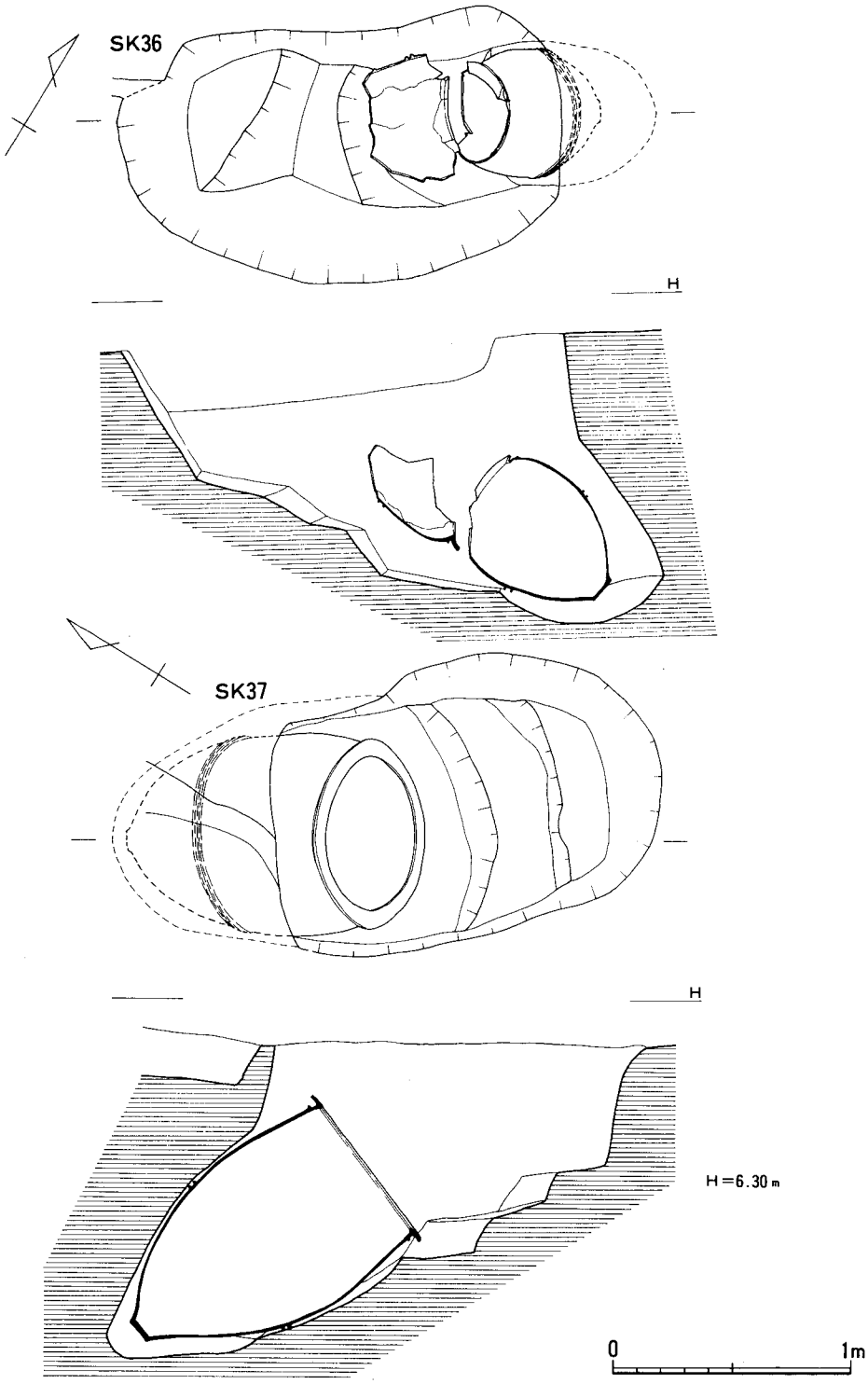


Fig.26　SK36・37甕棺墓出土状況実測図（1／30）

いる。墓壙掘方・甕棺の挿入は東側から行なわれている。

棺使用甕は口縁部を欠損するが、胴部は中位より直立に近く、下部突帯が高く、下向きの「コ」字形突帯２条を中位に付している。

ＳＫ35甕棺墓（Fig.25・PL.21）　ＳＫ35甕棺墓は上部を完全に破壊され、断面「コ」字形突帯痕をスタンプとして残しているが、本棺は第２次調査における第11号甕棺墓と位置的に重複する可能性がある。

ＳＫ36甕棺墓（Fig.26・PL.23）　ＳＫ36甕棺墓はＳＸ08方形周溝遺構と切り合い関係にあるが新・古の差は明確でない。上甕・下甕ともに中型の甕形土器を使用した接口式合口甕棺墓である。主軸をＮ－59°－Ｅにとり、40°の強い傾斜をもって埋置される。墓壙掘方・甕棺の挿入は東側からである。

棺使用甕は上・下甕ともに口縁の屈曲がつよく、直下に一条の三角突帯を付す。胴部の中位よりやや上部を最大径として急激に口縁へとしまる。胴部中位にいづれも２条の「コ」字形突帯を付す。

ＳＫ37甕棺墓（Fig.26・PL.24）　ＳＫ37甕棺墓は墓地東辺に位置する単棺墓で、墓壙は３段の平坦部を残し、埋置状態をよくとどめている。棺は主軸をＮ－32°－Ｗにとり、37°の強い傾斜で埋置される。墓壙掘方・甕棺の挿入は東南側より行なわれる。

棺使用甕は器高１１８cm、口径77.5cm、胴部最大径75cm、底部径10cmをはかり墓地内では最大のものである。胴部は中位よりやや下った位置よりゆるく内傾して立あがる。口縁も若干内傾し、直下に三角突帯１条を付す。また胴部には２条の「コ」字形突帯を付す。

ＳＫ38甕棺墓（Fig.27）　ＳＫ38甕棺墓は墓地の北東辺に位置し、上甕・下甕ともに大型の甕形土器を使用した接口式合口甕棺墓である。墓壙は斜坑に近い形態となる。主軸をＮ－９°－Ｗにとり、34°の角度で埋置される。ＳＫ４甕棺墓が墓壙上にのる。

棺使用甕は上甕が口縁部が「く」字形につよく内傾し、直下に一条の「コ」字形突帯を付し、胴部中位に２条の「コ」字形突帯を付す。下甕は口縁がやや外方に垂れ、よくしまる。最大径を胴部中位にもち、ここに２条の「コ」字形突帯を付す。

ＳＫ40甕棺墓（Fig.27・PL.24）　ＳＫ40甕棺墓は墓地西端に位置し、主軸をＮ－1.5°－Ｗにとり、21°の角度をもって埋置される接口式合口甕棺墓である。

棺使用甕は上甕が胴上部より打欠きで、２条の「コ」字形突帯を付す。下甕は口縁部がよくしまり、外口唇が肥厚して内傾する。最大径を胴部中位よりやや上にもつ。

ＳＫ41甕棺墓（Fig.28・PL.25）　ＳＫ41甕棺墓は第１号古墳周溝掘削により破壊を受けている。主軸をＮ－91.5°－Ｗにとり、40°の角度で埋置される。棺は下甕のみで胴部の膨らみが大きく２条の「コ」字形突帯を付す。

ＳＫ42甕棺墓（Fig.28・PL.25）　ＳＫ42甕棺墓は墓地南端に位置し、主軸をＮ－83°－Ｅにと

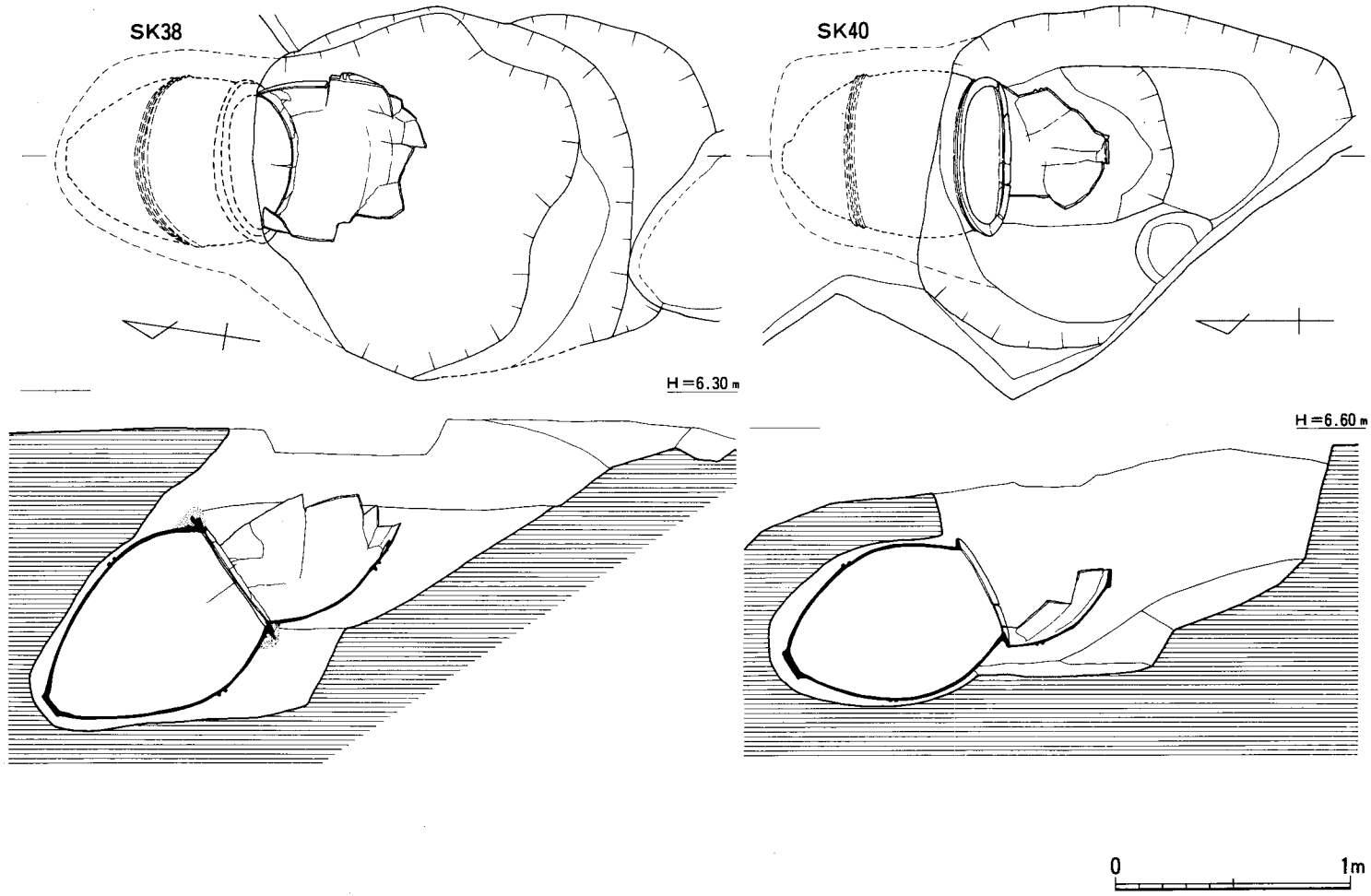


Fig.27　SK38・40甕棺墓出土状況実測図（1／30）

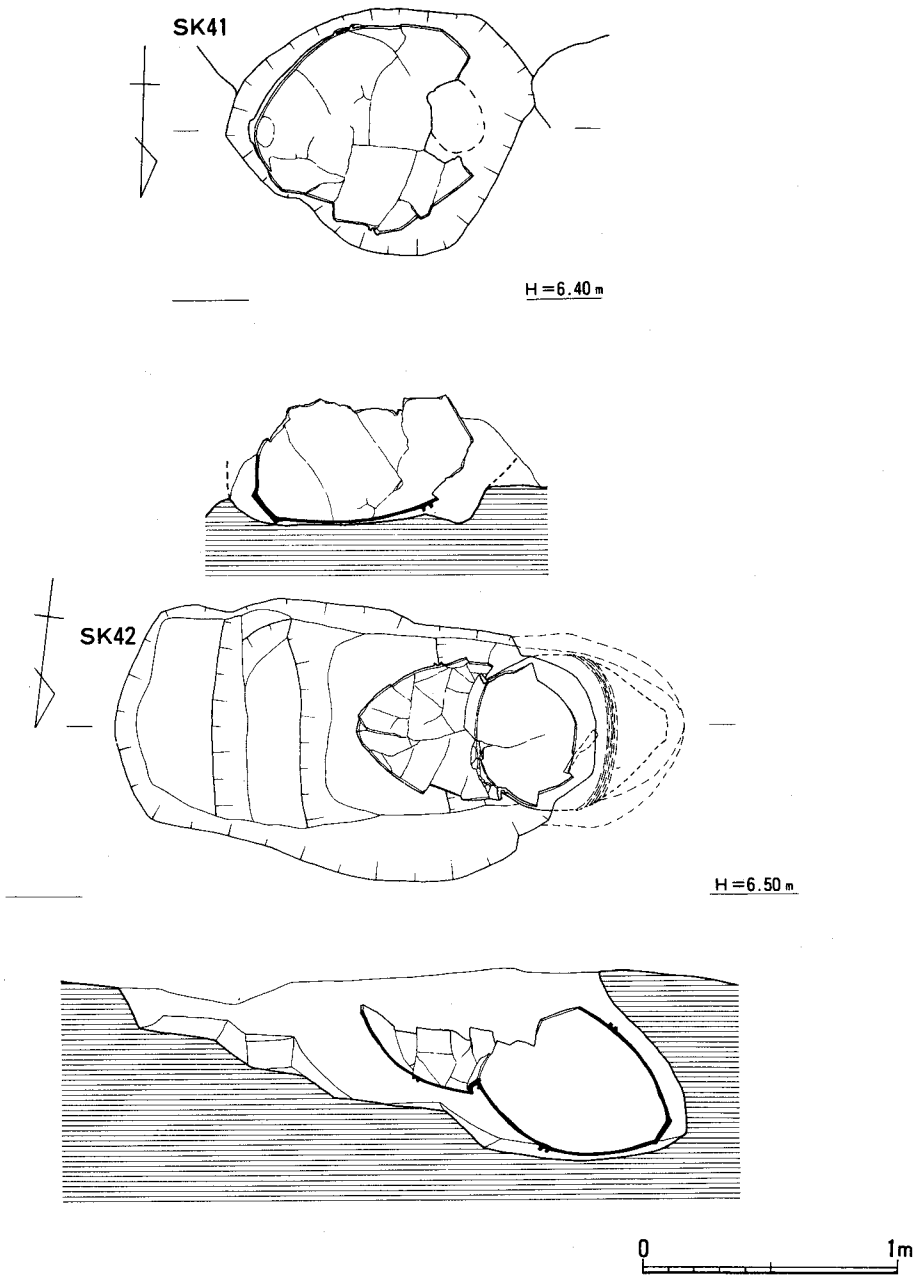


Fig.28　SK41・42甕棺墓出土状況実測図（1／30）

り、30°の傾斜で埋置される。覆口式合口甕棺墓である。下甕に大腿骨片が残る。

棺使用甕は上甕が打欠きで、下甕は口縁部がよくしまり、「く」字形に強く屈曲する。胴部中位に２条の「コ」字形突帯を付し、最大径は中位よりやや上った位置にある。胴下半もしまりがなく、底部は安定している。

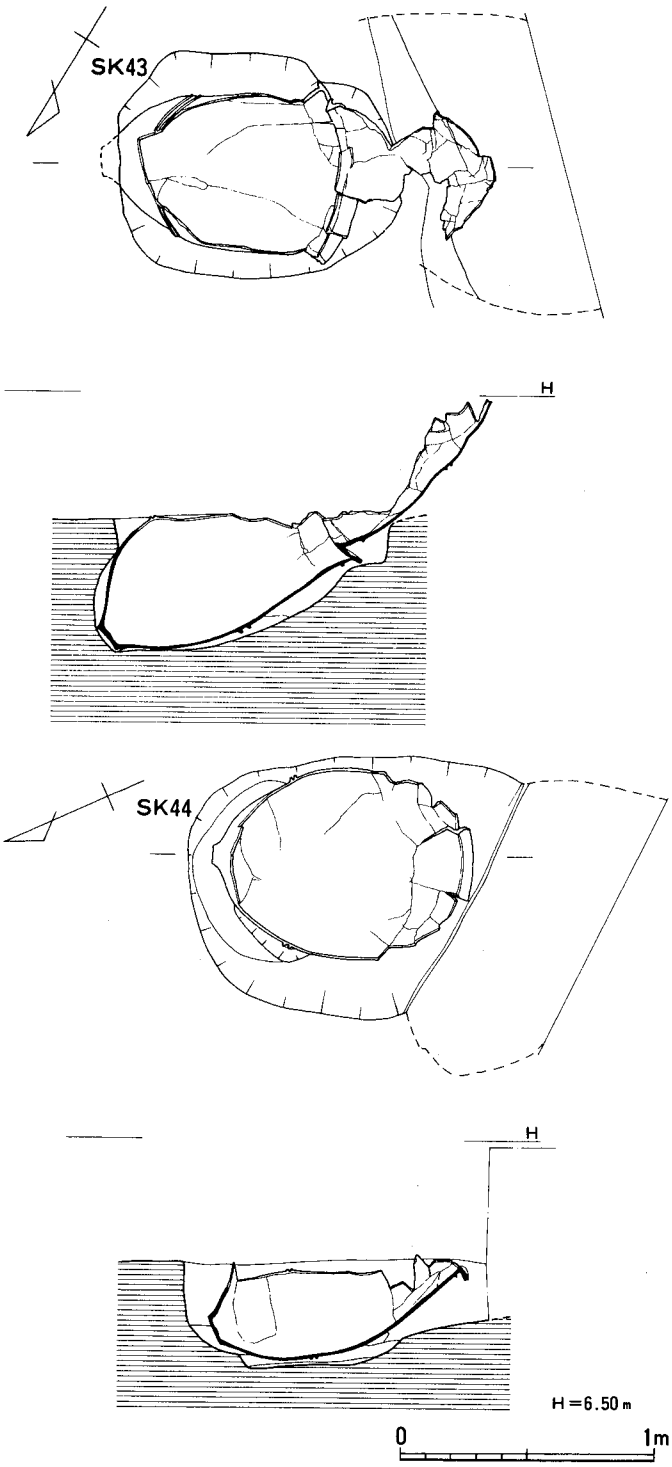


Fig.29　SK43・44甕棺墓出土状況実測図（1／30）

ＳＫ43甕棺墓

（Fig.29・PL.26）　ＳＫ43甕棺墓は墓地西辺に位置し、主軸をＮ－110.5°－Ｗにとり、39.5°の角度をもって埋置される接口式合口甕棺墓である。

棺使用甕は上甕・下甕ともに胴部中位よりやや下った位置に２条の突帯を廻らし、これ以上は若干外反しながら直立する。下甕は口縁が内外方によく発達し、直下に「コ」字形突帯を１条廻らす。上甕は口縁外唇が下方に垂れ、内唇は肥厚し、外唇直下に一条の三角突帯を廻らす。

ＳＫ44甕棺墓

（Fig.29・PL.26）　ＳＫ44甕棺墓は主軸をＮ－127°－Ｅにとり、24°の角度で埋置されている。単棺墓であろう。墓壙掘方・甕棺埋置は東側からなされている。

棺使用甕は口縁部が内外によく発達する。最大径部は胴部中位よりやや下った位置で、2条の「コ」字形突帯を付す。

次にＳＫ03・04・06・11・15・16・19・26・27・39甕棺墓については残りが悪く、図示縮尺の都合上順不同となった。これらのうちＳＫ03・04・11・19・26については小児用甕棺墓と考えられる。以下個別に説明を加える。

ＳＫ03甕棺墓（Fig.30）　ＳＫ03甕棺墓は小型甕の胴部下半以下を残すのみである。ＳＫ39甕棺墓より新しい所産であろう。主軸をＮ－82°－Ｗにとる。

ＳＫ04甕棺墓（Fig.30・PL.９）　ＳＫ04甕棺墓は墓地北端に位置し、ＳＫ38甕棺墓（中期末）の墓壙上にのり、これより新しい所産である。棺は主軸をＮ－116°－Ｅにとり、26°の傾斜をもって埋置されている。墓壙掘方・甕棺埋置は東南側より行なわれている。

ＳＫ06甕棺墓（Fig.30・PL.11）　ＳＫ06甕棺墓は墓地西端に位置し、長さ110×80cm程度の東西に長い竪穴上に倒立の状態で口縁を下にして埋置されている。所謂「倒置棺」は墓壙底面に接して棺を倒立させるのが一般的であるが、この場合は底面より20～25cm程度浮いている。棺使用甕は口縁部がよくしまり、内弯気味に外反する口縁直下に一条の三角突帯を付す中型甕である。

ＳＫ15甕棺墓（Fig.31・PL.14）　ＳＫ15甕棺墓は全くの削平を受け、胴部をわずかに残すにすぎない。棺使用甕は胴部に２条の三角突帯を付す大形甕である。

ＳＫ16甕棺墓（Fig.30・PL.14）　ＳＫ16甕棺墓はＳＸ03土壙墓の南辺を切って営まれている。棺は主軸をＮ－3.5°－Ｗとほぼ南北方向に向けて埋置されており、胴部中位に２条の三角突帯を付す大形甕であろう。墓壙掘方・甕棺挿入は北側から行なわれている。

ＳＫ19甕棺墓（Fig.30・PL.15）　ＳＫ19甕棺墓はＳＫ28甕棺墓の北側に隣接して痕跡的に姿をとどめていた。棺は上・下甕ともに小型甕形土器を使用する接口式合口甕棺墓であり、接口部に黄灰色粘土による目貼りがみられた。主軸をＮ－75°－Ｅにとっている。破片のため時期的には正確を期し難いが中期中葉の所産であろう。

ＳＫ26甕棺墓（Fig.31・PL.18）　ＳＫ26甕棺墓はＳＫ27甕棺墓とともにＳＫ28甕棺墓の東側に位置する。棺は小形の壺形土器を下甕に使用したものと思われる。墓壙も80×55cm程度しか残っていない。主軸をＮ－73°－Ｅに向けて埋置されている。

ＳＫ27甕棺墓（Fig.31・PL.18）　ＳＫ27甕棺墓はＳＫ28甕棺墓の東に隣接している。後世の削平により胴部の半分を欠損している。棺は主軸がＮ－９°－Ｅとほぼ南北方向をとり埋置されている。墓壙掘方・甕棺の埋置は北側から行なわれている。

ＳＫ39甕棺墓（Fig.31）　ＳＫ39甕棺墓はＳＫ３甕棺墓と隣接する。削平により胴部の半分を失なっている。棺は主軸をＮ－130.5°－Ｅにとり、40°の角度をもって埋置された大形甕である。棺使用甕は胴部に２条の三角突帯を付す。

小結

甕棺墓地は前述の如く後世の削平・撹乱による改変があって遺構の遺存は悪く、また調査地

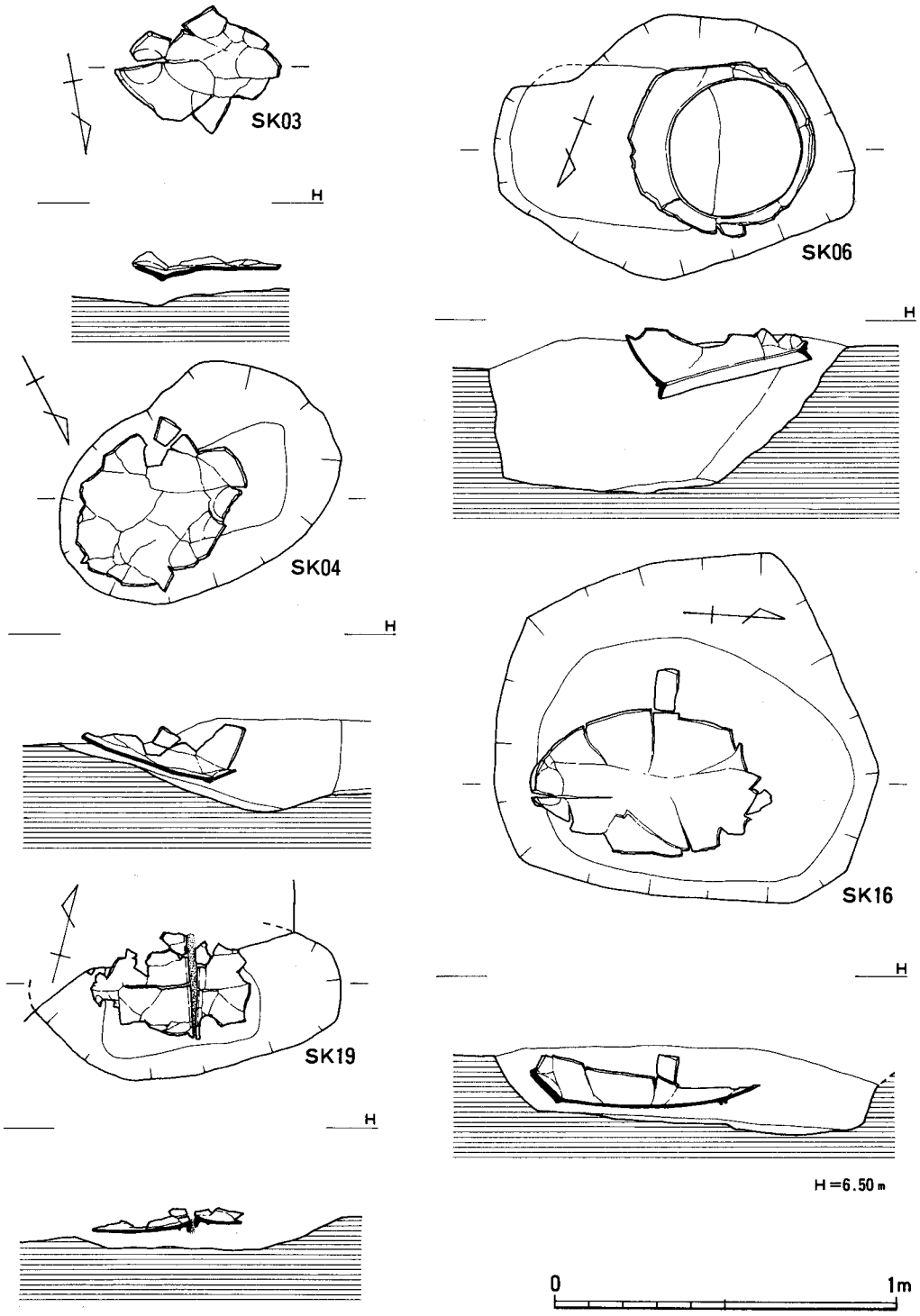


Fig.30　SK03・04・06・16・19甕棺墓出土状況実測図（1／20）

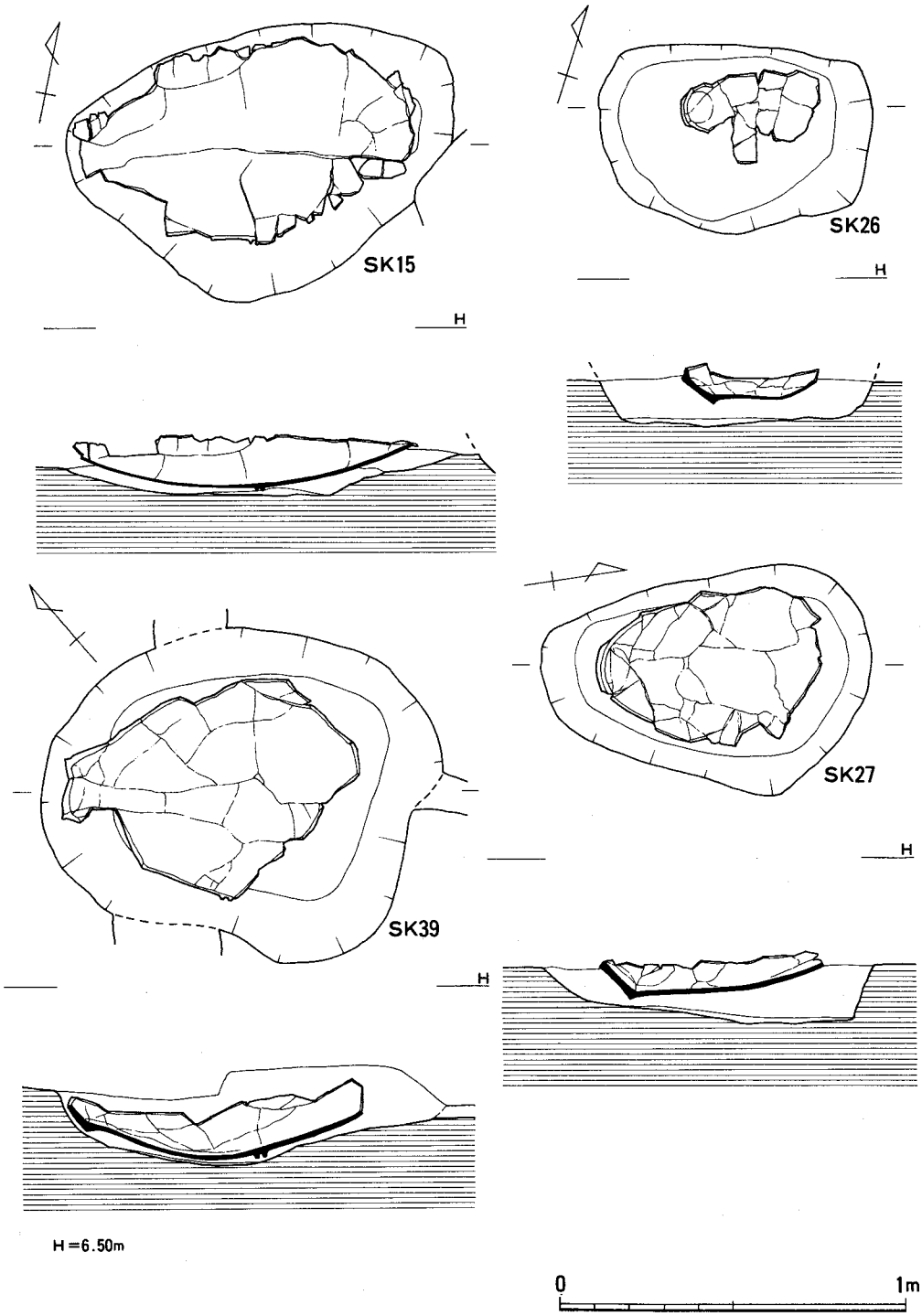


Fig.31　SK15・26・27・39甕棺墓出土状況実測図（1／20）

SK No.	挿図 図版 番号	合口型式	器形 上	器形 下	埋置 方位	埋置 角度	時期	備考
01	Fig.11 PL. 9	接口式	甕	甕	N-66.5°-E	9°	中期中葉	
02	Fig.11 PL.10	〃	〃	〃	N-30.5°-W	0°	中期前葉	
03	Fig.30	?			N-82°-W	?	中期末	
04	Fig.30 PL. 9	?			N-116°-E	26°	中期末	
05	Fig.12 PL.10	接口式	鉢	甕	N-78°-E	3.5°	中期中葉	
06	Fig.30 PL.11	単棺				76°	中期末	倒置棺？
07	Fig.12 PL.11	〃			N-112°-E	34°	中期末	
08	Fig.13 PL.11	接口式	甕	甕	N-89.5°-E	21°	中期末	
09	Fig.13 PL.11	覆口式	甕	甕	N-80.5°-E	31°	中期後葉	
10	Fig.14 PL.12	単棺			N-51°-E	37.5	中期後葉	
11	Fig.14 PL.12	?			?	?		
12	Fig.14 PL.12	単棺			N-78.5°-E	26.5°	中期後葉	
13	Fig.15 PL.13	接口式	甕	甕	N-118°-E	36°	中期後葉	
14	Fig.15 PL.13	単棺			N-131.5°-E	31°	中期末	
15	Fig.31 PL.14	単棺(?)			N-78°-E	—	中期前葉？	
16	Fig.30 PL.14	?			N-3.5°-W		中期後葉	
17	Fig.16 PL.15	接口式	甕	甕	N-67°-E	3.5°	中期前葉	
18	Fig.16 PL.15	〃	鉢	甕	N-95°-E	29°	中期後葉	
19	Fig.30 PL.15	〃	甕	甕	N-75°-E	?		
20	Fig.16 PL.16	単棺(?)			N-5°-W	29°	中期中葉	
21	Fig.17 PL.16	接口式	甕	甕	N-77°-E	36°	中期末	
22	Fig.17 PL.17	呑口式(?)	甕	甕	N-36°-E	39°	中期末	
23	Fig.18 PL.17	接口式	鉢	甕	N-96.5°-E	28.5°	中期後葉	
24	Fig.18	接口式(?)			N-52.5°-E	?	中期末葉	
25	Fig.19	接口式	甕	甕	N-74°-E	34°	中期後葉	
26	Fig.31 PL.18	?			N-73°-E	53°		
27	Fig.31 PL.18	?			N-9°-E	42°	後期初頭	
28	Fig.20 PL.19	接口式	甕	甕	N-18.5°-W	0.5°	中期前葉	細形銅剣副葬
29	Fig.19 PL.18	?			N-53°-E	45°	後期初頭	
30	Fig.23 PL.21	単棺			N-128.5°-E	29°	中期後葉	
31	Fig.23 PL.21	接口式	甕	甕	N-88.5°-E	7.5°	中期中葉	
32	Fig.24 PL.18	?			N-56.5°-E	26°	中期後葉	
33	Fig.24 PL.22	覆口式	甕(?)	甕	N-62.5°-E	46°	中期末	
34	Fig.25 PL.23	?			N-58°-E	44°	中期末？	
35	Fig.25 PL.21	?			——	?	?	墓壙のみ
36	Fig.26 PL.21	接口式	甕	甕	N-59°-E	40°	後期初頭	
37	Fig.26 PL.16	単棺			N-32°-W	37°	中期後葉	
38	Fig.27 PL. 9	接口式	甕	甕	N-9°-W	34°	中期末	
39	Fig.31	単棺(?)			N-130.5°-E	40°	中期後葉？	
40	Fig.27 PL.24	接口式	鉢(?)	甕	N-1.5°-W	21°	中期後葉	
41	Fig.28 PL.25	単棺(?)			N-91.5°-W	40°	中期末	
42	Fig.28 PL.25	覆口式	甕	甕	N-83°-E	30°	中期末	
43	Fig.29 PL.26	接口式	甕	甕	N-110.5°-W	39.5°	中期中葉	
44	Fig.29 PL.26	単棺(?)			N-127°-E	24°	中期後葉	

Tab. 1　甕棺墓一覧表

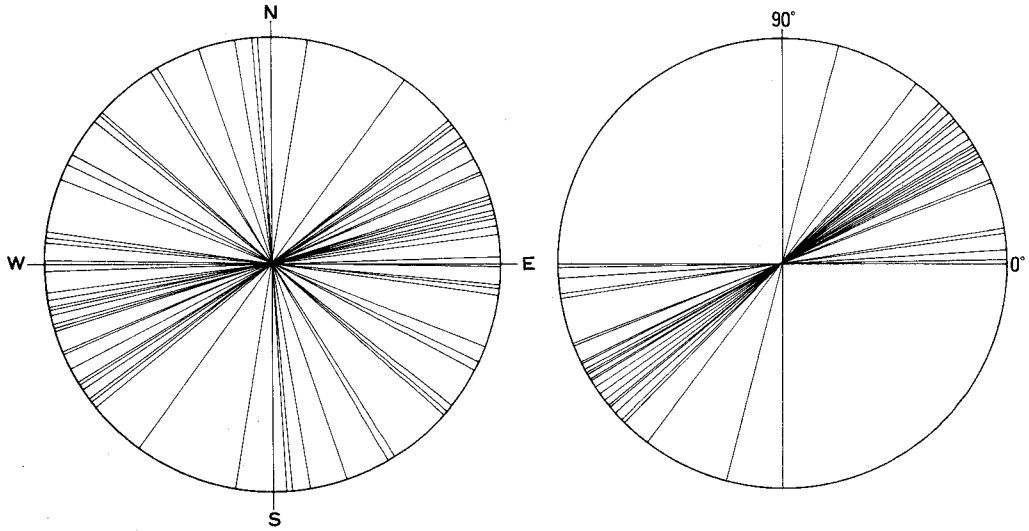


Fig.32　甕棺墓の埋置方位と角度

区外に墓地が拡がることが第２次調査の成果などから知られるところであるがここでは調査区内で観察された若干の点をあげて甕棺墓地のまとめとしたい。

甕棺墓は棺そのものが現在修復中であり、正確な実測図をもとにすることは出来ないが甕棺墓間の切り合い関係および土器の各部分の特徴を観察して時期別の構成を考えた。今回調査および第２次調査の数を合計すると52基以上となるが、後述する土壙墓を除けばこの墓地の初源は弥生前期に属するものはなく、弥生中期前葉でも新しい段階（汲田式期）にあるといえる。この時期では細形銅剣を副葬したＳＫ28甕棺墓がこの墓地ではもっとも古いタイプの甕棺と考えることができる。またこの時期は後につづく中期中葉に属する甕棺墓の分布と似て全体に散在的である。続く中期後葉から後期初頭にかけての時期が墓地形成の主要な時期である。中期後葉では明らかなもので12基があり、南北に細長くまとまる墓地の東辺に集中し、両側にも散発的にある。また続く中期末～後期初頭では先の中期後葉に属する甕棺墓の存在を意識するかのように分布が重複しており、しかも積極的に切合いをもつものは少なく、15基が明らかにこの時期のものと考えられる。次に甕棺墓は墓壙掘方・甕棺挿入の方向が位置上で特徴をなしている。これは墓地形成時における旧地形の形状を反映していると同時に旧地形では東斜面にあたるとおもわれる墓地東辺部に中期後半～後期初頭にかけての甕棺墓が集中して営まれる点は墓地内においてより有利な場所がすでに以前の甕棺墓によって占地されていたことによるのかも知れない。

(2) 土壙墓（Fig.33～36・PL.27・28）

土壙墓と考えられるものは７基（ＳＸ01～07）が区別された。土壙墓は調査区西端部甕棺墓地内に３基（ＳＸ01～03）、他に古墳時代後期溝（ＳＤ04）に切られるＳＸ04土壙墓および調査区中央部に残るＳＣ04竪穴住居址に重複するＳＸ05・06・07土壙墓である。他に溝状遺構の項で述べるＳＸ08は甕棺墓地内にあるＳＸ02土壙墓あるいは隣接する土壙を主体部とする墳墓施設の一部と考えたが明らかにされなかった。以下個別に出土状況について説明を加え、次いで出土遺物にもとづいて時期比定を行いたい。

ＳＸ01土壙墓（Fig.33）

ＳＸ01土壙墓は甕棺墓地東辺に位置し、ＳＫ24甕棺墓（中期末葉）に隣接するが他に遺構との切断関係はない。同墓は主軸をＮ－65°－Ｗに向け、長幅は98×60cm、深さ40cmを残す。壁面は東小口部で染付磁器を含む円形竪穴によって破壊されているが全体的に形状は垂直に近く、部分的にオーバーハングする。底面は西側小口部が若干高くなる。

ＳＸ02土壙墓（Fig.33）

ＳＸ02土壙墓は甕棺墓地東辺南端に位置する。同墓は主軸をほぼ南北方向のＮ－24°－Ｗにとる木棺土壙墓である。墓壙は隅丸長方形をなす２段掘方であるが、小口部および側壁部を水道管埋設溝によって破壊されている。上部掘方は長・幅が1.9～1.95×１～1.05m、深さ0.45mを残す隅丸長方形壙で北側の小口部は直線的とならずカーブを描き丸い。また下部掘方は撹乱によって小口部の２ヶ所のコーナーを失っているが、小口部幅0.6m、側壁部1.55mの隅丸長方形壙であり、北側の掘方は上部のものと同様に直線的にならない。埋置された木棺は実際の形態を全くとどめないが下部掘方の観察から外形最大規模としても小口幅0.45～0.5m、側壁長1.45m程度と考えられた。

ＳＸ03土壙墓（Fig.34・PL.27）

ＳＸ03土壙墓は甕棺墓地北辺からやや南に位置する。同墓は主軸をＮ－104°－Ｗにとり、ほぼ東西方向に向け、墓壙掘方・主体部の南辺上に弥生中期後半以降に属すると考えられる胴部下半のみをのこすＳＫ16甕棺墓が営まれている。墓壙掘方は東・北辺の緩く全辺におよばない部分を除き明確なものは二段となっている。外側にあたる上部掘方は側壁長４～4.1m、小口幅1.8m程度の長大なものであり、深さ0.25mを残す。また内側にあたる下部掘方は側壁長が3.8～3.85m、小口幅は東・西でそれぞれ1.1m・1.3m程度となっているが下部掘方には北側壁の両端部を除く部分と南側壁西半部分にいずれも壁面下に沿って小溝状に掘られた部分が見付かった。北壁に沿うものは長さ232cm、幅9～10cmをはかる。また南壁に沿うものは３ヶ所に切れぎれとなり連なっており、東側から順に長さ51cm・幅８cm、長さ49cm・幅4～5cm、長さ44cm・幅９～10cmをはかる。もっとも西側のものは壁面の延長上より若干内側に這入っている。これ

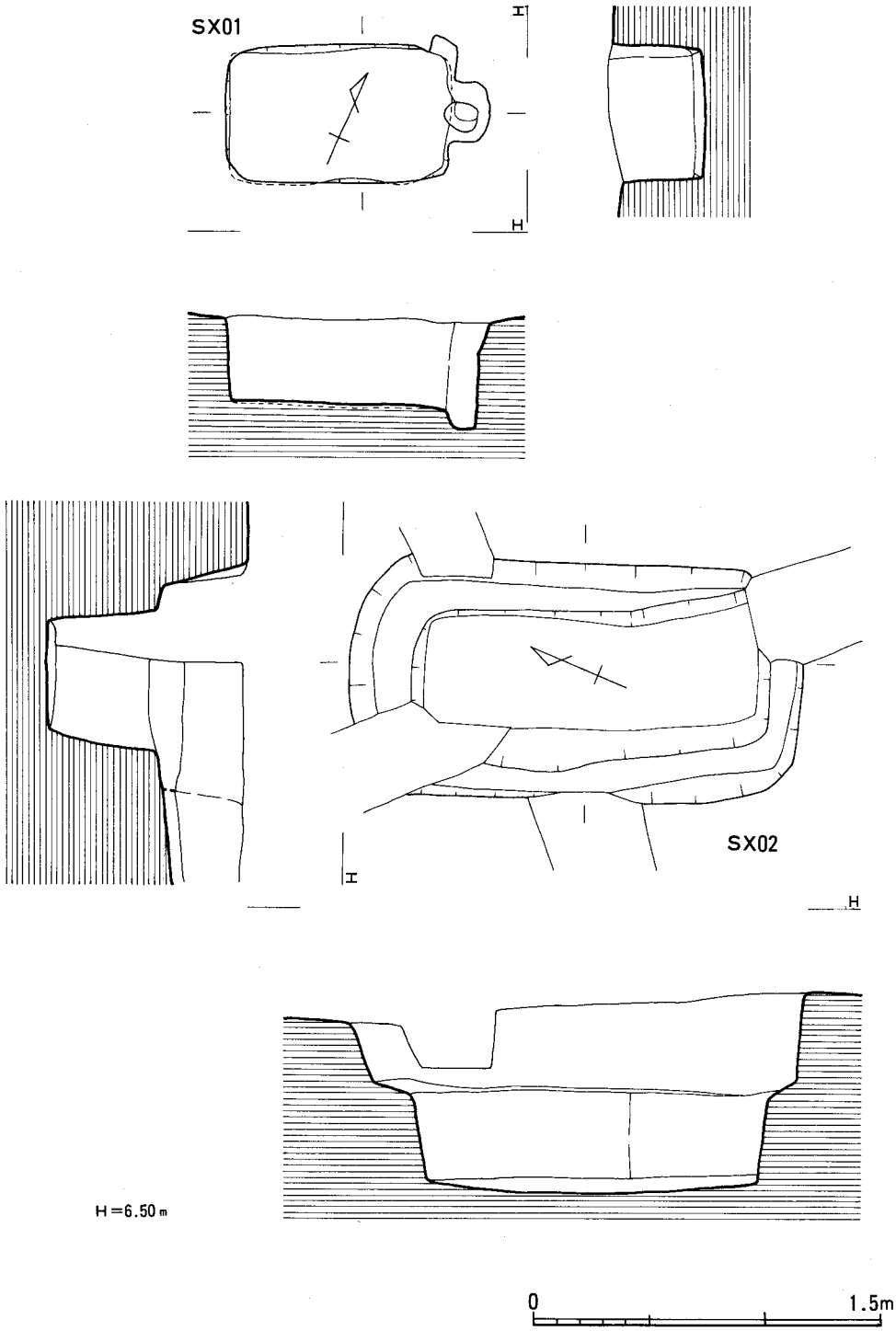


Fig.33　SX01・02土壙墓出土状況実測図（1／30）

ら下部掘方側壁に残るのは更に内側にある主体部の外側にあることから板材をこれに並べたてて謂はば「槨」的施設とした可能性が高いところである。なお壁面に立てた材は土層の観察によると高さは少くとも25cm以上はあると考えられた。次いで主体部は側辺長2.7m、小口幅50～60cmをはかり、横断面は半円状となる。西側小口部で少量の朱（？）痕があったが、他には何等の副葬遺物の出土はなかった。朱（？）痕部が埋葬時の頭位に近いとすれば前の「槨」的施設が西側に片寄って全辺におよばないことも理由のない事ではないであろう。

ＳＸ04土壙墓（Fig.35・PL.28）

ＳＸ04土壙墓は調査区南東側に位置し、古墳時代後期と考えられるＳＤ04溝の東端部近くでこれに切られている。遺構は主軸をN－122.5°－Wにとり、外側での長・幅が2.6～2.7×1.4～1.5mで深さ50～55cmをはかる隅丸長方形をなす。竪穴壁面は西側で検出当時オーバーハングする状態にあり、他では立あがりが緩い。また内部は西側で壁面より40～50cm幅の平坦面を有し、これより更に長円形の掘方がなされている。覆土は底面全部に黒色粘質土が厚さ２cm程でひろがる以外は上層全て黄褐色ロームと黒色土の混在土である。

ＳＸ05土壙墓（Fig.36・PL.28）

ＳＸ05土壙墓はＳＣ04竪穴住居址の床面に重複している。またＳＸ06土壙墓を切って営まれている。遺構は主軸をN－130°－Eにとり、長・短辺が1.7×1.3mの不整な長円形をなす。竪穴は２段の掘方となり内部は1.3×0.8mの同形のものである。底面は平坦とならず、壁面は全て緩く立あがる。

ＳＸ06土壙墓（Fig.36・PL.28）

ＳＸ06土壙墓は前のＳＸ05土壙墓に切られており、これより古い時期の所産である。主軸をN－80°－Wにとる木棺土壙墓である。墓壙掘方は側壁長2.4m、小口幅60～70cmをはかる隅丸長方形をなしていたと考えられる。主体部木棺は底面に残る痕跡より少くとも最大値で側壁長1.5m、小口幅50cm程度の規模を考えることができる。

ＳＸ07土壙墓（Fig.36）

ＳＸ07土壙墓はＳＣ04竪穴住居址の南壁に近い床面に位置する。竪穴は東西長2.4m、南北幅1.1mをはかる不整な隅丸長方形をなし、主軸はN－76°－Wにとる。北辺は他遺構との重複であるか不明であるがこれに平行な平坦面をなしている。床面はほぼ平らで深さ35cm程度を残す。

各土壙墓覆土の遺物

各土壙墓では明確に副葬状態で出土した遺物類はなかった。ＳＸ01土壙墓は覆土から弥生中期後半甕・甕棺胴部破片、中期丹塗り土器破片６点（壺・高坏）、投弾等36点が出土した。ＳＸ02土壙墓覆土からは弥生中期鉢、甕・壺底部、中期後半以降の器台片などが出土した。ＳＸ03土壙墓は墓壙と木棺主体部覆土とを区別した。墓壙覆土からは上部・下部掘方を含めて分厚く、上げ底となる中期初頭の特徴をもつ甕底部、頭部が窪む蓋形土器破片、断面が逆「Ｌ」字

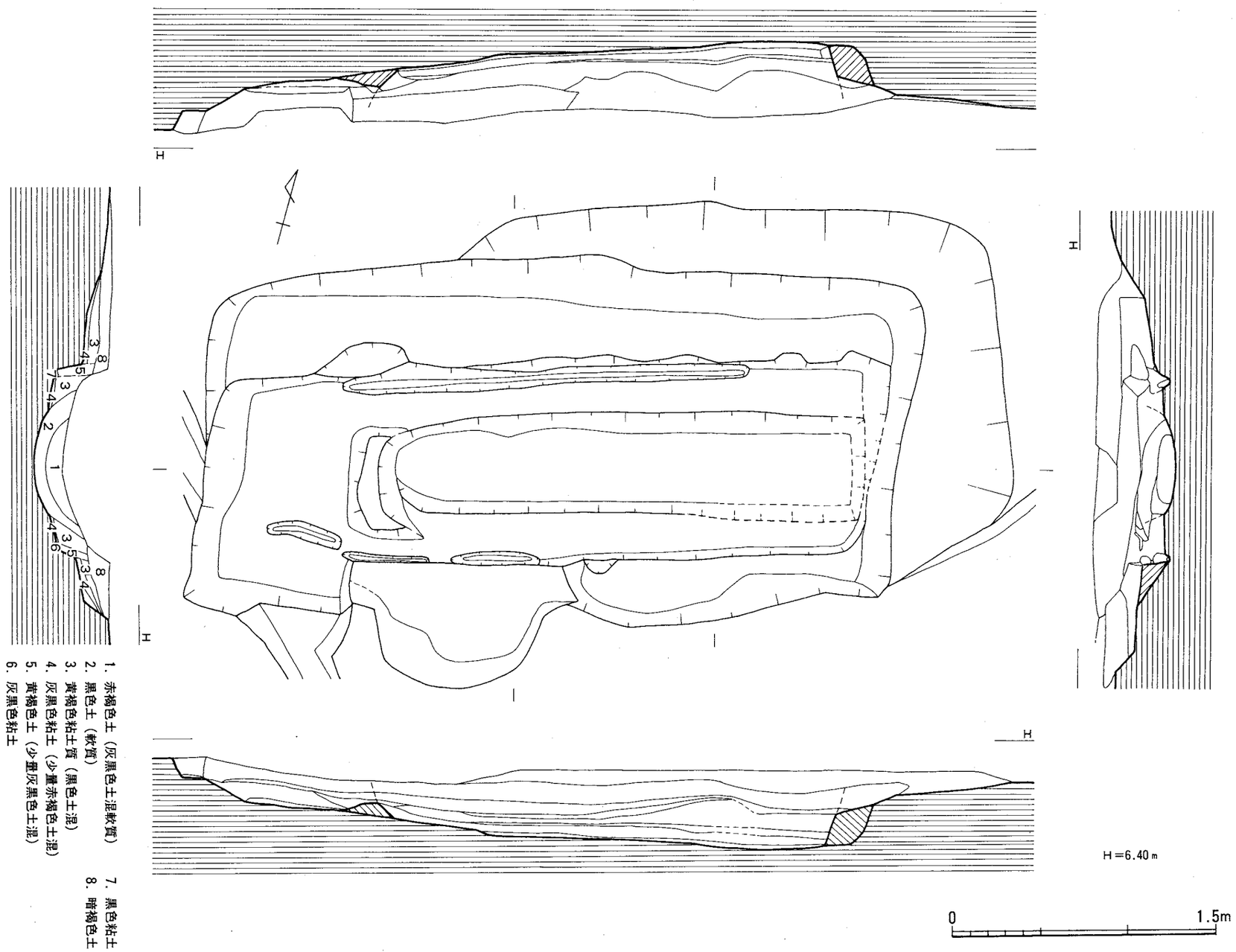


Fig34　SX03土壙墓出土状況実測図（1／30）

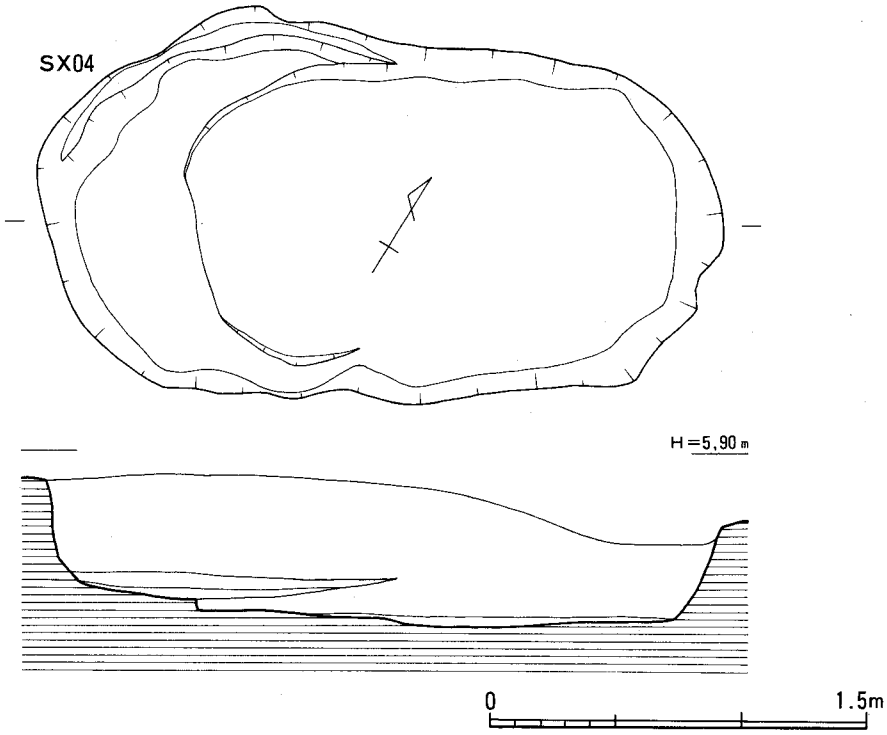


Fig.35　SX04土壙墓出土状況実測図（1／30）

形をなす甕口縁、それに鉢および頸部が直立に近く、口縁部が緩く外反し、頸部下端に一条の三角突帯を付す前期末～中期初頭にかかる壺形土器破片が出土した。また主体部覆土では口縁部が薄く、外方に発達の弱い逆「L」字形をなす甕破片など12点が出土した。ＳＸ04土壙墓の覆土では最下層の黒色粘質土から時期不詳甕破片および上層の黄褐色ローム土と黒色粘質土との混在土からは弥生中期後半に属する甕形土器破片、小型の丹塗り直口壺および砥石・黒曜石剝片・鉄片などがあり、他に時期不詳の土器片300点が出土した。ＳＸ05土壙墓覆土からは弥生中期甕形土器および口縁部がやや外反する長頸壺・口縁部が内傾する二重口縁壺、外反して朝顔状にひらく壺、鉢・砥石などの他に時期不詳破片36点が出土した。ＳＸ06土壙墓はＳＸ05に切られているが覆土は上・下層に分層できた。上層（黒色土）では弥生中期甕・高坏などの他に時期不詳破片76点が出土した。また下層（黄褐色ロームと黒色粘質土の混在土）では中期前葉甕形土器破片、器台片および他に時期不詳破片62点が出土した。またＳＸ07土壙墓からは遺物の出土がなかった。以上個別に出土遺物についてはみたが、土壙墓の時期比定については出土状況・遺物の更なる検討を行なう必要があり、甕棺墓地における位置と墓地形成の時期を含めて問題となろう。

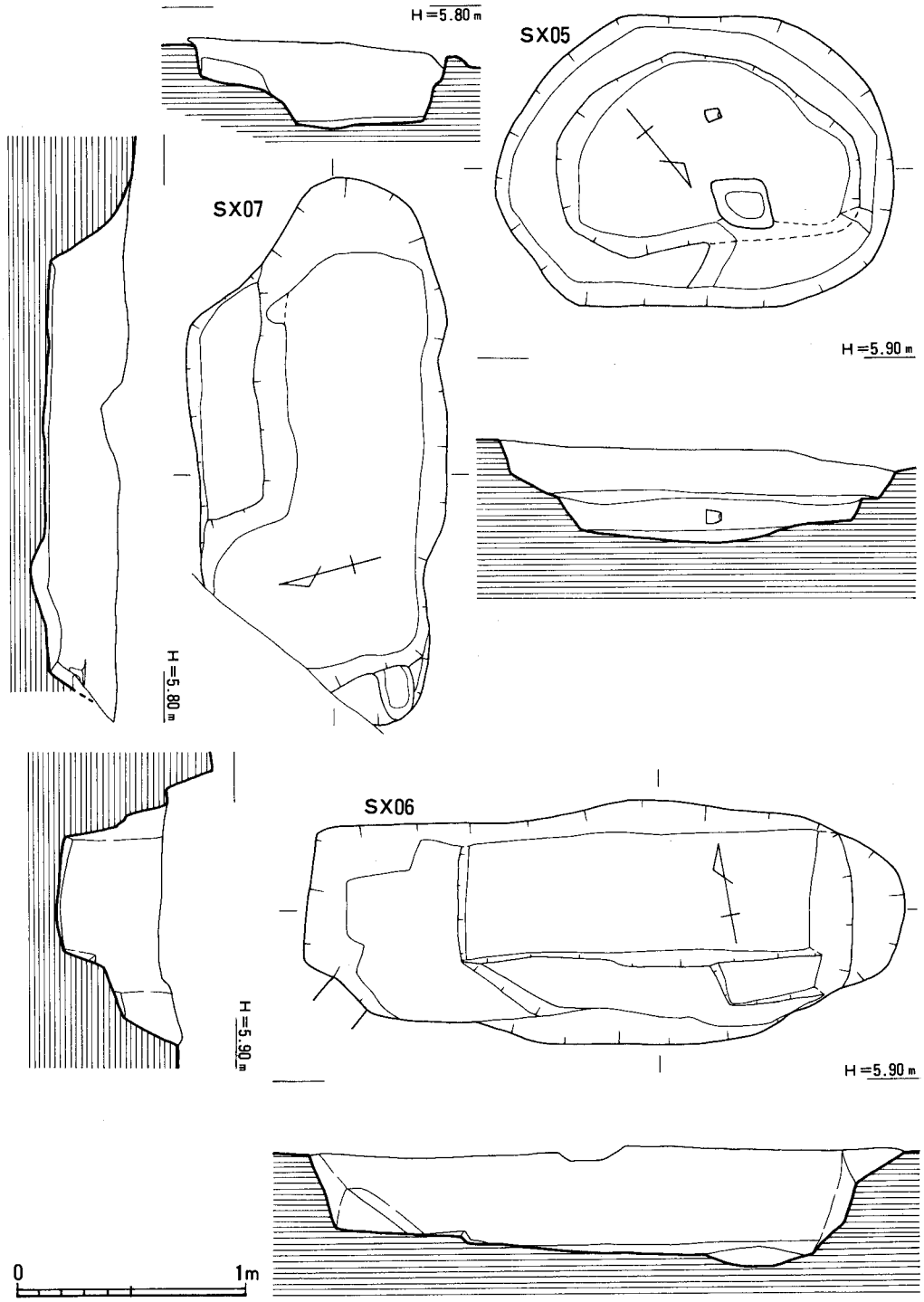


Fig.36　SX05・06・07土壙墓出土状況実測図（1／30）

(3) 竪穴住居址（Fig.37・38・PL.29・30）

竪穴住居址と考えられるものは調査区内で9軒（ＳＣ01～09）以上検出できたが、前記の様に後世の削平工作と本来の遺構相互の重複とで十分に構造を平面的に把握できないものが多かった。また近世以降のＳＤ07・08溝以東にもその分布状態から住居址が存在するものと考えられた。以下各竪穴住居址について説明を加えることとする。

ＳＣ01住居址（Fig.37・PL.29）

ＳＣ01住居址は調査区中央部南端に位置する。住居址は西辺・南辺が3.5m×4.0mでやや東西に長い方形を呈し、壁高10cm未満で、床面積14m²となる。主柱穴は明らかでないが、床面中央にある60×90cmをはかる長円形の浅い掘込みに焼土が充満して炉址と考えられるところからこれを挟む南北2個のピットであろう。ベッド状施設はなく、東壁では壁面に沿って幅50cm程の浅い溝状遺構がはしる。覆土中より弥生中期中葉～後葉の甕形土器、小型投弾、石製紡錘車が出土しており、炉址より中期壺・甕形土器が少量出土した。

ＳＣ02住居址（Fig.37・PL.29）

ＳＣ02住居址は調査区北端部に位置し、南半部のみを調査できた。住居は復原直径が約7m前後となると考えられる円形住居址で、壁高50～60cmをはかり、壁面は西側ではほぼ垂直で東側に従って緩い傾斜をもつ。また壁直下には排水施設などはなかった。床面は柱穴が多く重複しており、床面より5～20cm程度の深さをもつものが多く、床面の調整がおこなわれたものと考えられる。また主柱穴は特定できなかった。住居址覆土および床面柱穴内から中期中葉を主とする甕・壺・無頸壺および鉢形土器破片など数10点に部分磨製の打製石鏃（黒曜石製）が出土した。土器片類は丹塗り土器破片が多い。

ＳＣ03住居址（Fig.38・PL.30）

ＳＣ03住居址は調査区中央部に位置する。住居址は撹乱溝によるプランの改変が著しいが、南辺部長6.2m、東辺部長7.2mをはかり南北にやや長い方形を呈する。壁面は良好な部分で20cmを残す。プランはＳＣ05住居址と切りあっており西壁コーナーと北辺が明らかではなく、ＳＤ04溝より切られている。床面はベッド状遺構は明らかに認めることができなかった。床面積は約45m²程度である。また炉址と考えられるものはなく、主柱穴についても明らかにできなかった。

住居址覆土から豊富な遺物が出土したがＳＣ05住居址との切り合いで所属を特定できないものも多い。第1区では口縁が「く」字形に屈曲する甕形土器口縁破片・石庖丁残欠および古式土師器甕破片など、第2区では口縁部が内傾する二重口縁壺・鉢形土器、タテの削りが顕著な棒状石錘未成品などがある。また第3区では口縁部が内傾する二重口縁壺、外面丹塗りの袋状口縁長頸壺、内傾する口縁部が上端で跳上げ状となり、口縁直下に「コ」字形突帯一条を付す

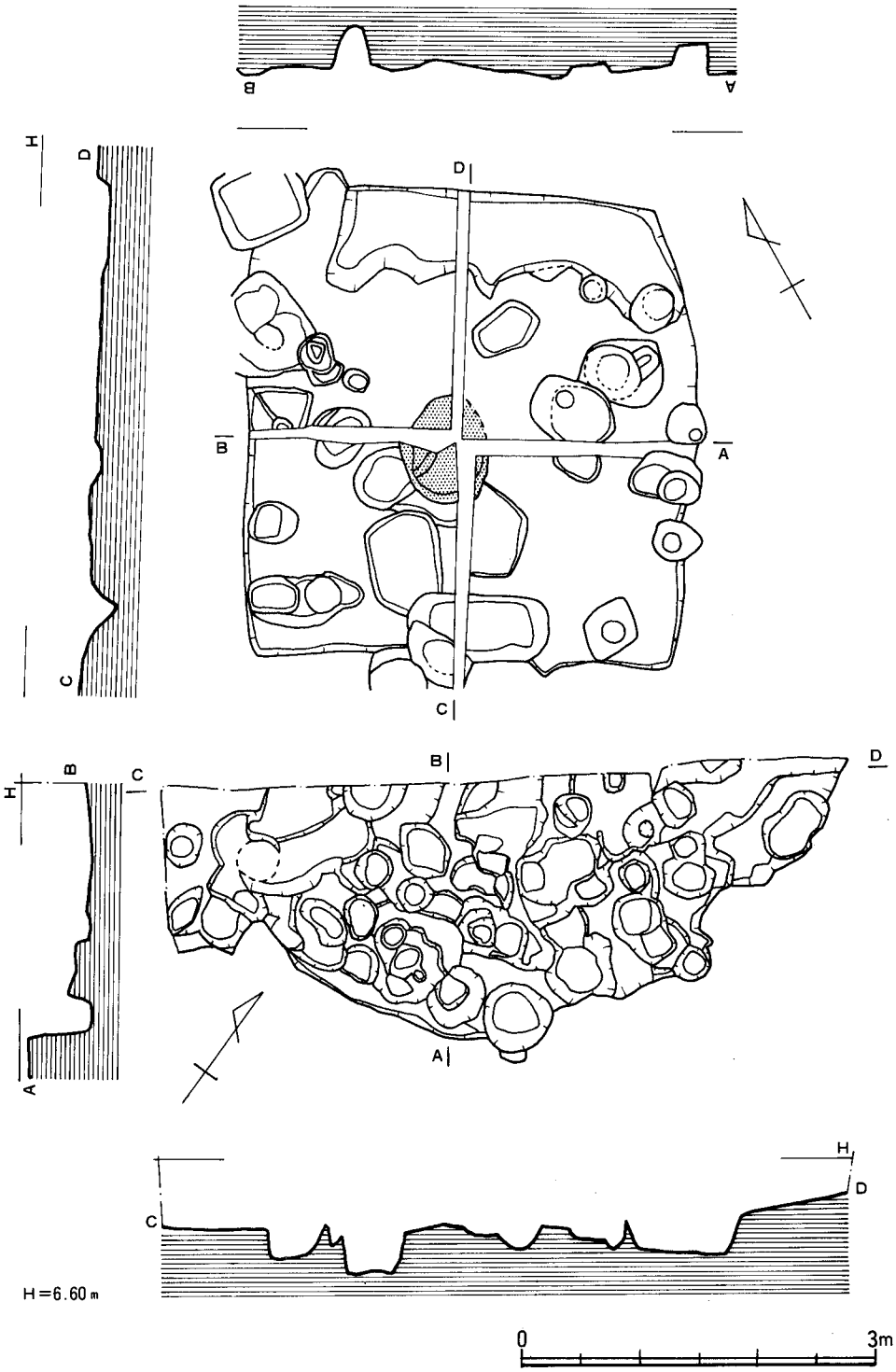


Fig.37　SC01・02竪穴住居址出土状況実測図（1／60）

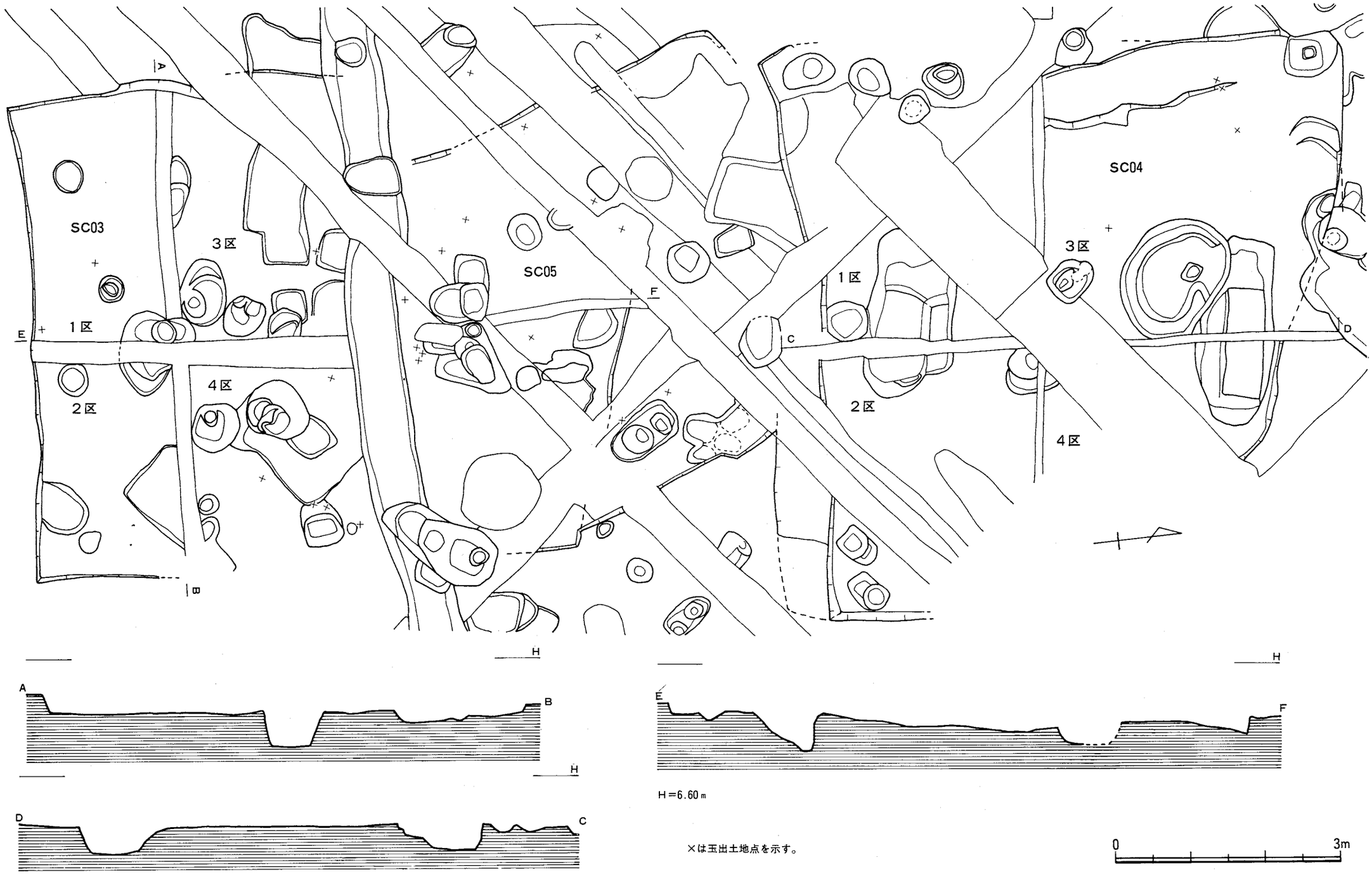


Fig.38　SC03・04・05竪穴住居址出土状況実測図（1／／60）

甕形土器片および石庖丁・角棒状鉄器・甑把手などが出土した。第４区では口縁部が直線的に外反し、胴部はふくらみが弱くヨコの荒いタタキ調整をもつ甕形土器破片・底部が丸味をもち不明瞭な甕形土器破片および石剣未成品・砥石などが出土した。またその他上面出土のものでは袋状口縁長頸壺、口縁が内傾する二重口縁壺、直立する口縁に胴部が半球状に屈曲する小型丸底壺形土器および紡錘形をなし長・短軸に溝を有する石錘（滑石）などの出土があった。次に覆土中からはガラス小玉、碧玉製管玉が出土した。これらはスカイブルー色小玉10個、コバルトブルー色棗玉・小玉各１個（小玉は直径が２㎜～４㎜）、丸玉１個、淡緑～緑色碧玉製管玉２個である。

ＳＣ04住居址（Fig.38・PL.30）

ＳＣ04は調査区中央部に位置しており、ＳＣ05住居址・ＳＸ05～07土壙墓に重複している。このうちＳＸ06土壙墓は明らかに住居址以前に営まれており、ＳＸ07は住居址より新しい。住居址は南壁および西壁部に沿って幅80cm程の削り出しのベッド状施設をもつが他については不詳である。壁延長は西辺推定7.5m、南辺推定7.0mをはかり、平面形はほぼ方形をなすとおもわれる。

住居址覆土中からは土器・土製品・石器類・玉が出土した。第２区からは弥生中期甕形土器、胴部下半に斜めの刻目突帯を有する壺、第３区では口縁部が「く」字形に折れ、端部が跳上げとなる甕口縁破片、口縁が内傾する二重口縁壺破片および無茎式打製石鏃（サヌカイト）・突錐(黒曜石製)・外弯刃石庖丁・鉄剣形鉄鏃・土器片利用の有孔円盤などがあり、スカイブルー色ガラス小玉１個も出土した。

ＳＣ05住居址（Fig.38・PL.30）

ＳＣ05住居址はＳＣ03・04住居址と南・北部で切合っており、北壁・西壁を断続的に追うことが出来る。北壁推定長5.3mをはかり、平面プランは方形となろう。主柱穴・炉址およびベッド状施設は確認できなかった。

住居址覆土中から胴部下半に一条の「コ」字形突帯を付す壺形土器破片、スカイブルー色ガラス小玉（直径3.5㎜～4.5㎜）４個（東壁部など）などが出土した。

ＳＣ06・07・08・09住居址（付図１）

ＳＣ06・07・08住居址は調査区北端部に近く位置し、平面プランの一部を僅かに残すのみのものが殆どである。ＳＣ06住居址は西側コーナ部分を残す。覆土中に弥生中期前葉甕形土器、筒形器台を含む。ＳＣ07住居址は北壁の一部を残すのみである。覆土中より弥生中期甕形土器、筒形器台および青銅製鋤先・石製紡錘車が出土した。ＳＣ08住居址はＳＣ06に隣接し、東壁の一部を残す。覆土中より弥生中～後期甕・壺形土器および凹基式打製石鏃、石製紡錘車１点が出土した。ＳＣ09住居址は調査区南端に位置し、北壁にベッド状施設をもつ、これらは何れも平面形プランは方形となろう。

(4) 掘立柱建物（Fig.39～43）

第6次調査では遺物を出土した柱穴と考えられる小竪穴は600個以上にのぼるが建物としてまとまると考えられるのは22棟（ＳＢ01～22）分である。又掘方・柱痕ともに良好な状態を残すものも他に多い。建物群は近世以後の溝ＳＤ07・08を水利施設とする水田造営がなされた際にかなりの削平がおこなわれたと考えられるが、現在の分布はこのＳＤ07・08溝の東側・西側にある。溝の西側ではＳＢ01～06建物があたり、柱掘方は40～50cmを残す。東側は段おちとなりＳＢ07～22建物があり、柱掘方は20～30cm程度が残るが掘方も方形～長方形のものが目立ち、内部に礎板あるいはその痕跡を残すものが多く、地形的に本来低く、主柱の沈没が著しいためか或は建築上の特徴であるのかも知れない。建物群は規模的に柱間が１間×１間、１間×２間、２間×４間以上のものなどがあり、南北棟を主として東西棟分がこれに次ぎ造営の時期に幅があることを窺わせる。またＳＤ07・08の東側では掘立柱建物・井戸址・土壙の分布には重複が一部みられるが特に井戸址ＳＥ36・37井戸址を除いては両遺構が各々２～３群の群を形成するように分布を異にするように思われる。以下個別に出土状況について説明を加えることとする。また各建物の細部の計測値は表にして後にまとめた。（Tab.2）

ＳＢ01建物（Fig.39）

調査区南端にある１間×１間の小規模な南北棟建物である。東西実長310cm、南北実長340cmをはかる。柱掘方は隅丸方形を呈し、70×80cmを最大とする大型のもので深さは40～50cmを残す。柱穴１は径が20cm程度の柱痕が認められる。柱穴３埋土中のみに遺物が検出された。弥生中期鋤先形口縁壺・筒形器台破片および後期壺形土器頸部破片など54点の土器細片である。

ＳＢ02建物（Fig.39）

調査区最南端に位置し、ＳＣ09と重複する。西側が調査区外となるが全体的に桁行に比べて梁行柱間が大きい点を考慮すると規模は不明であるが、それぞれ実長180cm・240cmをはかり東西棟の可能性が高い。掘方は径50～60cm・深さ40cmを残し、柱穴２より外面にタタキをもつ小形甕・頸部突帯に刻目を有する壺形土器破片が出土した。

ＳＢ03建物（Fig.39）

東側をＳＤ07溝で失なっている。東西柱間実長300cm、南北320cmをはかる1間×1間建物である。柱掘方は隅丸方形となり、径が60×70cmを最大として、深さ50cmを残す。柱穴１で沓形器台、中期後半の甕形土器破片など166点の破片が出土した。

ＳＢ04建物（Fig.39）

調査区北側に位置し、１間×２間の東西棟建物である。桁行柱間実長は510cm、梁間実長430cmをはかる。柱掘方は径30～50cmの円形で深さ20cm程度のものが多い。東西棟建物であるがやや北に偏する。柱穴１埋土で弥生中期甕形土器が出土した。

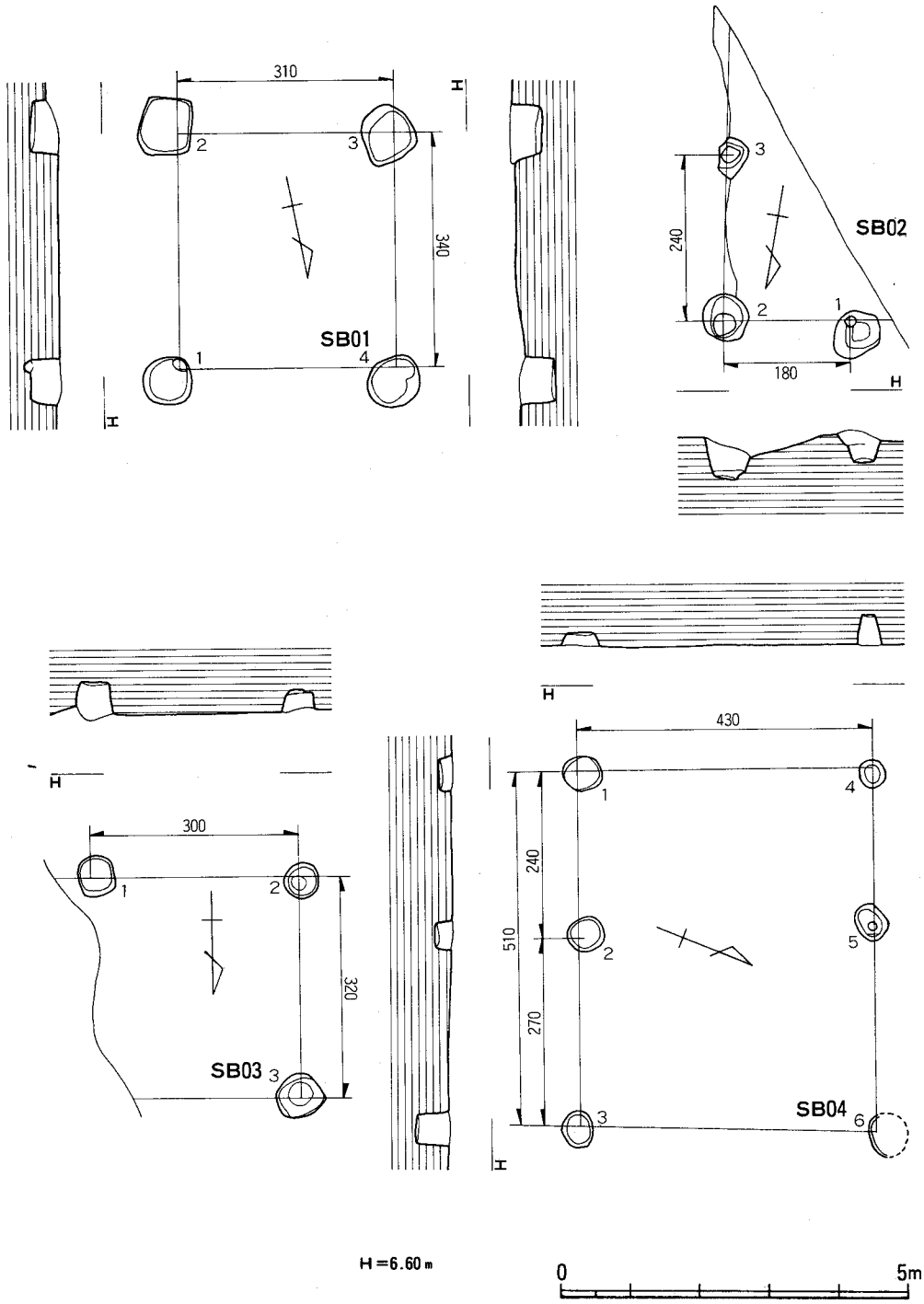


Fig.39　SB01・02・03・04掘立柱建物出土状況実測図（1／100）

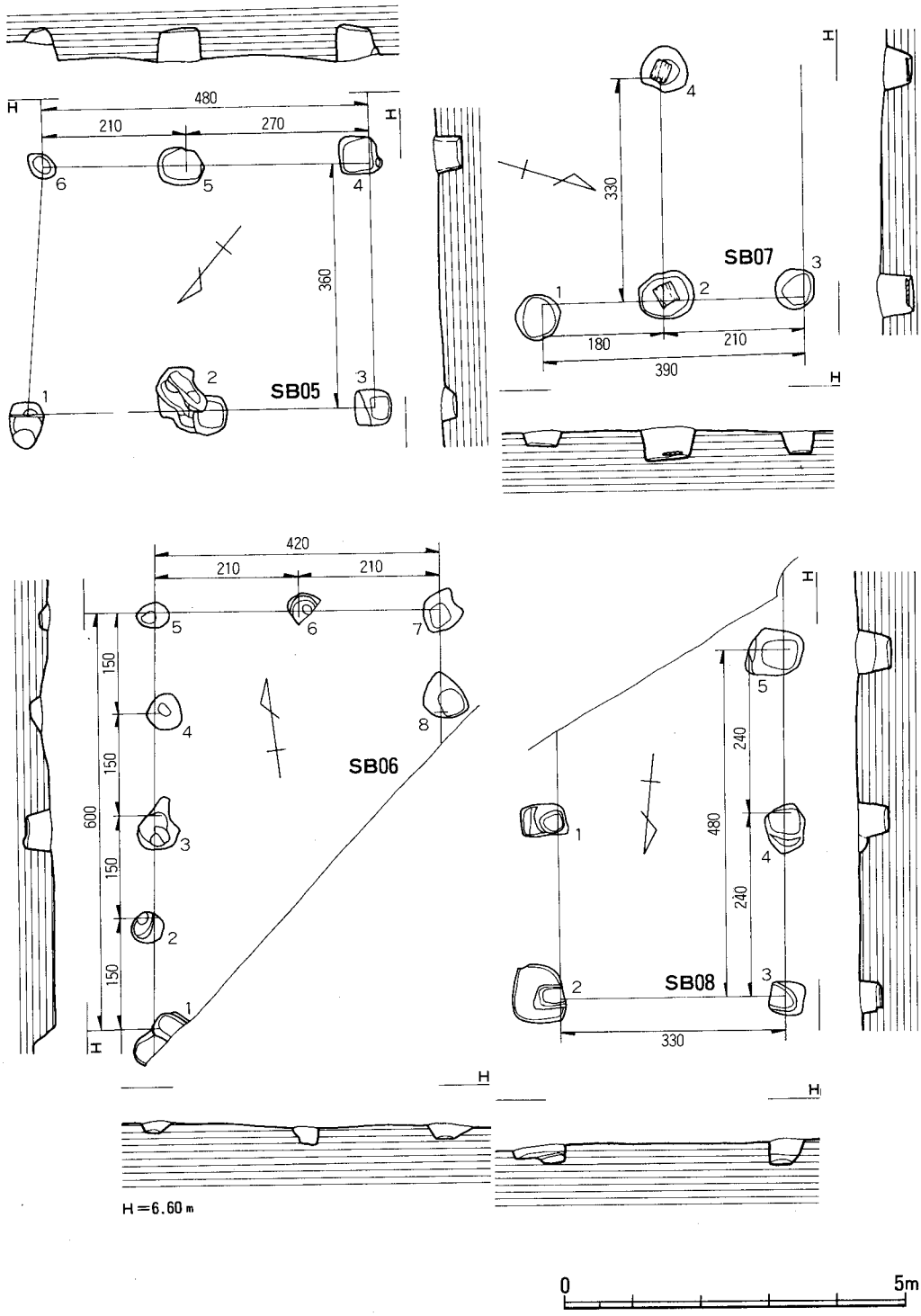


Fig.40　SB05・06・07・08掘立柱建物出土状況実測図（1／100）

ＳＢ05建物（Fig. 40）

ＳＢ04西側に位置する１間×２間の東西棟建物である。桁行および梁行は不等間隔であり、桁行総実長480cm、梁行360cmをはかる。柱掘方は不揃いで円一隅丸方形をなし径50cm前後が多い。柱穴1･2･5埋土から弥生中期丹塗り甕形土器破片、跳上げ状口縁となる甕形土器破片など60点が出土した。

ＳＢ06建物（Fig. 40）

ＳＤ05溝と重複する。南側は調査外となるが２間×４間の南北棟建物である。桁行総実長600cm・柱間150cm、梁行総実長420cm・柱間210cmの等間隔となる。柱掘方は円形で径が50cm前後が多い。柱穴１・２・５・６・７・８埋土で弥生中期中葉～後葉甕形土器破片・土師器破片が出土した。

ＳＢ07建物（Fig. 40）

ＳＤ07溝に切られる。西側は不明な部分が多い。１間×２間の南北建物となるか。桁行総実長390cm、梁行長330cmをはかる。柱穴１～４ともに埋土より遺物が少量出土しており、柱穴２で後期甕形土器が混入する。また柱穴２・４に礎板が残る。

ＳＢ08建物（Fig. 40）

ＳＤ07溝東側南端に位置する。南側で壁に這入るが２間×３間或は４間の規模となる南北棟建物である。梁行実長は330cmをはかる。柱穴１～３埋土より弥生中期後半～後期甕底部破片および石製有孔円盤が出土した。

ＳＢ09建物（Fig. 41）

ＳＢ08建物の西側に隣接する１間×２間の南北棟建物である。桁行総実長は480cm、梁行実長380cmをはかり、側柱は不等間隔である。柱掘方は長・短が60×50cm程度の隅丸長方形を呈し、深さは10～20cmを残すのみである。柱穴１・２・３・４より遺物が出土した。柱穴１では弥生中期鉢形土器破片、柱穴２では胴部の膨らみが弱く、頸部から長く外方に伸びる口縁部をもつ甕形土器口縁部破片、柱穴３・４でも弥生中～後期の土器片８点が出土した。

ＳＢ10建物（Fig. 41）

ＳＢ18の北側に隣接する位置にある１間×１間以上の東西棟建物で１間×２間程度の規模になる可能性が高い。梁行実長310cm、桁行柱間実長210cmをはかる。柱掘方は長・短が60×50cm程度の不整円形を呈し、深さは30～35cmを残している。柱掘方埋土からは柱穴１で弥生中期～後期に属すると思われる土器破片４点が出土した。

ＳＢ11建物（Fig. 41）

ＳＢ12・13・14と重複する１間×１間の南北棟建物で主軸は西側にかなり偏する。南北柱間実長480cm、東西柱間実長400cmをはかる。柱掘方は長・短が60×40cmの長円形のものを最大としてかなり不揃いである。深さは10～20cmを残すのみである。柱穴１・２から若干の遺物が出

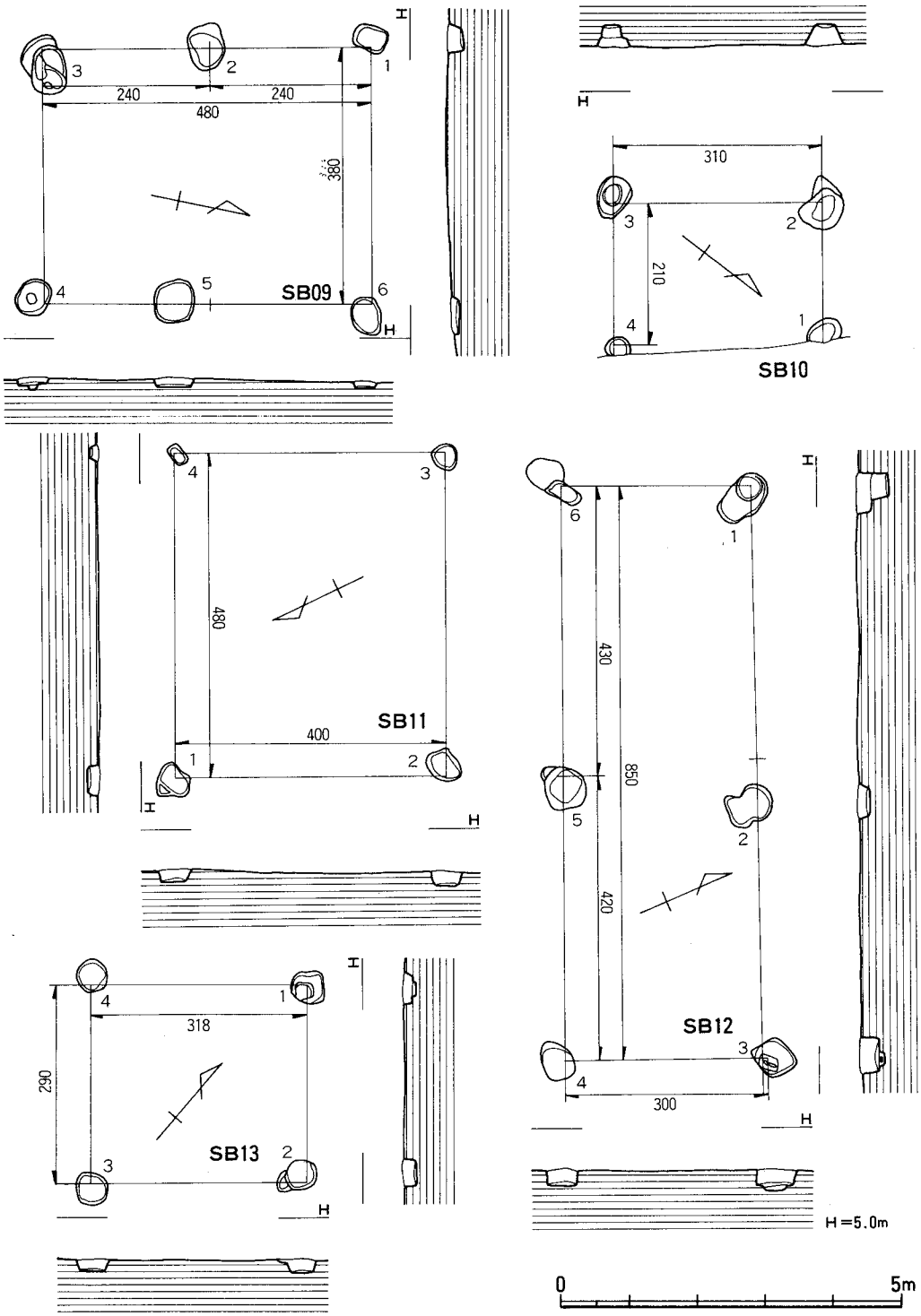


Fig.41　SB09・10・11・12・13掘立柱建物出土状況実測図（1／100）

土した。柱穴１では弥生後期と思われる土器破片14点、柱穴２では弥生中期中葉甕形土器破片、器台破片および時期不詳の土器片22点が出土した。

ＳＢ12建物（Fig. 41）

ＳＢ11･13･14･15と重複する１間×２間の南北棟建物であり、主軸はかなり西に偏する。桁行総実長は850cm、同柱間430・420cmをそれぞれはかる。また梁行実長は300cmとなり、他の建物に比較して側柱柱間が長く、配置も不等間隔であって他のものと異った性格をもつ建物であるかも知れない。柱掘方は長・短が60×40cmを最大として円・隅丸長方形を呈し、底部に礎板および礎板痕跡を残すものがある(柱穴３、６)。柱穴埋土からは柱穴１～５で遺物が出土した。柱穴１では弥生中期甕形土器片など４点、柱穴２では中期後半甕形土器片など８点、柱穴３では弥生中期後半甕・筒形器台片それに内面ヘラ削りを施した甕形土器破片など14点、柱穴４では頸部に一条の三角突帯を付した弥生後期とおもわれる壺形土器片など10点、柱穴５では弥生中期後半甕・壺形土器片および内面ヘラ削りを施した薄手の土器片など24点が出土した。

ＳＢ13建物（Fig. 41）

ＳＢ11･12･14･15･16建物と重複する１間×１間の小規模な建物である。南北・東西とも実長が300cmをはかる。柱掘方は長・短が50×40cm程度の隅丸方形を呈し、斉一性があり、深さ20cm程を残す。柱穴は４個とも遺物が出土した。柱穴１・２・３で弥生中～後期と思われる甕形土器片など11点、柱穴４では弥生後期土器片３点と内弯気味に外反する口縁を有する小型の丸底壺破片が出土した。

ＳＢ14建物（Fig. 42）

ＳＢ12・13・16と重複する1間×1間の小規模な南北棟建物である。南北柱間実長330cm、東西柱間実長240cmをはかる。柱掘方は円形で径30～40cm程度である。柱穴１～３より弥生中期後半甕形土器破片および柱穴３では他に弥生後期とおもわれる壺破片が出土した。

ＳＢ15建物（Fig. 42）

ＳＢ12・13建物と重複する1間×1間以上の東西棟であり主軸はかなり北に偏する。梁行実長は480cmをはかり、桁行柱間実長は300cmとなる。柱掘方は径50cm程の円形をなし、深さ10～30cmをはかる。柱穴は１～３ともに弥生中期～後期と考えられる土器細片を含む。

ＳＢ16建物（Fig. 42）

ＳＢ14・16と重複する2間×3間程の規模となるものと思われる南北棟建物である。桁行総実長580cm、同柱間実長180・210・190cmをはかる。また梁行柱間実長は210cmであり全体に柱間寸法にも斉一性があるといえる。柱掘方は長・短が60×45cmの隅丸長方形のものを最大とし、全体的に角張ったものが多い。柱穴は１～５ともに弥生中期後半～後期と考えられる土器片が少量出土した。

ＳＢ17建物（Fig. 42）

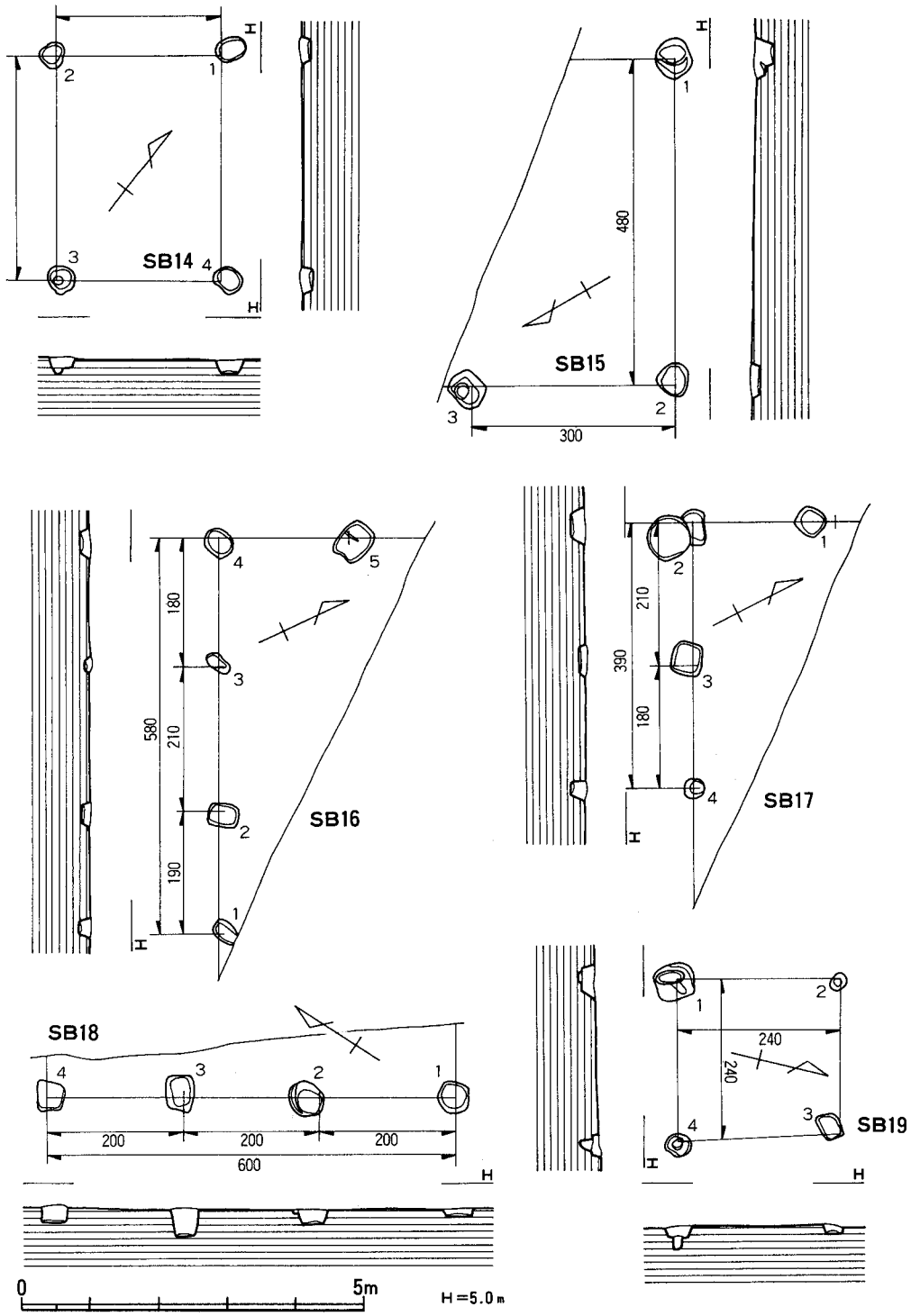


Fig.42　SB14・15・16・17・18・19掘立柱建物出土状況実測図（1／100）

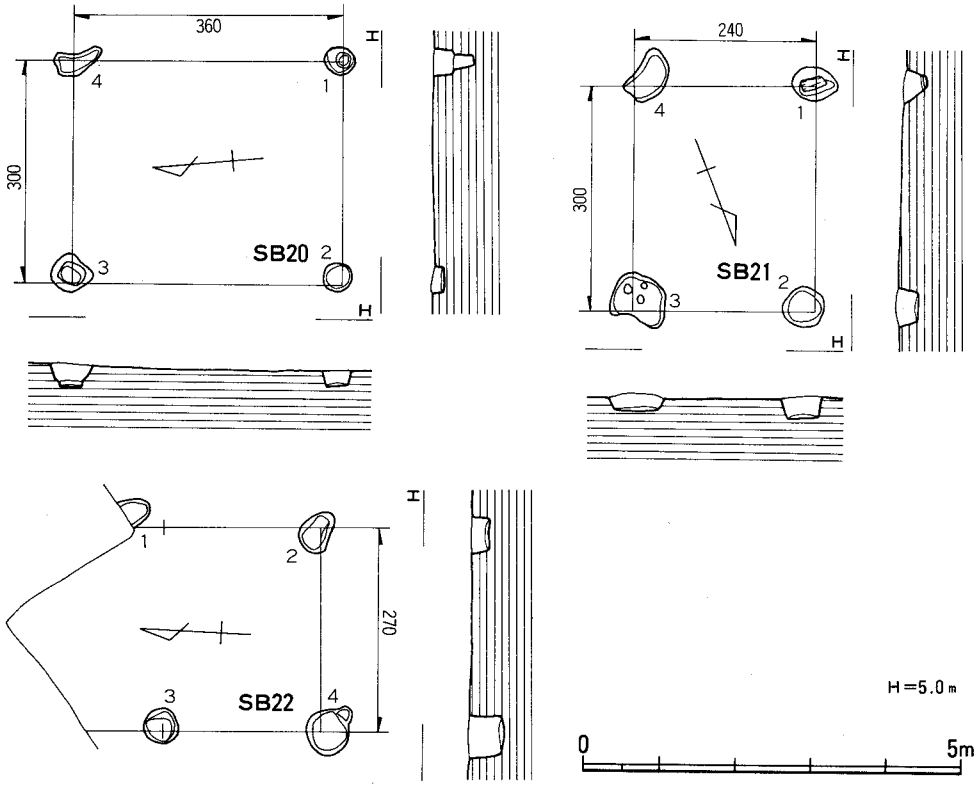


Fig.43　SB20・21・22掘立柱建物出土状況実測図（1／100）

ＳＢ16・18と重複する梁１間以上、桁２間以上となる南北棟建物となろう。梁・桁柱間実長は170～180cm程度である。柱掘方は隅丸方形をなし、長・短が50×45cmのものを最大とし、深さは10～20cmを残している。柱穴では１～３について弥生中～後期に属すると考えられる甕・鉢形土器破片が少量出土した。

ＳＢ18建物（Fig.42）

ＳＢ16・17と重複する建物で桁行３間を検出できた。建物は主軸を北よりやや北に振る南北棟である。桁行総実長600cm・柱間実長200cmをはかる。柱掘方は長・短が50×40cm程度の隅丸長方形を呈し、深さ25～40cmを残す。柱穴１～４から弥生中期～後期と考えられる器台・脚付鉢形土器破片など少量が出土した。

ＳＢ19建物（Fig.42）

他建物と重複しない1間×1間の小規模建物である。東西・南北柱間実長は240cmをはかる。柱掘方は不整であり、大きさもまちまちであるが一応建物としてまとめた。柱穴１・３で弥生中～後期に属すると考えられる甕形土器破片など少量が出土した。

ＳＢ20建物（Fig.43）

建物番号	規模	方向	桁行		梁行		方位（磁北）	床面積
			実長	柱間尺	実長	柱間尺		
SB 01	1×1	EW	340 (11.3)	11.3	310 (10.3)	10.3	N- 11° -E	10.54m²
SB 02			—	6	—	8	N -9° -W	2.16+αm²
SB 03	1×1+α	EW	—	10	320 (10.6)	10.6	N- 90° -W	9.6+αm²
SB 04	2×1	EW	510 (17)	9・8	430 (14.3)	14.3	N- 67° -E	21.93m²
SB 05	2×1	EW	—	9・7	360 (12)	12	N- 50° -W	17.3m²
SB 06	4×2	NS	600 (20)	5·5·5·5	420 (14)	7・7	N-7.5° -E	16.2m²
SB 07	2×1	NS	390 (13)	7・6	330 (11)	11	N-72.5° -E	12.9m²
SB 08	2×1	NS	510 (18)	9・8	330 (11)	11	N- 5° -W	16.8m²
SB 09	2×1	NS	480 (16)	8・8	380 (12.6)	12.6	N-13.5° -E	18.24m²
SB 10	1+α×1	EW	—	7	310 (10.3)	10.3	N-51.5° -E	6.51+αm²
SB 11	1×1	NS	480 (16.0)	16	400 (13.3)	13.3	N- 65° -W	19.2m²
SB 12	2×1	EW	850 (28.3)	14・14.3	300 (10)	10	N- 67° -W	25.5m²
SB 13	1×1	NS	318 (10.6)	10	290 (9.6)	10	N- 50° -W	9m²
SB 14	1×1	NS	330 (11)	11	240 (8)	8	N-35.5° -W	7.92m²
SB 15	1+α×1	EW	—	10	480 (16)	16	N-29.5° -W	14.9+αm²
SB 16	3×1+α	NS	580 (19.3)	6·3·7·6	—	7	N- 60° -W	9.6+αm²
SB 17	2+α×1+α	NS		7・6	—	6	N-62.5° -W	6.8+αm²
SB 18	3×1+α	NS	600 (20)	6.6·6.6·6.6	—	—	N-33.5° -W	7+αm²
SB 19	1×1	NS	240 (8)	8	240 (8)	8	N- 75° -E	5.9m²
SB 20	1×1	NS	360 (12)	12	300 (10)	10	N- 5° -E	10.8m²
SB 21	1×1	NS	300 (10)	10	240 (8)	8	N- 21° -E	11.75+αm²
SB 22	1+α×1	NS	—	7	270 (9)	9	N- 3° -W	7.1m²

桁・梁の実長単位はcm、( )内は1尺を30cmとして除した数値

Tab.2 掘立柱建物計測表

SB21建物に重複している1間×1間規模の南北棟建物である。桁行・梁行総実長が360×300cmをはかる。柱掘方は径30～40cmをはかる円形のもので、深さ20～30cmを残す。柱穴1・3で弥生中期後半～後期にかけての甕形土器口縁・底部・壺形土器破片などが出土した。

SB21建物（Fig.43）

SB20・22と重複する1間×1間の小規模な南北棟建物である。桁行・梁行実長は300×240cmをはかる。柱掘方は円～長円形で径50～60cm、深さ30cm程度を残す。柱穴1～4で弥生中期後半～後期にかけての器台・甕形土器破片が出土した。

SB22建物（Fig.43）

SB21と重複する1間×2間以上の南北棟建物である。梁行実長270cm、桁行柱間実長210cmをはかる。柱掘方は円～長円形で径50cm程度のものを最大とし、20～50cmを残す。柱穴1～4から弥生中期後葉甕・蓋形土器片など多数が出土した。

またこの他にはSB08建物の北妻に近い複合する小竪穴(P509、510)の覆土中に「水銀」の堆積が認められた。以上掘立柱建物について個別に記したが、SD07・08溝をともなう水田化工作によってかなりの削平を受けたと考えた同溝東側部分では柱掘方が最低10cm程度の深さを有する点で削平は50cm内外と考えられ、旧地形ではSD07以東においてかなりの地形変換があったものと考えられる。これら建物群の時期決定については出土遺物類と配置の規則性の検討にまちたい。

(5) 井戸址（Fig.44～62, PL.31～37, Tab. 3）

井戸址は調査区内で50基（ＳＥ01～50）検出した。

これらの井戸址はＳＥ01が調査区西端近くに単独で位置していたのを除けば、ＳＤ07溝の辺縁以東に分布するものがほとんどであった（Fig.44）。このＳＤ07溝以東は近世以降の水田化にともない削平されており、溝の西側から1.5ｍほど段落ちした状態になっている。この段落ち

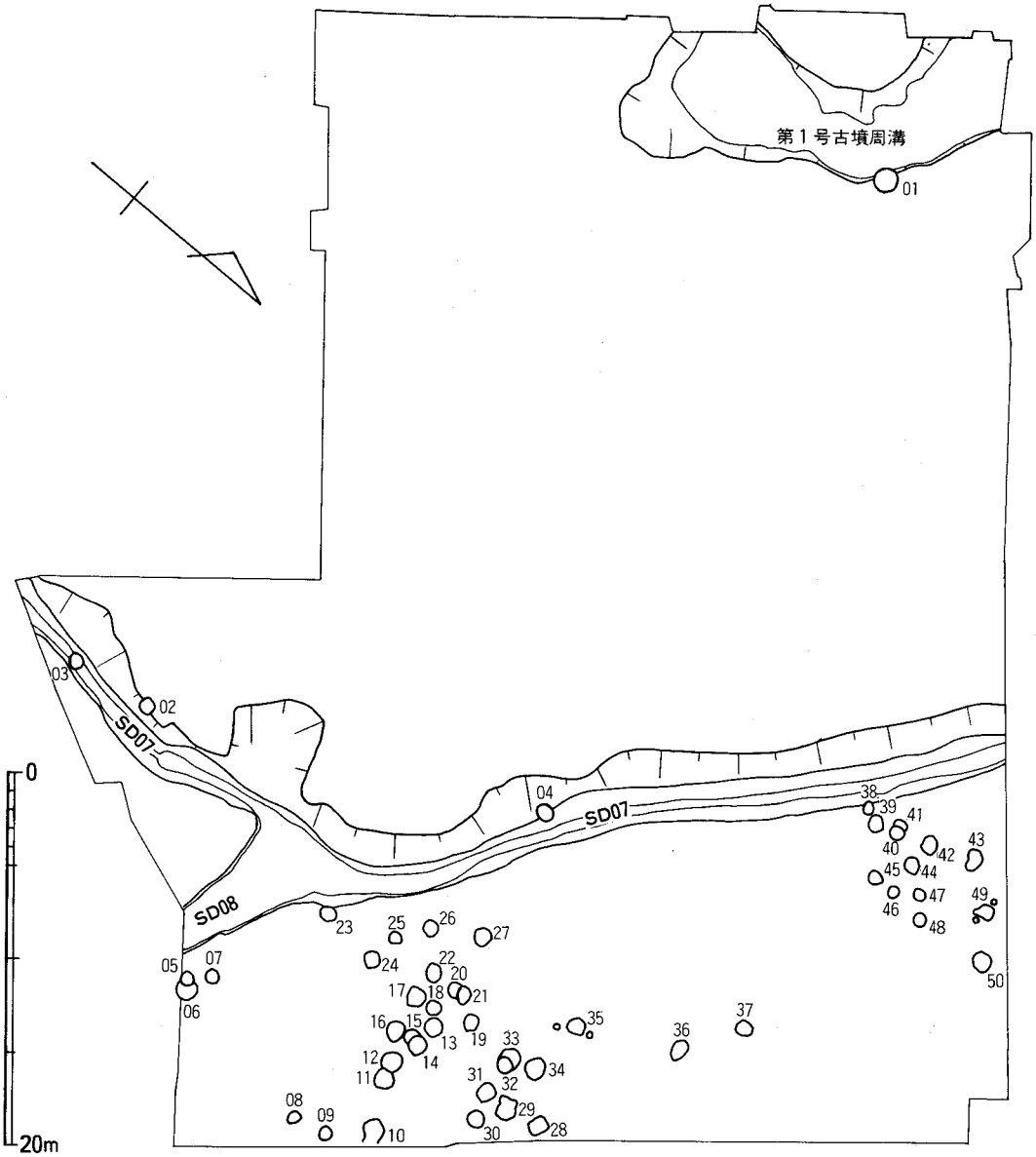


Fig.44　井戸址分布図（1／400）

部分にＳＥ02・03・04があり、ＳＤ07溝の東肩以東の削平平坦部にＳＥ05～50の46基がある。この46基の井戸址も大まかにはＳＥ05・06・07、ＳＥ08～35、ＳＥ36・37、ＳＥ38～50の４群に分別でき、さらにＳＥ08～35の群は分布の細分が可能である。また井戸址はこれで完結しているわけではなく、その分布は東南の調査区外に延びそうな気配である。

当然のことながら以上述べた井戸址の分布はあくまでも平面的なものにすぎず、井戸どうしの切り合い関係が６組（ＳＥ05・06、ＳＥ14・15、ＳＥ21・20、ＳＥ32・33、ＳＥ40・41、以上は前者が新しい。他にＳＥ11と12が切り合うが先後関係不明）あり、また出土遺物からもかなりの時間幅をもつことが判明している。本報告では遺物を除外したため、明確な時期決定などの詳細については次報告に譲るが、現在のところではＳＥ04・17の弥生時代中期末頃に本遺跡の井戸の初源を、またＳＥ46の古墳時代前期（布留式併行期）にその終焉を求めることができるようである。出土遺物が少なく時期決定が困難なものもあるが、残りはほとんど弥生時代後期におさまるものと考えられる。そのうち後期前半～中頃の井戸はＳＥ08～35の群に、また後期後半のものはＳＥ38～50の群に集中する傾向がみられる。

検出した井戸はすべて素掘りで（ただＳＥ17だけは井戸側に用いたと考えられる大型甕形土器が底面近くから出土）、遺構検出面からの深さはＳＥ11の2.78ｍが最も深く、ＳＥ36の0.5ｍが最も浅い。穿井時期が古いものほど深く、新らしいものが浅い傾向がうかがわれる。しかしいずれの井戸址も削平を受けており、また分布位置によって検出面の標高が異なっている。Fig.45は井戸址の断面と標高の関係を表したもので、湧水点との関係をみていくと次のようになる。第１湧水点である鳥栖ロームと八女粘土の境は、場所により多少の相違はあるものの、標高3.5～3.9ｍの所に求められる。ＳＥ01以外の井戸底はすべてこの湧水点に達している。実際、発掘中においても湧水が認められたことから、浅い竪穴遺構も井戸として取り扱った次第である。第２湧水点は八女粘土が青灰色シルトに変る部分に認められ、その標高は2.5ｍ前後で、湧水量も第１湧水点に比べはるかに多い。ここまで穿井されたものは弥生時代中期末～後期前半の時期がほとんどで、第２湧水点付近から下が大きく抉れた状態を呈するものが多い。これは湧水点以下に水を汲みあげた際に側壁が剥落するもので、発掘中にもたびたびみられた。検出時にすでにこの状態を呈していることは、この種の井戸がその使用時に何度か底部の清掃を行なっていることをうかがわせる。ＳＥ17にみられる大型甕の井戸側はこの第２湧水点側壁の崩壊防止のため設けられたものであろう。

井戸内からは多数の土器とともに、石器・木器・獣骨・果核などが出土した。土器は完形で井戸底に置かれたものが多く、井戸祭祀に関係するものであろう。井戸の時期を問わず袋状口縁や複合口縁の壺形土器が多いことが特徴的である。これら遺物については前述したように次報告に譲り、本報告ではその概要を記すにとどめたい。

以下、各々の井戸址について詳述する。

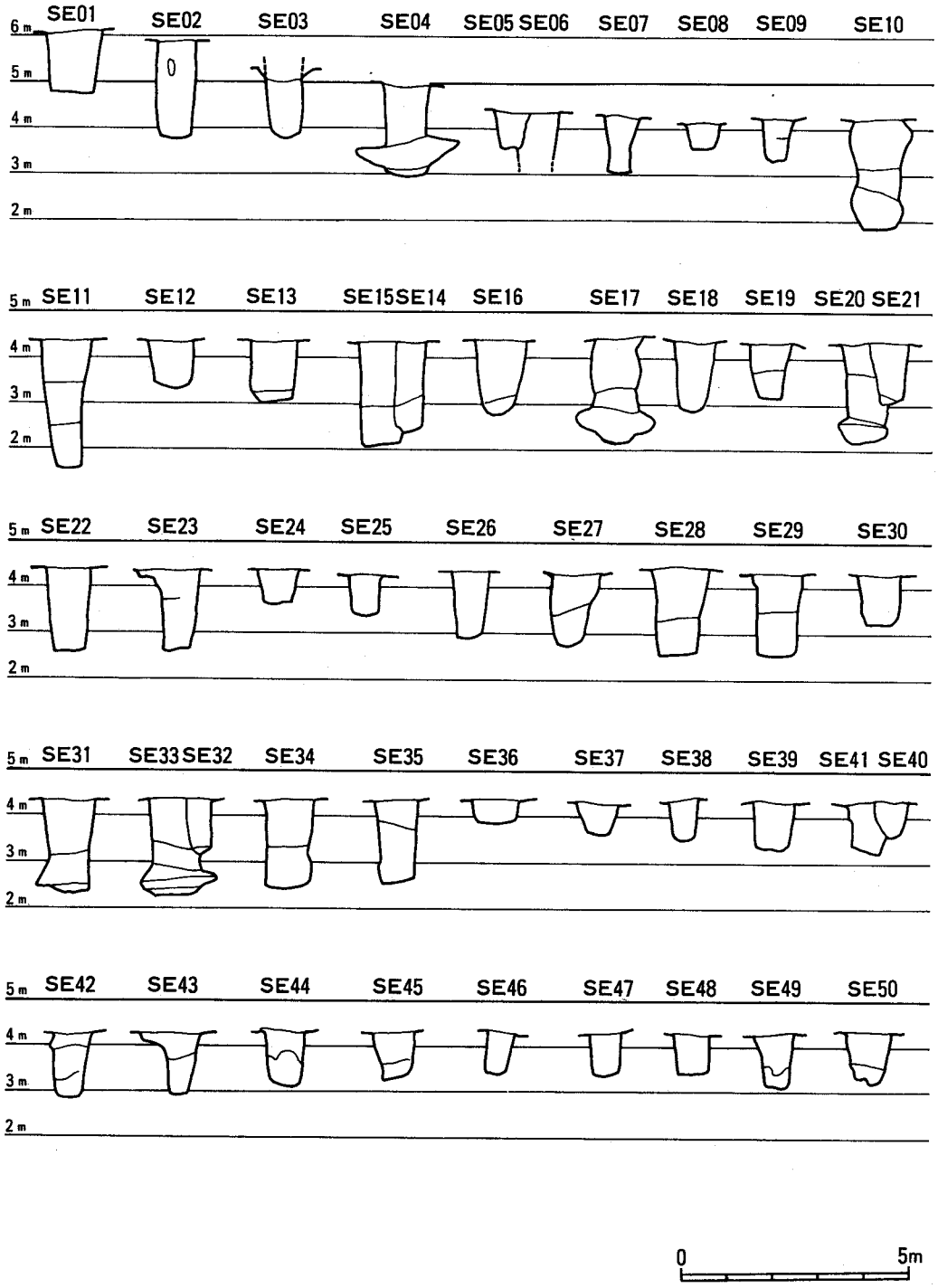


Fig.45　井戸址断面図（1／150）

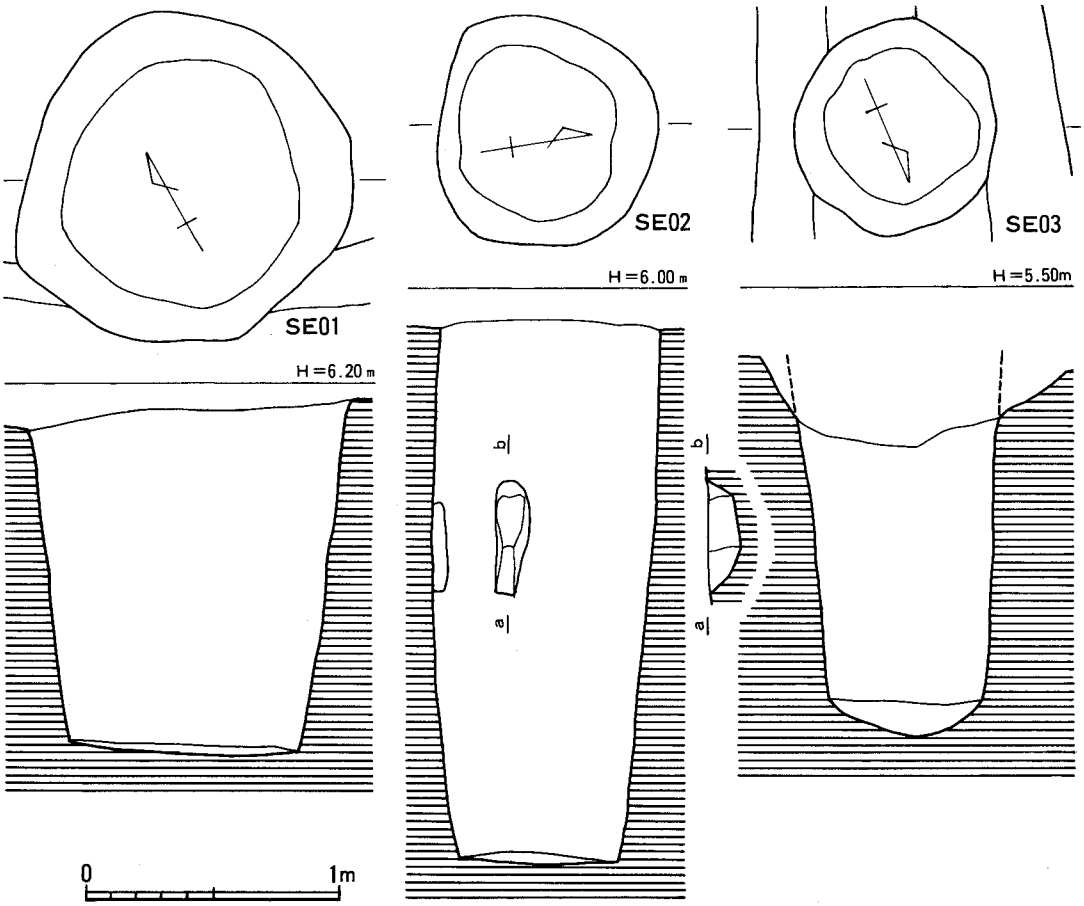


Fig.46　SE01・02・03井戸址実測図（1／30）

ＳＥ01　（Fig.46，ＰＬ.31）　調査区の西北で検出した。残りの井戸址が調査区の東側に集中するのに対し単独出土である。第１号古墳の周溝によって西南部を切られる。上面は径122～134cmのほぼ円形を呈し、底部にむかってすぼまる。深さは140cmであるが、遺構底の標高は4.73mしかなく第１湧水点に達していない。覆土上層から弥生時代中期中頃までの土器片に混り、後期の複合口縁壺口縁が一片のみ出土した。底部付近からの出土遺物はなかった。位置および湧水の関係から井戸址としては問題を残す。

ＳＥ02　（Fig.46）　ＳＤ07溝南側西肩の段落ち際に位置する。上面は径90cm弱のほぼ円形をなし、底面はすぼまり不整円形を呈する。深さは213cmで、八女粘土に達している。底面より上約110cm付近の西側壁に１ヶ所、南側壁に３ヶ所の縦40cm、横15cm、奥行13cmほどの、足掛けに使用したと推察される凹みを設けている。覆土からは弥生時代後期土器片、木器、木片などの出土をみたが、量的には少ない。

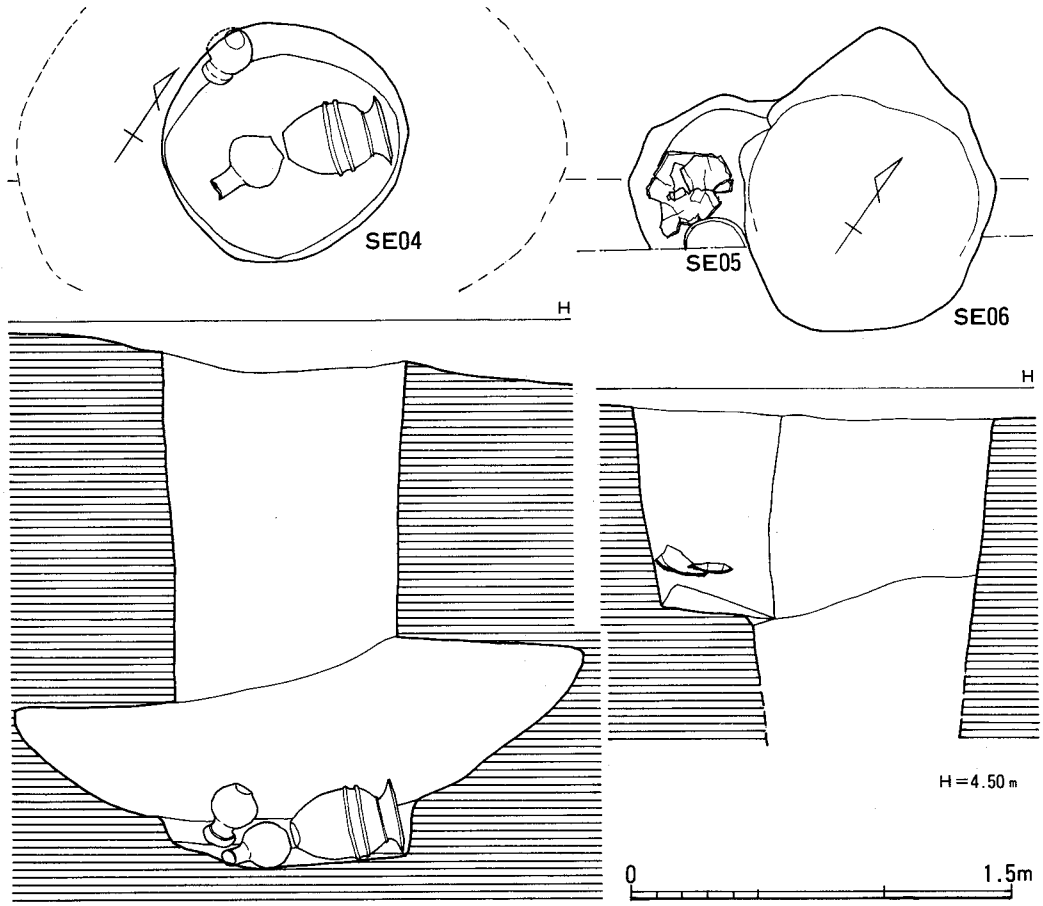


Fig.47　SE04・05・06井戸址実測図（1／30）

ＳＥ03　（Fig.46）　ＳＥ02の西南に位置するが、すでにＳＤ07溝によって切られていた。上面は径80～84cmのほぼ円形をなし、隅丸方形の底面にむかってすぼまる。深さ113cmで、底面標高はＳＥ02とほぼ同じの3.72mである。出土遺物は弥生時代後期土器片少量のみである。

ＳＥ04　（Fig.47，PL.31）　ＳＤ07溝中央西肩で検出した。上面は径90～96cmのほぼ円形を呈し、深さ120cm前後まで垂直に掘削される。この地点が鳥栖ロームと八女粘土の境にあたり、ここより側壁は奥に向い水平に60～70cm程度抉れる。底面はさらに約75cm下にあり、抉れた部分から底面にかけては八女粘土と黒色粘土が混ざった状態であった。底面に接して、弥生時代中期末の袋状口縁壺２、瓢形土器１のほぼ完形品の出土をみた他、同時期の甕・壺形土器片、石庖丁、木片などを検出した。袋状口縁壺のうち西壁側で倒立して出土した１個体は、口縁下凸帯の直下に細縄状のものを巻き結んでおり、釣瓶として使用されたものではないかと推察される。本遺跡の井戸址としてはＳＥ17とともに最も古い時期のものである。

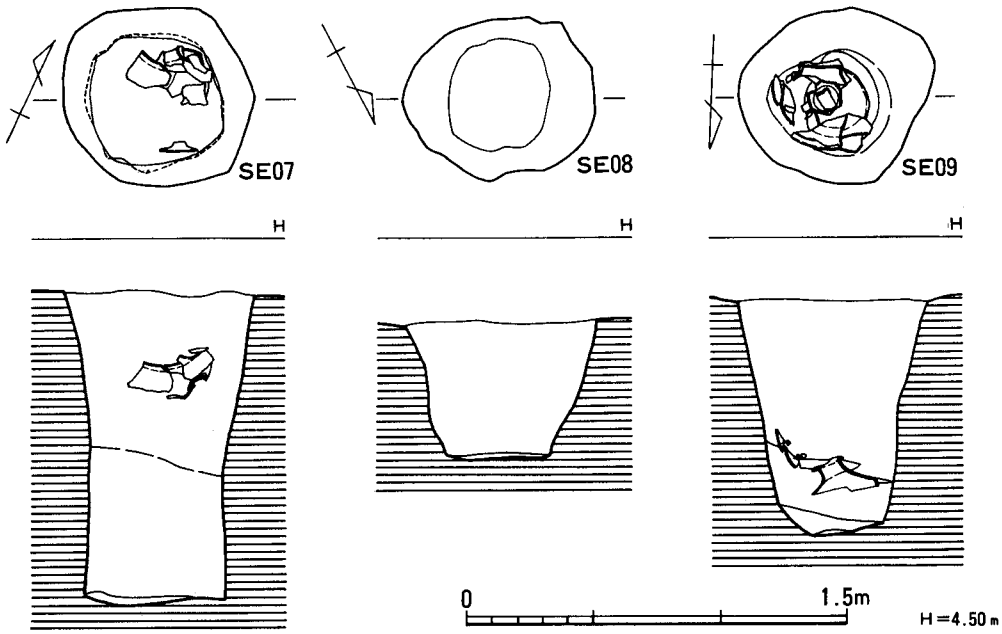


Fig.48　SE07・08・09井戸址実測図（1／30）

ＳＥ05　（Fig.47，PL.31）　ＳＤ08溝の東側、発掘区南境で検出した。上面は径80cmの円形で、東側のＳＥ06を切っている。深さ74cmと浅いが、第１湧水点には達している。底面よりわずかに浮いた状態で、弥生時代後期複合口縁壺１個体分が出土した。他の出土遺物はない。

ＳＥ06　（Fig.47，PL.31）　ＳＥ05の東側で切られる。南半分が調査区外にかかるものの、上面は径105cm前後のほぼ円形をなすと考えられる。上面から徐々にすぼまり、深さ180cm前後で底面に至ったが、湧水と崩壊のため実測図作成は断念した。遺物は弥生時代後期の土器片を十数点覆土上部から検出した他、底面近くから木片を見出しただけである。

ＳＥ07　（Fig.48，PL.31）　ＳＥ05の北０.７ｍに位置する。上面は径70～75cmの円形をなす。深さ60cm前後の鳥栖ロームと八女粘土の境まですぼまり、そこから底部に向いわずかに拡がりをみせる。底面までの深さ123cm。上面から深さ20cmあたりから土器がまとまって出土しはじめ、底面近くでは弥生時代末頃と考えられる甕１、直口壺２、注口土器１を完形に近い状態で検出した。土器以外の出土遺物はない。

ＳＥ08　（Fig.48）　調査区の東南部近くで検出した。上面は61×76cmの楕円形をなし、深さ56cmで一辺40cm前後の隅丸方形の底面に達する。井戸址の中では浅い部類であるが、底面は八女粘土を切り込んでいる。出土遺物はいずれも弥生式土器の小破片である。

ＳＥ09　（Fig.48，PL.32）　ＳＥ08の北約1.2ｍに位置する。67×77cmの楕円形の上面から、深さ94cmで径36cmの円形の底面に達する。底面より15～20cmほど浮いた状態で、弥生時代末頃

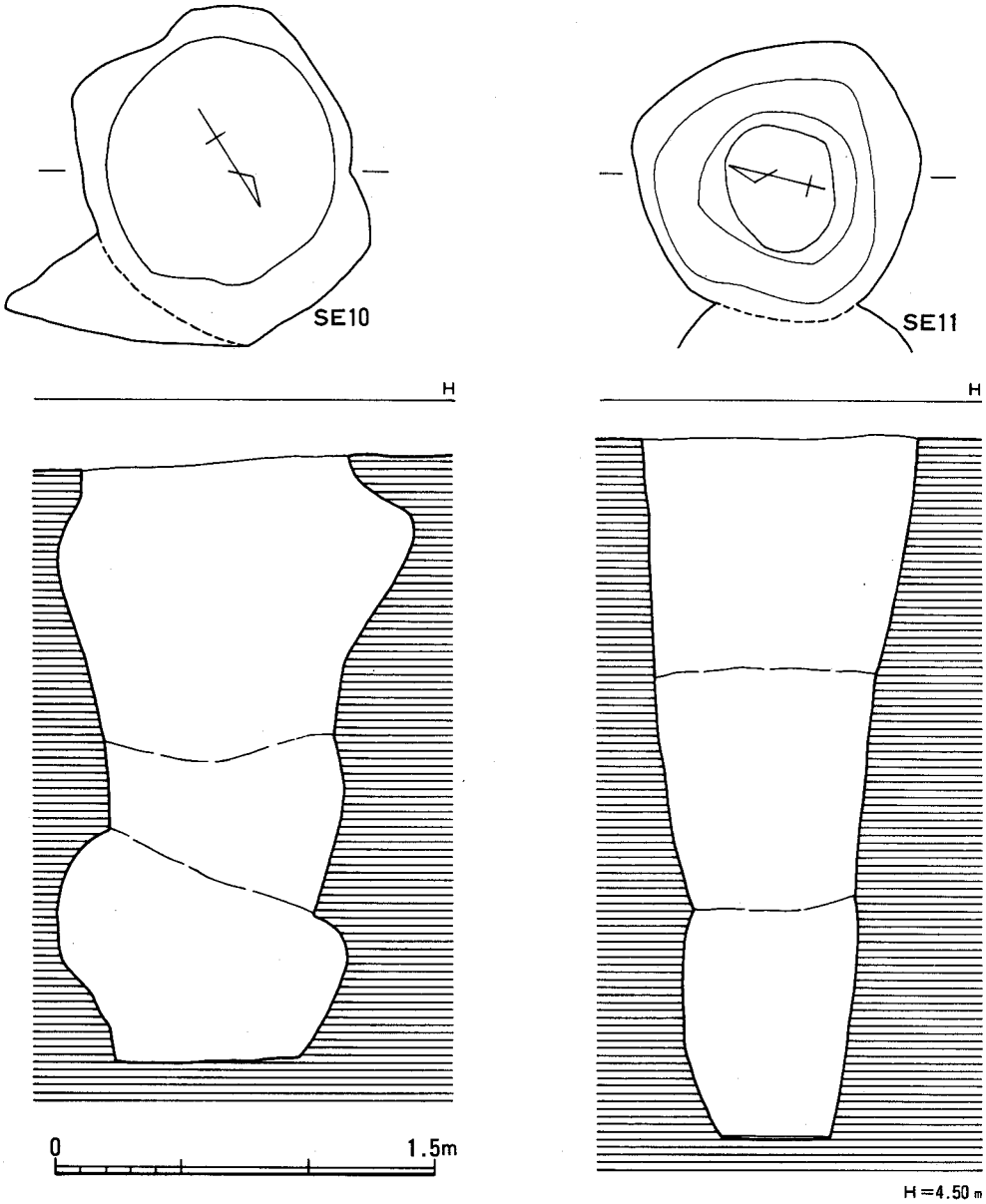


Fig.49　SE10・11井戸址実測図（1／30）

と考えられる複合口縁壺１と広口壺１を検出（ともに出土状態は破砕、接合完形）した他、覆土から弥生時代中・後期土器細片が多数出土した。

ＳＥ10　（Fig.49，PL.32）　ＳＥ09の北約1.7ｍに位置する。東側を撹乱で一部破壊され、また西側の調査区境では別遺構と切り合っている。上面は108×120cmの隅丸長方形に近く、深さ241cmで径90cm強の円形底面に達する。上面から深さ40cm前後で一度小さな抉れをみせ、深さ

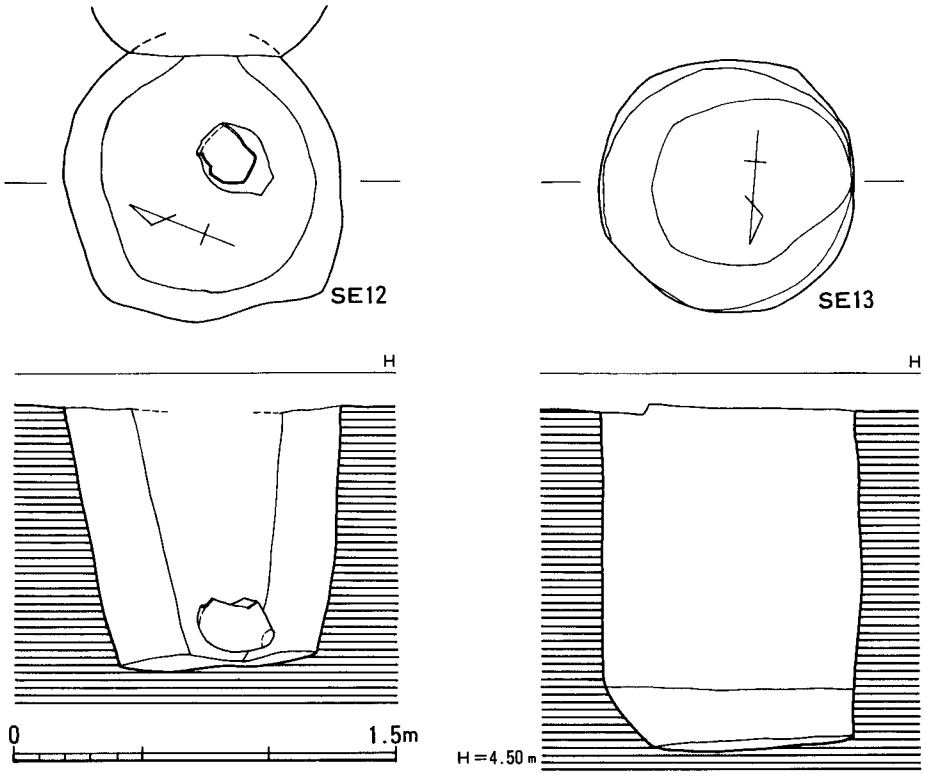


Fig.50　SE12・13井戸址実測図（1／30）

150cm前後の八女粘土と青灰色シルトの境でまた20cm前後の抉れがある。出土遺物は弥生時代後期前半頃までにおさまる土器片（完形出土は小型甕１のみ）および叉鍬・諸手鍬・つちのこ・枘材などの木器である。

ＳＥ11　（Fig.49，ＰＬ.32）　ＳＥ10の西約1.7ｍに位置する。上面は径112cmのほぼ円形をなし、西側でＳＥ12と切り合うが、遺構検出時の先後関係は確認できなかった。上面から次第にすぼまり、深さ278cmで底面に達する。途中、深さ185cm（標高2.50ｍ前後）で八女粘土と青灰色シルトの境があるが、抉れた状態は認められなかった。覆土はほぼ同じもので、出土遺物も弥生時代中期～後期土器の破片が少なからずあるだけである。これらの状況は、本井戸址が比較的短期間しか使用されず、またその埋戻しが一気に行なわれたことを推察させる。

ＳＥ12　（Fig.50，ＰＬ.32）　ＳＥ11の西にあり切り合い関係をもつが、前述したように検出時に先後関係を確認できなかった。上面は径110cm前後の円形を呈し、深さ100cmで径80～90cmの円形の底面に達する。底面よりわずかに浮き、横置の状態で弥生時代後期甕１個がほぼ完形のまま出土しただけで、他の遺物は全く認められなかった。

ＳＥ13　（Fig.50）　ＳＥ12から西へＳＥ14・15をはさみ約1.9ｍの所で検出した。上面は径約100cmの円形で、側壁はほぼ垂直である。深さ137cmで、底面は62×79cmの楕円形を呈する。

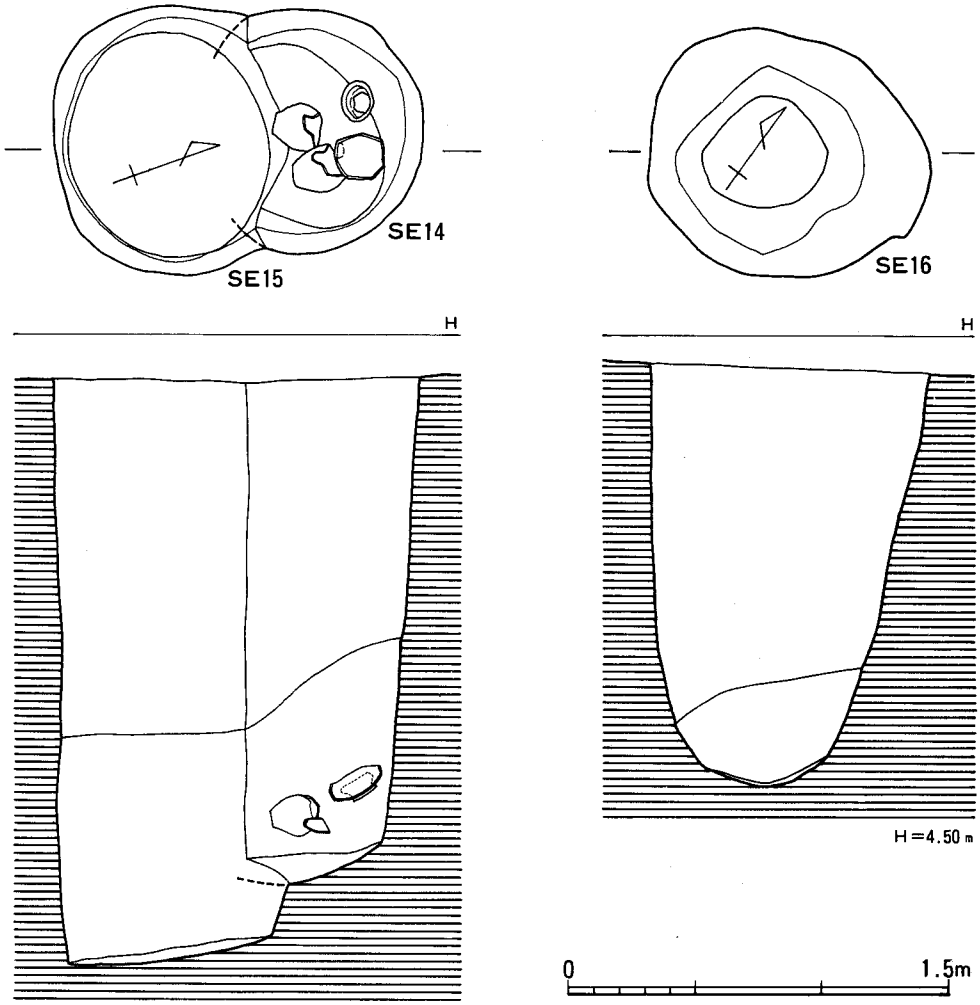


Fig.51　SE14・15・16井戸址実測図（1／30）

覆土からの出土遺物は極めて少なく、弥生時代中・後期土器片、黒曜石片にすぎない。

ＳＥ14　（Fig.69，PL.33）　ＳＥ12の西0.7ｍに位置する。南側でＳＥ15を切っている。上面は径96cmの円形をなし、深さ200cm。径70cm前後の平面不整円形の底面は、八女粘土と青灰色シルトの境まで達している。底面よりわずかに浮いた状態で、弥生時代後期前半の甕・複合口縁壺・椀など５個体分ほどが横置で出土した。その他弥生時代中・後期の土器片を多量に覆土中より検出した。

ＳＥ15　（Fig.51，PL.33）　ＳＥ14の南側で切られる。上面は東西幅105cmを計る円形を呈する。側壁は底面までほぼ垂直に掘削され、深さは231cm。底面はすでに青灰色シルトになって湧水が著しかったが、側壁が抉れた状態は見られなかった。覆土からは弥生時代中期末頃の土

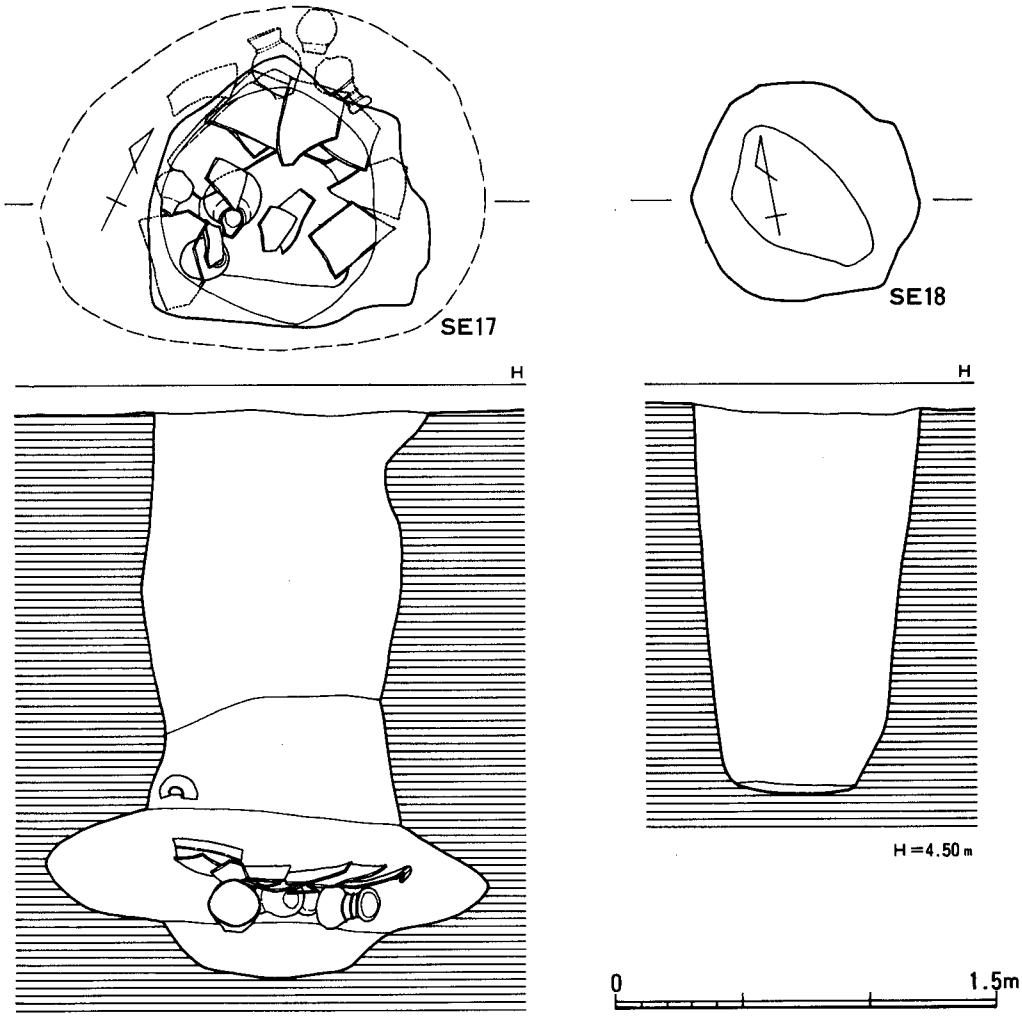


Fig.52　SE17・18井戸址実測図（1／30）

器片が少量出土しただけである。あるいは使用期間が短く、埋戻しも一気に行なわれたものであろうか。

ＳＥ16　（Fig.51）　ＳＥ15の南に接するように位置する。上面は96×113㎝の楕円形を呈し、底部に向ってすぼまる。深さは166㎝で、底面は径44㎝ほどの不整円形である。覆土からは弥生時代中・後期土器片80点余と木製杓子（全長33.5㎝）および木片が出土した。

ＳＥ17　（Fig.52，PL.33）　ＳＥ16の西１ｍの所で検出した。上面は多少の出入りがあるものの径100㎝余のほぼ円形として捉えることができる。側壁は八女粘土と青灰色シルトの境である深さ約160㎝あたりまで、垂直あるいは小さなオーバー・ハングの状態を呈し、そしてそこ

から奥へ40cmほど抉れる。上面から径60cmの円形底面までの深さは224cmを計る。側壁が大きく抉れる深さあたりから多量の土器片が出土し始め、八女粘土の混った黒色泥土とともに取りあげてゆくと、一面に大型甕を敷きつめた状態にあたった。甕はいずれも内面を上に向けており、側壁にそうように口縁部がめぐっていた。これを取り上げ接合すると、普通甕棺として用いられる大型甕の口縁部から胴部凸帯下までの一片の欠けもないものとなった(Fig.53)。大型甕は口径64cm、残高64cmで、胴部凸帯下は明らかに打ち欠きによるものであり、また口縁部内面のわずかな出っぱりも打ち欠いてあった。出土位置・状態、および遺物のあり方からすれば、この大型甕は八女粘土と青灰色シルトの境付近に据置かれた井戸側（土器側）であった可能性が極めて強い。この甕の下から袋状口縁壺２（ほぼ正置）、さらに甕の外にあたる抉れ部分から袋状口縁壺１と壺２（いずれも横置）を検出した。後者の土器の出土状況は、大型甕が井戸側とすれば、それは穿井当初から置かれたものではないことをうかがわせる。遺物は他にこの甕の上部から出土した土器や木製鍬、木片などがある。土器はほとんどが弥生時代中期末までにおさまるものと考えられる。

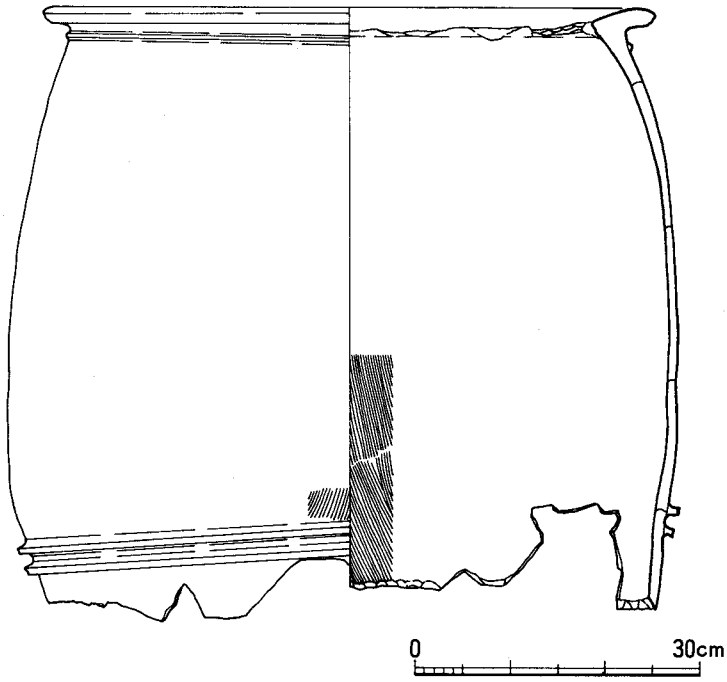


Fig.53　SE17井戸側大型甕実測図（1／8）

ＳＥ18　（Fig.52）　ＳＥ17の0.2ｍ北で検出した。上面は径90cmのほぼ円形を呈し、側壁は不整楕円形の底面に向ってすぼまる。深さ153cm。覆土はほとんど同一の土質で、その中から弥生時代中・後期土器片少量と木片が出土したにすぎない。

ＳＥ19　（Fig.53）　ＳＥ18の北1.2ｍに位置する。上面は東側がやや広がるものの、径88cmほどの円形をなす。底面は径50cm余の円形を呈し、深さは119cmを計る。断面中位の稜線が鳥栖ロームと八女粘土の境になる。覆土からは弥生時代中・後期の土器片だけが出土した。

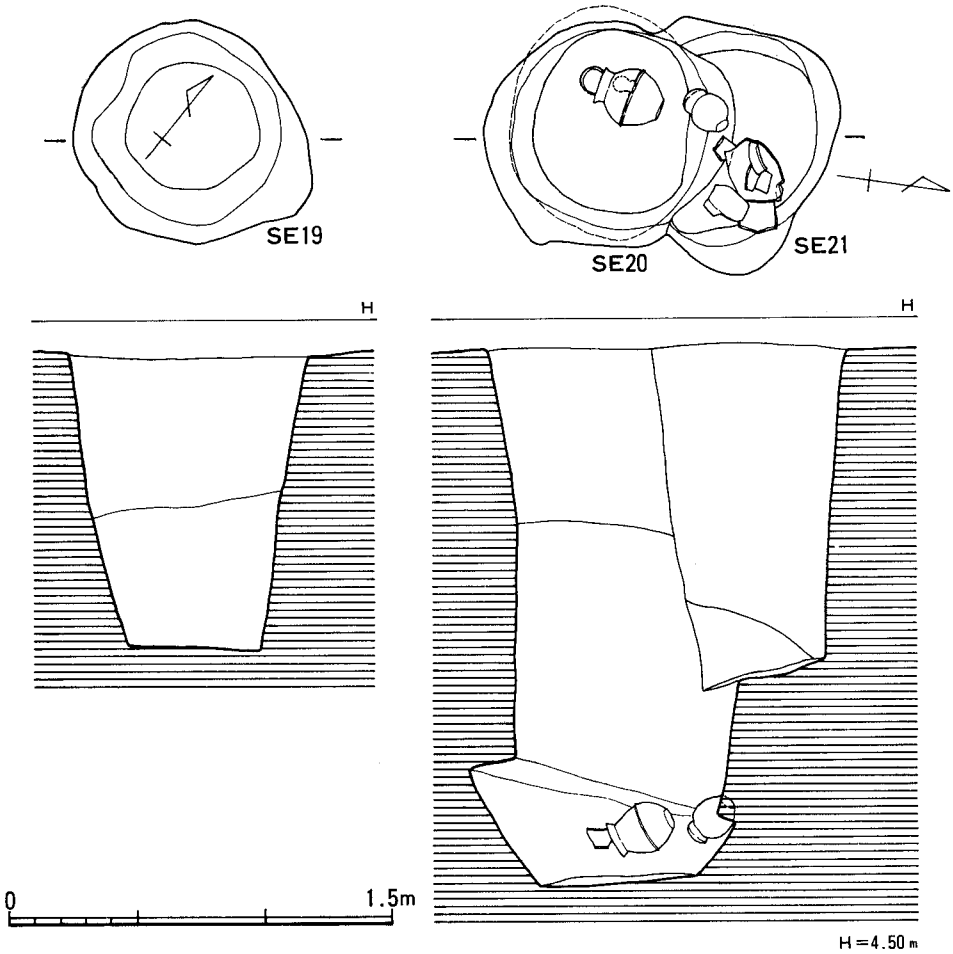


Fig.54　SE19・20・21井戸址実測図（1／30）

ＳＥ20　（Fig.54，PL.33）　ＳＥ18の西0.6ｍに位置する。北側をＳＥ21によって切られる。上面は径90～100cmの円形をなし、深さ70cm付近（鳥栖ロームと八女粘土の境）まですぼみ、八女粘土と青灰色シルトの境である深さ160～80cmまでほぼ垂直になる。そこより奥に10～15cmほど抉れる。上面から60×70cmの楕円形底面までの深さは213cmを計る。底面より10数cm上で、横置または正置の状態で弥生時代後期前半の袋状口縁壺２、壺１、甕１、椀１を検出した。他に覆土から弥生時代中・後期の土器片が多量に出土した。

ＳＥ21　（Fig.54、PL.33）　ＳＥ21の北側を切る。上面は80×97cmと東西に幅広い楕円形を呈し、深さ137cmで径70cmの底面に達する。深さ70cmの東側壁近くで、弥生時代後期甕１個体分を検出したのみで、他の出土遺物は全く認められなかった。

ＳＥ22　（Fig.55，PL.34）　ＳＥ20の南0.7ｍに位置する。上面は85×100cmの東西に幅広

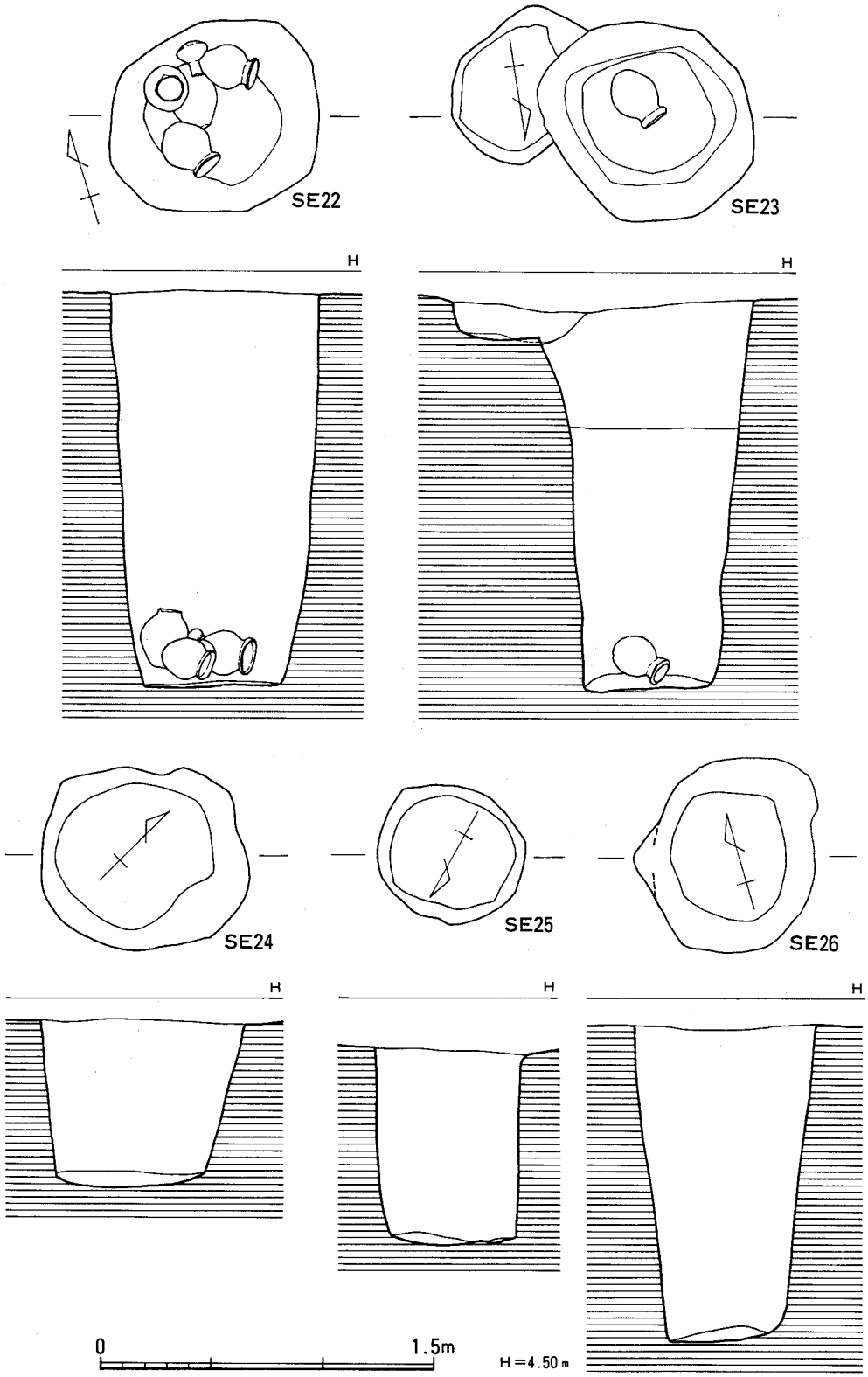


Fig.55　SE22・23・24・25・26井戸址実測図（1／30）

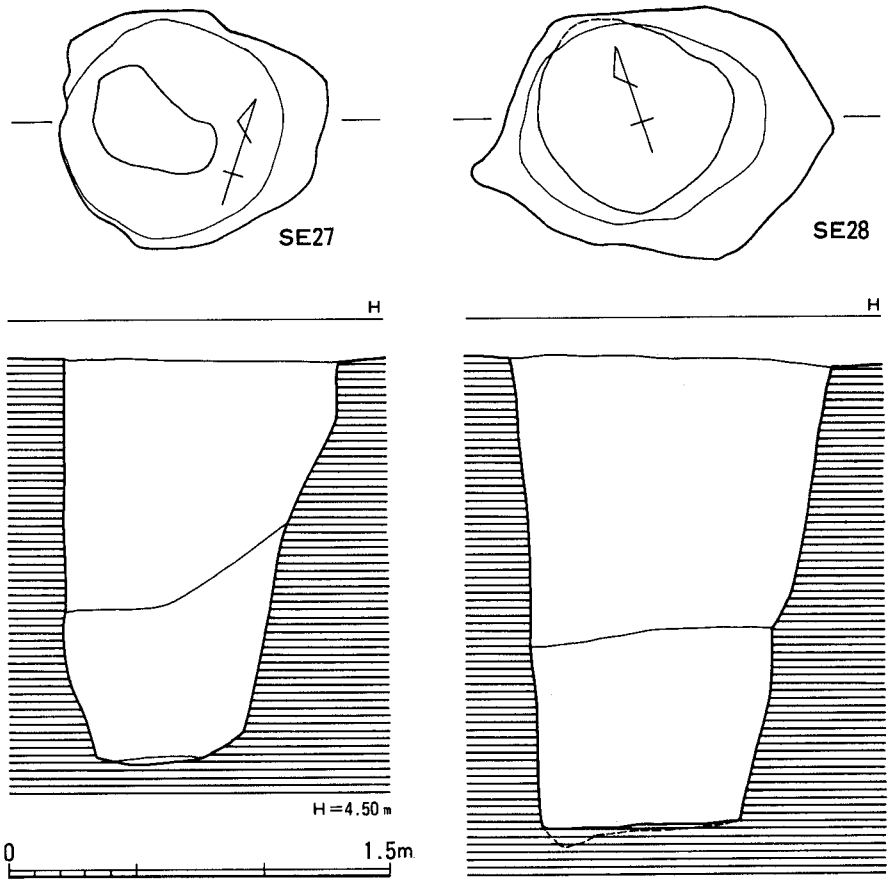


Fig.56　SE27・28井戸址実測図（1／30）

い楕円形をなし、深さ179cmを計る。底面も東西に幅広い楕円形をなし、その西側半分に横置および正置の状態で、甕３、直頸壺１、短頸壺１がほぼ完形で出土した。このうち甕はいずれも同じ器形で、北部九州では出土例をみない。この他覆土上部から弥生式土器片が出土しており、上述の５個体もあわせ後期中頃までの時期におさまるものと考えられる。

ＳＥ23　（Fig.55）　ＳＤ07溝がＳＤ08溝と分岐する東肩部分で検出した。東南部分を柱穴と切り合うが、先後関係は明瞭にしえなかった。上面は85×95cmの楕円形で、深さ178cmで１辺53cmの方形に近い底面に達する。底面から弥生時代後期前半の袋状口縁壺１が完形で出土し、また覆土中から同時期の土器片少量と木材・枝などが出土した。

ＳＥ24　（Fig.55，ＰＬ.34）　ＳＥ23の北約2.5ｍに位置する。上面は83～92cmの南北にやや幅広い楕円形をなす。深さ77cmで八女粘土を切り込んだ径65cmの不整円形の底面に達する。覆土は単一のもので、出土遺物は一切なかった。

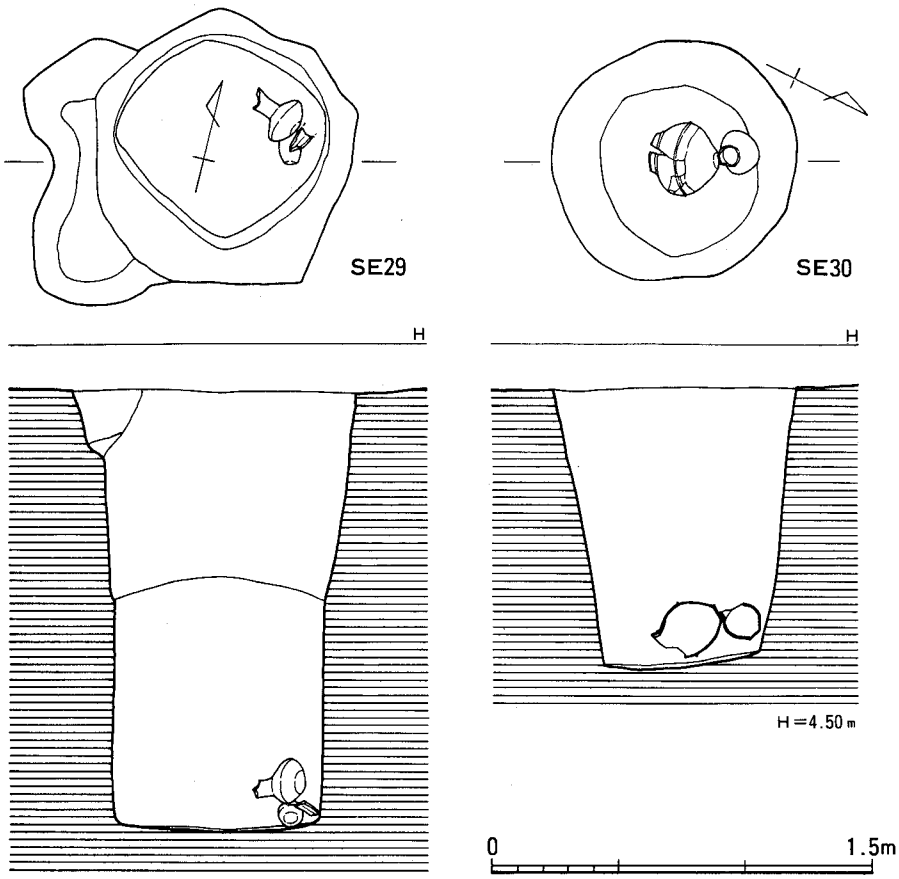


Fig.57　SE29・30井戸址実測図（1／30）

ＳＥ25　（Fig.55）　ＳＥ24の西約0.8ｍに位置する。上面は60×66cmの東西にやや幅広い楕円形を呈し、やや丸みをもった長方形の底面に向ってすぼまる。深さ90cm。覆土からは弥生時代中・後期の土器片が少なからず出土しただけである。

ＳＥ26　（Fig.55）　ＳＥ27の西北1.2ｍに位置する。上面は73×87cmの隅丸長方形に近く、52×57cmの長方形に近い底面に向ってすぼまる。深さ144cm。覆土から出土した遺物は土器片のみで、およそ弥生時代後期前半の時期までにおさまるものである。

ＳＥ27　（Fig.56，ＰＬ.34）　ＳＥ26の北寄り約２ｍに位置する。上面は93×105cmの不整楕円形をなす。深さは160cmで、底面は31×50cmの不整形を呈する。覆土からは弥生時代中・後期の土器片と木杭・枝などが出土した。

ＳＥ28　（Fig.56，ＰＬ.34）　ＳＥ28～35は調査区西側中央部で検出したもので、ＳＥ28はそのうち調査区境に最も近い。上面は95×130cmと東西に幅広く楕円形に近い。深さ194cmで、不整円形の底面は青灰色シルトに達する。出土遺物は弥生時代中・後期の土器片と木片である。

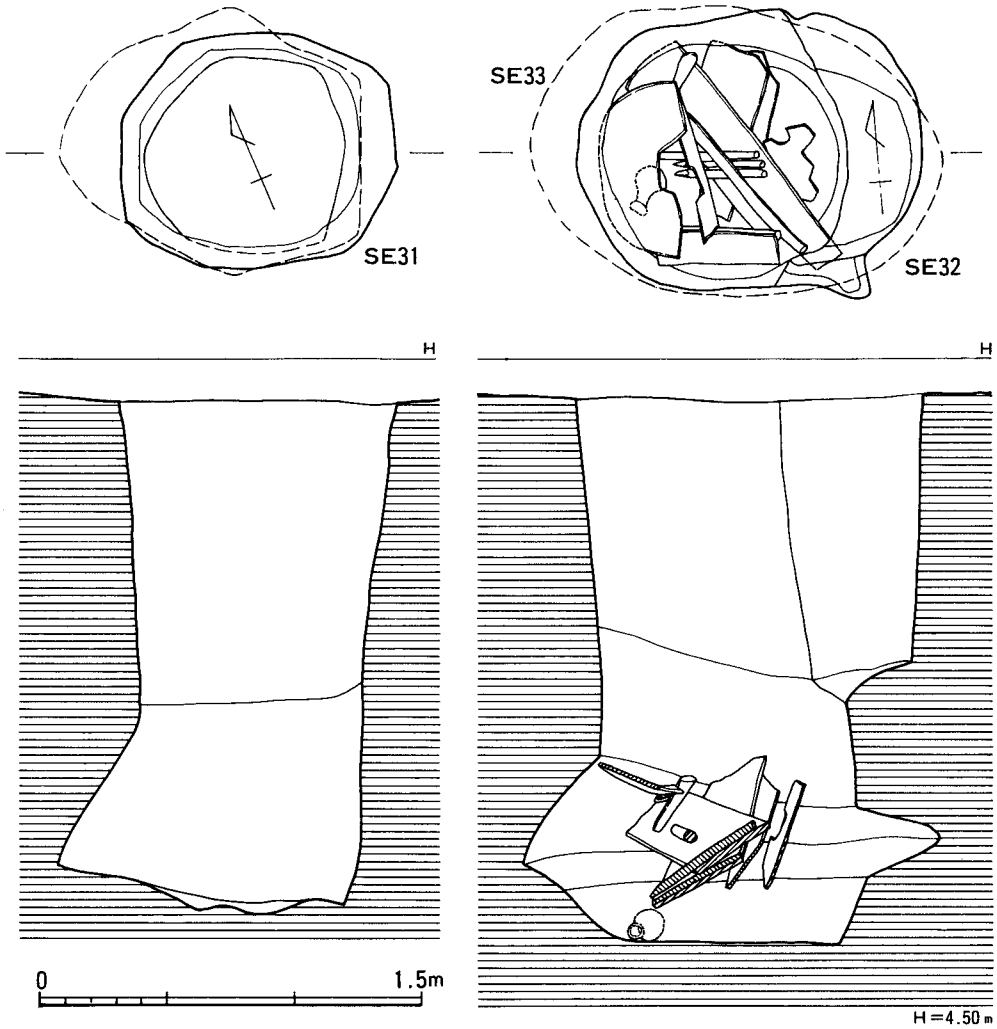


Fig.58　SE31・32・33井戸址実測図（1／30）

ＳＥ29　（Fig.57，ＰＬ.35）　ＳＥ28の南0.8ｍに位置する。上面は西側を柱穴に切られ、一部丸みをおびる所もあるが、ほぼ一辺100cm余の方形に近い。深さ175cmでやはり１辺70cm前後の方形底面に至る。その東北隅で小型袋状口縁壺と直口壺を１個体ずつ横置の状態で検出した。他に覆土から土器片多数と木片などが出土したが、土器は底面のも含め弥生時代後期におさまるものである。

ＳＥ30　（Fig.57）　ＳＥ29の東南0.6ｍに位置する。上面は径95cm余の円形をなし、しだいにすぼまり深さ113cmで径60cm余の円形底面に達する。この底面から、ほぼ横置の状態で複合口縁壺１、直口壺１が出土した他、覆土から多数の土器片に混り陶質土器胴部片１点を見出した。いずれも弥生時代後期に属するものと考えられる。

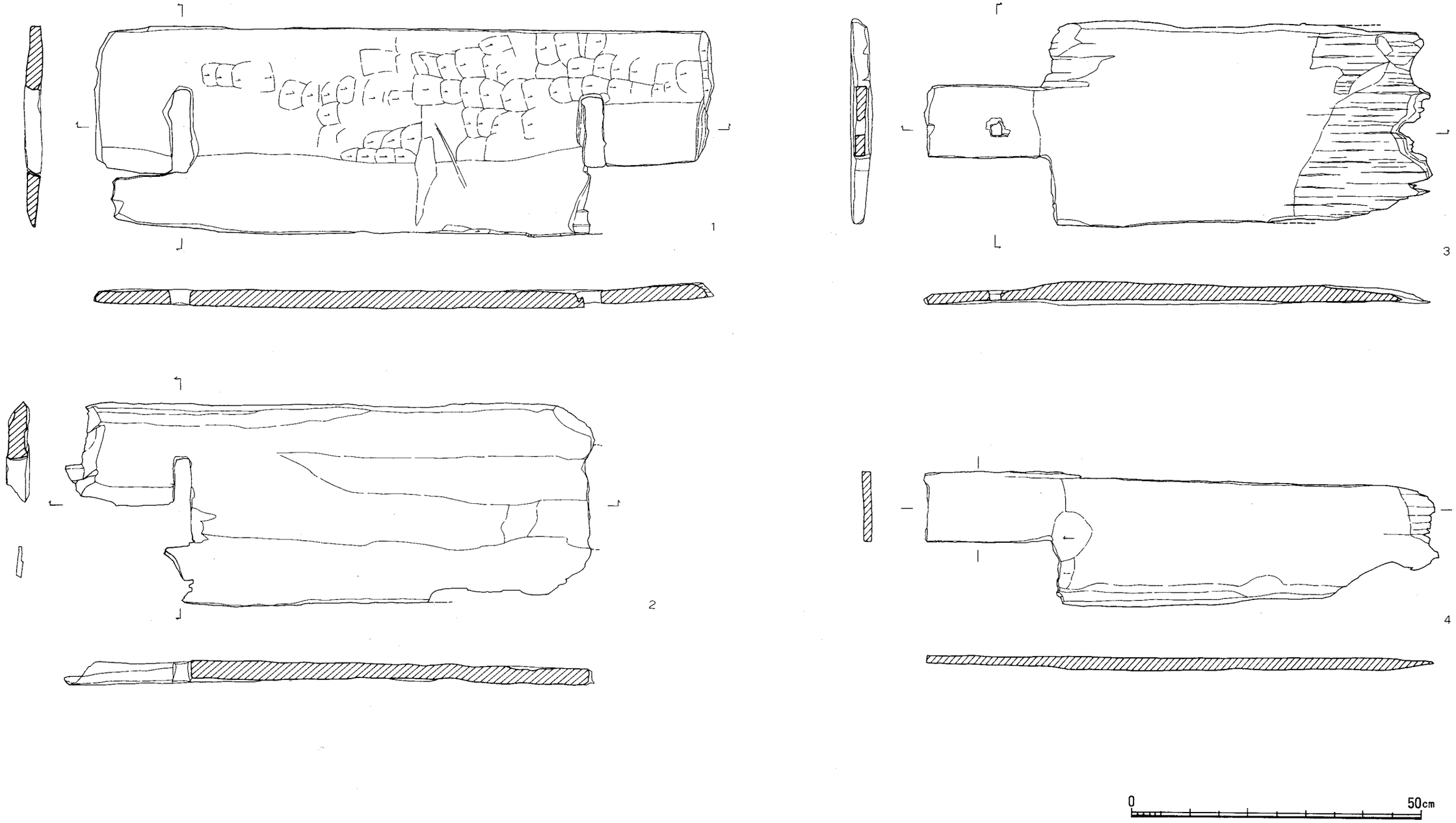


Fig.59　SE33出土井桁実測図（1／8）

ＳＥ31　（Fig.58）　ＳＥ30の西0.5ｍに位置する。上面は93×108cmの東西に幅広いほぼ楕円形を呈する。上面から深さ120cmまですぼまり、そこから東北部分が奥に20～30cmほど抉れる。最も大きく抉れた深さ180cm付近が八女粘土と青灰色シルトの境にあたる。上面から径75cm余の円形底面までの深さは209cmを計る。覆土からは小型の壺形土器１個体の他、複合口縁壺を主体とした土器片が多数と磨製片刃石斧が１点出土した。その時期は弥生時代後期中頃までにおさまるものと考えられる。

ＳＥ32　（Fig.58，PL.35）　ＳＥ31の西0.9ｍに位置し、西側でＳＥ33を切る。上面は径99cmの円形をなし、深さ123cmで径70cmの円形底面に達する。覆土からは弥生時代中・後期の土器片が少なからず出土したのみである。

ＳＥ33　（Fig.58，PL.35）　ＳＥ32に東側を切られる。上面は径106cm前後のほぼ円形で、深さ140cmまでほぼ垂直に掘削されている。そこより奥へ30cmほど抉れる。この抉れ部分が八女粘土と青灰色シルトの境にあたり、発掘時にも湧水が著しく、また覆土も黒色泥質土であった。上面から径83cmの円形の底面までの深さは215cmを計る。覆土上部から多数の土器片が出土したが、抉れ部分に達するあたりから、加工材が一面に認められた。これは本井戸内で構築されたものが壊れた状態ではなく、明らかに上から投棄された出土状況を呈していた。その内訳は半円形の直線部分に抉りを設けた板材２、枘穴を左右両端に穿った板材２、枘をもつ板材２の他、杭状丸木が数本である。このうち枘および枘穴をもつ板材（Fig.59）は組み合さって「井」状の形態をなすものと考えられる。最も残存状態の良好な枘穴をもつ１の板材は、全長106.4cm・幅36.2cm・厚さ３cm、枘穴は縦14cm・横幅３cmを計る。両枘穴間は内法で約68cm、外法で約74cmであり、同じ種類の２もほぼ同じ計測値をもつ。枘をもつ３・４は残存状態が悪く全体を確認できないが、幅・厚さは１・２とほとんど同じである。枘部は長さ20cm・幅12cm・厚さ1.5cmほどで、１・２の枘穴にすんなりとおさまる。また３の枘部中央には方形の穿孔がみられる。これを井戸側あるいは井桁のどちらかと考えるかについては問題が残るが、現在の所後者の可能性をあげておきたい。というのは一辺が106cm・幅36cmほどの井戸側を構築しうる底面規模をもつ井戸は検出したＳＥ01～50の中にただの一基も認められないからである。またこれらの板材はいずれも下辺部の傷みが著しく、その部分が埋められていたのではないかと推察される。井桁としても本井戸に伴うものではない可能性が強い。前述したように本井戸の上面は径約106cmであり、井桁が単純に据え置かれ人畜の転落または泥水の流入防止の役割を果すものとすれば、全く用をなさないものであるからである。少なくとも１の両枘穴の関係から求めれば、この用をなすには上面径が74cm前後以下のものと考えねばなるまい。一応ここでは井桁として扱い、細い検討は次報告で行ないたい。井戸底面からは横置の状態で袋状口縁壺１個体が出土した。他に覆土から土器片多数と二又鍬、獣骨などが出土した。土器はすべて弥生時代後期前半の時期までにおさまるものである。

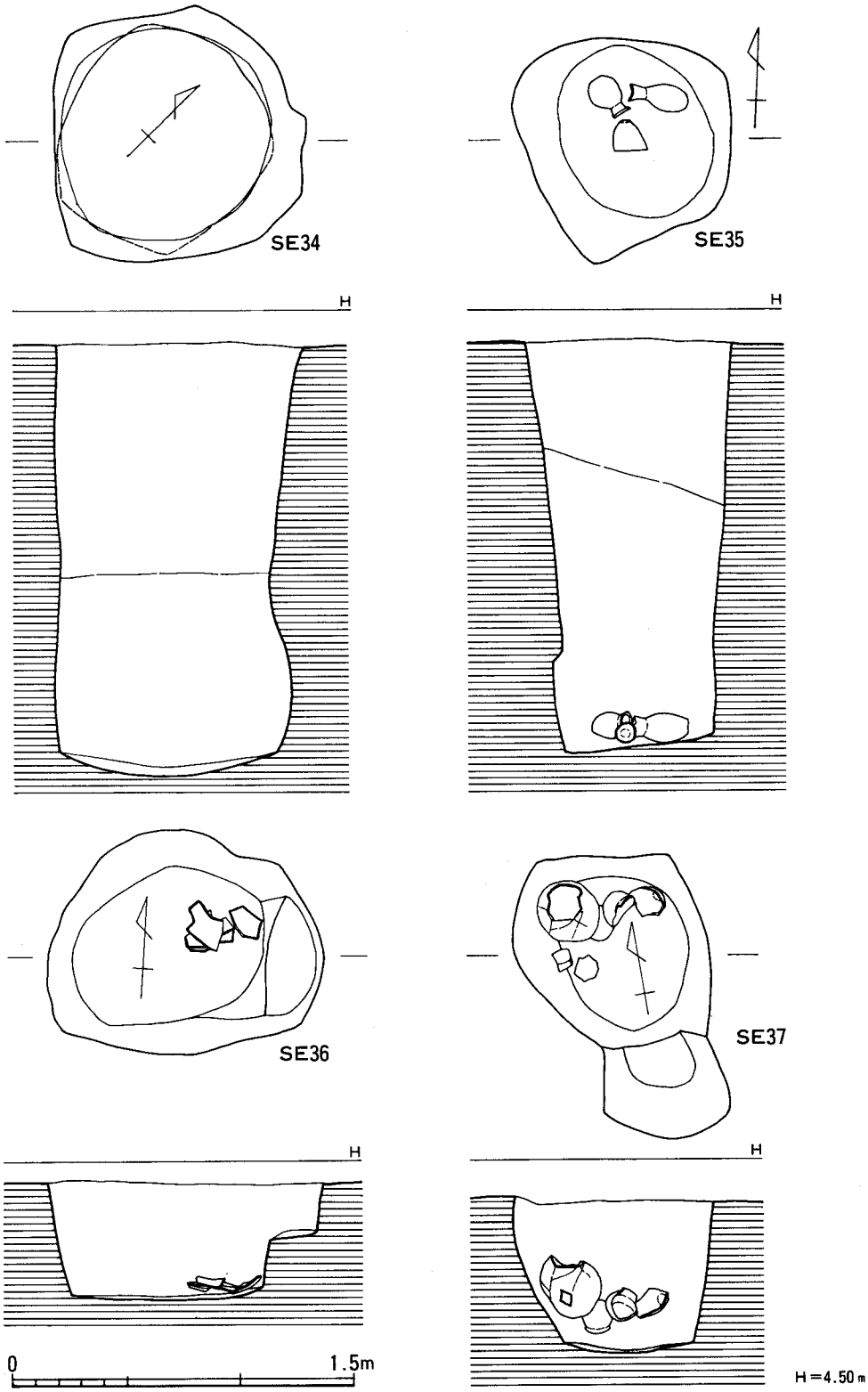


Fig.60　SE34・35・36・37井戸址実測図（1／30）

ＳＥ34　（Fig.60）　ＳＥ33の北0.3ｍに位置する。上面は径110cmのほぼ円形を呈する。深さ約100cmまで垂直近くに掘削され、それ以下は南半側壁を中心にややオーバー・ハングの状態を呈する。上面から径95～100cmのほぼ円形の底面までの深さは193cmを計り、青灰色シルトに達している。覆土からは弥生時代中・後期の土器片が少量出土しただけである。

ＳＥ35　（Fig.60，PL.35）　ＳＥ34の西2.1ｍに位置する。上面は径95cmほどの不整円形で、しだいにすぼまり深さ183cmで青灰色シルトに達した65×78cmの楕円形底面となる。深さ140cm付近で東側壁がややオーバー・ハングになっている。底面南半から袋状口縁壺２と甕１が横置の状態で出土した。他に把手付容器・又鍬・杭材・丸材・割材などの木器・木材と多量の土器片が覆土から出土した。土器は弥生時代後期前半の時期におさまるものであろう。この井戸址に付随して注意を引くのは、上面の南北に0.2～0.3ｍ離れて径40cmほどのピットが各々あることである。このピットは調査区東側で検出した掘立柱建物群からはずれており、この井戸に伴なった地上施設のためのものであった可能性が高い。ＳＥ49にもこのピットが見られる。

ＳＥ36　（Fig.60，PL.36）　ＳＥ36・17は先述してきたＳＥ28～35の一群とその西17～24ｍに分布するＳＥ38～50の一群との間に位置する。ともに浅く、また掘立柱建物と重複する。このＳＥ36はＳＥ35のほぼ北4.8ｍに位置し、上面は東西に幅広い100×122cmの楕円形を呈する。深さ52cmで65×90cmの楕円形底面に達する。深さ25cmの東側壁にテラスを設けている。底面および覆土から弥生時代末頃の土器片が少量出土した。

ＳＥ37　（Fig.60，PL.36）　ＳＥ36の西北寄り2.7ｍに位置する。南側を柱穴によって切られる。上面は南北に幅広い80×90cmの楕円形に近く、しだいにすぼまり深さ70cmで55×70cmの楕円形底面に至る。底面は八女粘土に達し湧水がみられた。底面北側には横置・正置・倒置の状態で小型および大型の壺３がやや浮いて出土した他、覆土より土器片多数を検出した。これらの土器は弥生時代末の時期と考えられる。

ＳＥ38　（Fig.61，PL.36）　ＳＥ38～50は調査区東北で一群をなす。本井戸はこのうち一番南に位置するもので、南側をＳＤ07溝に切られる。上面は径65cm余の円形を呈し、深さは92cmを計る。底面は不整形で、深さ40cmの東北部には小さなテラスがある。この種のテラスは先述したＳＥ37、後述するＳＥ39・50にも共通して認められるものである。土層は底面から10cmが灰色粗砂層であった他はすべて同一土層（黄白色ローム土と黒色粘土の混土層）であった。底面から約10cmほど浮いて複合口縁壺１と直口壺１を横置状態で検出した。他には土器片が少量出土したが、いずれも弥生時代末までにおさまるものと考えられる。

ＳＥ39　（Fig.61）　ＳＥ38の東北に接するように位置する。上面は90×110cmの南北に長い瓢形をなす。北側は別遺構の切り合いではないかとも考えたが、平面的にも断面的にもそれを確認できなかった。覆土は上面から40～50cmまでの黒色粘質土と黄褐色ロームの混り層、75cmまでの黒色粘質土、それ以下深さ100cmの底面までの灰色粘質土の三層に分別できた。底面は八

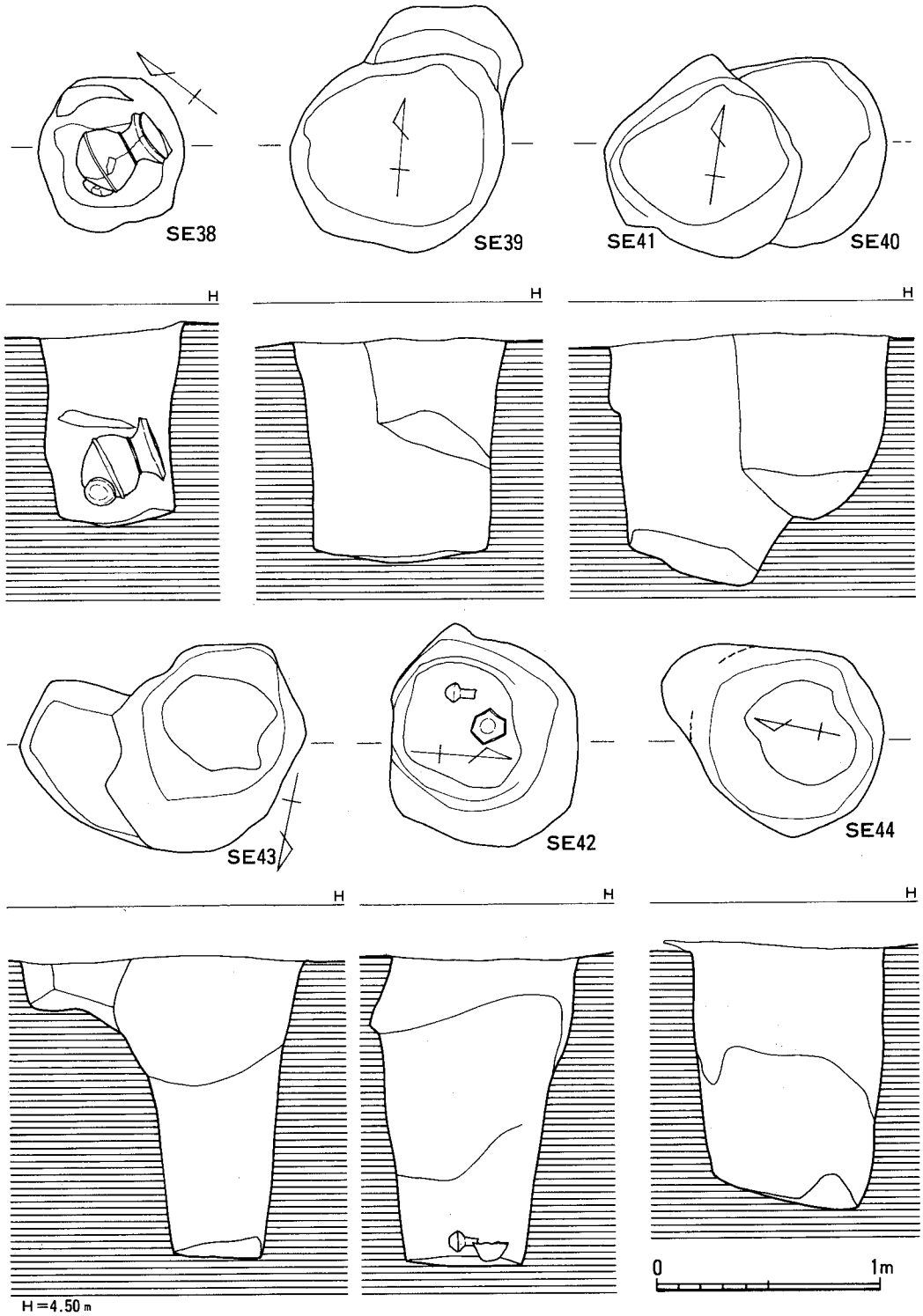


Fig.61　SE38・39・40・41・42・43・44井戸址実測図（1／30）

女粘土を切り込んだ不整方形をなす。深さ約40cmの東北側壁にテラスを設ける。覆土からは複合口縁壺2個体を中心とした土器片および木材片が出土し、土器は弥生時代末頃の所産と考えられる。

ＳＥ40　（Fig.62）　ＳＥ39の北0.3mに位置し、西側でＳＥ41を切る。上面は径84cmの円形をなし、深さは83cmを計る。径65cmの円形底面から10cm弱の厚さで灰色粗砂が堆積していた他は、黒色粘質土と黄褐色ロームが混った覆土であった。出土したのは弥生時代中・後期の土器片少量のみである。

ＳＥ41　（Fig.62）　ＳＥ40に東側を切られる。上面は75×83cmの不整形をなし、深さ112cmで51×67cmの近長方形の底面に達する。覆土は上下2層に分れ、上面から深さ80cm前後までが黒色粘質土と黄褐色ロームの混り、それ以下底面までが灰色粗砂である。出土遺物は弥生時代後期土器片少量のみである。

ＳＥ42　（Fig.61，PL.36）　ＳＥ38の北1mに位置する。上面は東西にやや幅広い隅丸方形状をなし、その規模は84×94cmを計る。下面は不整形を呈し、上面からの深さは139cmを計る。底面からわずかに浮いて、長頸壺1と壺底部1が、横置および正置の状態で出土した。他に覆土から砥石1および土器片が多数出土した。出土土器はいずれも弥生時代後期後半頃に属するものと考えられる。

ＳＥ43　（Fig.61）　ＳＥ42の西北寄り1.6mに位置する。東北側で柱穴で切られるが、上面は南北に幅広い80×105cmの楕円形を呈する。深さ136cmで40×50cmの不整形の底面に達する。底面近くから複合口縁壺1、甕1が完形で出土した他、壺・甕の口縁部を欠損したものがまとまって出土した。また覆土から投弾1点と土器片が出土している。土器の時期は弥生時代後期中～後半頃のものであろう。

ＳＥ44　（Fig.61）　ＳＥ42の東約0.5mに位置する。上面は東北側がやや崩れて広がるが、全体的には径85cm前後の円形をなす。深さ121cmで、底面は38×48cmの楕円形に近い。深さ約85cmの北側壁に、約35cm離れて丸杭が2本打ち込まれていた。覆土からは弥生時代中・後期の土器片が少量出土しただけである。

ＳＥ45　（Fig.62，PL.37）　ＳＥ44の東南寄り約1.3mに位置する。上面は南北に幅広い77×90cmの楕円形をなし、そこからしだいにすぼまり、深さ106cmで径53cmの円形底面に達する。底面近くで複合口縁壺1、短頸壺1が完形で出土した。この組み合せは先述したＳＥ38および後述するＳＥ48・49とほぼ同一で興味深い。他に覆土から土器片が出土したのみで、いずれも弥生時代後期後半頃と考えられる。

ＳＥ46　（Fig.62，PL.37）　ＳＥ45の北0.5mに位置する。上面は東西にやや幅広い57×62cmの楕円形をなし、ほぼ垂直に径40cm弱の円形底面に達する。深さ97cm。遺物は土器のみであるが、上・下2層の出土状態を示していた。上層は深さ20～30cmにおける土器群で、壺・甕・高

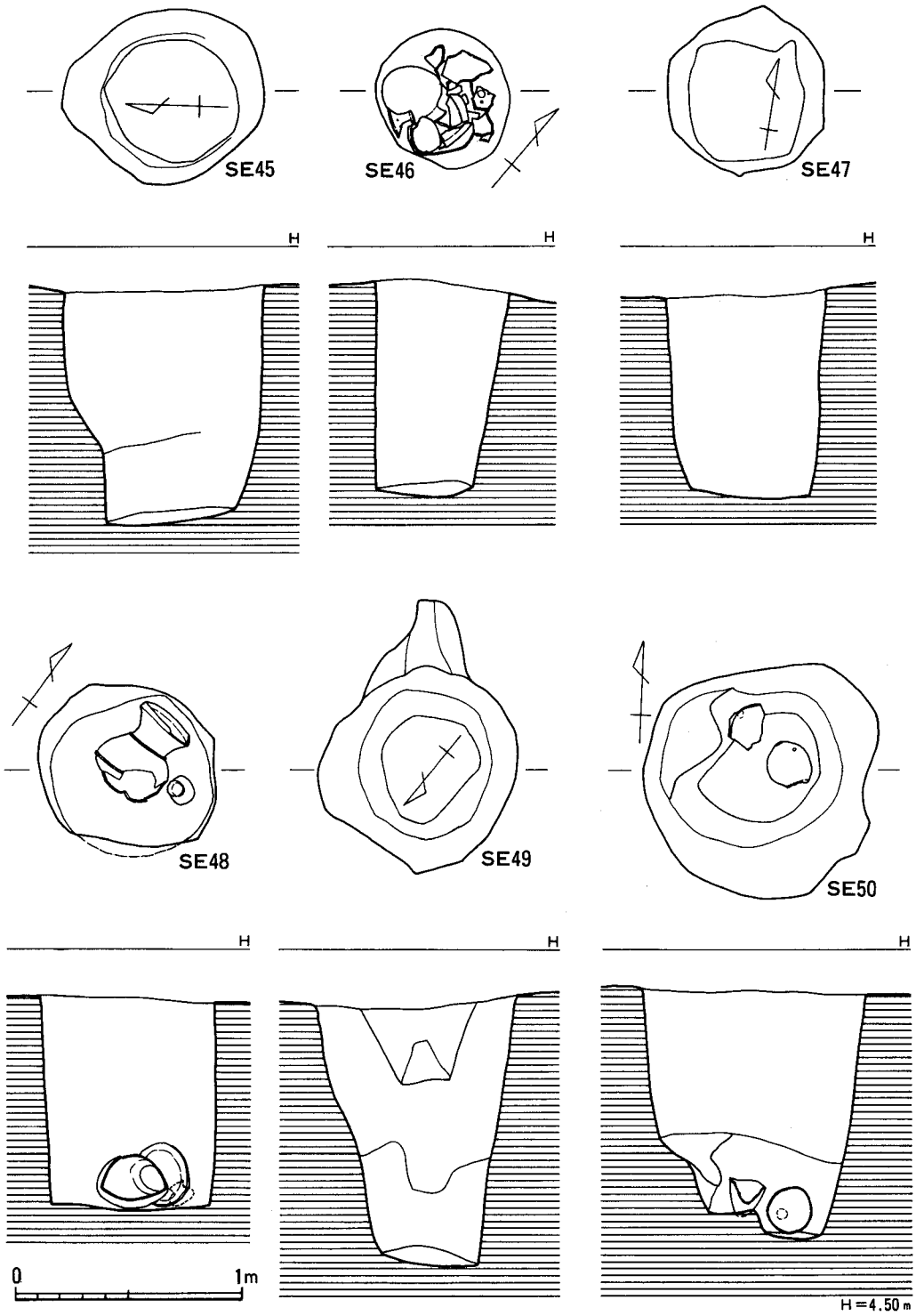


Fig.62　SE45・46・47・48・49・50井戸址実測図（1／30）

坏などの破片がまとまって出土した。その下に無遺物の黒色粘質土が30cmほど堆積し、深さ65cmから底面部分にかけて布留式併行の甕１、広口壺１を検出した。上･下層の遺物とも時期的に大差はなく、古墳時代前期のものと考えられ、本遺跡の井戸址の中では最も新しいものである。

ＳＥ47　（Fig.62）　ＳＥ46の西北寄り0.7ｍに位置する。上面は径70cmのほぼ円形をなし、深さ94cmで一辺約51cmの正方形に近い底面に達する。覆土からは短頸壺が１個体完形で出土した他、多数の土器片を検出した。その時期は弥生時代後期中頃までにおさまるであろう。

ＳＥ48　（Fig.62，PL.37）　ＳＥ48の東北0.6ｍに位置する。上面は東西に幅広い75×85cmの楕円形を呈し、側壁はほぼ垂直に掘削され、東南側はわずかにオーバー・ハングする。深さ95cmで、底面は径70cmの円形をなす。底面から複合口縁壺１、直口壺１が横置と正置の状態で出土した。覆土からは土器片・木片が出土しており、土器は底面のものもあわせ弥生時代末頃までにおさまるものであろう。

ＳＥ49　（Fig.62）　ＳＥ48の西北約2.5ｍに位置する。上面は径90cmのほぼ円形を呈するが、東南側に約30cmほど張り出した部分がある。これは深さ約30cmの所でテラスを作って終るが、土層その他から他遺構とは考えられず、この井戸に伴う施設であると考えられる。また上面の東西には径30cm、深さ10cmほどのピットが、井戸をはさむように１個づつあり、ＳＥ35と同様に本井戸の地上施設であった可能性が強い。側壁は不整円形の底面に向ってすぼまり、上面からの深さは120cmを計る。底面近くから複合口縁壺１と短頸壺１が出土した。他に覆土から土器片および木片が出土し、土器は底面出土のものもあわせ、弥生時代末頃におさまるものと考えられる。

ＳＥ50　（Fig.62，PL.37）　ＳＥ49の東北1.7ｍに位置する。上面は径100cmのほぼ円形を呈し、深さ112cmで底面に達する。深さ70cmの西北側壁にテラスを設ける。底面から穿孔をした壺胴部と底部片が出土した他、覆土から多数の土器片が出土しており、その時期は弥生時代末頃と考えられる。

以上ＳＥ01～50の各々の井戸址の位置・形状・出土遺物について述べてきた。そのうちＳＥ05～50の位置する調査区東側は、当初調査予定に入っておらず、拡張して初めて遺構の所在がわかったため急拠調査に切り換えた所にあたる。そして発掘調査期間の関係から、遺構の完掘を目標においたため、井戸址も十分な観察が行なえず、不備な点が多々ある。それにもかかわらず、この50基の井戸址（問題が残るものもあるが）の調査成果は大きなものといえる。

これまで比恵遺跡群では、１次調査で２基、５次調査で１基の井戸址が検出されている。いずれも素掘りの井戸で、前者は環溝住居址内に設けられていた。今回の調査では総数50基で、そのほとんどが調査区の東側にあたる。検出面はかなりの削平を受けてはいるが、その遺存状態は極めて良好で、多量の遺物が出土したとともに、井戸の形態についてもかなりの知見を得

SE番号	上面規模(cm)	底面規模(cm)	深さ(cm)	井戸底標高(m)	備考	SE番号	上面規模(cm)	底面規模(cm)	深さ(cm)	井戸底標高(m)	備考
01	122×134	92×99	140	4.73	1号古墳周溝に切られる	26	73×87	52×57	144	2.95	
02	86×89	61×68	213	3.73	側壁に足掛状の窪みあり	27	93×105	31×50	160	2.75	
03	80×84	54×60	113	3.72	ＳＤ07に切られる	28	95×130	74×76	194	2.51	
04	90×96	77×88	203	2.93	ＳＤ07に切られる	29	102×108	69×73	175	2.57	
05	(80)	(70)	74	3.69	ＳＥ06を切る	30	94×97	61×66	113	3.21	
06	105	崩壊	100＋α	—	ＳＥ05に切られる深さ180cm前後か	31	93×108	75×79	209	2.30	
07	70×75	50×52	123	3.06		32	99	70	123	3.13	ＳＥ33を切る
08	61×76	40×42	56	3.62		33	106	83	215	2.20	ＳＥ32に切られる
09	67×77	36	94	3.32		34	110	95×100	193	2.43	
10	108×120	91×93	241	1.87		35	95	65×78	183	2.54	
11	112	41×51	278	1.59	ＳＥ12と切り合う	36	100×122	65×90	52	3.88	
12	109×116	80×90	100	3.37	ＳＥ11と切り合う	37	80×90	55×70	70	3.64	
13	100×102	62×79	137	3.01		38	65×67	35×47	92	3.50	
14	96	70	200	2.34	ＳＥ15を切る	39	90×110	65×78	100	3.37	
15	95×105	80×88	231	2.02	ＳＥ14に切られる	40	84	65	83	3.52	ＳＥ41を切る
16	96×113	44	166	2.73		41	75×83	51×67	112	3.23	ＳＥ42に切られる
17	100×105	60	224	2.15	大型甕を井戸側として使用	42	84×94	50×61	139	2.88	
18	88×90	38×67	153	2.89		43	80×105	40×50	136	2.92	
19	88	50×53	119	3.18		44	82×85	38×48	121	3.12	
20	90×(100)	60×70	213	2.26	ＳＥ21に切られる	45	77×90	53	106	3.27	
21	80×97	70	137	3.03	ＳＥ20を切る	46	57×62	38×40	97	3.39	
22	85×100	52×58	179	2.62		47	70	51	94	3.37	
23	85×95	53	178	2.60		48	75×85	70	95	3.35	
24	83×92	65	77	3.64		49	90	42×48	120	3.10	
25	60×66	47×55	90	3.38		50	100	43×53	112	3.22	

Tab.３　井戸址一覧表

た。ひとつはＳＥ17にみられた大型甕による井戸側の可能性である。井戸底付近から大型甕がまとまって出土する例は板付遺跡でもあり、再検討を要する問題である。他の井戸は素掘りであるが、その側壁に凹みやテラスを設ける井戸がみられた。これは足掛けまたは足置きの役割を果したものと考えられ、井戸内の清掃等の際に用をなした可能性がある。上部構造としては、井桁と考えられる枘材が４枚セットでＳＥ33から出土したことがまず挙げられる。井戸側である可能性もあるが、検出した井戸址でこれを設置できるものはなかった。井桁とすれば弥生時代のものとしては九州で初見である。またＳＥ27・49のように上面の両側にピットを持つ井戸も注意すべきであろう。この例は佐賀県川寄吉原遺跡のＳＥ001にもみられる。

多量に出土した遺物については整理がほとんど進んでいない。そのため今回の報告では井戸址の時期を大まかにしか述べられず、その時期ごとの分布・形態などについても追及できていない。また各々の井戸底出土の土器に基本的な組み合せが見られたが、これも判然としないままになっている。次報告で遺物を検討すると同時に、井戸址そのものについても再度考察を加えたい。

(6) 土壙 (Fig.63～65, PL.38・39)

土壙は調査区のほぼ全域で15基（ＳＨ01～15）検出した。

これらの土壙は、ＳＨ01～03が比較的平面形態が同様で、位置も近接するのを除けば、残りは形態もまちまちで、また検出位置もかけ離れている。出土遺物もＳＨ14が比較的まとまっている以外は少なく、各土壙の性格づけを困難なものとしている。遺物からみる限り弥生時代中期中頃を上限とし、古墳時代前期（布留式併行）を下限とした遺構であることがうかがわれる。

以下、各々の土壙について詳述する。

ＳＨ01 （Fig.63, PL.38） 調査区西南寄りのＳＤ02の北端近くに位置する。長さ118cm、幅50cmの隅丸長方形をなし、東南側を別遺構に切られる。長軸方位はＮ－60°－Ｅである。深さは45cmであるが、底面は平坦さを欠く。覆土は上・下２層に分れ、深さ30cmまでが①暗褐色土、それ以下が②赤褐色土である。出土遺物は弥生式土器細片数点のみである。

ＳＨ02 （Fig.63） ＳＨ01の東寄り2.1ｍに位置する。長軸をＮ－60°－Ｅにとった長さ143cm、幅60cmの長方形の平面を呈する。西隅をピットに切られ、また北側壁は一部崩れている。底面は西側が深さ20cmで、やや段落ちした東側では37cmの深さを計る。覆土は①黒色土＋赤褐色粘質土②くすんだ赤褐色土の上・下２層に分かれる。出土遺物は弥生式土器の細片が数点出土しただけで、明確な時期を示すものはない。

ＳＨ03 （Fig.63, PL.38） ＳＨ02の北2.5ｍに位置する。上面は長軸をＮ－66°－Ｅにとった長さ136cm、幅48cmの隅丸長方形を呈する。東北部分をピットによって切られている。削平によって遺構上面の高さも、東と西では15cmほど異なる。底面の東西には段がつき、中央部に向って深くなる。中央やや西寄りには径約25cmのピットがある。底面中央部での上面からの深さは25cmを計る。覆土からは弥生式土器の細片が数点出土したのみである。

ＳＨ04 （Fig.63） ＳＨ03の北2.2ｍに位置する。上面は東西130cm、南北110cmの方形をなすが、中央部分を現代埋設管溝に切られ遺構は不明瞭なものとなっている。長軸方向はＮ－67°－Ｅである。底面南側は北側に比べやや深い長方形をなす。上面からの深さは北側で25cm、南側で40cmである。底面西北隅には径22cm、深さ12cmのピットがある。出土遺物は弥生式土器細片だけである。

ＳＨ05 （Fig.63, PL.38） ＳＨ04の西2.1ｍに位置する。東北隅をＳＤ04溝に切られやや不整形をなすが、本来的には長さ205cm、幅125cmの長方形の平面を呈していたものと考えられる。主軸方向はＮ－58°－Ｅである。底面は深さ約20cmで、中央部に向ってわずかに深くなり、中央北側はさらに10cmほど深い。南側壁にへばりつくようにして土器片が一括で出土した。いずれも弥生時代中期のもので、他に石鎌片・黒曜石フレイクなどが出土した。

ＳＨ06 （Fig.63, PL.38） 調査区の中央南側、ＳＣ01住居址に近接して位置する。上面

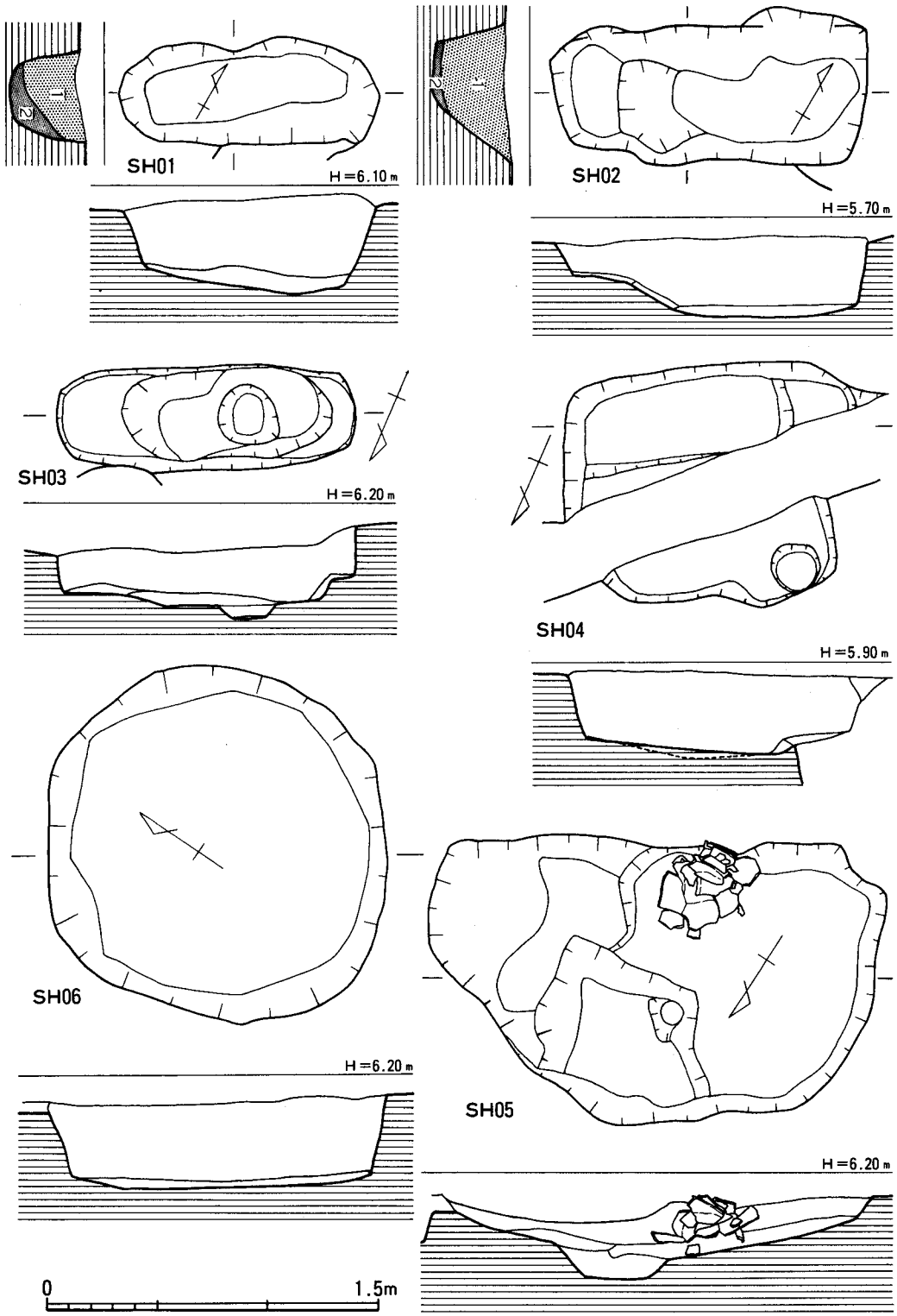


Fig.63　SH01・02・03・04・05・06土壙実測図（1／30）

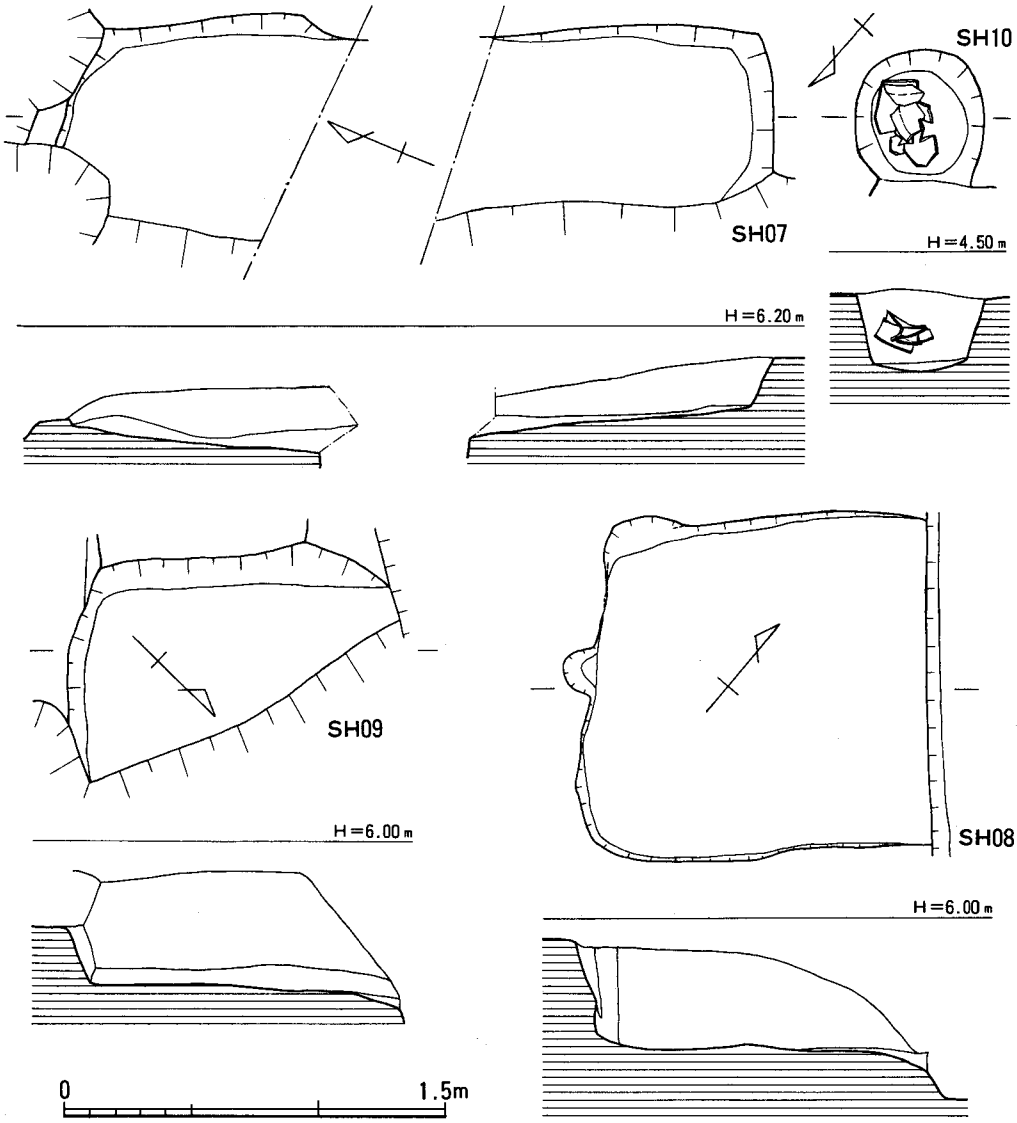


Fig.64　SH07・08・09・10土壙実測図（1／30）

は径約155cmの円形を呈し、西北隅を別遺構に切られる。深さは40cm前後で、底面も円形をなし径約135cmを計る。覆土は黒褐色土の単一層で、投弾1および弥生式土器片が少量出土した。土器は弥生時代中期中頃のものと考えられる。

ＳＨ07　（Fig.64）　調査区の西北隅付近に位置し、西南側を第１号古墳周溝に切られ、またＳＣ02住居址と北側で近接する。南北は古墳周溝に切られ不明であるが、東西長は292cmを計る。断面軸の方位はＮ－60°－Ｗである。深さは約20cmを計る。覆土からの出土遺物はない。底

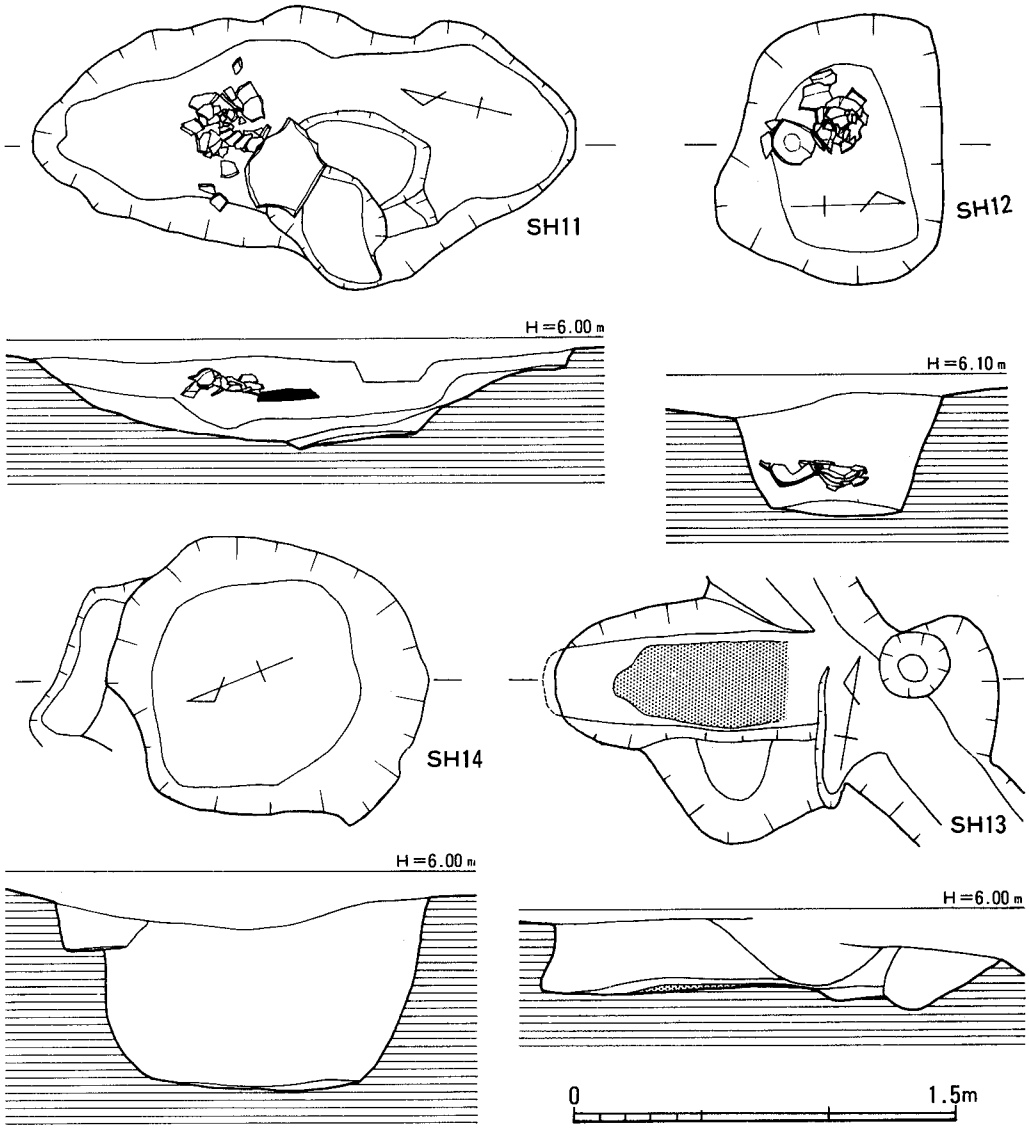


Fig.65　SH11・12・13・14土壙実測図（1／30）

面東南隅のカーブからいえば長方形の遺構である可能性が強いが、断定はできない。

ＳＨ08　（Fig.63，ＰＬ.39）　調査区の中央西寄り部分に位置する。西側を撹乱坑によって切られ、南北幅および東西現存幅も133cmを計る。遺構の状態からすれば、東西に幅広い長方形を呈していたものと考えられる。断面軸はＮ－50°－Ｅの方位をとる。側壁は垂直に近く、底面までの深さは西側で43cmである。上面は東に向うにつれ削平が著しく、底面との差が小さくなる。覆土の上部から長方形の鉄製品１と弥生式土器細片が出土した。

ＳＨ09　（Fig.63）　調査区の中央北寄りの位置で検出した。北側を現代埋設管溝に、また東側をＳＤ07溝に伴う段落ちで破壊されており、残存するのは西辺115cm、南辺85cmのみである。本来的には長方形の平面を呈していたものと考えられる。断面軸の方位はＮ－44.5°－Ｗである。深さは西側で38cmを計り、底面はわずかに東側に向って低くなる。覆土からの出土遺物は弥生式土器の細片だけであった。

ＳＨ10　（Fig.63）　ＳＤ07溝以東で検出した唯一の土壙で、ＳＥ37の西1.2ｍに位置する。西北側を柱穴に切られるが、上面は径50cm余の円形をなす。上面からしだいにすぼまり、深さ32cmで36×42cmの楕円形底面に達する。底面標高は4.03ｍで、八女粘土には達しておらず、湧水もみられなかった。底面よりわずかに浮いた状態で、甕・壺などの破片がまとまって出土した。その一部は古墳時代前期まで下る可能性がある。この遺構は掘立柱建物群中にあり、あるいはその柱穴であるかもしれないが、他の柱穴でこれほどのまとまった土器を底面近くに持つものがないことから、一応土壙として分離した。

ＳＨ11　（Fig.64，PL.39）　調査区の南側、ＳＣ09住居址の北1.5ｍの所に位置する。上面は長軸方向をＮ－13°－Ｗにとった長さ215cm、最大幅110cmの楕円形に近い。東側を一部現代撹乱坑によって破壊されている。側壁は比較的緩く傾斜し、東側での底面までの深さは12～23cm程度である。底面は中央部に向って低くなり、さらに西側では10～15cmの深さの不整形の凹みがみられる。この凹みの北に、底面から15cmほど浮いた状態で、砥石・石庖丁片および弥生時代後期前半の複合口縁壺１個体分の破片を検出した。砥石は幅30cm前後、厚さ約４cmの大型のもので、研ぎ面を上にして水平状態で出土した。あたかも土壙中央部に砥石（工作台を兼ねるものか）を置き、そこで石器の研磨などの作業を行なったかの状況を想像させる。他に覆土から弥生時代中・後期の土器片が少量出土した。

ＳＨ12　（Fig.64，PL.39）　調査区の西南、ＳＸ08方形周溝遺構の北側周溝を切った状態で検出した。またＳＤ01溝とも接するが、先後関係は明確にできなかった。上面は東南部がやや広がるものの、長軸方向をほぼ南北にとった長さ107cm、幅90cmの隅丸長方形を呈する。底面に向ってすぼまり、深さは50cmである。底面よりわずかに浮いた状態で、台付壺・甕などの破片がまとまって出土した。これらの土器は弥生時代末頃のものと考えられる。

ＳＨ13　（Fig.13）　調査区中央部やや北寄りの位置で検出した。東にはＳＣ04住居址が近接してある。上面は東側を現代埋設管溝によって大きく破壊されており、その規模を明確にしえないが、その溝の東肩にみられる線が生きるとすれば、長さ116cm、幅約40cmの隅丸長方形とすることができる。長軸方位はＮ－80°－Ｗで、南側にも別遺構による切り合いがみられる。深さ30cmで、底面幅は約40cmを計る。西側壁はややオーバー・ハングになる。底面中央部の長さ52cm、幅35cmの範囲に赤色顔料（未鑑定）が、最大３cmの厚さで敷きつめてあった。あるいは土壙墓の類であるのかもしれない。覆土からは弥生式土器の細片が数点出土したのみである。

ＳＨ14　（Fig.64，ＰＬ.39）　調査区の中央やや東寄りの位置で検出した。西２ｍにはＳＣ03住居址がある。遺構の上を現代埋設管溝が通っているため、上面はかなり破壊されていたが、およそ径120cmの円形のプランを見出すことができた。覆土は大きく三層に分けられた。上面から深さ約40cmが黒色粘質土と赤褐色粘質土が混った層で、その下に厚さ10～15cmの灰層がみられた。この中から支脚状土製品３と土師器甕（３個体分の破片）などがまとまって出土した。その下底面までは黒色粘質土が約10cm堆積していた。上面から不整方形の底面までの深さは、最も残りの良い所で75cmを計る。覆土から出土した遺物は先述したものの他に、投弾５、有溝土錘１・石剣切先１・蛸壺１・杓子状土製品１などとともに黒耀石フレイク、土器片などがある。このうち土器は灰層出土のものも含め古墳時代前期の布留式併行期か、それをやや遡るものと考えられる。当初この遺構は、その形態等から井戸址と考えていたが、発掘過程で灰層が支脚状土製品とともに出土したことから、その考えは捨てなければならなくなった。実際、完掘後においても底面は鳥栖ロームであり、湧水もみられなかった。灰層および３個体の支脚状土製品と甕の組み合わせは、この土壙が煮炊きの場に用いられたものではないかと推測させる。また蛸壺・有溝土錘の出土は、この時期の漁業を考える上で重要な資料であろう。

ＳＨ15　（Fig.68）　第１号古墳周溝の東南に位置するものである。覆土が周溝とほぼ同じであったためその検出は困難を極めたが、西北部を周溝に切られていることが判明した。また本遺構はＳＫ５・41甕棺墓を切って設けられている。現存長約520cm、幅約220cmと規模が大きく、本来的には西北に長軸をとった長方形をなしたものと考えられる。側壁の傾斜は緩やかで、底面までの深さは最も残りの良い所で約80cmを計る。覆土からは弥生時代中・後期の土器が少なからず出土した。

以上ＳＨ01～15土壙の各々の検出状態・形態・出土遺物をみてきた。一応土壙として一括したものの、その用途・性格はそれぞれによって大きく異なるものである。ＳＨ01・03・13は土壙墓としてとらえていいのかもしれないが、積極的な資料に欠ける。ＳＨ10は柱穴の可能性がないともいえない。ＳＨ15の大型の土壙に至っては、その用途を知るすべがない。そんな中にあってＳＨ14は煮炊きの場所として利用された遺構であった可能性が強い。またＳＨ11も工作場的な意味をもった遺構ではなかったかと推察される。類例を求めてみたいと考えている。

現在の所、土壙の遺物もほとんど整理が進んでおらず、土壙の時期決定も大まかなものとなった。今後の整理の進捗状況によってはさらに細い時期区分ができるとともに、また反面時期の修正を行なわねばならないものもでてくることが考えられる。次報告の遺物篇で再度、遺構の用途および時期について考えてみたい。

(7) 溝状遺構（Fig.66、付図１）

溝状遺構としたものは８条（ＳＤ01～08）が検出された。これらは一部を除いて他の遺構との関連および性格を十分に明らかにし得るものは少ない。以下個別溝について説明を加えることとする。

ＳＤ01溝　本溝は長さ5.5ｍ、幅60cmを測り東西方向に伸びる溝で両端部が立あがる。横断面は底面が平坦な逆台形状をなす。ＳＸ08周溝遺構を切る。覆土中より弥生中期中葉～後期に亘る甕・壺形土器破片多数とともに丁字頭の土製勾玉が出土した。

ＳＤ02溝　本溝はＳＤ01の北側に位置し、長さ4.6ｍ以上、幅80～60cm、深さ50cmを測る両端部が立あがる溝である。埋土中には多量の土器破片が堆積していた。弥生中期大形甕、口縁部が強く内傾する後期壺および胴部が半球状をなし、直立する頸部にゆるく外反する口縁を有し、中位が段をなす古式土師器壺形土器などが出土した。

ＳＤ03溝　本溝はＳＣ01住居址北辺に平行して走る溝で長さ6.5ｍ幅70cm、深さ60cm前後を測る。横断面は「コ」字形をなし、溝両端部が立あがる。覆土上層で弥生中期後半の甕・壺形土器破片、中・下層で外面にタタキを施した直口壺、下唇部に斜めの刻目を付した筒形器台・袋状口縁長頸壺形土器破片が出土した。

ＳＤ04溝　本溝はＳＨ05・ＳＣ03・ＳＸ04を切る小溝である。ほぼ東西方向に34ｍ走り、西側で立あがる。また東側ではＳＤ07溝に切られて延長を失なう。溝幅は西部で60cm、東部で１ｍ前後をはかり、溝底は西より東へ20cm程の比高で傾斜する。覆土中から土師器甑把手、須恵器横瓶・甕形土器が多量に出土し、時期的には古墳時代後期に位置づけられよう。

ＳＤ05溝　ＳＢ06建物と重複する溝でコーナーを有し西側で立あがる。幅60cm、深さ10cmをはかり、ＳＸ08周溝遺構と同様の性格を持つものかも知れない。覆土中より弥生中期以降の土器破片が少量出土した。

ＳＤ06溝　本溝はＳＤ07溝に位置し、北西から南東に走る小溝で、長さ11.5ｍを確認でき、幅50～70cmをはかる。深さは10cmに満たない。覆土中より蛇目高台をもつ越州窯産青磁碗などが出土し、少くとも古代末期の時期に比定されよう。

ＳＤ07・08溝　調査区北西から南東に走り、南端部で東・西に分かれ２条となる溝で、近世以降の水利溝である。溝幅は1.5～3ｍをはかる。

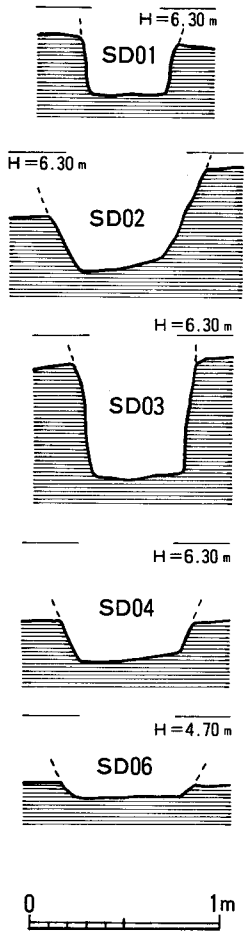


Fig.66　SD01～04・06 溝断面実測図（１／40）

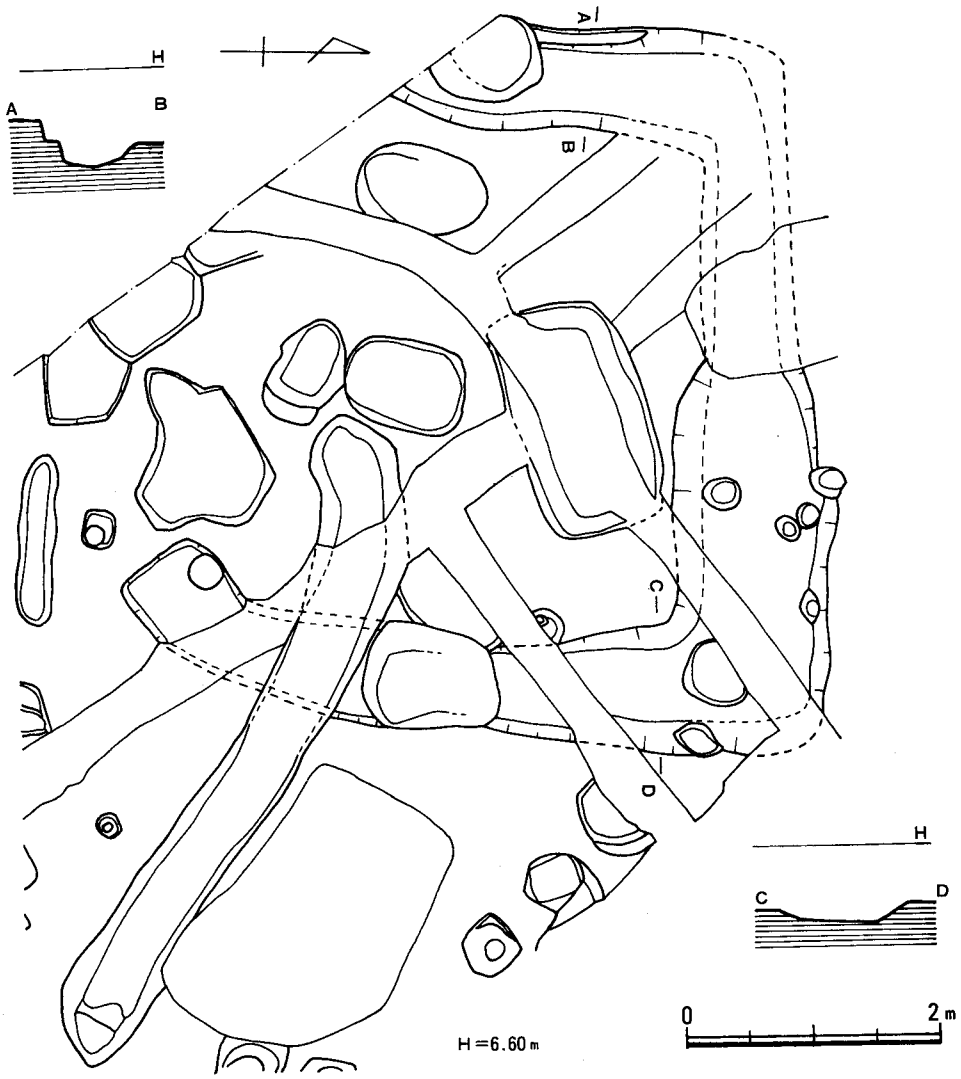


Fig.67　方形周溝遺構実測図（1／60）

覆土中より弥生終末期甕形土器・黒釉陶器・染付などの他に玻璃滓とも呼ぶべきコバルトブルー色のガラス塊片が出土した。

(8)　方形周溝遺構（Fig.67）

本遺構はＳＤ01溝に切られる周溝遺構で北辺5.5ｍ、西辺推定5.5ｍの規模で東辺の北コーナー近くに陸橋部をもつ。溝幅80～100cm、深さ10cmを残す。周溝内部には北辺に片寄ってＳＸ02土壙墓やその他の比較的大型の浅い竪穴があるが、周溝遺構と積極的に関連をもつと考えられるものについては不詳である。周溝内覆土から弥生後期の二重口縁壺、時期不詳の甕形土器破

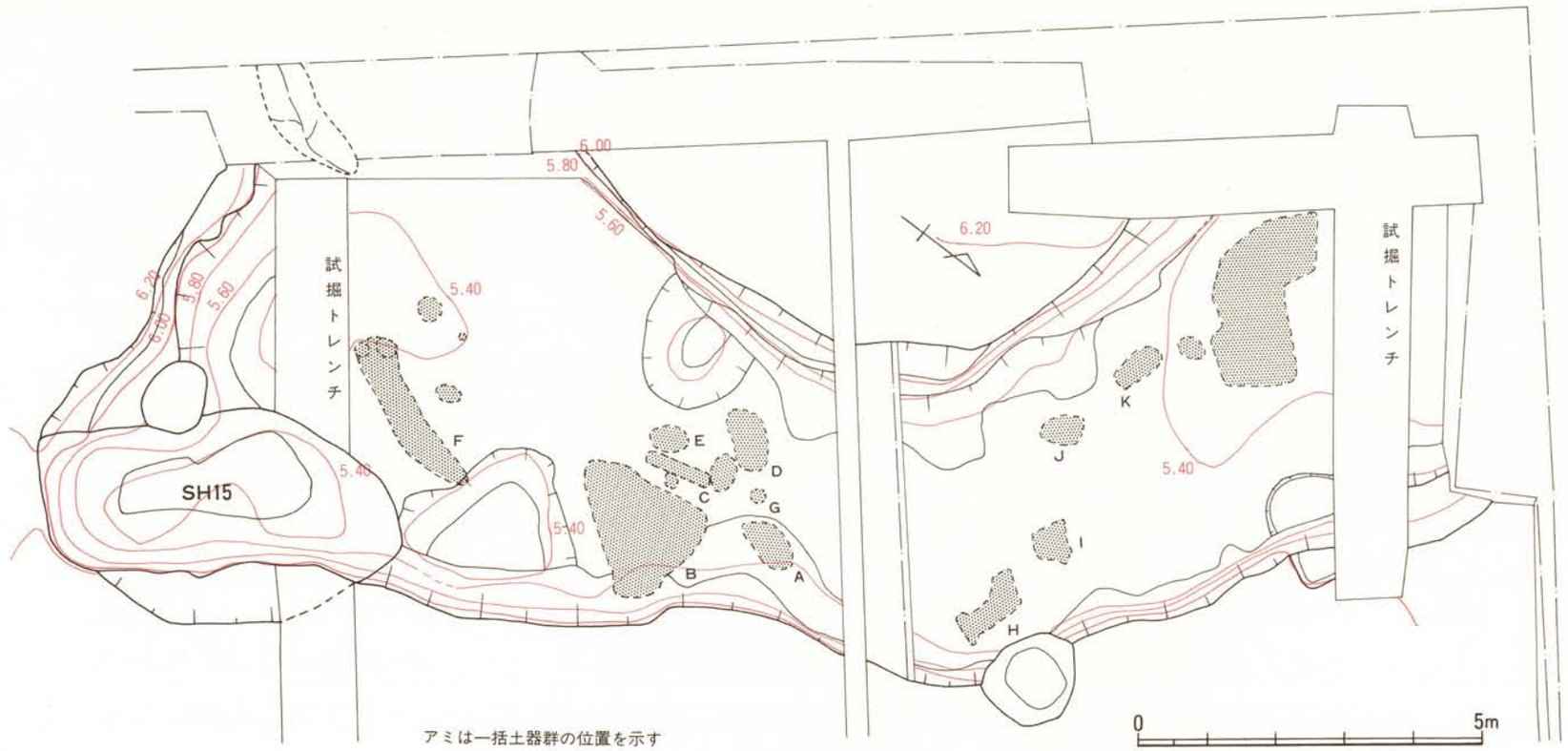


Fig.68　第１号古墳実測図（1／100）

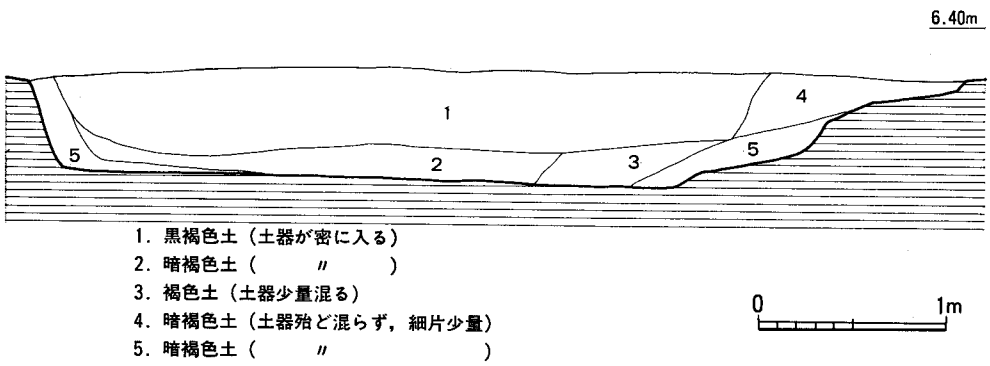


Fig.69　第１号古墳周溝土層断面実測図（１／40）

片など少量の遺物が出土したが副葬品に関連するものは全く出土しなかった。

(9)　第１号古墳（Fig.68・69，PL.40）

第１号古墳は調査区西端部に位置し、周溝部のほぼ半分を調査できたが、埋葬主体部施設については全く痕跡をとどめなかった。周溝は幅５ｍをはかる半円形であり、外周部は立あがりが急で壁面50cmをとどめる。そして平坦な底面につづく内部の壁面は非常に緩やかな立あがりをもっている。周溝は円形であれば外周で直径25ｍを越える規模となろう。内部主体については不詳であるが周溝南西壁に近く花崗岩大石が周溝に落込んだ状態であり、これが石室構築材の一部をなしたものであるかも知れない。また一方ＳＤ07溝上の撹乱土下層中には片面に朱塗りをとどめる石棺々材と考えられる板石が２枚見付かっておりこちらも可能性を全く否定できない。

周溝内覆土はFig. 69にみる埋積状況であるが、このうち上部40cm程の黒褐色土中には弥生時代中期中葉～古墳時代後期に亘る非常に膨大な遺物類を含んでおりこれを上層と呼ぶ。またこれ以下20cm足らずの暗褐～褐色土は上層程遺物包含量は多くはないがFig. 68に示した様に周溝内にブロック状に遺物が分布することが知られ、これを下層と呼ぶ。下層には須恵器は全く含まれない。上層では全体でパンケース200箱程度分の種々の遺物類が出土した。その主なものは弥生中期中葉以降の日常土器、甕棺破片、弥生中期以降の石庖丁（小豆色凝灰岩製のもの多し）・石鎌・玄武岩製太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧、特殊磨石があり、土師器には小型丸底壺が特徴的である。また須恵器はII～III期の坏類・瑞・大甕などがあり、他に滑石製平玉、鉄製刀子・鉄斧・スラッグが出土した。下層は古式土師器類で殆ど占められる。

本古墳の造営時期についてはこれら遺物類の検討によって明らかにすることとしたい。

Ⅳ　おわりに

比恵遺跡群第６次調査は以上に述べた様に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落、墓地遺構等を検出することができ多大な成果をあげたが、今回の報告ではこれらの遺構に伴出した諸遺物類の十分な検討をすることができず、従って各遺構の詳細な時期比定およびこれらの作業に基いて各遺構間のつながりを十分に把むことができていない。ここでは検出した各遺構別にその特徴を述べて一応のまとめとしたい。

弥生時代墓地では中期前葉～後期初頭の甕棺墓44基、木棺土壙墓７基が見付かったが、甕棺墓のうち主体を占めるのは中期後葉～後期初頭にかけてのものであり、小児甕棺の遺存が少ない。また現在のところ甕棺墓地の構成で初源的となるものは中期前葉後半にあたる甕棺墓（ＳＫ28甕棺墓など４基）である。弥生中期前葉に属する甕棺墓のうちＳＫ28甕棺墓は同時期の他の３基と比較して墓壙形態、規模において非常に特徴的で、実用的な武器である細形銅剣を副葬された被葬者はこの時期の比恵ムラの盟主的人物であることが考えられる。また副葬された細形銅剣は福岡平野内でも板付田端、須玖岡本、飯倉唐木遺跡などで同型式のものが出土している。これらは時期的に弥生前期末[(1)]～中期中葉[(2)]の甕棺墓に副葬[(3)]されるものが多いところである。同銅剣には剣身・茎に２種類の絹織物が付着し、我国の弥生中期前葉における絹布の存在が明らかとなったが同時期の我国における絹布生産技術の存否については不明な点が多く将来の課題であろう。なお有田遺跡第２号甕棺墓（弥生前期終末）から薄肉の仿製らしい銅戈が出土しており、この銅戈の関に近い部分に布痕[(4)]が付着するが内容については絹布であるか不明である。

また土壙墓のうちＳＫ02・03・06土壙墓は明らかに木棺を使用したものと考えてよい。このうちＳＸ03土壙墓は前期の様に側壁長、小口幅が４～4.1×1.8ｍを測る長大な墓壙をもつ木棺墓であり、二段をなす墓壙の内側壁に沿って溝状施設を配し、謂はば木槨墓的構造をもつものと思われる。類似する形態を有するものは春日市伯玄社遺跡および嘉穂郡穂波町スダレ遺跡などで知られている。スダレ遺跡例は弥生前期～中期前半に亘[(5)]る木棺、土壙墓55基中の１基Ｄ－35号[(6)]であり、墓壙の長、幅が447×425cmを測り、方形をなす。木棺は内法で長さ175cm、東端幅60cm、西端幅33cmとなるが、この木棺をとり囲むように内法長、幅が210×98cm、幅約10cm、深さ５cm内外の長方形掘込みがあった。調査者は木槨墳の可能性もあるとしている。ＳＸ03土壙墓には前記の様に墓壙南壁上にＳＫ16甕棺墓（中期後葉）が営まれており、少くともこれより古い造営時期にあたり、また覆土中からも中期中葉に降る土器類の発見はなく、中期前葉甕棺墓との切り合い関係もなく、ＳＫ17・28甕棺墓と並列する位置にある点でこれらよりやや古いか或は同時期に位置づけられる可能性が高い。

次に生活遺構については竪穴住居址９軒、掘立柱建物22棟、井戸および井戸状遺構50基、溝状遺構９条、その他の土壙15基が確認されたが、このうち竪穴住居址は時期的にＳＣ01・02住居址が弥生中期に属する以外は全て弥生後期～古墳時代前期（ＳＣ03～09住居址）にあたると考えてよく、何れも平面形が方形を呈し、一部にベッド状施設をもつものがある。この弥生時代中期から古墳時代前期にかけての住居址群は今回調査地点より 100m 西側に位置する第５次調査で中期４軒、後期28軒、古墳時代前期10軒などが重複して見付かっており、かなり安定した集落形成がこの時期におこなわれたものと考えられる。竪穴住居址ではＳＣ03、04、05住居址を主として覆土内よりガラス小玉（コバルトブルー、スカイブルー色のもの)、丸玉および碧玉製管玉が出土しており、他の住居址ＳＣ06、07、08、09には見当らず、またＳＣ07住居址では青銅製鋤先が検出された。これらのガラス製玉類、青銅器類は同様に第５次調査でも出土しており、ＳＤ07溝内より見付かった玻璃滓から考えると集落内でガラス玉生産がおこなわれた可能性が高く、集落遺構としての同時性を窺わせる。また掘立柱建物は近世以降の溝ＳＤ07、08の東、西側に22棟をまとめることが出来た。規模的には１間×１間のものが７棟、１間×２間のもの６棟、２間×４間のもの１棟その他の構成であり、竪穴住居址に伴う倉庫群的建物と考えられるが、柱掘方覆土中からは弥生中期後半から古墳時代前期の土器破片類が出土して、時期的には弥生後期以降の所産であろう。ＳＢ01建物掘方内ではＳＣ03住居址発見のものと同様の碧玉製管玉が出土した。

井戸および井戸状遺構は時期的に弥生後期を主体として弥生中期、古墳時代前期（布留期）に亘って営まれたもので50基が確認された。これらのうちにはＳＥ17井戸址で打欠いた大型甕を井戸側とするもの、ＳＥ33井戸址で上端部に井戸桁を設けたと考えられる例があって興味深いが、住居と生活組成をなす井戸址がこれ程多数に而も小範囲に密集する在り方は他の集落址に類例をみることがなく今後は各井戸址の伴出遺物の検討に基いて他遺構との詳細な時期的構成を把握することにつとめたい。次に末尾には今回の出土遺構の平面的分布に建設予定建物の配置を重ねて今後の検討に供した（Fig.70)。

註

1　中山平次郎「鋼鉾・銅剣の新資料」『考古学雑誌第７号』1917年

2　浜田耕作「筑前須玖史前遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告第11冊』1930年
　渡辺正気「福岡県須玖・岡本遺跡調査概報」『福岡県文化財調査報告第　集』1972年

3　森貞次郎「飯倉の甕棺と細形銅剣」『有田遺跡』1968年

4　３と同掲書

5　松岡史・亀井勇「福岡県伯玄社遺跡調査概報」『福岡県文化財調査報告書第36集』1968年

6　橋口達也他「スダレ遺跡」『穂波町文化財調査報告書第１集』1976年

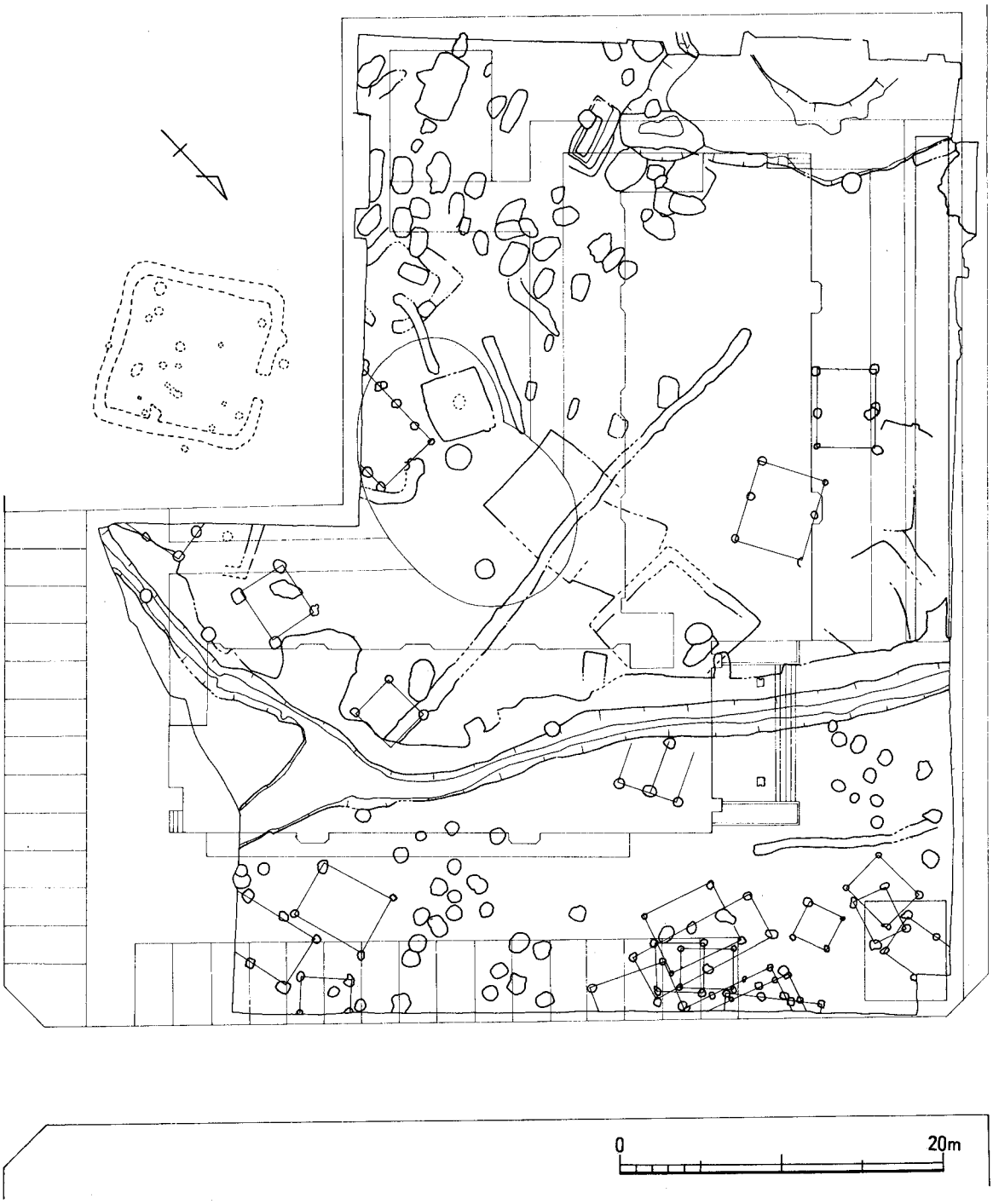
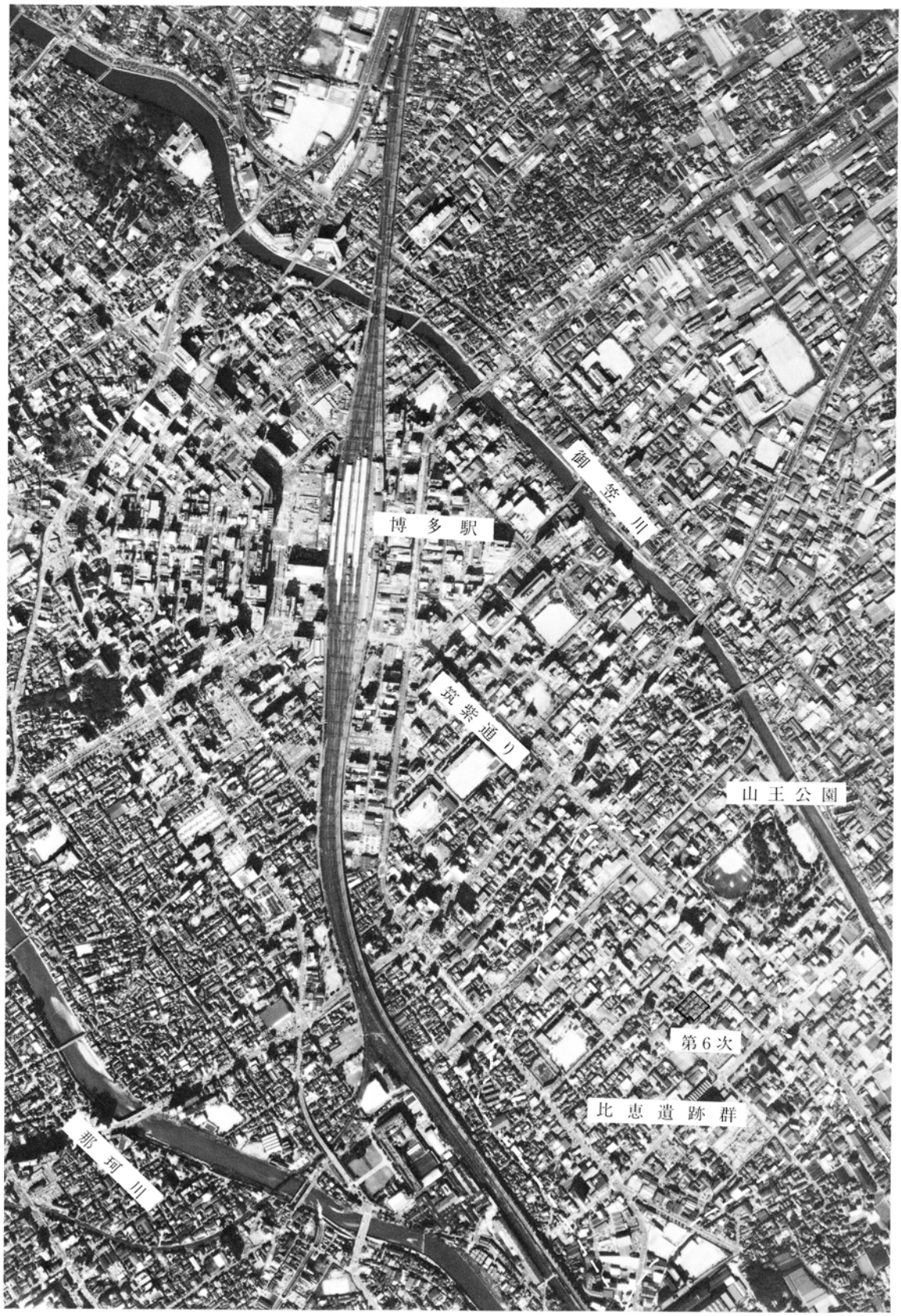


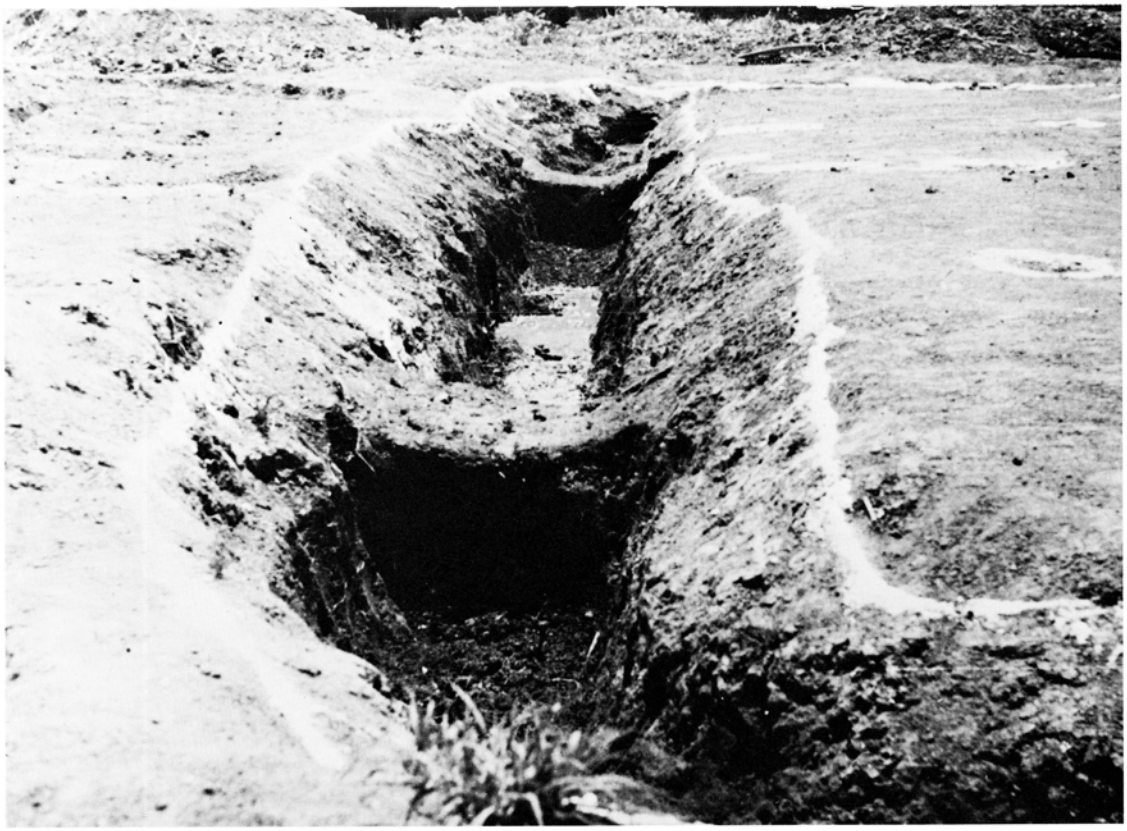
Fig.70　完成予定建物と遺構との関連図

図　　版

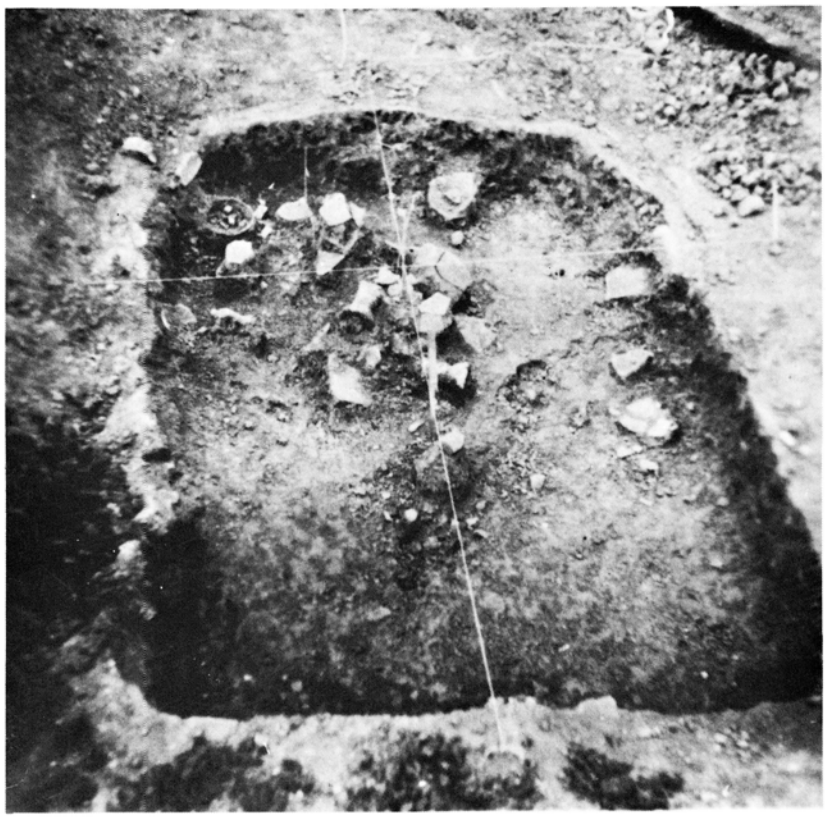


比恵遺跡群付近航空写真(1／15,000昭和55年11月撮影)

1. 第２次調査風景（昭和26年）　　2. 環溝遺構全景

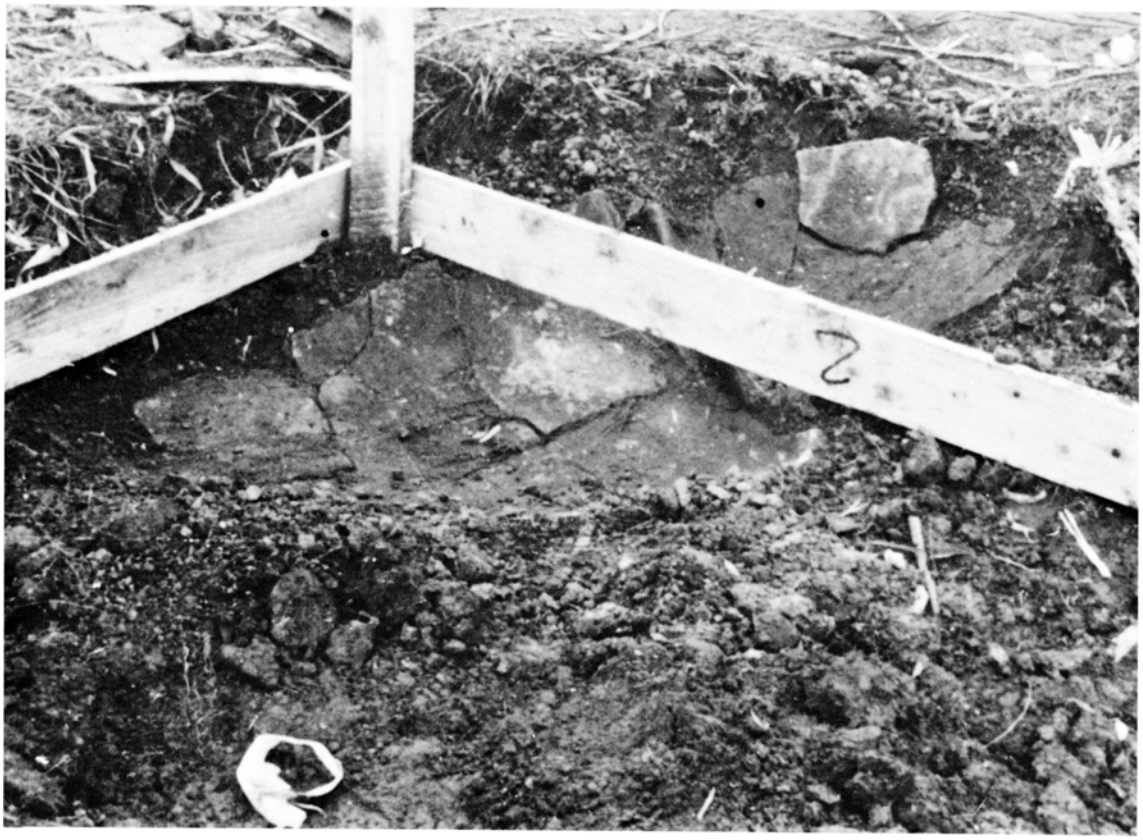


1



2

1. 環溝遺構内堆積状況　　2. 第3号土壙出土状況



1

2

1.　第１号甕棺墓出土状況　　2.第第2 号甕棺墓出土状況

1

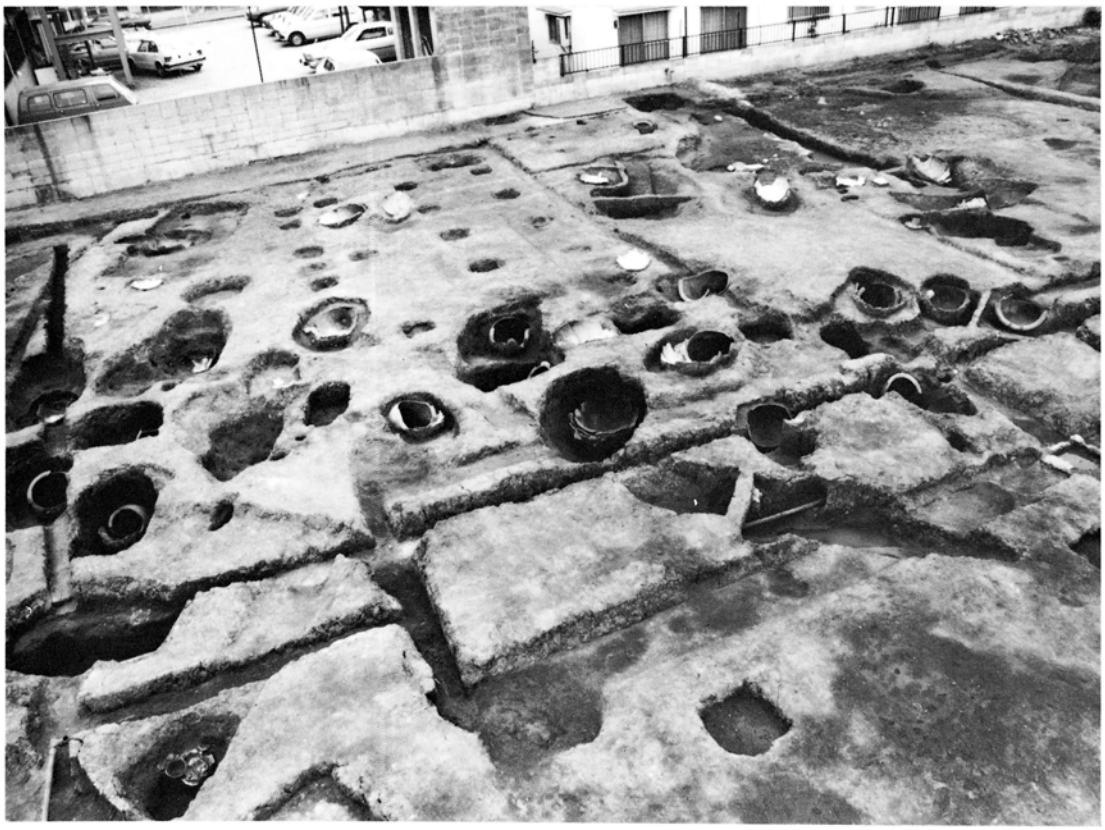
2

1.　第4号甕棺墓出土状況　　2.　第6号甕棺墓出土状況

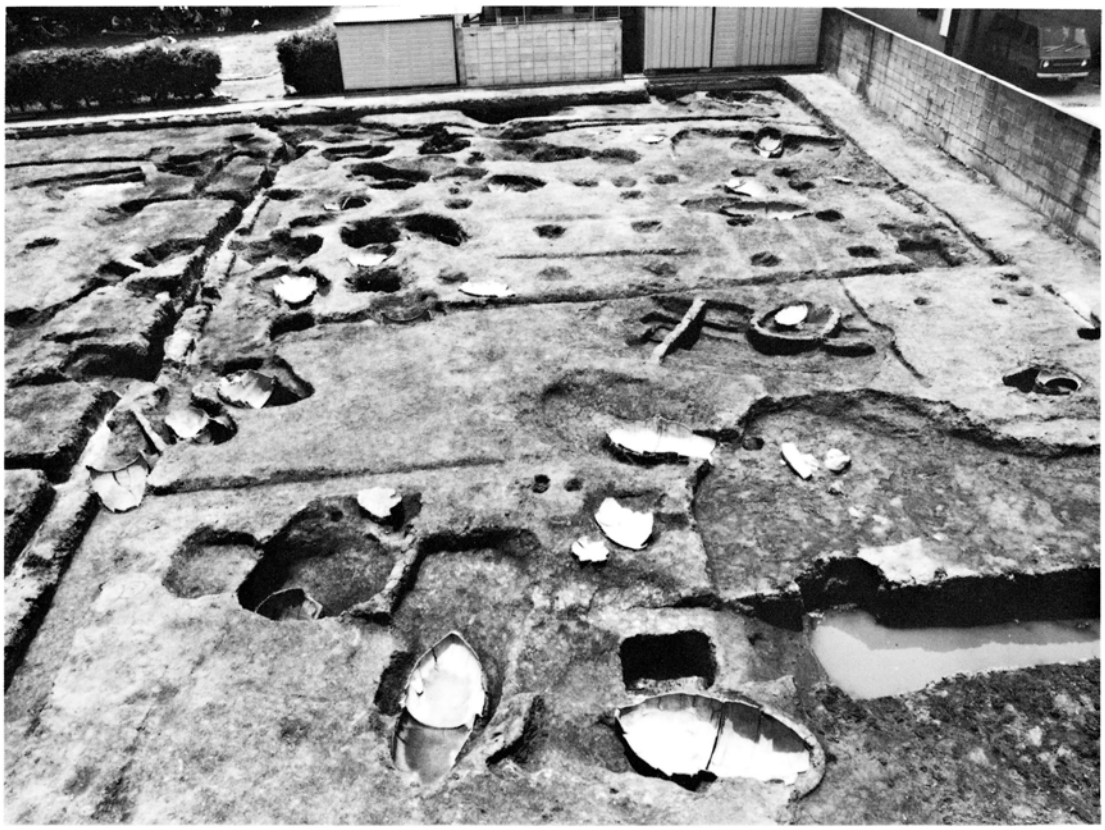
1

2

1. 第８号甕棺墓出土状況　　2. 第12号甕棺墓出土状況



1



2

1.　甕棺墓出土状況（東より）　　2.甕棺墓出土状況（北より）

1

2

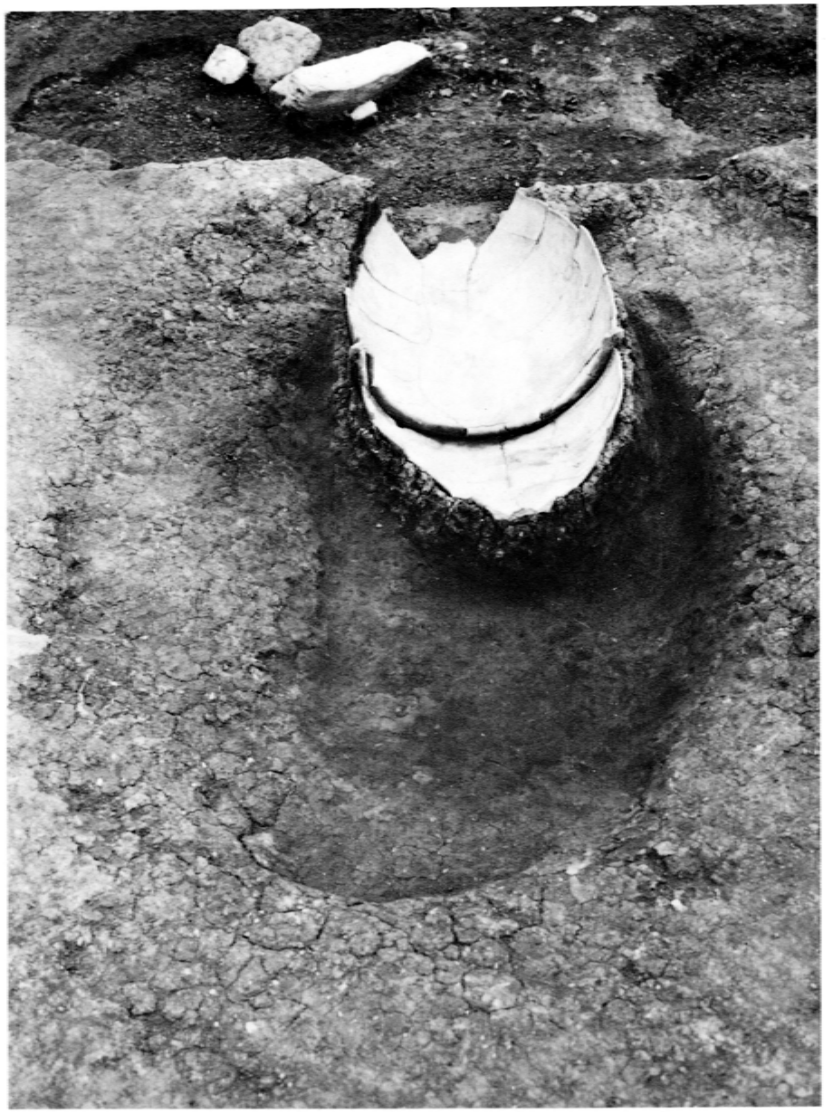
1.　調査区南東部遺構出土状況　　2.　調査区東部遺構出土状況

1

2

1.　ＳＫ01甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ04・38甕棺墓出土状況

1.　ＳＫ02甕棺墓出土状況

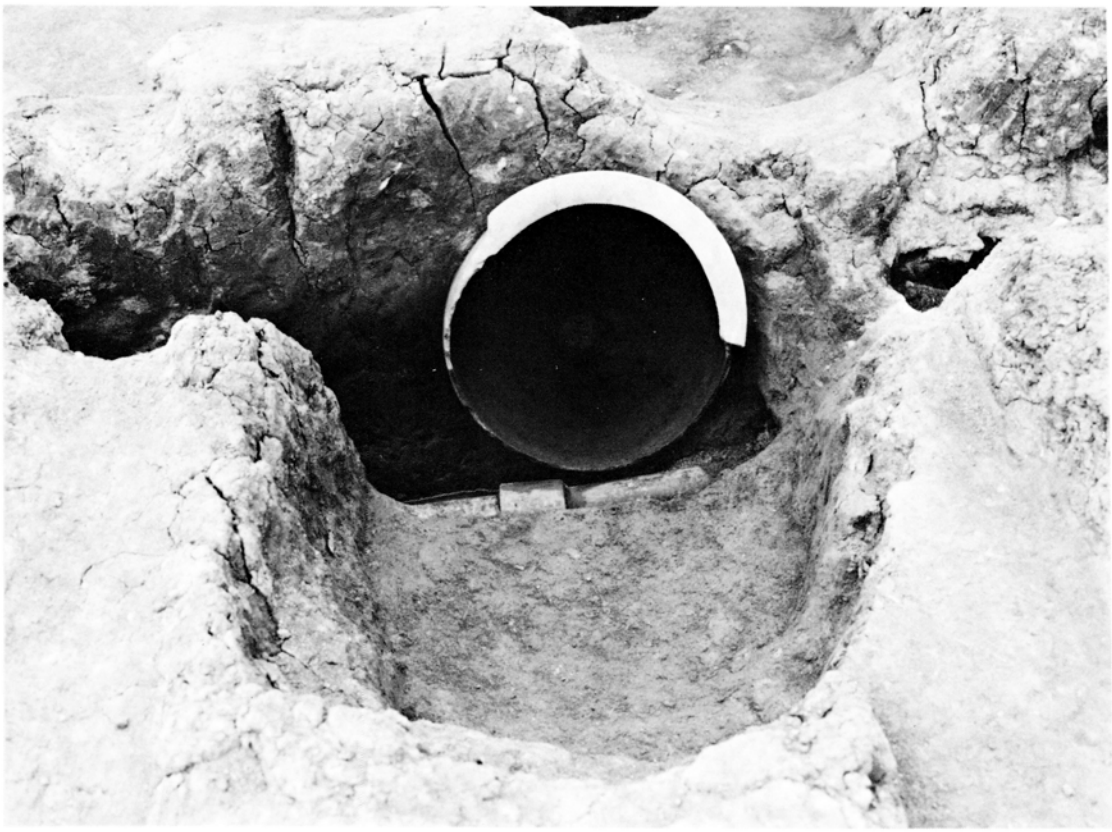


2.　ＳＫ05甕棺墓出土状況

1

2

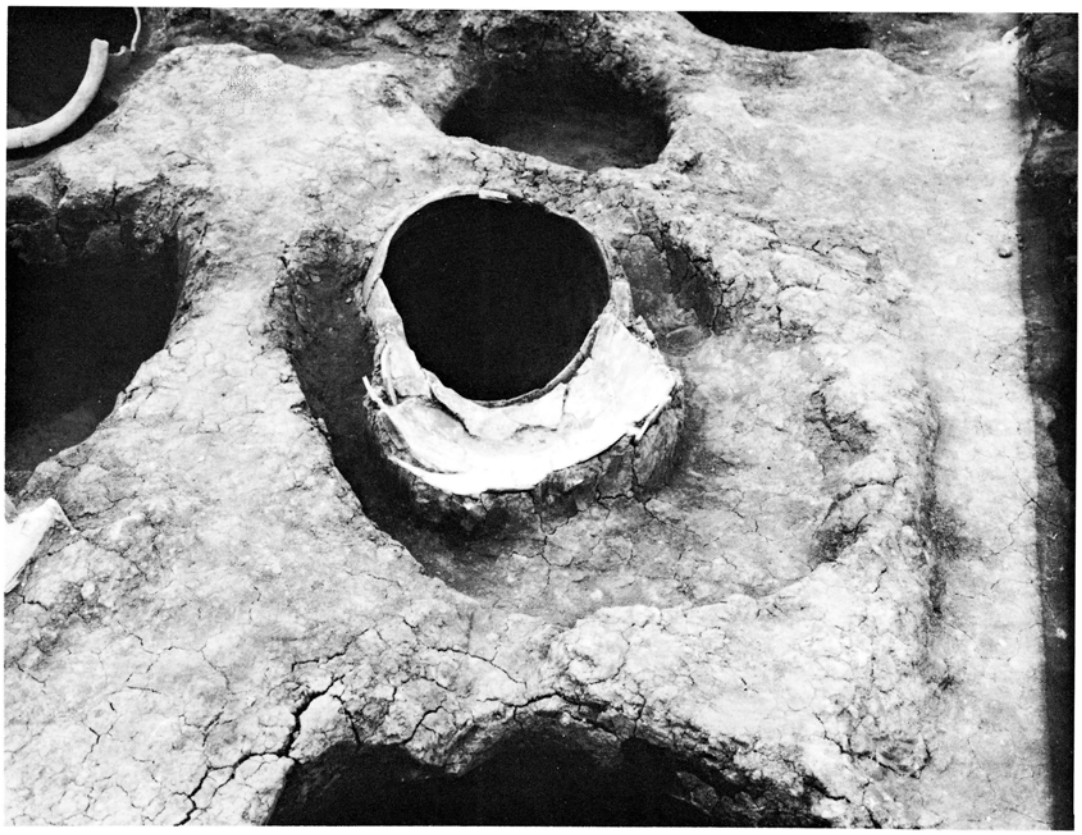
1.　ＳＫ06甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ07・08・09甕棺墓出土状況



1

2

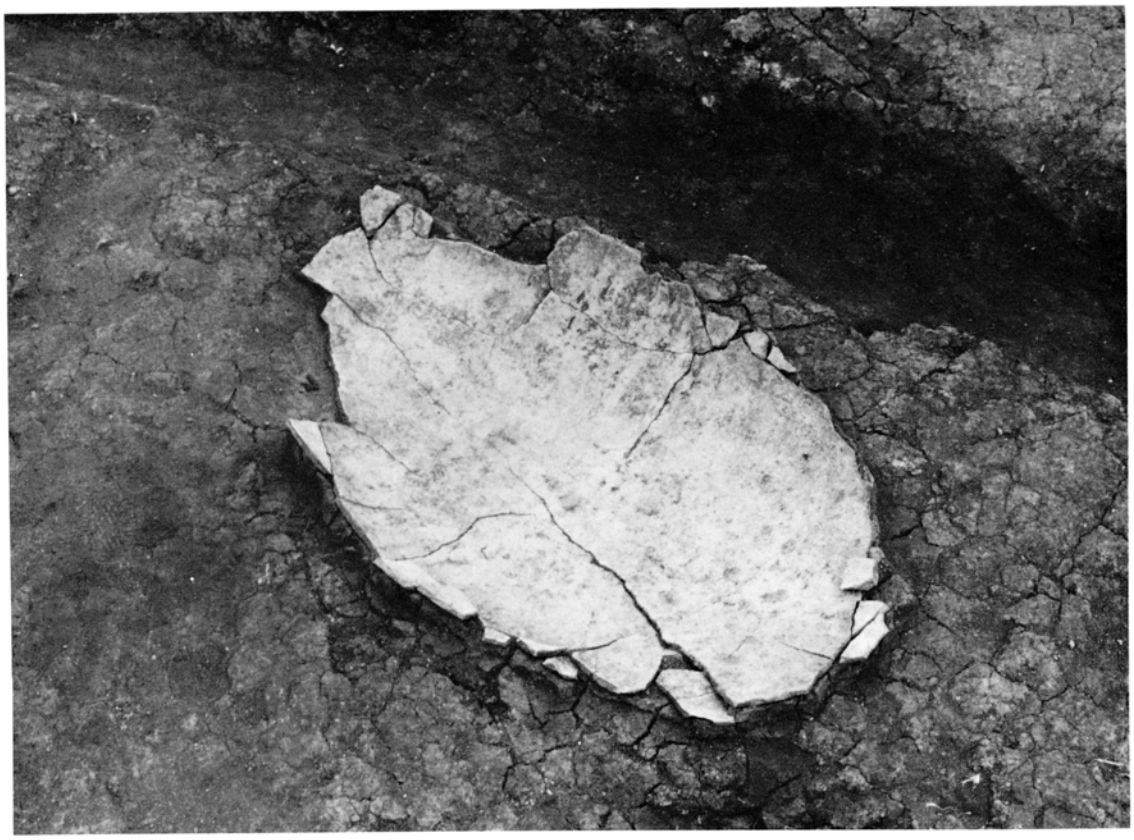
1.　ＳＫ10甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ11・12甕棺墓出土状況



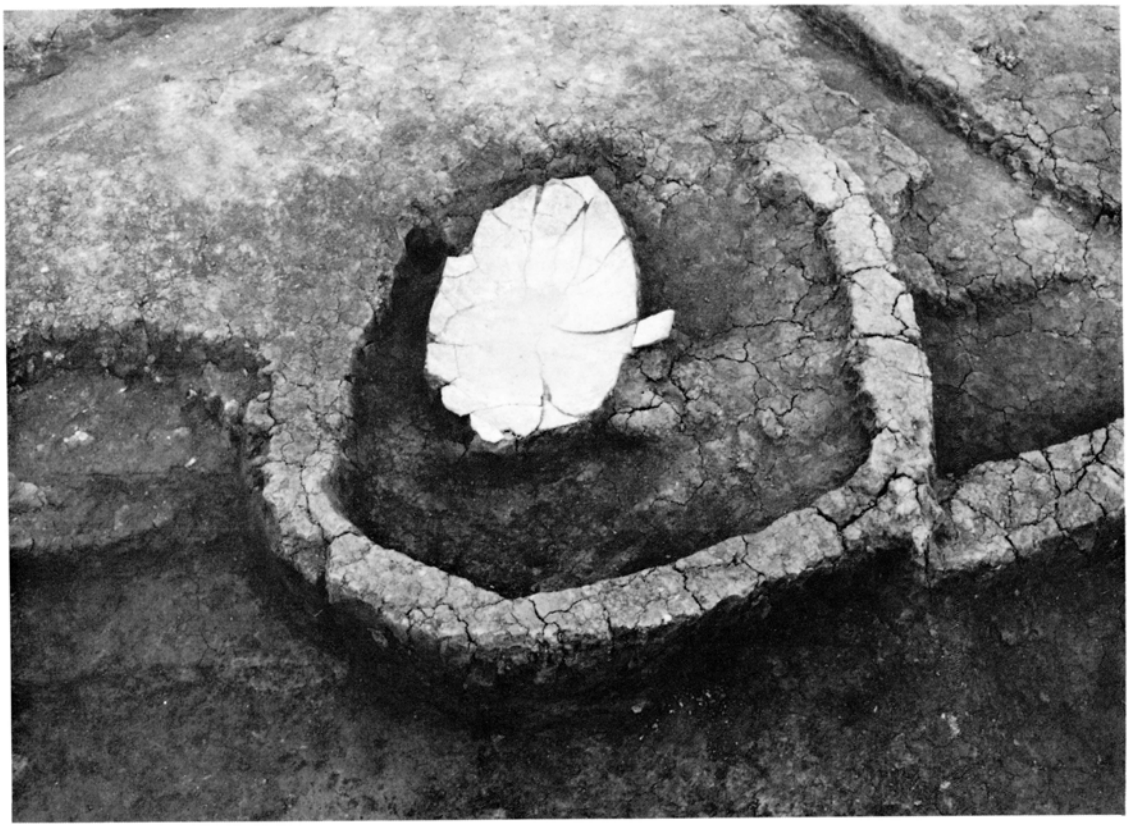
1

2

1.　ＳＫ13甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ14甕棺墓出土状況



1



2

1.　ＳＫ15甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ16甕棺墓出土状況

1

2

1.　ＳＫ17・18甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ19甕棺墓出土状況

1

2

1.　ＳＫ20甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ21・37甕棺墓出土状況

1

2

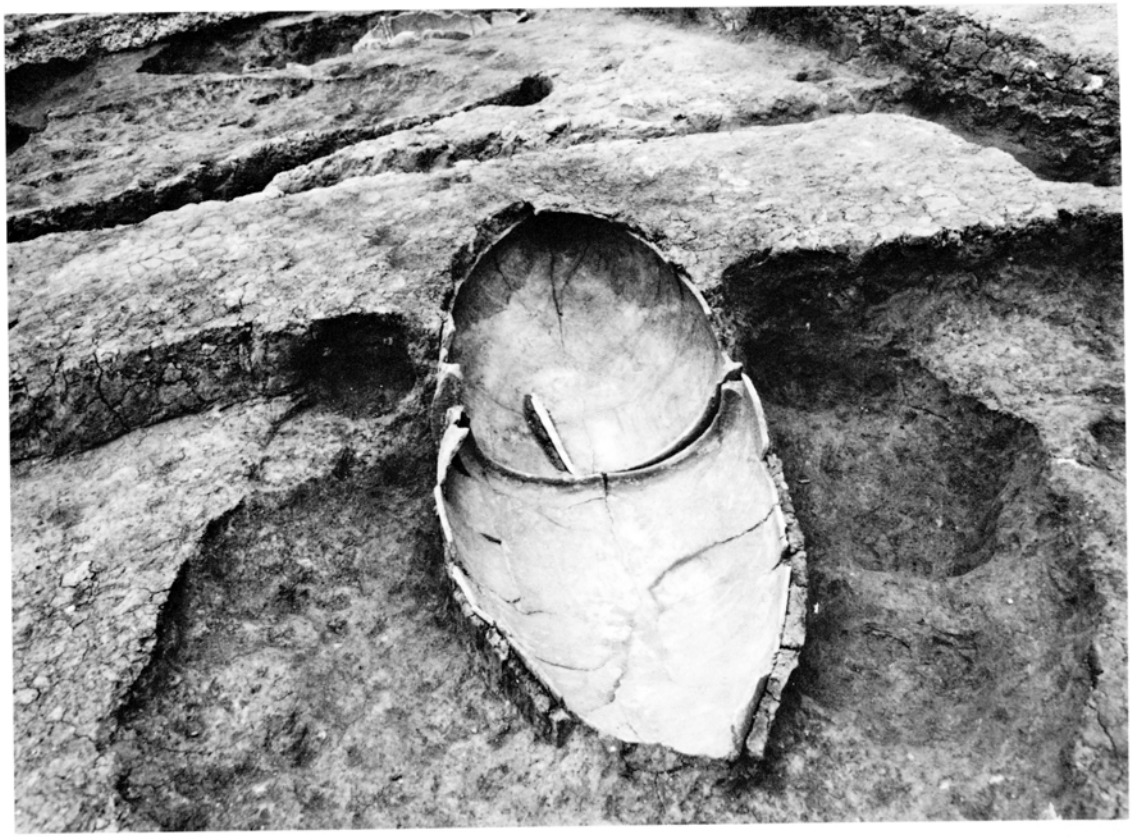
1.　ＳＫ22甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ23甕棺墓出土状況

1

2

1.　ＳＫ26・27甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ29・32甕棺墓出土状況

ＳＫ28甕棺墓出土状況

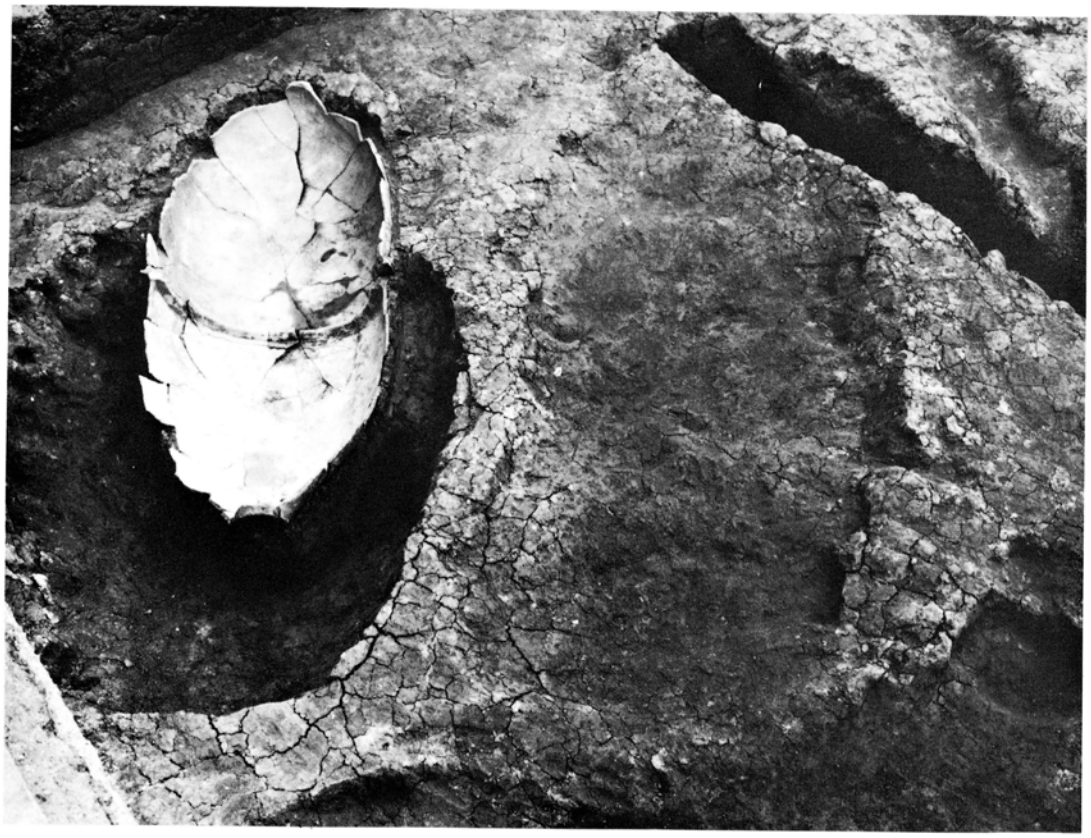


1

2

1.　ＳＫ28甕棺墓出土状況　　2.　同甕棺墓出土銅剣

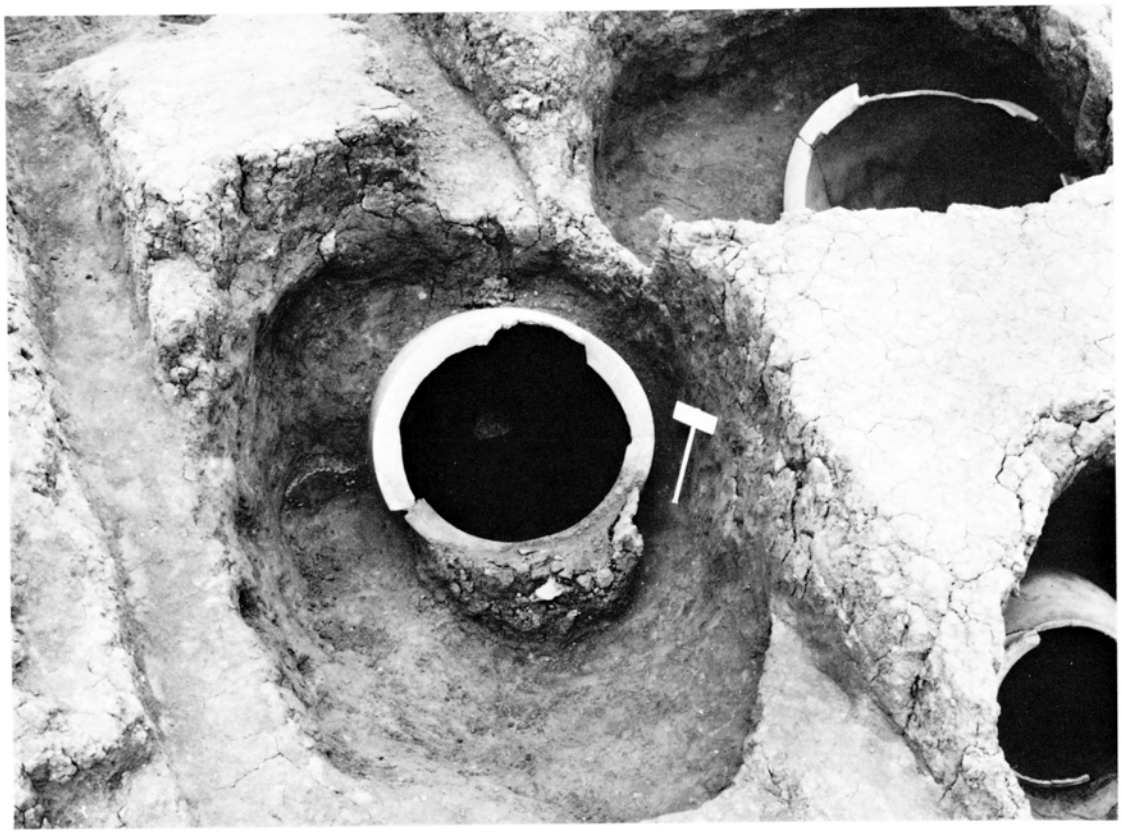
1



2

1.　ＳＫ30・36甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ31・35甕棺墓出土状況

1



2

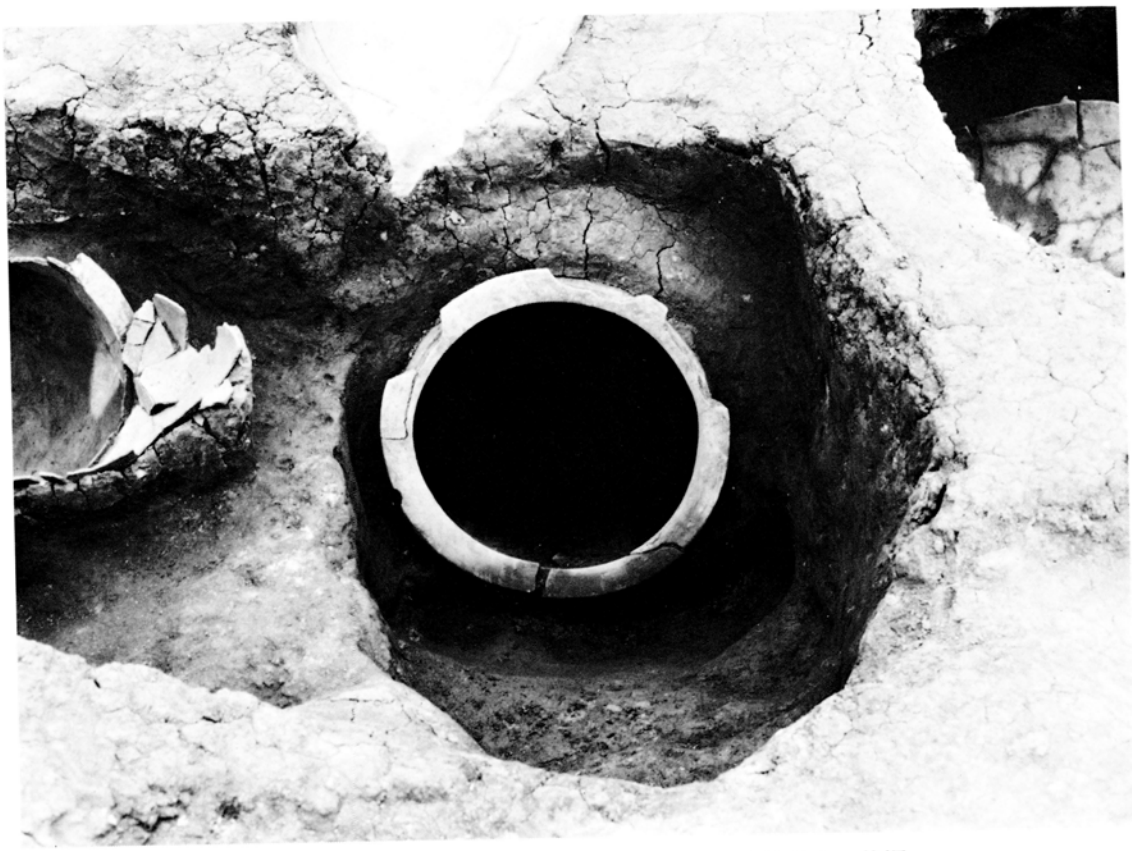
1.　ＳＫ32甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ33・30・36甕棺墓出土状況

1

2

1.　ＳＫ36・33・30甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ34甕棺墓出土状況

1



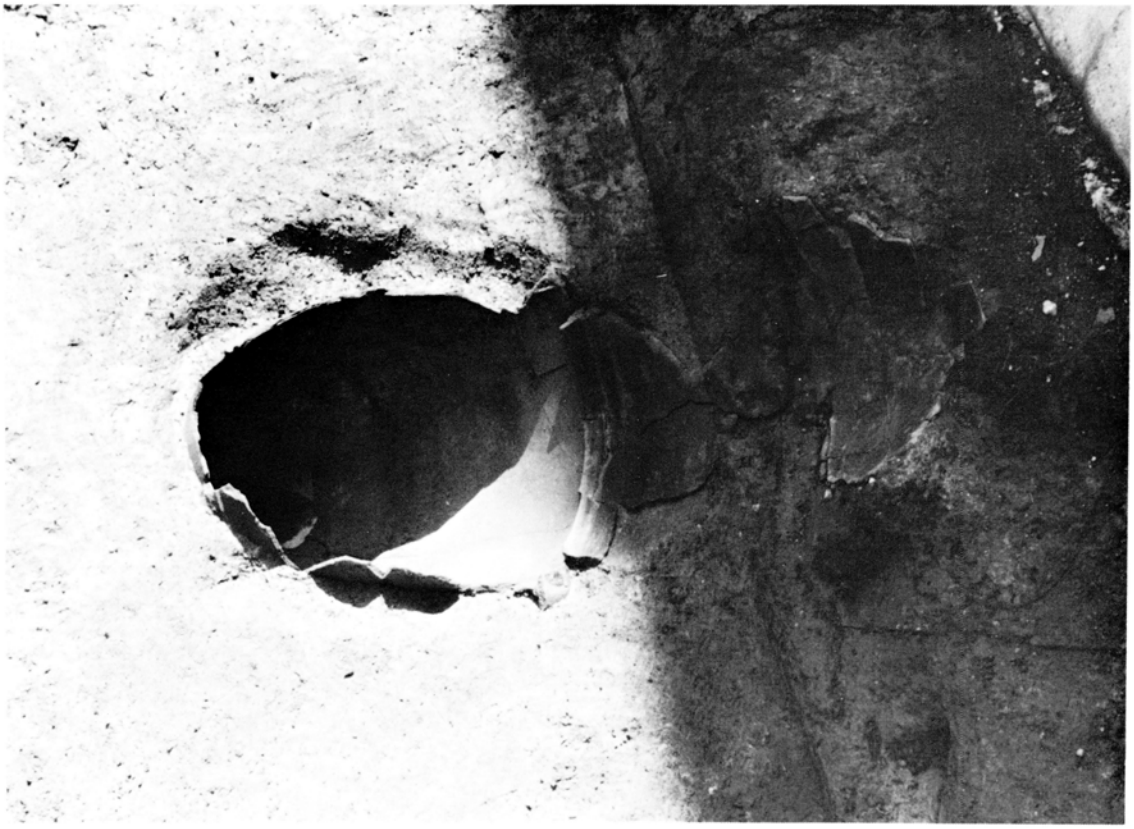
2

1.　ＳＫ40甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ37甕棺墓出土状況

1

2

1.　ＳＫ42甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ41甕棺墓出土状況



1

2

1.　ＳＫ43甕棺墓出土状況　　2.　ＳＫ44甕棺墓出土状況

1

2

1.　ＳＸ03土壙墓出土状況（西より）　　2.　同土壙墓主体部土層

1

2

1.　ＳＸ04土壙墓出土状況（北より）　　2.　ＳＸ05・06出土状況（西より）

1

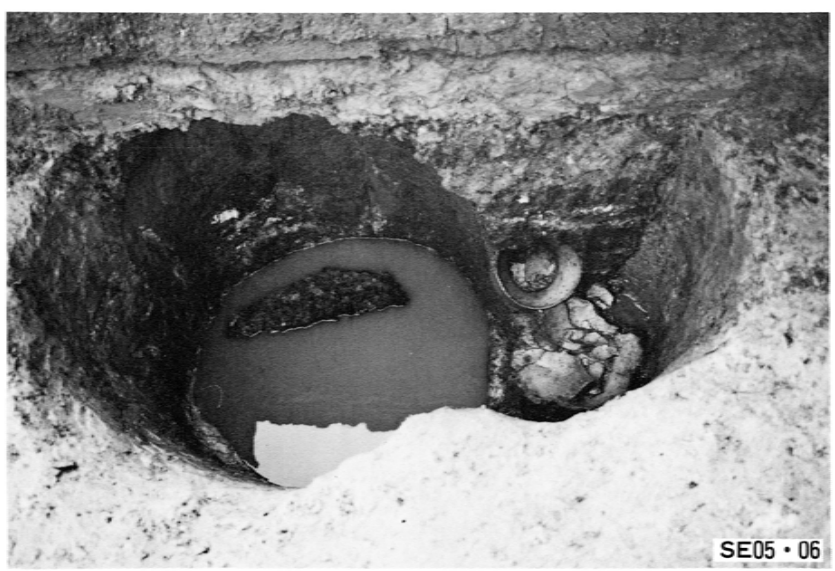
2

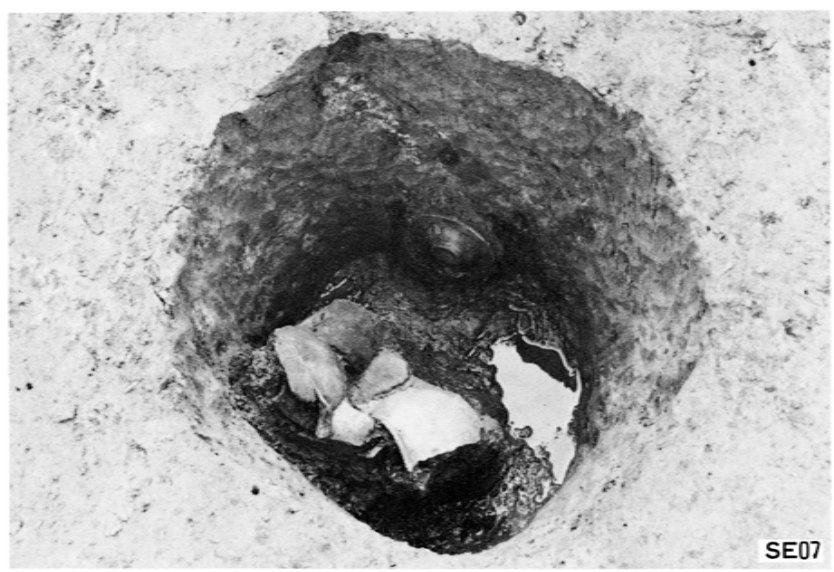
1.　ＳＣ01住居址出土状況　　2.　ＳＣ02住居址出土状況

1

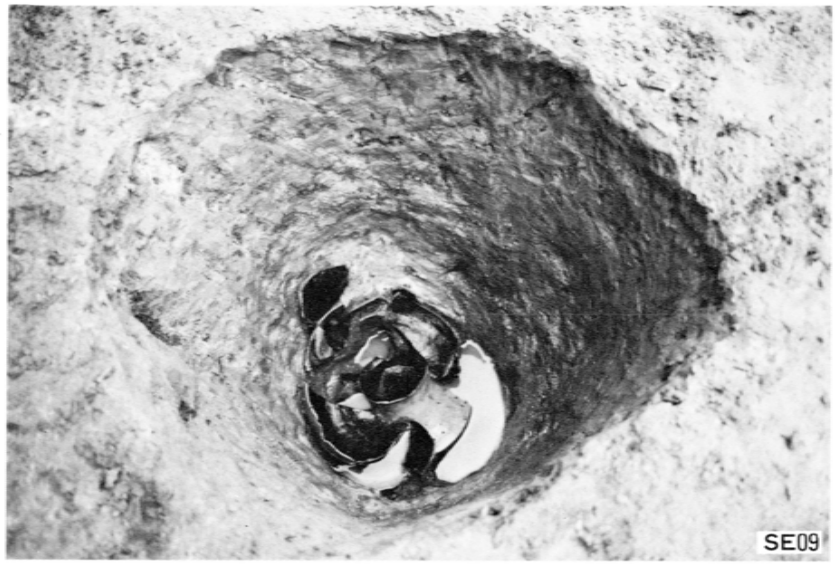
2

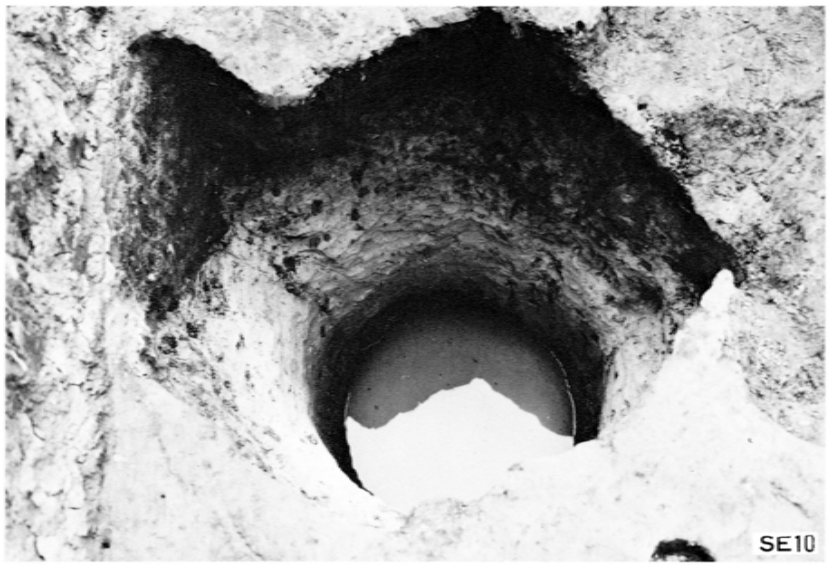
1.　ＳＣ03・04・05住居址出土状況　　2.　ＳＣ08住居址出土状況

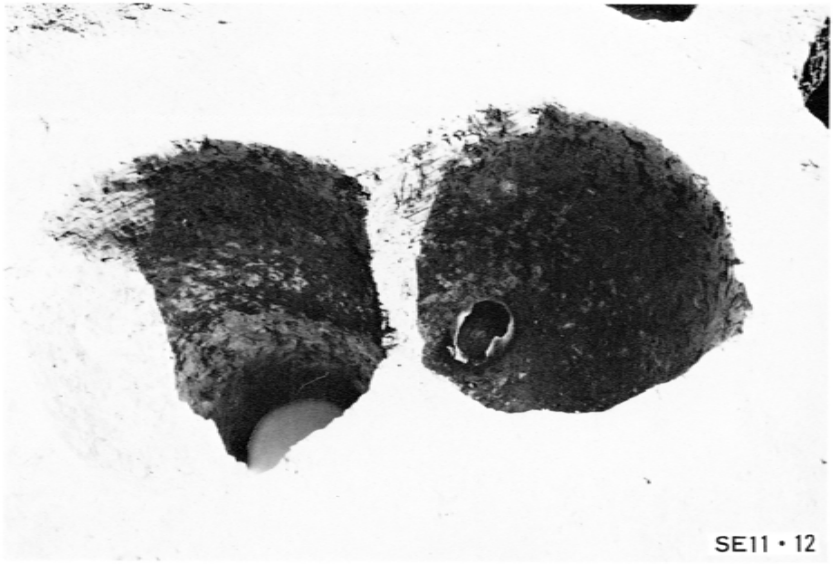




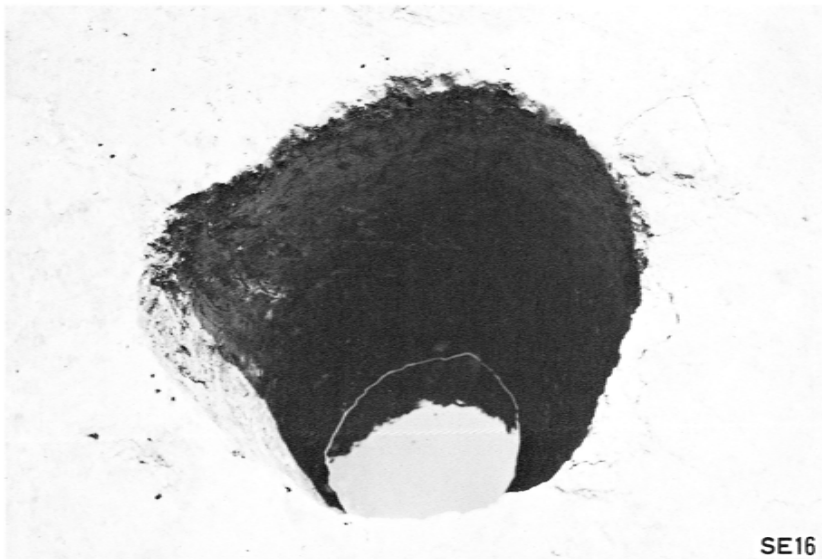
井戸址出土状況 I

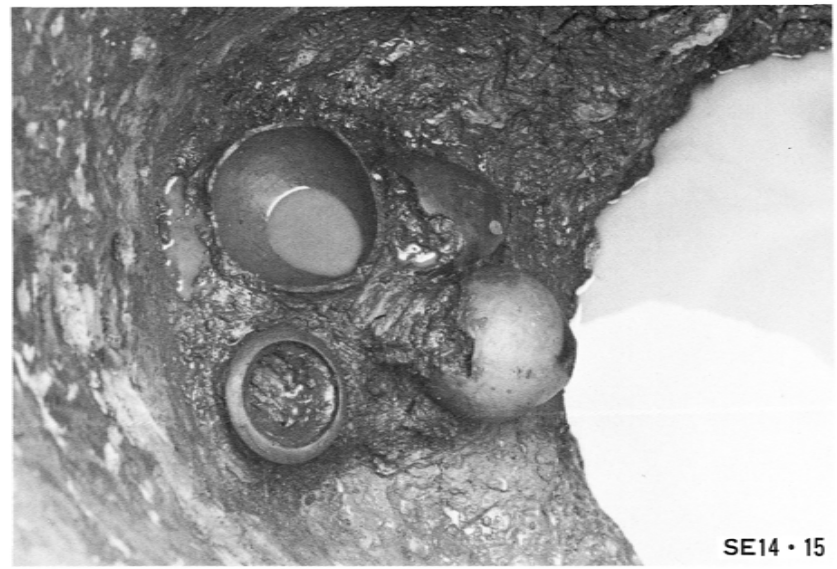


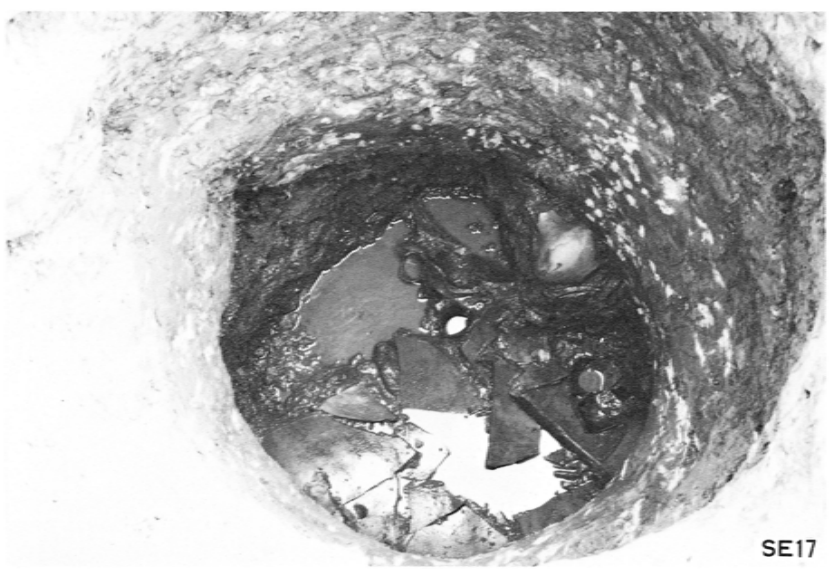




井戸址出土状況II

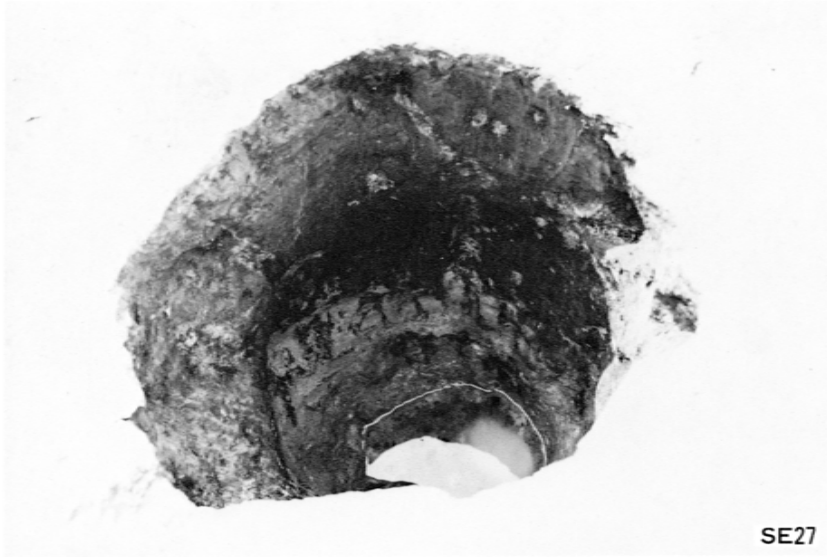

SE16

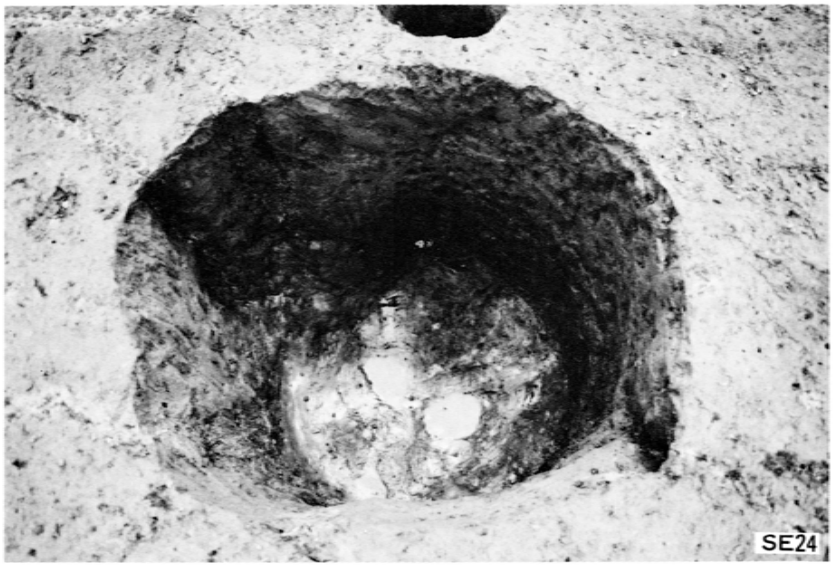

SE14・15


SE17

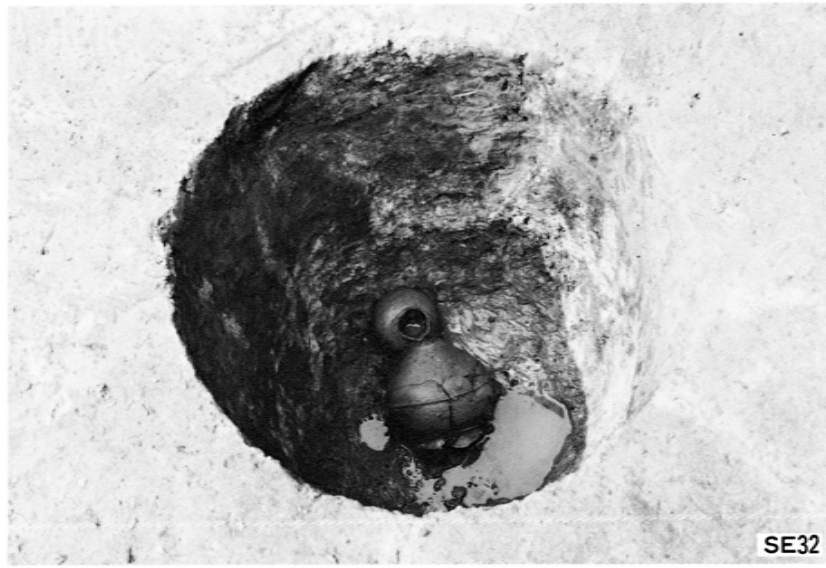
SE20・21

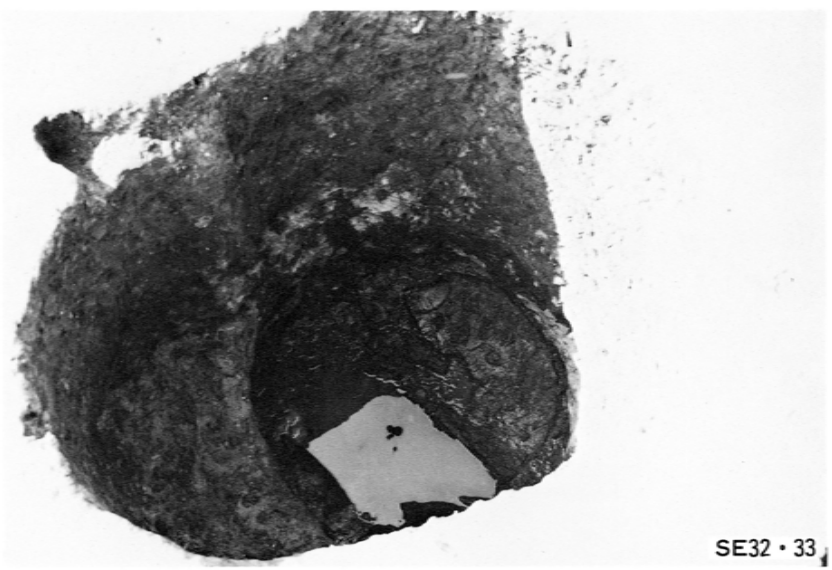
井戸址出土状況Ⅲ



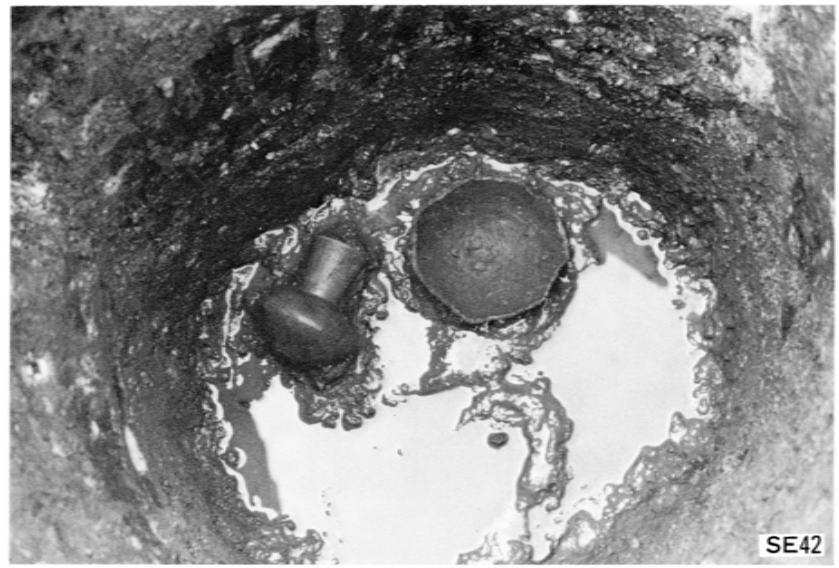


井戸址出土状況Ⅳ

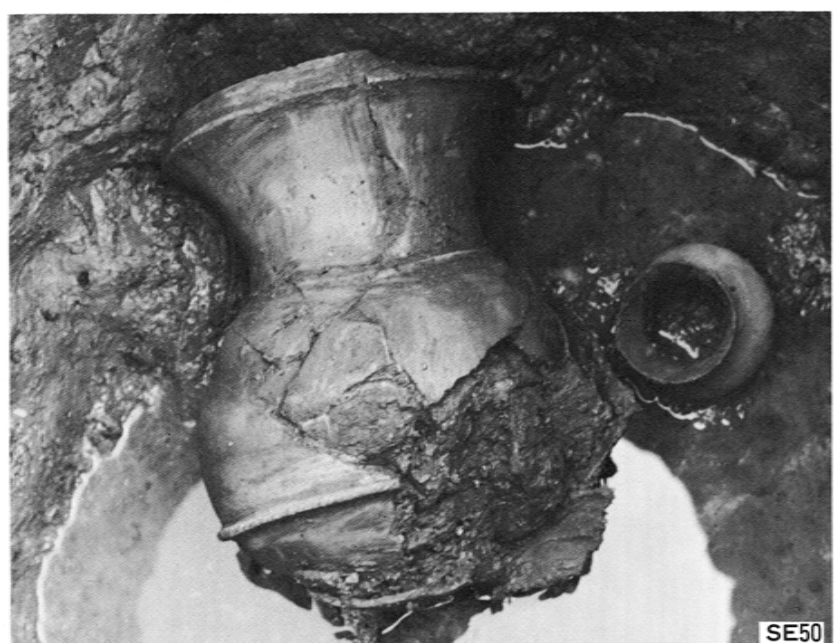




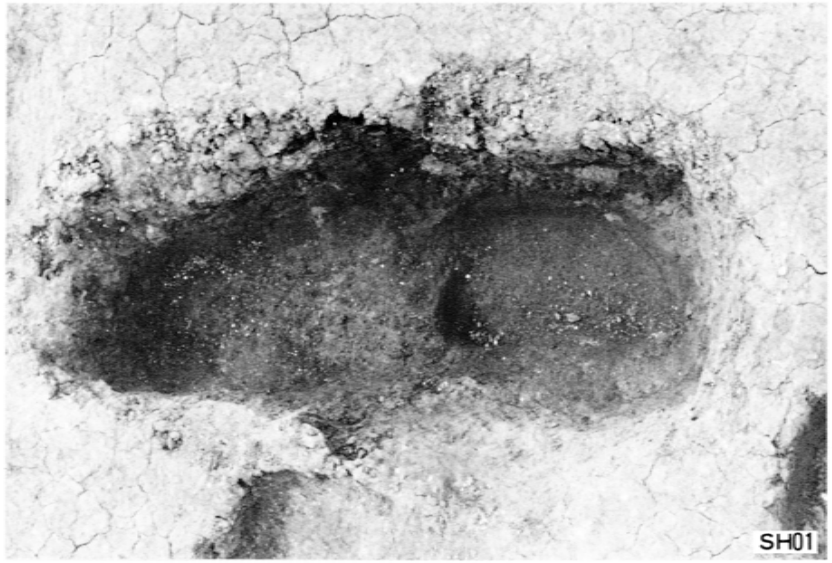
井戸址出土状況 V

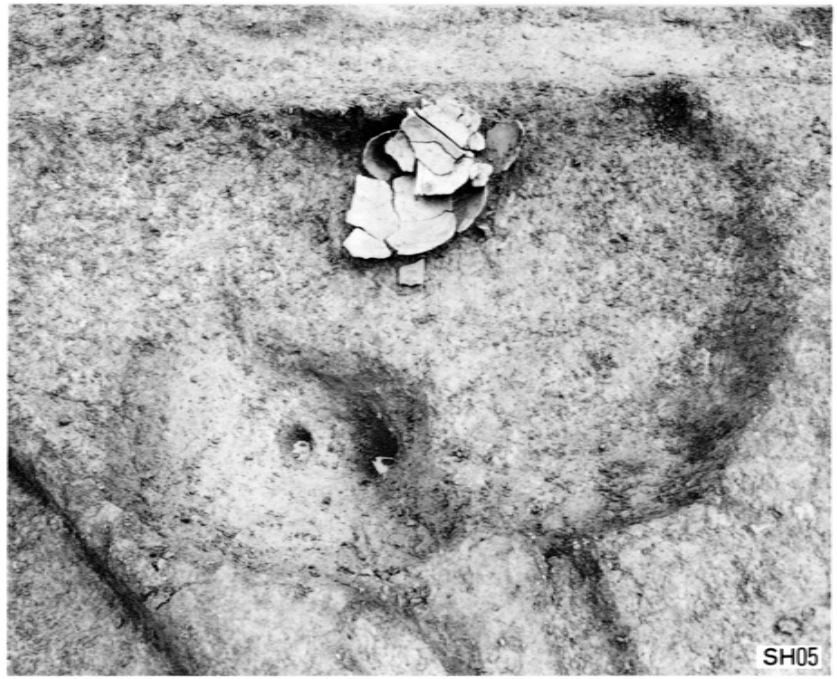


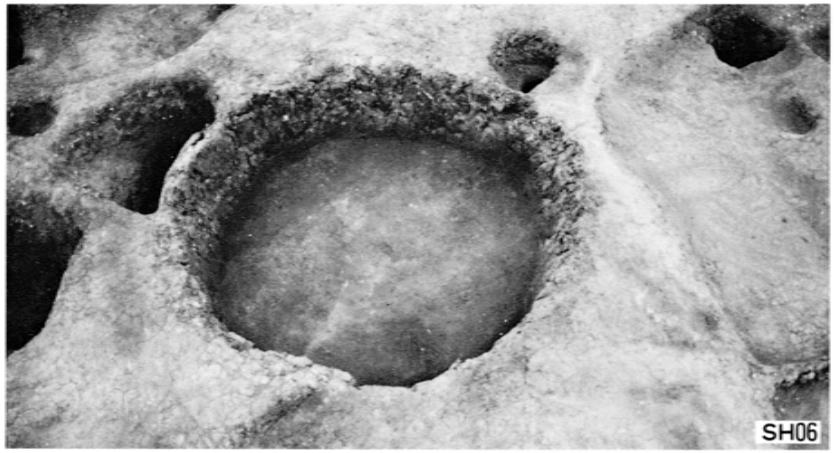
井戸址出土状況Ⅵ



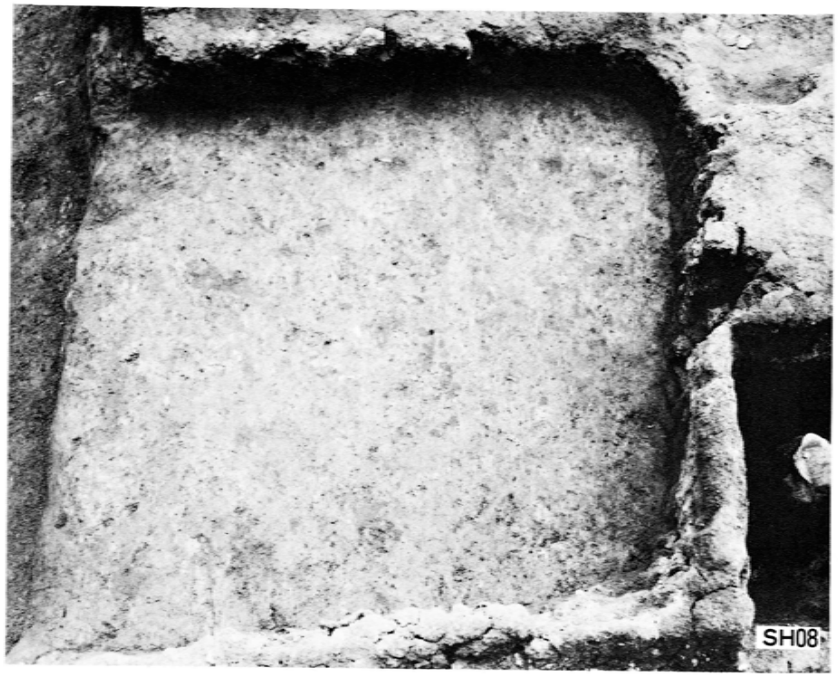
井戸址出土状況Ⅶ

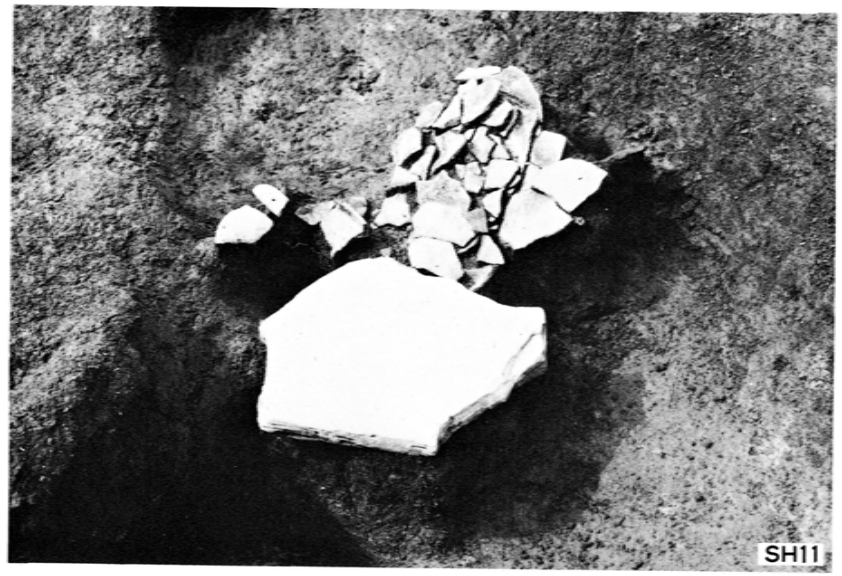


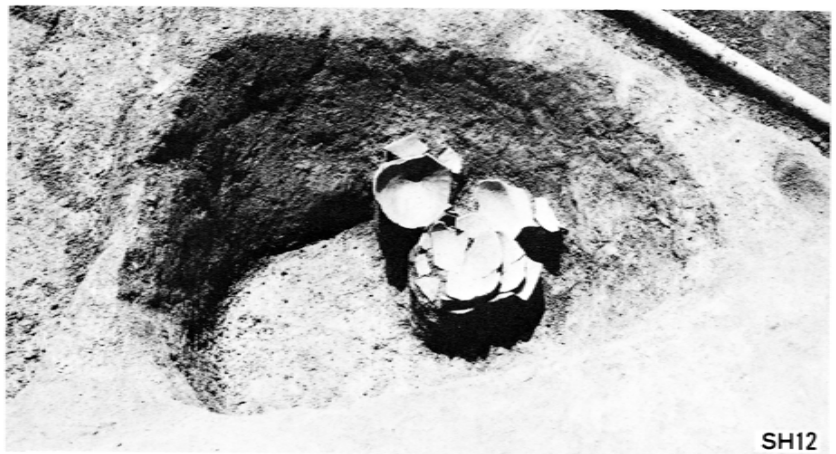




土壙出土状況 I







土壙出土状況II

1

2

1.　第１号古墳出土状況　　2.　同古墳周溝内遺物出土状況

付　　論

I　比恵遺跡の細形銅剣に付着する織物・繊維について

布　目　順　郎

II　比恵遺跡出土の絹織物の走査型電子顕微鏡による観察

小　西　　孝

付論Ⅰ　比恵遺跡出土の細形銅剣に附着する織物・繊維について

京都工芸繊維大学名誉教授　布　目　順　郎

(1)表面観察

比恵遺跡群第６次調査の際に、弥生時代中期前半に属する第28号甕棺墓（接合合口）の下甕から出土した細形銅剣（長さ30.35cm）に織物が附着していたことから、その調査を依頼されたのは1982年の６月に入って間もない頃である。早速現地に赴き、実体顕微鏡を用いて観察したところ、剣身の片面、柄に近い方の約半分にかなりの範囲にわたって織物が附着している。さらにその裏側をみると、これも柄に近い方の約半分に織物の痕跡がかなりの範囲にみられる[1]。そしてさらに、柄（長さ2.38cm）の部分にはほぼ全面に繊維が巻かれている。

剣身の織物は普通の平織で併糸は認められない。したがって、これがもし絹であるとすれば、それはただの平絹で、縑ではないということになる。織密度は１cm当たり経が40～44本（平均42本）、緯が16本である（第１表参照）。この密度は部分により（裏面においても）殆ど差がなく、かつ織目方向が柄に近い部分を除きほぼ同じであるところから、一連の織物でもって剣身を巻いたものとみられる。巻き方は右下がりで、見方によっては恰も幅の狭い（約７mm）帯状の織物が右下がりに巻かれているかのようにもみえる。その帯の縦方向は経糸方向と大体一致している。

この織物の表面には緑青と粘土が附着していて、色は部分によって緑青色、褐色、青白色等様々である。

織糸は経緯とも右撚であり、その撚数は経糸については算定困難であるが、緯糸については１cm当たり最高５回を算える。

剣柄の繊維は幅２～３mmの扁平化した繊維束を全面に巻いてあるようにみえるが、その巻き方は不揃いである。繊維束は撚られてはいない。色は純白に近い。おそらく繊維自体が白色で、その上から何か白い物質がまぶされているような感じである。

(2)　材質調査

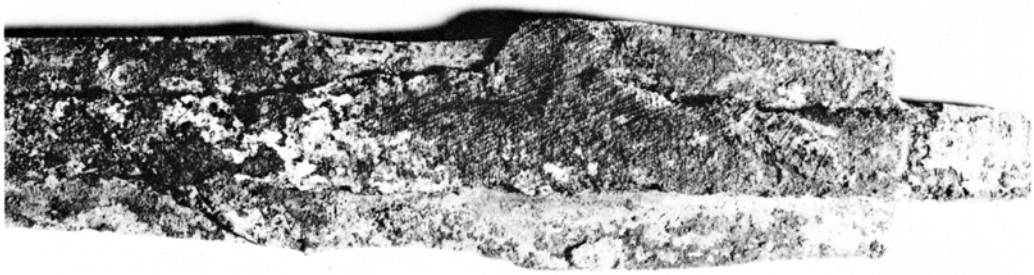
材質の調査は従来と同様繊維断面形によった。断面作成はパラフィン切片法による。

調査の結果は第２、３図に示す通りであって、これら図形と第１表の断面計測値からみて、剣身の織物、剣柄の繊維はともに家蚕のものに相違ない。

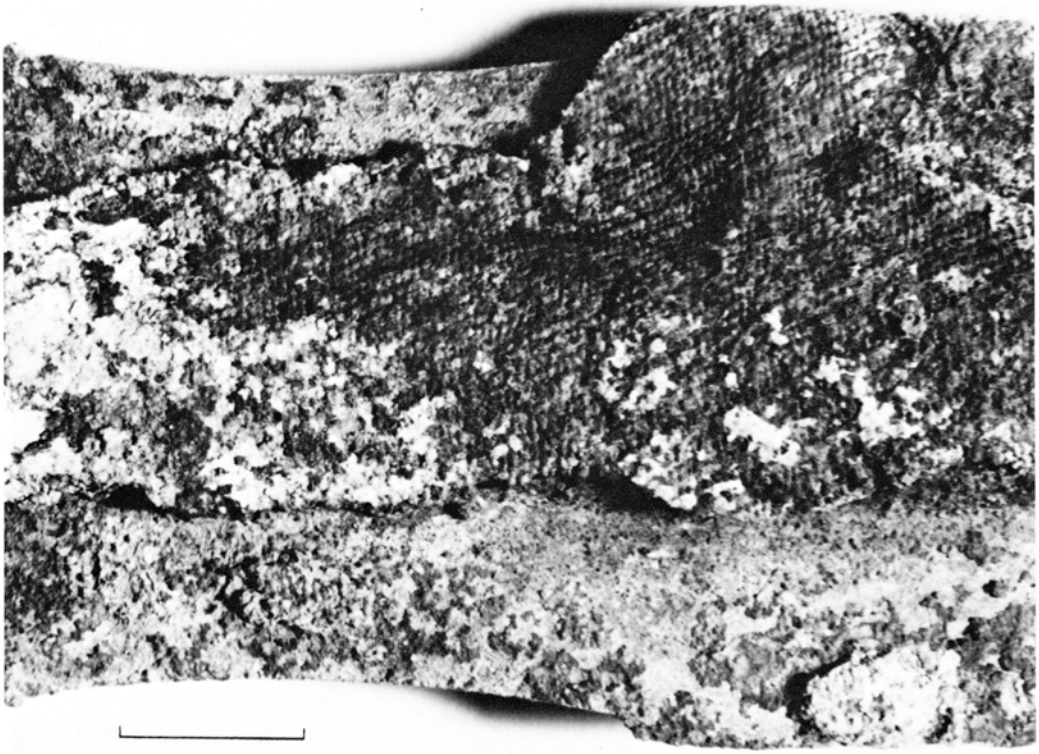
京都工芸繊維大学の小西　孝助教授は、剣身の織物を走査型電子顕微鏡によって調査し、家蚕の絹に間違いないことを追認された（付論Ⅱ参照）。なお、以下において「比恵絹」と称するものは、この絹をさす。

A

B

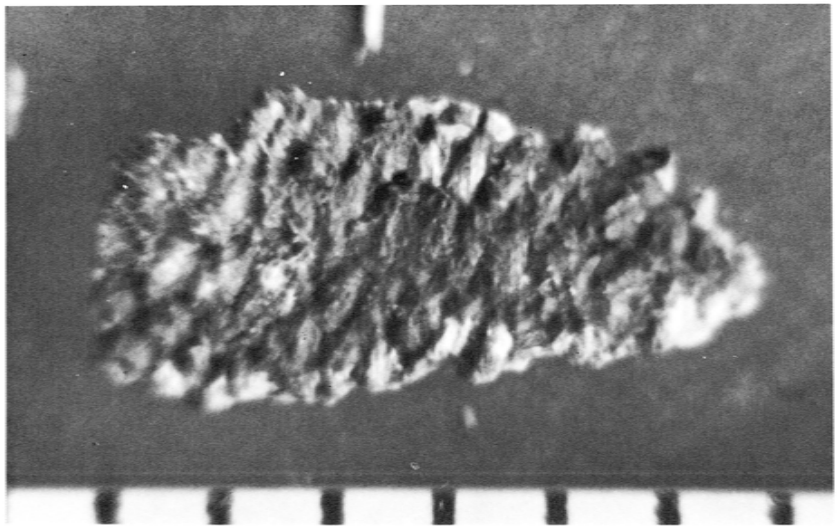


C

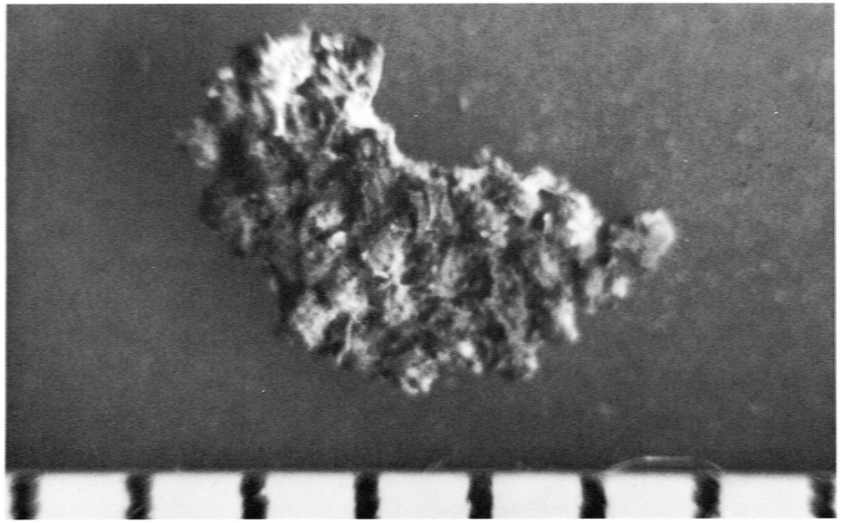


第１図　A細形銅剣（織物の付着している面），B 織物付着部分の拡大，C 織物付着部分の１部をさらに拡大したもの
Scal　A：10㎝，C：1㎝

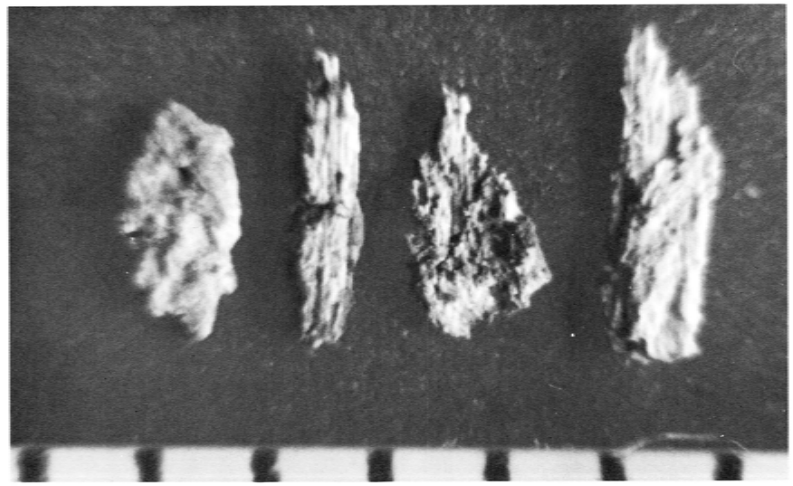
D



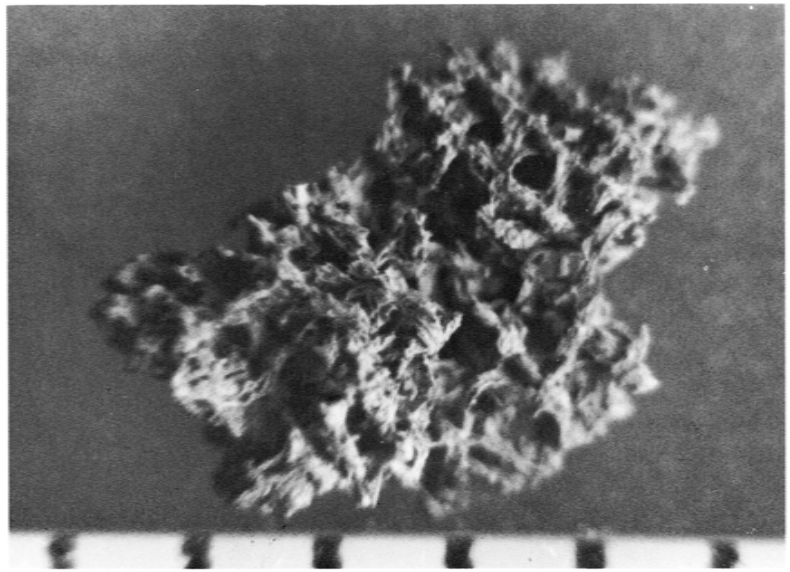
E



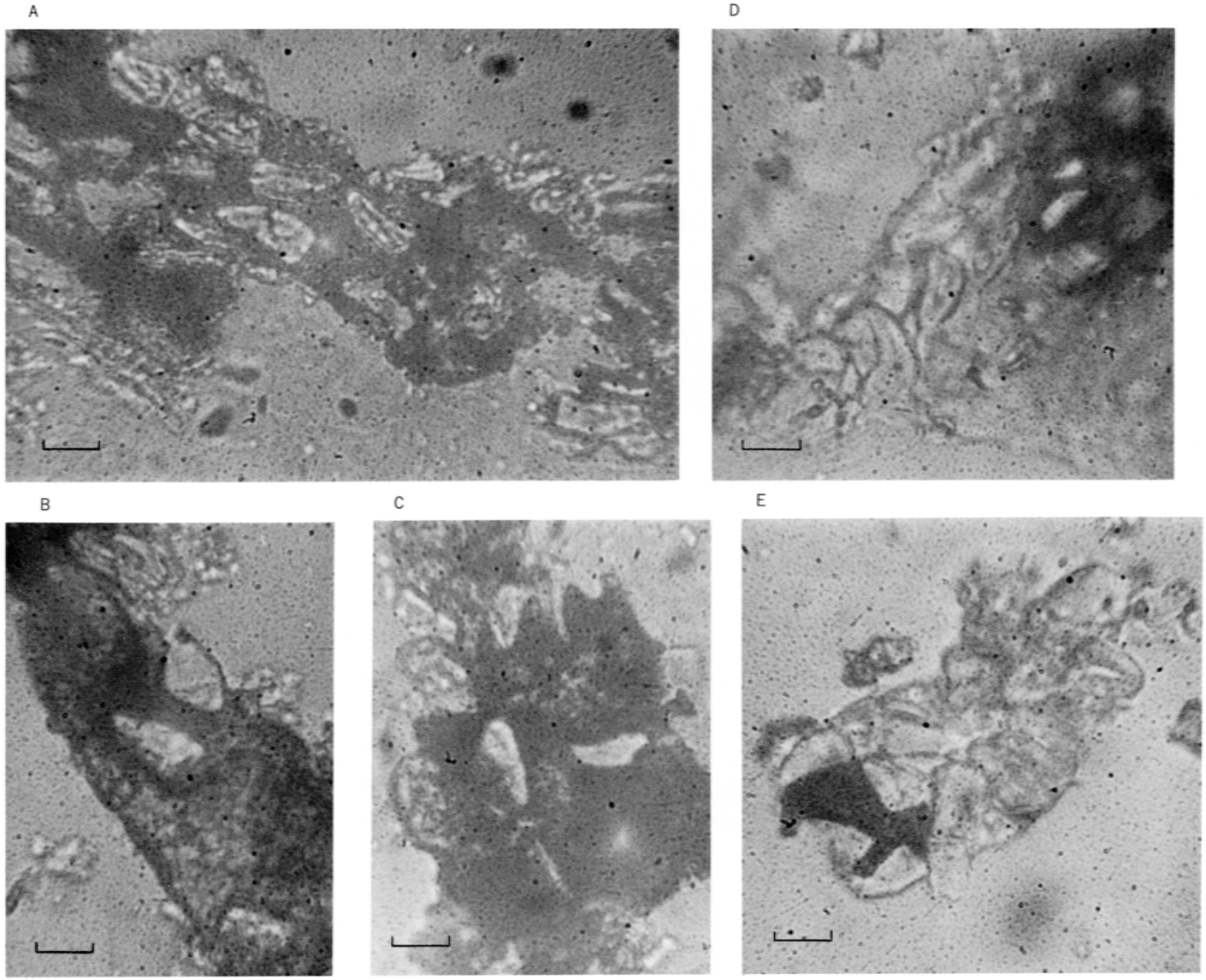
F



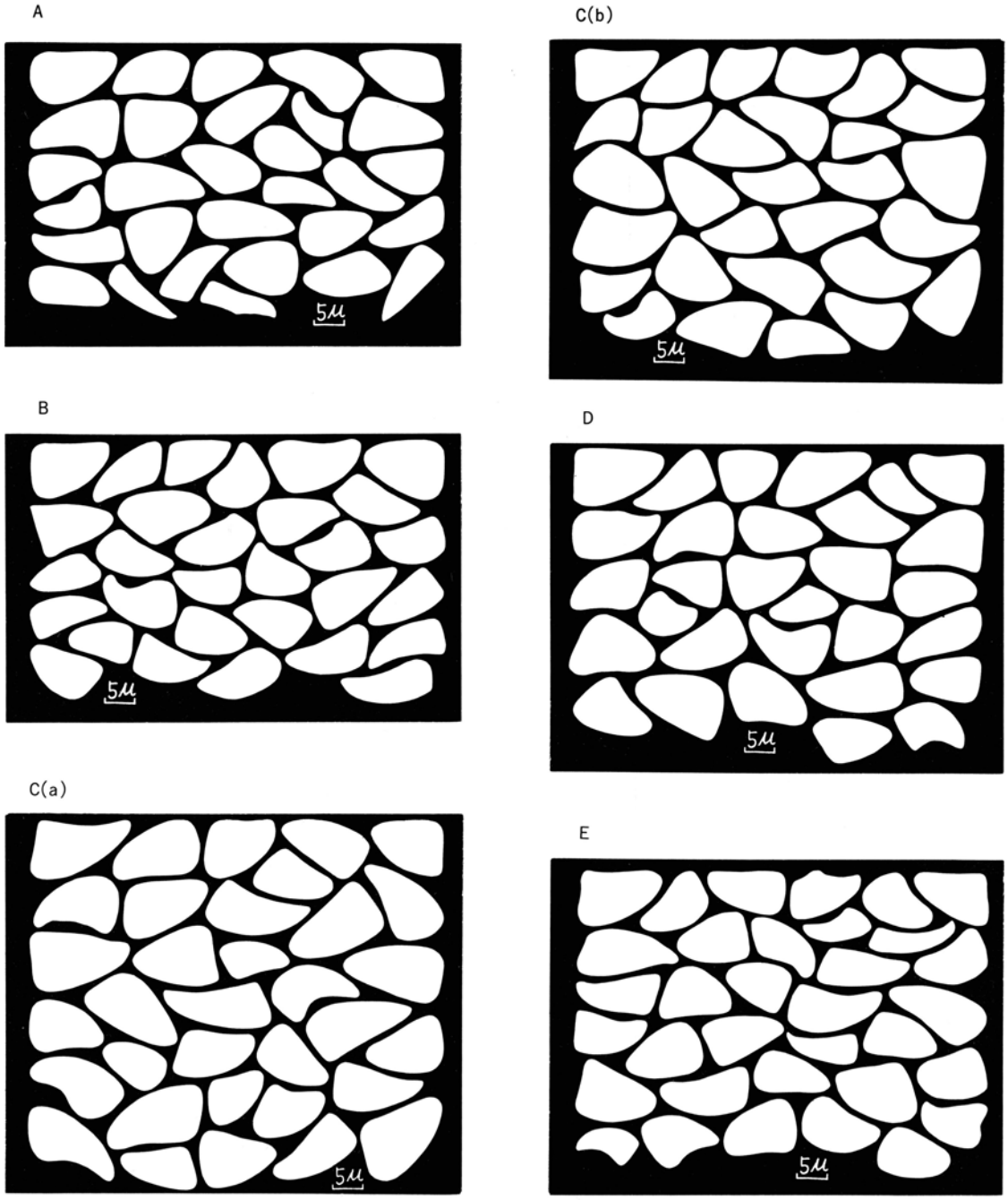
G



D, E 織物の１部を顕微鏡で拡大したもの，F 銅剣の柄に巻かれている繊維を顕微鏡で拡大したもの，G 栗山遺跡(甘木市)出土の織物(第38号甕棺内人骨に付着していたもの)
Scal D-G:1mm



第2図　細形銅剣々身に付着する織物の繊維断面顕微鏡写真
A～C 経糸　D，E 緯糸　Scal 10μ
（同剣の柄に巻かれている繊維の断面については良い断面写真が撮れなかったので掲載しなかった）



第３図　繊維断面拡大転写図（顕微鏡視野にあらわれた個々の繊維の断面転写図を無秩序に並べたもの。転写はABBE式転写器による）
A 細形銅剣々身に付着する織物の経糸，B 同じ織物の経糸，C 同剣の柄に巻かれた繊維(a, bは同じ柄の任意の２箇所でのもの)
D 栗山遺跡(甘木市)出土の織物(第38号甕棺内人骨に付着していたもの)の経糸，E 同じ織物の緯糸
Scal　5μ

(3) 繊維断面計測

比恵遺跡出土の銅剣の身に附着する平絹と、柄に附着する絹繊維についての繊維断面計測値は第１表に示す通りであって、断面完全度については剣身の絹での値と剣柄の絹繊維での値とは大きく違っていないが、断面積においては剣柄の繊維の方がかなり大きな値を示した。

弥生時代中期前半の織物としては比恵遺跡のもののほかに甘木市栗山遺跡[2] のものがある。昭和56年に第38号甕棺から人骨に附着して出たもので、調査の結果これも絹であることが判明したから、序にその調査値をも同表に併記しておいた。

第１表　比恵遺跡出土の絹製品とその繊維についての調査成績

原資料	経緯の別	色	繊維横断面についての計測値			織糸数	経糸数と緯糸数の比	撚り	甕棺番号	時代
			完全度(%)	面積(μ^2)	供試繊維の数	(対1cm)				
剣身に附着している平絹	経	緑青	45.6±4.38	61.1±6.33	30	42	2.62	右	28	弥生中期前半
〃	緯	〃	50.8±3.22	63.0±4.56	30	16		〃	〃	〃
剣柄巻絹繊維 (a)		白	50.0±2.55	78.9±5.65	34	—	—	無	〃	〃
〃 (b)		〃	48.2±2.70	75.2±6.49	30	—	—	〃	〃	〃
栗山遺跡の人骨に附着の平絹	経	黄橡	54.4±3.17	74.4±5.84	30	40	1.67	〃	38	〃
〃	緯	〃	53.1±3.72	65.3±5.00	34	24		右	〃	〃

備考　剣柄巻絹繊維におけるａ、ｂは同じ資料の任意の２ヶ所をあらわし、ａ、ｂと複数にしたのは差の有意性検定のための措置である。これにより、同一資料でも部分によって計測値にどの程度の違いがあるかを知ることもできる。

(4) 比恵絹とその繊維の性格

比恵絹とその繊維が日本産かそれとも渡来品であるのか。もし渡来品であるとすれば、何処から渡来したか。また、その繊維を生産した蚕はどのような系統のものか。それらのことが、日本と外国における当時の絹出土品についての調査値を互いに比較することによってある程度推定できるかもしれないところから、弥生中期前半に属する比恵、栗山両遺跡出土の絹を１グループとし、これと漢代絹及び弥生中期後半の絹とにおける調査値を互いに比較してみたいと思う。それには多変量解析法を適用しなければならない。

(a) 織密度からの推測

まず織密度について、弥生中期前半の値と漢代５墓での値(第2表)とを比較すれば第3表のようになる。すなわち、弥生中期前半での経糸数は漢代５墓のいずれよりも小さく、殊に陽高、ノイン・ウラ及びパルミラとの間に有意な差が認められる。楽浪及び馬王堆との間には有意差がなく、どちらかといえば馬王堆の方に近い。緯糸数においては、漢代４墓（ノイン・ウラの数値を欠く）のいずれよりも小さく、この場合は陽高、楽浪及びパルミラとの間に有意差を認めるが馬

王堆との間には有意差がない。経糸数と緯糸数の比では、漢代4基のいずれよりも大きい。ただし、そのいずれも有意な差ではない。

漢代5墓（又は4墓）を1グループとした場合にも同様の傾向が認められる。

以上から、弥生中期前半の絹は機織法において漢代絹と異なるものがあり、中国産とは考え難い。織密度において漢代絹よりも小さいということは、織技において漢よりも劣っていたことをあらわしているとみてよいであろう。

さらに、弥生中期前半の値を弥生中期後半での値と比較すれば第4表のようになり、経糸数、緯糸数、経糸数と緯糸数の比のいずれにおいても弥生中期前半の方が大きい。特に経糸数において明らかな有意差を認める。このことからすれば、弥生中期の前半における織法は後半におけるよりも勝れていたようにみえる。織密度が必ずしも時代とともに細密化しないことは古墳時代の例（前期に最も細密で、中期、後期と下るにしたがって漸次に粗くなる）をみても明らかである。

弥生中期前半頃の韓国において、もし蚕織が行なわれていたとすれば、比恵及び栗山の絹が韓国製である可能性も生じてくる。しかし、弥生中期前半頃の韓国からの絹出土品が皆無であることから、当時の韓国において養蚕機織が行なわれていたと確言することはできない。このことから、九州北部から出土したこれらの絹は日本で作られた可能性が濃いと考えたい。

第2表　漢代の平絹における繊維断面計測値と織密度

遺跡名	繊維横断面についての計測値		織密度		
	完全度(%)	面積（μ^2）	経糸数(対1cm)	緯糸数(対1cm)	経糸数と緯糸数の比
陽高県(山西省)	50.9 (10)	37.1 (10)	125.8 (6)	70.8 (6)	1.97 (6)
楽浪	50.8 (23)	49.8 (23)	68.4 (10)	32.9 (10)	2.06 (10)
馬王堆1号	—〔53.9〕 (5)	65.5〔69.3〕 (5)	61.1 (90)	33.0 (90)	1.95 (90)
ノイン・ウラ	53.9 (20)	73.0 (20)	86.7 (184)	—	—
パルミラ	—	—	71.9 (36)	37.9 (36)	2.15 (36)

備考(1)　馬王堆の絹繊維横断面計測値は『考古学報』(1974年第1期)[6]にあるもの（ただし、〔　〕内の数値は筆者が同学報に示された繊維横断面写真をもとに算出したもの）であり、経糸数及び緯糸数は『長沙馬王堆1号漢墓』上集(1973)[7]に表示されているもの（ただし、経糸数と緯糸数の比は筆者が同表の数値をもとに算出したもの）。
ノイン・ウラの経糸数はL-Lesnichenko (1961)[8]に表示されているもの。パルミラの数値はPfister[9]の数値により計算したもの。

(2)　本表の数値にはマワタでのものは含まれていない。

(3)　（　）内の数値は資料数。

第３表　弥生中期前半の平絹と漢墓から出た平絹とにおける織密度
(それぞれ 平均値) の差の有意性の検定

遺　　跡	経糸数(対1cm)	緯糸数(対1cm)	経糸数と緯糸数の比	遺　　跡
弥生中期前半遺跡(2)	<***	<*	>0.8	陽高漢墓（6）
〃	<0.2	<*	>0.8	楽浪漢墓（10）
〃	<0.5	<0.4	>0.6	馬王堆1号漢墓（90）
〃	<*	—	—	ノイン・ウラ古墳(184)
〃	<*	<*	>0.6	パルミラ古墳（36）
〃	<0.1	<0.2	>0.8	漢代墓（5又は4）

備考(1)　<又は>の下に附した＊、＊＊、＊＊＊印はそれぞれ危険率0.05、0.01、0.001の水準で両平均値間に有意差を認めるもの。同じ場所に数値を記したものは危険率0.05以下の水準では両平均値間に有意差を認めないもの（この数値が大きくなるほど両平均値間の差が小さくなる）。

(2)　（　）内の数値は資料数。

(3)　弥生中期前半での数値（平均値）は、経糸数41、緯糸数20、経糸数と緯糸数の比2.15であり、漢代絹での数値（平均値）は第２表に示す通りである。

(4)　最下列の漢代５墓（ただし、緯糸数と、“経糸数と緯糸数の比”については４墓）での数値としては、それぞれの墓での平均値を平均した値（経糸数82.8、緯糸数43.7、経糸数と緯糸数の比2.03）を当てた。

第４表　弥生中期前半の平絹と同後半の平絹とにおける織密度
(それぞれ 平均値) の差の有意性の検定

遺　　跡	経糸数(対1cm)	緯糸数(対1cm)	経糸数と緯糸数の比	遺　　跡
弥生中期前半遺跡(2)	>*	>0.4	>0.7	弥生中期後半遺跡(8)

備考(1)　第３表の備考(1)(2)(3)に同じ。

(2)　弥生中期後半での数値（平均値）は、経糸数25.9、緯糸数16.6、経糸数と緯糸数の比1.57である。

(b)　繊維断面計測値からの推測

繊維断面計測値について、弥生中期前半の値と漢代４墓(パルミラの数値を欠く)での値とを比較すれば第５表のようになる。すなわち、比恵絹では、断面完全度については漢代４墓のいずれよりも小さい。しかし、いずれも有意な差ではない。どちらかといえば楽浪の値に近い。断面積の方は陽高及び楽浪よりも大きく、馬王堆及びノイン・ウラよりは小さい。ただし、有意差の認められるのは陽高及び馬王堆との間だけである。どちらかといえば楽浪に近い。

剣柄の絹繊維では、断面完全度については漢代４墓のいずれよりも小さい。ただしいずれも

有意な差ではない。どちらかといえば楽浪に近い。断面積については漢代4墓のいずれよりも大きい。かつ、陽高、楽浪及び馬王堆との間に有意差がある。どちらかといえばノイン・ウラの値に近い。剣柄の絹繊維でのこの傾向は立岩遺跡の第10号甕棺から出た鉄剣の柄巻撚糸の場合とよく似ている。[3]

以上から、剣身の絹を構成する繊維を産出した蚕は楽浪系品種の可能性がある。剣柄の繊維の場合は、断面完全度からみる時は楽浪系蚕品種の可能性があり、断面積からみる時は、中国本土の比較的太い繊維を産出する種類の蚕のものであることが考えられる。その蚕の飼育地としては華北中原から華中へかけての地方がまず考えられる。しかし、当時の楽浪や日本でそのような蚕が飼われていなかったと断言することもできない。剣柄を巻いた繊維を生産した蚕の眠性としては、四眠蚕の可能性が濃いが、三眠蚕のものでないといい切ることもできない。というのは、現在系統保存されている三眠蚕の繊度をみても必ずしも細くはなく（山東三眠で2.6d、四川三眠で2.3d、三眠白で2d、高麗三眠で1.6d、韓三眠で1.3d）[4]、当時飼育されていた三眠蚕の繭の中から特に大形で繭層の厚いものを選んで使用することもできたからである。朝鮮の在来品種としては古来、三眠蚕が主体をなしていたから、当時の楽浪で飼育されていた蚕は当然三眠系の品種であったろうし、当時の日本で養蚕が行なわれていたとすれば、それも三眠系品種が主体をなしていたであろう。華北中原では主として三眠蚕、華中方面では四眠蚕が多かったと思われる。

これを要約すれば、比恵遺跡の剣身の絹を構成する繊維を産出した蚕としては、楽浪系（三眠蚕）であった可能性が大きい。剣柄の絹繊維の場合は、中国本土系（眠性としては三眠蚕よりも四眠蚕の可能性が濃い）、楽浪系（三眠蚕）の両方が考えられる。剣身の絹の産地としては日本の可能性が大きいのに対して、剣柄の絹繊維の場合は中国本土（特に華北平原から華中へかけての地方）、楽浪、日本のいずれかということになる。繊維断面積の値からみるときは中国本土の可能性が大きいといえるが、断面完全度からいえば楽浪か日本の可能性がでてくる。

比恵遺跡の剣とそれに附着している絹又は絹繊維との関係について考えてみると、剣身の絹の場合は死者の埋葬時にその剣を絹で巻いて棺中へ納めたと考えられるのに対し、剣柄の繊維の場合は剣が作られた直後にその柄に巻かれたものとみなされる。したがって、剣の産地と繊維の産地は同じであったとみなければならない。ただし、剣を長い間使ったあと、何かの都合で新しい繊維で巻きかえることがあったとすれば、剣の産地と繊維の産地は必ずしも一致しないことになる。

ここで栗山遺跡第38号甕棺の絹の場合を検討してみよう。栗山の絹は、織密度においては比恵の剣身の絹ときわめてよく似ている。しかし、断面完全度では、比恵の剣身の絹や剣柄の絹繊維よりも大きく、断面積では、比恵の剣身の絹と剣柄の絹繊維との中間よりも剣身の絹の方に寄った値である。いまこれを漢代4墓の値と比較してみると、断面完全度においては、

陽高、楽浪よりも大きく馬王堆、ノイン・ウラよりも小さい。どちらかといえば馬王堆、ノイン・ウラの方に近い値である。断面積においては陽高、楽浪、馬王堆のいずれよりも大きいが、ノイン・ウラよりは小さい。どちらかといえばノイン・ウラに近い値である。したがって、この絹の材料として使われている繊維の性格としては、中国本土(特に華北中原から華中へかけて)的色彩が強く滲み出ている。すなわち、この絹が織られた場所は日本(九州北部)である可能性が濃いにしても、その繊維を産出した蚕は中国本土系品種（三眠蚕又は四眠蚕）であった可能性が濃いといえる。その材料糸を中国本土から輸入したというよりは、そのような蚕を甘木市のあたりで飼育していたとみる方が当たっていよう。

第５表　弥生中期前半の絹製品と漢墓から出た絹製品とにおける繊維断面計測値の差の有意性検定

弥生時代遺跡とその資料	完全度	面積	漢代４墓
比恵遺跡剣身巻平絹(2)	$<_{0.4}$	$>^{***}$	陽高県漢墓（10）
〃	$<_{0.6}$	$>_{0.3}$	楽浪漢墓（23）
〃	—	$<_{0.5}$	馬王堆１号漢墓（５）
	$[<_{0.1}]$	$[<^{**}]$	
〃	$<_{0.1}$	$<_{0.2}$	ノイン・ウラ古墳(20)
比恵遺跡剣柄巻絹繊維(2)	$<_{0.6}$	$>^{***}$	陽高県漢墓（10）
〃	$<_{0.7}$	$>^{*}$	楽浪漢墓（23）
〃	—	$>^{*}$	馬王堆１号漢墓（５）
	$[<_{0.5}]$	$[>^{**}]$	
〃	$<_{0.2}$	$>_{0.7}$	ノイン・ウラ古墳(20)
栗山遺跡第38号甕棺の平絹(2)	$>_{0.4}$	$>^{***}$	陽高県漢墓（10）
〃	$>_{0.5}$	$>_{0.1}$	楽浪漢墓（23）
〃	—	$>_{0.4}$	馬王堆１号漢墓（５）
	$[<_{0.9以上}]$	$[>_{0.9}]$	
〃	$<_{0.9以上}$	$<_{0.8}$	ノイン・ウラ古墳(20)

備考　第３表の備考(1)(2)に同じ。

(5)　絹の副葬について

弥生時代の遺跡から出た絹製品で筆者の調査対象となったものは10数種類であるが、筆者が調査しなかったものを含めても20種類には達しない。それに比べ、古墳時代における出土は莫大な数量である。80種類を超える絹を出した月の輪古墳（岡山県久米郡柵原町）などは特例であるとしても、数種類程度の絹を出した古墳の数は算えきれぬほど多い。このことが、弥生時

代と古墳時代とにおける絹生産量の違いをあらわしていることはいうまでもない。それら絹製品の大半は刀剣、鏃、鉇、鏡等の器物に附着して出ているが、古墳時代においては１つの器物に附着する絹製品の種類が単一の場合と複数の場合とがあり、多い時は４～５種類を算えることができるのに対し、弥生時代にあっては、筆者の経験した限りでは、多くの場合１器物に１種類のみであった（比恵遺跡の銅剣に２種類の絹製品が附着していたのを唯一の例外とする）。

月の輪古墳から多種類の絹帛が出たことについて西川　宏氏[5]は、「このような種類の豊かさは、生産技術の発達の結果というよりも、むしろ生産単位の多元性を反映したものである。すなわち、後の律令制下で行われたような品質管理がいまだなされておらず、月の輪古墳の首長の支配下にある共同体や近隣の共同体の内部の、おそらくいくつもの世帯共同体で、それぞれに生産されたものが、供献されたのであろう」という。もし氏のいわれる通りであるとすれば、１つの器物につき１種類（賻物のみを対象として考えるならば剣柄巻絹繊維は除外されることになるから、比恵遺跡の銅剣の場合もまた１器物１種類ということになる）といった弥生遺跡の場合は、生産単位は多元ではなくて一元であったことが想像される。そして、それら絹帛が賻物として供献されたものであったかどうかも疑わしくなる。死者の親族が、偶然手許にあった絹で器物を包んで棺内へ入れたに過ぎないとみることもできるからである。その場合、意識的に副葬されたのは器物の方であり、絹の方は単に器物を包むためのもので、副葬品としての性格はそれほど濃くはなかったであろう。

(6)　むすび

比恵遺跡から出た細形銅剣の剣身に附着している平織物、及び剣柄に巻かれている繊維はともに絹（家蚕の）である。

剣身の絹は、その織密度からみて中国製とは思えず、もっと技術の劣る国のものと思われる。韓国製の可能性もないではないが、その時代の絹が韓国で出土した例がないから、むしろ出土地である日本(九州北部)で作られた可能性が考えられる。したがって、弥生時代中期前半頃の九州北部においてすでに養蚕絹織が行なわれていたことになり、日本における養蚕の起源は前100年あるいはそれ以前にまで遡ることになる。養蚕の渡来経路としては、楽浪からもたらされた可能性が考えられる。漢の武帝による楽浪郡設置（前108年)よりも以前のことであったか、それとも以後であったかはわからない。南鮮を経由したか否かについても不明である。

剣柄の繊維の場合は、剣の産地と繊維の産地が同じである可能性が考えられる。その繊維断面計測値からすると、中国本土（特に華北中原から華中へかけての地)、楽浪、日本(九州北部)のうちのいずれかということになる。すなわち、断面積からみるときは中国本土の可能性が大きいが、断面完全度による場合は楽浪か日本の可能性がでてくる。

繊維断面計測値よりみて、剣身の絹の繊維を産出した蚕は楽浪系品種の可能性が考えられるのに対し、剣柄の繊維の場合は中国本土系品種（華北中原から華中方面にかけて多く飼育され

た種類)、楽浪系品種の両方が考えられる。

過去の例よりみて、弥生時代の遺跡（比恵遺跡を含む）から出た器物に附着する絹帛（剣柄に巻かれている撚糸や繊維は除外する）は、１つの器物につき１種類のみである。その点、古墳時代の場合（１器物に多種の絹織物を附着する例が少なからずある）と違っている。このことから、古墳時代においては絹生産単位の多元性が考えられるのに対して弥生時代の場合は一元的であったと想像される。また、古墳時代の墳墓から出る絹織物の場合は、墳墓によっては賻物としての性格が想定できるのに対し、弥生絹の場合は必ずしも賻物として供献されたとは考えられず、むしろ、たまたま手許にあった絹織物で器物を包んで埋納したと考える方が自然であろう。

終りに、本調査を行なう機会を与えられた福岡市教育委員会、九州大学考古学教室岡崎　敬教授ならびに栗山遺跡の絹を提供された福岡県教育庁文化課の橋口達也氏に対し感謝の意を表する。

(註)

1）銅剣が発掘された時は織物の附着する面が下になっていたという。甕棺の上部が大きく欠損していて、そこから入り込んだとみられる土が剣を覆っていたといわれるから、おそらく剣の上面の織物が、雨水や土によって削り去られてしまい、痕跡のみが残ったのに対し、下面の織物は削り去られることから免れたものと思われる。

2）甘木市教育委員会「栗山遺跡」甘木市文化財調査報告第12集、1982年。この遺跡からは弥生中期前半に属する織物のほかに弥生中期後半及び弥生後期初頭に属する織物も出ている（同報告165、166頁、橋口達也氏執筆)。

栗山遺跡第38号甕棺の被葬者は熟年の男性で、その右大腿骨、右腓骨、左右の肋骨等に織物が附着していたが、筆者の調査の対象となったものはその中の左肋骨に附着していたものである。

3）立岩遺跡調査委員会編「立岩遺跡」５章６（布目順郎執筆)、1977年

布目順郎「養蚕の起源と古代絹」第１章、1979年

4）布目順郎「絹繊維遺物の研究——蚕糸業技術の観点から—」、Tab.1、1967年

5）西川　宏「吉備の国」158—159頁、1975年

6）上海市紡織科学研究院 上海市糸綢工業公司文物整理組「長沙馬王堆１号漢墓出土的絨圈錦」、考古学報、1974年第１期、175—187頁

7）湖南省博物館 中国科学院考古研究所編「長沙馬王堆１号漢墓」上集、1973年、文物出版社

関野　雄氏ら訳「長沙馬王堆１号漢墓」、1976年、織物と衣服類の部分は林巳奈夫氏担当。

8）**Пуьо-Песниченко, Е., Аревняе Китайские Шелковые Ткани и Вышивки, 1961, Ленинград.**

9）Pfister, R., *Textiles de Palmyre.* I 1934, II 1937, III 1940, Paris.

付論II　比恵遺跡出土の絹織物の走査型電子顕微鏡による観察

京都工芸繊維大学繊維学部助教授　小　西　　孝

序言

透過型電子顕微鏡による物体の観察は、試料自身を数百オングストロムの薄片にウルトラミクロトームで切断しなければならない。ところが、二十数年前に開発された走査型電子顕微鏡は、試料表面に電子線を照射し、その結果、はじき出された二次電子を捕え、増巾してブラウン管上に結像させるものである。この電子顕微鏡は、試料の作成が容易であり焦点深度が深いのが特徴である。

本報告は、比恵遺跡より出土した織物について走査型電子顕微鏡を用い表面観察を行なったものである。

実験材料ならびに方法

材料は、前述した比恵遺跡出土の細形銅剣に附着していたものである。この試料は非常に堅く、カッター、レザーではスライスすることができなかった。そのため、1～5㎜大の大きさに割断した。

X線回折用試料は、5㎜大の割断片をオブラートに包み、X線試料台に取り付けた。X線回折写真の撮影には、ラウエ平板カメラを使用した。ピンホール直径0.5㎜、カメラ距離30㎜で4 hrs露出した。X線はニッケルフイルターでKβを除いたCu—Kα線を用いた。出力は40KV、20 mAである。

走査型電子顕微鏡用試料は、1㎜大の割断片を試料台に接着し、金を厚さ約100 Åほど、蒸着させ電導性をもたせた。検鏡は、陽極電圧5 KV、試料の吸収電流3×10^{-12}A前後の条件で撮影した。フイルムは、コダック　トライXを用い、D76現像液で現像した。

実験結果ならびに考察

X線回折

X線回折写真からは、何の情報も得られなかった。有機物中、特に炭素化合物が存在すると、4～5 Å（2θ＝15～25°）の位置にハローリングが現われるが検出できなかった。また、ラウエ斑点も現われず、このことから低分子炭素化合物も含まれていないことがわかった。他の無機物の定性は、銅陽極X線管を使用したため不明である。

走査型電子顕微鏡による観察

図1に割断片の表面写真を示す。糸が直交しているので織物であることが判るが、この状態では、どちらがタテ糸かヨコ糸かは判別できない。撚りが甘いところから機械織りでないこと

がわかる。図2は図1の拡大写真であるが、特徴ある繭糸の断面が見られる。中空になっているサヤの様なものや、何か充てんしているものもある。図3と図4は、充てんしている部分の写真である。恰かもフィブリル束があるように見えるが、X線回折の結果から見ても、これは有機物（絹）でなく、おそらく、長年月にわたり絹たんぱく（フィブロインとセリシン）が銅イオンと錯体を作り、銅化合物になったものと思われる。このフィブリル束を包むサヤ状のものは、セリシンと銅の化合物の跡ではないかと思われる。フィブロインにはスキン　コア構造がないことからも、セリシンらしい。フィブロインと異なりセリシンは親水性アミノ酸残基が多く、フィブロインよりも早く加水分解され、溶解することから考えて、早い時期に安定な銅化合物になったのではなかろうか。図4に見られるように、サヤの部分は充てん物よりも明るい。これは、サヤの部分からの2次電子発生量が多いことを示しており、より電導性のよいことを示している。

図5にサヤの部分を示すが、その内面は滑らかであり、充てん物の表面も滑らかであったものと思われる。しかし、図6に見られるようにサヤの内面が、非常に荒れているものもある。これは、電子顕微鏡で内部構造を見るために、薬品、紫外線あるいは放電効果を用いて表面の一部を昇華させて内部構造を見る、いわゆる、エッチング処理した表面像とよく似ている。長年月の流水、汚水にもとづく薬品エッチングは、全体平均にエッチされるが、これらの写真を見ると部分的にエッチされている。したがって、この試料は、多分、日光曝射によるエッチング効果ではないかと思われる。

図7は堆積物に埋まった中から一部側面が現われている写真である。図8は全体が荒れた表面でエッチされているが、図9の左下半分（割断した面）はエッチされていない。

結論

1．X線回折の結果より、フィブロイン、セリシンたんぱくの存在を示す回折はおろか、炭素化合物の存在を示す4～5Åのハローも見られなかった。

2．試料の横断面は繭糸の形態を示し、内部充てん物はフィブリル束に似た形でフィブロインの残骸のようである。また、スキンのような明るい構造物はセリシンの残骸を思わせる。

3．側面はエッチング処理を受けた様な部分があり、これは試料がたんぱく質であったときの日光曝射によるものと推察される。

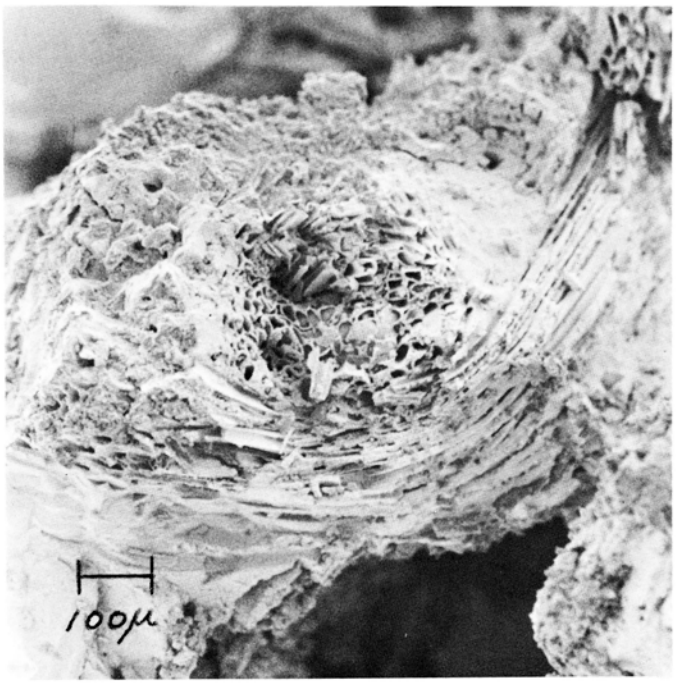


図 1

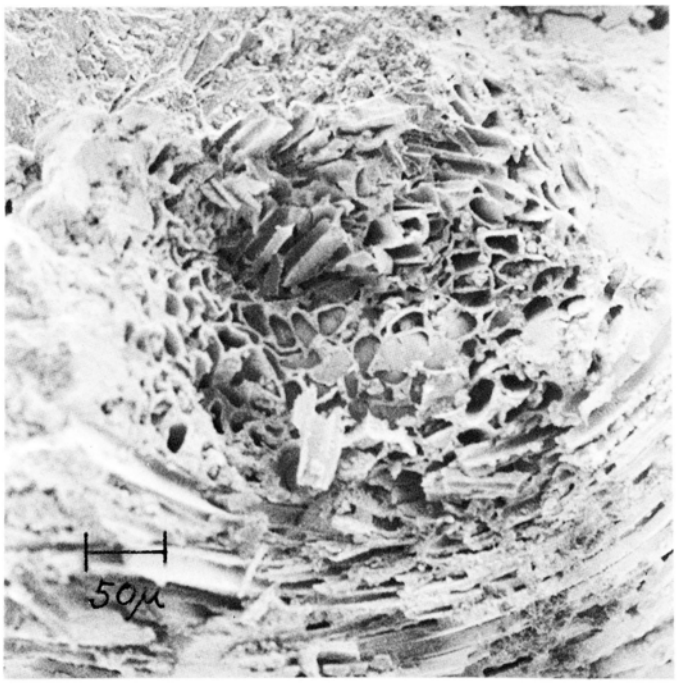


図 2

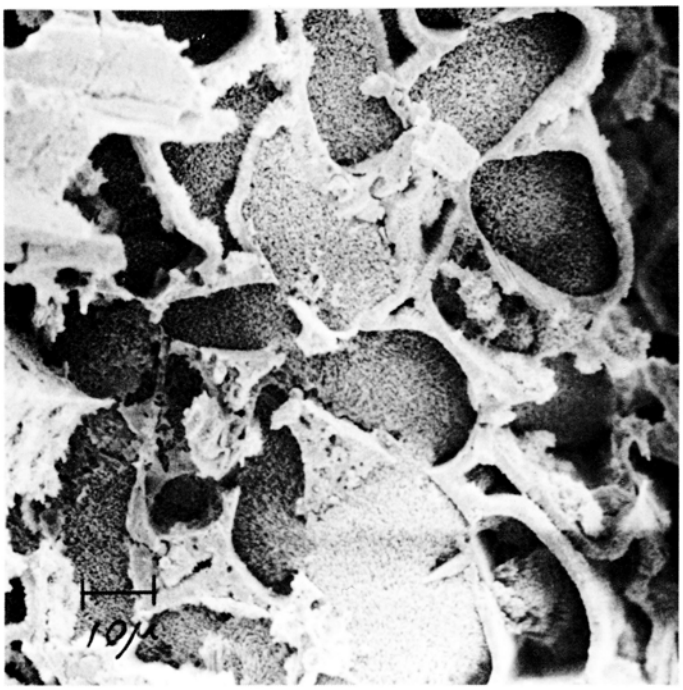


図 3

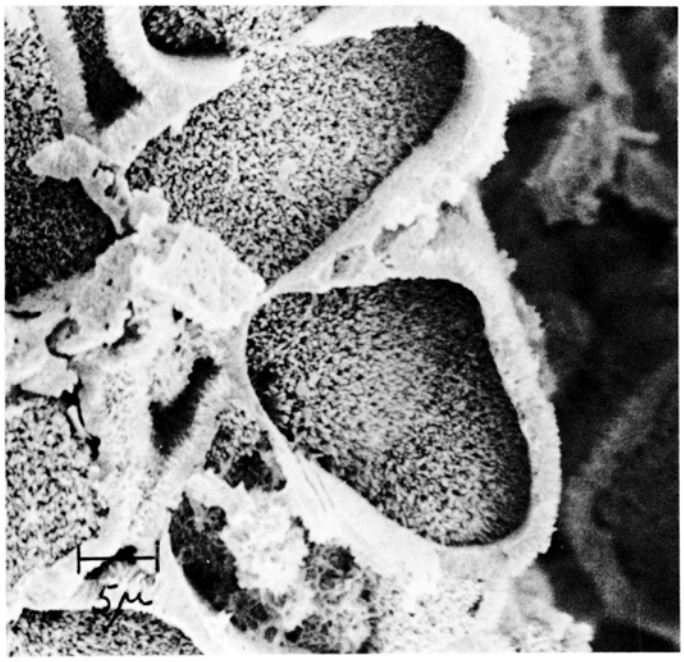


図 4

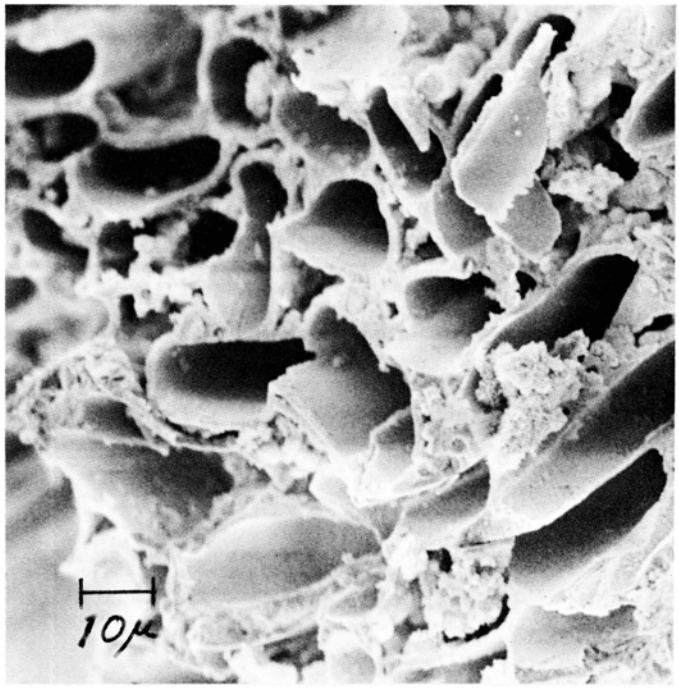


図 5

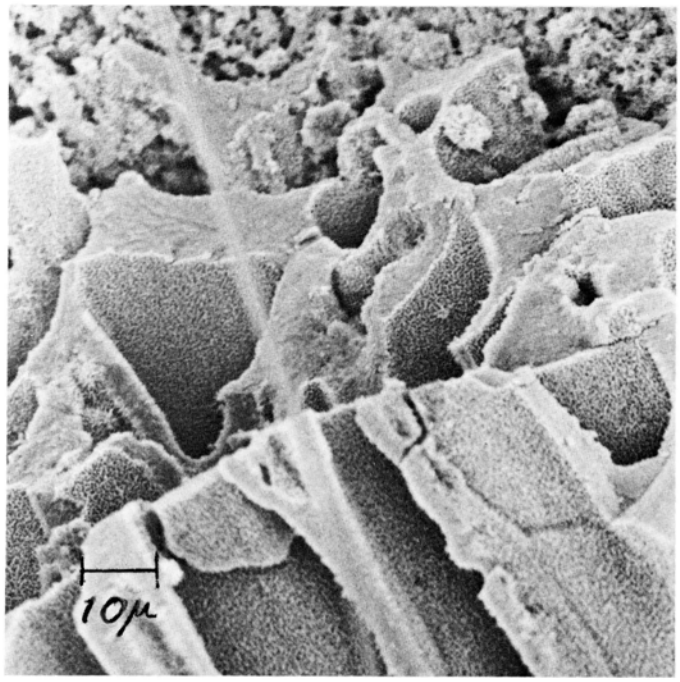


図 6

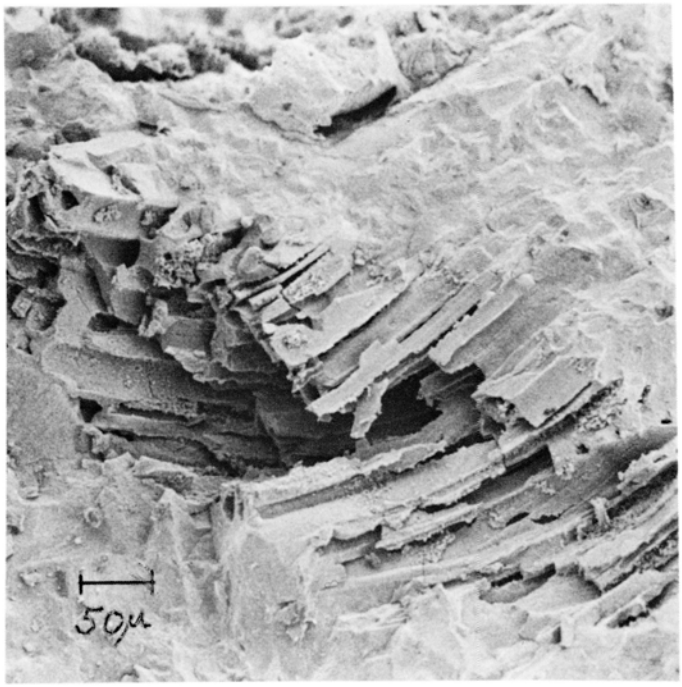


図 7

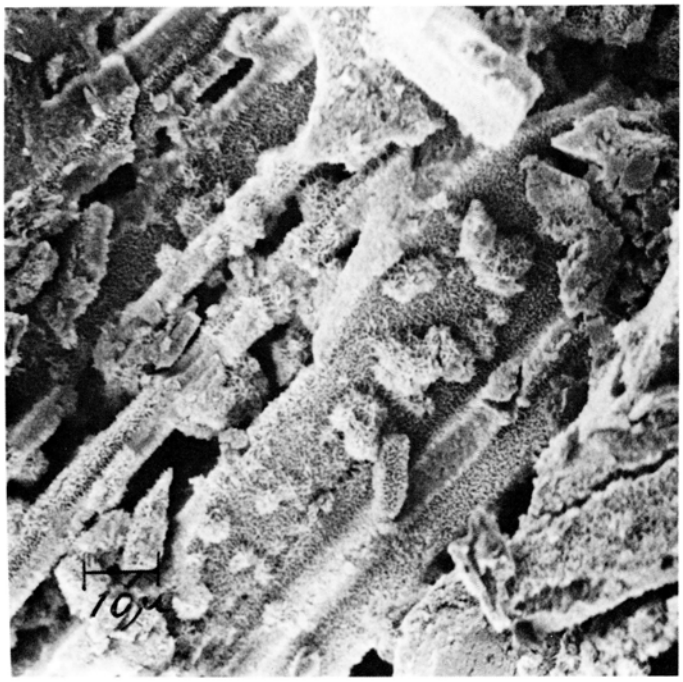


図 8

図 9

付図１　比恵遺跡群第６次調査遺構全体図（1／100）

付図２　第５・６次調査地点図（1／400）

福 岡 市 博 多 区

比　恵　遺　跡

— 第6次調査・遺構編 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集

1 9 8 3年3月3 1日

発 行　福 岡 市 教 育 委 員 会
印 刷　正 光 印 刷 株 式 会 社

比恵遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集

1983

福岡市教育委員会